

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第115集

寝屋川市所在

高宮遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

— 遺構編 —



2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター



小路遺跡（高宮地区）・高宮遺跡（その3） 全景 航空写真（垂直）（前者は白黒写真）



B区 大形総柱掘立柱建物群 全景（東↑）



1. 河内平野北半部（北東↑）（手前中央 高宮遺跡）



2. 高宮廃寺・高宮遺跡 全景（南西↑）



1. 高宮遺跡（その3） 全景（南↑）



2. 高宮遺跡 全景（南↑）

序 文

高宮遺跡は、大阪平野を一望できるたいへん見晴らしのよい丘陵端部に立地しています。遺跡の北側には白鳳寺院として著名な国指定史跡高宮廃寺跡が隣接し、同じ丘陵の東側には太秦古墳群がひろがり、丘陵南側を西流する讃良川流域には多数の縄文土器が出土する讃良川遺跡がひろがり、北河内のなかでも遺跡が稠密であり、以前より耳目を集めてきました。

このたび、一般国道1号バイパスおよび第二京阪道路建設に伴う発掘調査を実施しましたところ、旧石器時代～縄文時代早期の石器群、縄文時代中期の河道、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代中期初期須恵器併行期の竈のある竪穴住居群、古代の大形総柱掘立柱建物群を中心とする大型建物群、中世の屋敷跡、烏帽子を伴う土壙墓を検出し、旧石器時代～中世にわたる、多様かつ重要な成果を明らかにすることができました。とくに、古代の大形総柱掘立柱建物群は、高宮廃寺が隆盛を極めた7世紀後半～8世紀に位置づけられ、両者の関係が注目されます。

これらの成果は、高宮遺跡およびその周辺地域、ひいては北河内の歴史的景観を復原するにあたり、欠くことのできない貴重な資料といえます。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり、多大なご協力を賜った国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、日本道路公団関西支社、大阪府教育委員会をはじめとする地元の皆様に深く感謝しますとともに、今後とも文化財行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

2004年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）、及び第二京阪道路建設に伴って実施された小路遺跡（高宮地区）および高宮遺跡（その3）の発掘調査報告書（遺構編）である。高宮遺跡は寝屋川市国守町に所在する。なお、本報告地点は出土遺物多彩・多量であったため、別途、整理作業終了後（遺物編）を刊行する予定である。
2. 発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、日本道路公団関西支社の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人 大阪府文化財調査研究センター（平成14年4月より財団法人 大阪府文化財センター）が実施した。
3. 現地での発掘調査は小路遺跡（高宮地区）が平成13年6月20日～平成14年3月25日、高宮遺跡（その3）が平成14年4月24日～平成14年11月29日にわたり実施した。発掘調査の担当は、以下の通りである。

小路遺跡（高宮地区）

中部調査事務所 調査第一係 合田幸美、小暮律子

高宮遺跡（その3）

中部調査事務所 調査第一係 一瀬和夫、小暮律子

4. 遺構写真については調査担当者が撮影した。
5. 烏帽子等が出土した中世土壇墓については、遺物、遺構のはぎ取りおよび保存処理を（株）京都科学に委託した。
6. 発掘調査において、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ、以下の方々からご教示・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）
塩山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会）、宇治原靖泰（門真市教育委員会）、野島 稔（四條畷市教育委員会）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、仲原知之（和歌山県教育委員会）、菱田哲郎（京都府立大学）、山中敏史（独立行政法人 奈良文化財研究所）、竹原伸次（大阪府教育委員会）、桜井敬彦、野口 淳
7. 発掘調査にあたっては、以下の方々の参加・協力を得た。

小路遺跡（高宮地区）

池田計彦、石田純子、伊藤 武、岩下明正、奥村弥恵、河村恵理、後藤真紀、佐野 円、鹿野 壘、清水 哲、高田潤一郎、田口麻子、田中理絵、津田里江子、中津 梓、中野 咲、中谷あかね、浜田保子、林いず美、松尾洋次郎

高宮遺跡（その3）

伊藤 武、大矢祐司、奥村弥恵、黒須亜希子、後藤真紀、多賀政司、田中龍男、津田里江子、寺田麻子、浜田保子、松村祐香、宮本飛鳥

8. 本書の執筆は文責を文末に記した。編集は一瀬和夫、合田幸美、奥村弥恵が行った。
9. 本調査に関わる資料は財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海水位（T.P.）からのプラス値である。
2. 発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第VI座標系（旧座標 使用測地系 日本測地系（改正前））に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を示す。ちなみに座標北は磁北より東へ $6^{\circ} 40'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 12'$ 振れている。掲載遺構図にはそれぞれ縮尺にそって、座標の数値を記号化してその位置を示した。
3. 本書で使用した土壌色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
4. 遺構番号については、原則的に調査時に付した番号をそのまま使用している。
5. ピット番号は省略してP□と表記した。
6. 調査においては、遺構番号は小路遺跡（高宮地区）・高宮遺跡（その3）につき別個に付し、各調査区・面ごとに付したが、調査区の重複する箇所が存在するため、報告書では小路遺跡（高宮地区）・高宮遺跡（その3）の通して新たに付し、対応表を本書に付した。遺構ごとに番号を付しているため、同じ調査区内に「溝20」も「土坑20」も存在する。
7. 遺構図は、対象により適宜縮尺を変えて掲載しており、各図にスケールを表示している。
8. 引用文献、参考文献は各章の末尾に記した。
9. 文章責任者は各文末に記した。

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 位置と環境	3
第3節 調査方法	9
第2章 調査成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 小路遺跡（高宮地区）の調査	13
第3節 高宮遺跡（その3）の調査	93
第3章 調査のまとめと付編	121
第1節 調査成果のまとめ	121
第2節 高宮遺跡より出土した石製品、石材について	125
第3節 高宮遺跡出土烏帽子のレプリカ作成	133
第4節 高宮遺跡の作り付け竈について	141
第5節 高宮遺跡とその周辺の集落構造の変遷	143

挿 図 索 引

第1図 北河内南半の古代遺跡分布図	1
第2図 高宮遺跡調査位置図	4
第3図 調査区設定図	9
第4図 基本層序	12
第5図 A区下段1面 遺構配置図	13
第6図 A区下段1面 溝1 平・断面図	14
第7図 A区下段2面 遺構配置図	15
第8図 A区下段 段丘砂層除去後面 遺構配置図	15
第9図 A区中段8面 遺構配置図	16
第10図 A区中段9・10面 遺構配置図	17
第11図 A区中段9面 掘立柱建物3 平・断面図	18
第12図 A区中段9面 土坑1 平・断面図	19
第13図 A区中段9面 掘立柱建物4 平・断面図	20
第14図 A区上段7～10面 遺構配置図	22
第15図 A区上段10面 ピットP2 平・断面図	23
第16図 B1～B4・B11・B12区（中世）遺構配置図	27・28
第17図 B1～B5・B11・B12・C6・C9区（中世～古墳時代）遺構配置図	29・30
第18図 B1～B5・B11・B12区（古墳時代）遺構配置図	31・32

第19図	B 1 区 3 面	大形総柱掘立柱建物 4	平・断面図	33
第20図	B 1 区 3 面	大形総柱掘立柱建物 5	平・断面図	34
第21図	B 1 区 3 面	竪穴住居 1	平・断面図	35
第22図	B 1 区 3 面	竪穴住居 2 上層	平・断面図	37
第23図	B 1 区 3 面	竪穴住居 2 下層・3 の切り合い関係	平・断面図	38
第24図	B 1 区 3 面	竪穴住居 2 下層	遺物出土状況	39
第25図	B 1 区 3 面	竪穴住居 4	平・断面図	41
第26図	B 1 区 3 面	竪穴住居 4	竈・遺物検出・出土状況	42
第27図	B 1 区 3 面	竪穴住居 4	遺物出土状況	43
第28図	B 1 区 3 面	竪穴住居 4 上層に伴う土坑	遺物出土状況	43
第29図	B 2 区 3 面	大形総柱掘立柱建物 1	平・断面図	45
第30図	B 2 区 3 面	大形総柱掘立柱建物 2	平・断面図	46
第31図	B 2 区 3 面	土壙墓 1 木炭櫛	平・断面図	47
第32図	B 2 区 3 面	土壙墓 2 木炭櫛	木炭検出状況 (1)	48
第33図	B 2 区 3 面	土壙墓 2 木炭櫛	木炭検出状況 (2)	49
第34図	B 2 区 3 面	土壙墓 2 木炭櫛	木炭検出状況 (3)	50
第35図	B 2 区 3 面	土壙墓 3	平・断面図	51
第36図	B 2 区 3 面	竪穴住居 5	平・断面図	51
第37図	B 2 区 3 面	竪穴住居 6	平・断面図	52
第38図	B 2 区 3 面	竪穴住居 7	平・断面図	53
第39図	B 2 ・ B12 区 3 面	竪穴住居 8	平・断面図	54
第40図	B 2 ・ B12 区 3 面	竪穴住居 8	遺物出土状況	54
第41図	B 3 区南段・B 5 区 2 面	遺構配置図		55
第42図	B 区西側 3 面 (古代・古墳時代)	遺構配置図		55
第43図	B 3 区 2 面	ピット P10	平・断面図	56
第44図	B 3 区 2 面	井戸 2	平面図	56
第45図	B 3 区 2 面	土壙墓 6	平・断面図	57
第46図	B 3 区 3 面	柱穴列 5	平・断面図	57
第47図	B 3 区 3 面	掘立柱建物 11	平・断面図	59
第48図	B 3 区 3 面	掘立柱建物 12	平・断面図	60
第49図	B 3 区 3 面	柱穴列 7	平・断面図	61
第50図	B 3 区 3 面	壁立溝	平・断面図	61
第51図	B 3 区 3 面	竪穴住居 9	平・断面図	62
第52図	B 3 区 3 面	竪穴住居 10	平・断面図	63
第53図	B 3 区 3 面	竪穴住居 11	平・断面図	63
第54図	B 3 区 3 面	竪穴住居 12	平・断面図	64
第55図	B 5 区	溝 14	平面図	66
第56図	B 5 区	ピット P13	平面図	66

第57図	B 5 区	竪穴住居13	平・断面図	67
第58図	B 6 区	遺構配置図		67
第59図	B 7～B10区	遺構配置図		68
第60図	B10区 2 面	土坑 6	平面図	69
第61図	B11区	井戸 3・4	平面図	70
第62図	B12区 3 面	竪穴住居14	平・断面図	72
第63図	B12区 3 面	落ち込み 1	平面図	72
第64図	C 1 区	遺構配置図		74
第65図	C 1 区 (1-2)	土墳墓 9	平・断面図	75
第66図	C 2 区	遺構配置図		76
第67図	C 3 区	遺構配置図		77
第68図	C 4～C 6・C 9 区	遺構配置図		78
第69図	C 5 区 2 面	井戸 7	平・断面図	79
第70図	C 4 区 2 面	土墳墓 10	平・断面図	80
第71図	C 9 区 2 面	掘立柱建物17	平・断面図	81
第72図	C 2・C 7・C 8 区	遺構配置図		82
第73図	C 6 区 2 面	井戸 8	平・断面図	83
第74図	C 6 区 2 面	井戸 9	平・断面図	83
第75図	C 6 区 2 面	井戸 10	平・断面図	83
第76図	C 6 区 2 面	竪穴住居16	平面図、竈 平・断面図	84
第77図	C 6 区 2 面	竪穴住居16	平・断面図	84
第78図	C 7 区	竪穴住居17	平・断面図	85
第79図	C 7 区	竪穴住居18	平・断面図	87
第80図	C 7 区	竪穴住居18	床面 2 遺物出土状況、竈 1 平・断面図	88
第81図	C 7 区	竪穴住居18	床面 1・竈 2 平・断面図	89
第82図	F 1・F 2 区	遺構配置図		93
第83図	F 2 区 2 面	溝 25	平・断面図	94
第84図	F 2・E 1～E 3 区	竪穴住居群	平面図	95
第85図	F 2 区 2 面	竪穴住居19	平・断面図	96
第86図	F 2 区 2 面	竪穴住居20・21	平面図	97
第87図	F 3 区	遺構配置図		98
第88図	F 3 区	竪穴住居22	平・断面図	99
第89図	F 5・E 6 区	遺構配置図		100
第90図	F 6・F 8 区	遺構配置図		101
第91図	F 7 区	遺構配置図		101
第92図	E 1 区	ピット P 18	平・断面図	102
第93図	E 1 区	竪穴住居23、溝 33	平・断面図	103
第94図	E 1 区	竪穴住居24	平・断面図	104

第95図	E 1区	落ち込み5	平・断面図	104
第96図	E 1区	竪穴住居25	平・断面図	105
第97図	E 3区	竪穴住居26	平・断面図	106
第98図	E 3区	竪穴住居27・28	平・断面図	107
第99図	E 3区	竪穴住居27	遺物出土状況	108
第100図	E 3区	竪穴住居28	遺物出土状況	109
第101図	E 4・E 5区	遺構配置図		110
第102図	E 5区	掘立柱建物21	平・断面図	111
第103図	E 5区	掘立柱建物22	平・断面図	112
第104図	E 5区	掘立柱建物23	平・断面図	113
第105図	E 5区	柱穴列20・22	平・断面図	113
第106図	E 5区	柱穴列21、ピットP22	平・断面図	114
第107図	小路遺跡(高宮地区)・高宮遺跡(その3)	調査全体図		119・120
第108図	古代以前～中世	遺構変遷図		121・122
第109図	出土石器実測図(1)			128
第110図	出土石器実測図(2)			129
第111図	出土石器実測図(3)			130
第112図	出土石器実測図(4)			131
第113図	出土石器実測図(5)			132
第114図	高宮遺跡及び周辺調査位置図			147・148

表 索 引

第1表	高宮遺跡検出の竪穴住居一覧表	40
第2表	新旧遺構名対応表(1)	115
第3表	新旧遺構名対応表(2)	116
第4表	新旧遺構名対応表(3)	117
第5表	出土石製遺物一覧表	127

本文写真目次

I. レプリカの作製

写真(3)	錫箔を貼る	135
写真(5)	シリコンを塗布する	135
写真(6)	乾燥(1回目)	135
写真(7-1・2)	シリコンの裏打ち	136

写真 (8) シリコンの塗布、乾燥 (2回目)	136
写真 (11) シリコン型枠の着脱	136
写真 (12) クロスをはがす	137
写真 (13-1・2) シリコンをはがす	137
写真 (16) 彩色作業	137
II. 番外編 (烏帽子の切り取り)	
写真 (2) 墓壇の周りの土を掘り下げる	138
写真 (3) 切り取りの準備	138
写真 (4-1・2) 発砲ウレタンの使用	138・139
写真 (5) 遺構の切り取り	139

巻頭カラー写真図版目次

巻頭カラー写真図版 1	小路遺跡 (高宮地区) ・高宮遺跡 (その3) 全景 航空写真 (垂直)
巻頭カラー写真図版 2	B区 大形総柱掘立柱建物群 全景 (東↑)
巻頭カラー写真図版 3	1. 河内平野北半部 (北東↑) (手前中央 高宮遺跡) 2. 高宮廃寺・高宮遺跡 全景 (南西↑)
巻頭カラー写真図版 4	1. 高宮遺跡 (その3) 全景 (南↑) 2. 高宮遺跡 全景 (南↑)

写真図版目次

写真図版 1	A区 全景 航空写真 (垂直)
写真図版 2	A区下段 1. A区下段1面 全景 (西↑) 2. A区下段3面西半部 溝1下層 (西↑) 3. A区下段1面 掘立柱建物2 4. A区下段3面 溝1下層 縄文土器出土状況 (北↑)
写真図版 3	A区下・中段 1. A区下・中段8面 全景 (北東↑) 2. A区中段9・10面 全景 (南↑)
写真図版 4	A区中・上段 1. A区中段6面 全景 (北↑) 2. A区中段9面 検出状況 (北↑) 3. A区中段9面 掘立柱建物3東端、土坑1 (東↑) 4. A区上段7・8面 全景 (北↑)

5. A区上段10面 全景（北↑）
- 写真図版5 B区 全景 航空写真（垂直）
- 写真図版6 B1区
1. B1区2面 溝11（北↑）
 2. B1区2面 建物ピットP5の礎石検出状況（北東↑）
 3. B1区西半部2面（南↑）
 4. B1区2面 羽釜出土状況（西↑）
 5. B1区2面 中世遺構 全景（東↑）
- 写真図版7 B1・B2区 古代・古墳時代遺構面 航空写真（垂直）
- 写真図版8 B1・B2区
1. B1区3面 大形総柱掘立柱建物5（手前）・4（奥）（東↑）
 2. B2区 全景（西↑）
- 写真図版9 B2区
1. B2区2面 ピットP9（西↑）
 2. B2区3面 土壙墓2木炭柳（南↑）
 3. B2区3面 土壙墓1木炭柳（北↑）
 4. B2区3面 土壙墓3木炭柳墓壙底（南↑）
 5. B2区3面 大形総柱掘立柱建物1・2（南↑）
- 写真図版10 B1・B2区
1. B1・B2区3面 竪穴住居群（東↑）
 2. B1区3面 竪穴住居2・3上面（東↑）
- 写真図版11 B1区
1. B1区3面 竪穴住居4最下面（南↑）
 2. B1区3面 竪穴住居4 土器出土状況（西↑）
 3. B1区3面 土坑2（西↑）
 4. B1区3面 竪穴住居1・2（北↑）
 5. B1区3面 竪穴住居2下層西半（南↑）
 6. B1区3面 竪穴住居2下層 ピット上の土器出土状況（南西↑）
 7. B1区3面 竪穴住居2下層 土器・鉄鋌出土状況（西↑）
- 写真図版12 B2・B4・B12区
1. B2区3面 竪穴住居6（南↑）
 2. B2区3面 竪穴住居7（南↑）
 3. B2区3面 竪穴住居8 土器出土状況（北↑）
 4. B2区3面 竪穴住居5（南↑）
 5. B12区3面東半部 竪穴住居8（手前）・14（奥）（東↑）
- 写真図版13 B11・B12区
1. B11区 全景（西↑）
 2. B12区3面西半部（北↑）

3. B12区3面 落ち込み1 (北↑)
4. B12区3面 落ち込み1 土器出土状況 (西↑)
5. B12区3面 竪穴住居14 (西↑)
6. B12区3面 竪穴住居14 竈 (西↑)

写真図版14 B2・B3区

1. B2・B3区2・3面 (北西↑)
2. B3区2・3面 掘立柱建物・柱穴列 (南↑)
3. B3区3面 壁立溝 (西↑)
4. B3区3面 竪穴住居9・10 (南↑)

写真図版15 B3区

1. B3区2・3面西半部 (南↑)
2. B3区2面 土壙墓6 (南↑)
3. B3区2面 土壙墓6 土師器皿・烏帽子出土状況 (南↑)
4. B3区3面 掘立柱建物11・12 (西↑)
5. B3区2・3面東半部 柱穴列 (東↑)

写真図版16 B4・B5・B7～B10区

1. B5区2面 中世遺構集中区 (南↑)
2. B10区 掘立柱建物15 (東↑)
3. B4区 全景 (西↑)
4. B7～B10区 全景 (北↑)

写真図版17 C区

1. C1区 全景 (西↑)
2. C区 全景 航空写真 (垂直)

写真図版18 C1・C2・C4・C6・C9区

1. C1区2面 土壙墓9 (南↑)
2. C2区2面 全景 (南東↑)
3. C6区2面 井戸9 遺物出土状況 (西↑)
4. C6区2面 全景 (北↑)
5. C4区 (西↑)
6. C6区2面 竪穴住居16 土器出土状況 (北↑)
7. C6区2面 竪穴住居16 (南↑)

写真図版19 C5・C7区

1. C5区 全景 (北↑)
2. C7区2面 全景 (西↑)

写真図版20 C7区

1. C7区2面 全景 (北東↑)
2. C7区2面 竪穴住居18付近 (南西↑)

写真図版21 C7区

1. C7区2面 竪穴住居18 竈1 (手前)・2 (奥) (東↑)
2. C7区2面 竪穴住居18 完掘状況 (西↑)

写真図版22 C7区

1. C7区2面 竪穴住居18 竈1 (北西↑)
2. C7区2面 竪穴住居18 竈2煙道 (南↑)
3. C7区2面 竪穴住居18 竈2 (南西↑)
4. C7区2面 竪穴住居18 竈2支脚の高坏 (南西↑)

写真図版23 E・F区 全景 航空写真 (垂直)

写真図版24 E1・E2区

1. E1区 全景 (東↑)
2. E3区 竪穴住居27 甌出土状況 (東↑)
3. E2区 竪穴住居24 (左前)・20 (右奥) (南西↑)
4. E1区 竪穴住居25 (西↑)
5. E1区 竪穴住居25 竈 (西↑)

写真図版25 E1区

1. E1・F2区 竪穴住居群上面 (南↑)
2. E1区 竪穴住居26中面 (西↑)
3. E1区 竪穴住居26 鎌出土状況 (南東↑)
4. E1区 竪穴住居26 土器出土状況 (北西↑)
5. E1区 竪穴住居26 最下面状況 (南西↑)

写真図版26 E3・F2区

1. E3・F2区 竪穴住居群 全景 (南↑)
2. E3・F2区 竪穴住居群最下面 全景 (東↑)

写真図版27 E3区

1. E3区 竪穴住居27中面 (東↑)
2. E3区 竪穴住居27 土器出土状況 (東↑)
3. E3区 竪穴住居28 土器出土状況 (北↑)
4. E3区 竪穴住居28ピット内 土器出土状況 (東↑)
5. E3区 竪穴住居28 土器・竈出土・検出状況 (北↑)
6. E3区 竪穴住居27・28下面 (北↑)

写真図版28 F2・F3区

1. F2区 竪穴住居19上面 (南↑)
2. F2区 竪穴住居19 竈 (南↑)
3. F3区 竪穴住居22 (東↑)

写真図版29 F1～F3区

1. F1～F3区 全景 (北↑)
2. F2区奈良遺構面 (南↑)
3. F3区 (西↑)

4. F 3区 (南↑)

写真図版30 E 4～E 6区

1. E 4～E 6区 全景 (東↑)

2. E 4区中心 全景 (東↑)

3. E 5区 ピットP22断面 土器出土状況

写真図版31 E 6・F 5～F 8区

1. F 5区 (西↑)

2. F 7区 (北↑)

3. F 8区 (東↑)

4. E 6区 (東↑)

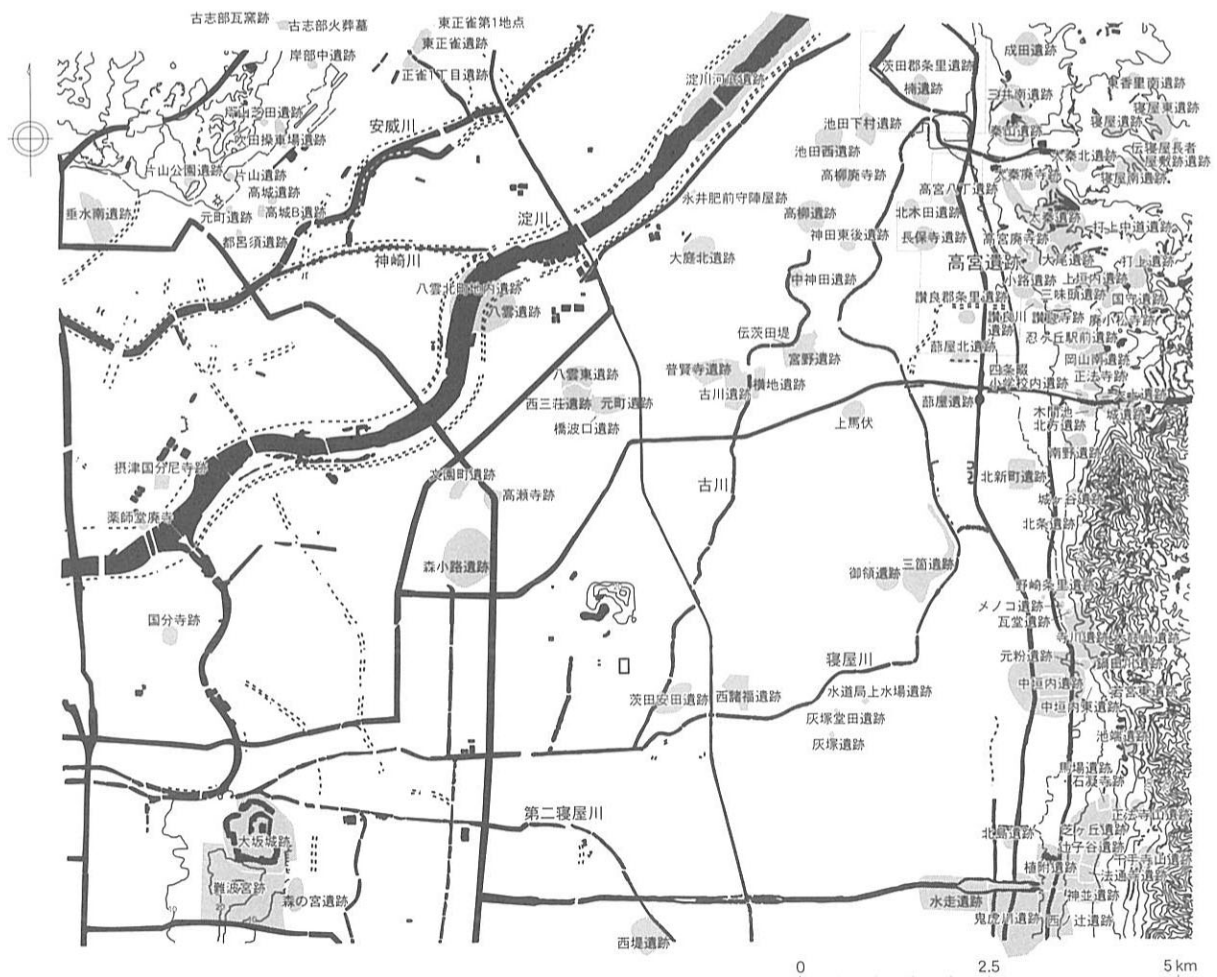
第1章 調査に至る経緯と方法

第1節 調査に至る経緯

高宮遺跡は大阪府寝屋川市国守町に所在する。生駒山地の西側斜面から派生した丘陵の先端部に立地し、遺跡の北側には国指定史跡「高宮廃寺跡」が隣接することから、遺構・遺物が存在する可能性が非常に高い地域であった。

この地に一般国道1号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路建設が計画されたため、当センターは平成12年11月から平成13年3月までの間、小路遺跡確認調査として道路建設予定地内に41カ所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無、および遺構が確認された場合にはその深度の確認を行った¹⁾。その結果、トレンチの多くから溝・土坑・ピット等の遺構を検出し、古代～中世の土器が出土することが確認され、道路建設予定地内が遺跡であることが判明した。なお、調査の成果を受けて小路遺跡は小路、高宮、大尾として遺跡名を分ける扱となった。

以上の成果にもとづき、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受けた当センターが、日本道路公団関西支社の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、小路遺跡（高宮地区）として平成13年6月から平成14年3月まで、高宮遺跡（その3）として平成14年4月から11月まで埋蔵文化財発掘調査を実施した。平成13年度の小路遺跡（高宮地区）の発掘調査においては里道部分などの



第1図 北河内南半の古代遺跡分布図（飛鳥時代～平安時代前期）

未調査地が残りの、また奈良時代大形総柱掘立柱建物周辺ではその下層遺構が未調査として残ったため、これらの未調査地と小路遺跡（高宮地区）調査地の北東に隣接する部分をあわせて平成14年度に高宮遺跡（その3）として調査を実施したものである。

他に平成13年度に小路遺跡（大尾地区）²⁾を東側で、平成14年度に高宮遺跡（その2）を西側で実施しているが、本報告書では小路遺跡（高宮地区）と高宮遺跡（その3）の遺構分を掲載するものである。

（合田・一瀬）

註

- 1) (財)大阪府文化財センター 2002 『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第77集）
- 2) (財)大阪府文化財センター 2003 『大尾遺跡 一般国道1号バイパス（大阪北道路）建設に伴う小路遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第92集）

第2節 位置と環境

1. 地理的環境

高宮遺跡は寝屋川市小路から高宮にかけて所在し、生駒山地へ連なる枚方丘陵より西へと派生した小高い丘陵の先端に立地する。丘陵頂部には弥生時代の方形周溝墓等を検出した大尾遺跡が位置し、下降する南西斜面地に高宮遺跡が立地する。高宮遺跡の調査区内には西側に枚方撓曲とうきょくといわれる活断層によって形成された段丘崖が南北にはしり、その比高差は約10mにも及ぶ。

縄文時代前期には海岸線が枚方撓曲付近まで入り込んでおり、旧河内湾・河内潟を形成していた。時代が下るにつれて海岸線は退いていき、小河川などによって堆積した沖積平野が形成されていく。当調査区においても段丘崖以西では斜面性の堆積物が厚く堆積する。

古代にあっては河内潟の名残である低平な平野が形成されており、高宮遺跡からはそれを一望することができたと考えられる。また、遠く西方の対岸には、上町台地にそびえ立つ難波宮をのぞむことができたであろう（第1図）。

調査地から東へ約1kmの地点には、古代官道の一つである南街道を踏襲する東高野街道が南北にはしる。東高野街道は生駒山地の西麓沿いに比較的直線を意識して設置された幹線道路である。河内の平野部には河内潟の名残である湿地帯が点在し、河内平野を南北に通過する唯一の官道としてその起源は古いと考えられている。また、都である奈良へと抜けるいくつもの街道と交差することもその起源の古さの傍証となろう。それに対し調査地より西側約500mの現在の高宮の集落には、南北の2線の道路、即ち、西端に河内街道が通り、山根街道が間を貫いて現在の高宮の集落と他の村落をつないでいた。河内街道は主に樟葉や京都が重要な拠点として整備されてから発達した道路であり、東高野街道よりも利便性の高い重要な幹線道路であったと考えられる。この河内街道沿いに位置し、また東側に古代寺院である高宮廃寺をのぞむ高宮の集落は交通の要所に位置したといえよう。一方、山根街道は枚方丘陵沿いの太秦など近辺の集落へ向かう古来から生活道としての交通路であった。また、高宮の集落内には、江戸時代に讃良郡の一の宮とされた延喜式内社高宮神社が鎮座し、讃良郡の周辺集落の中では中心的存在であった（第2図）。
(小暮)

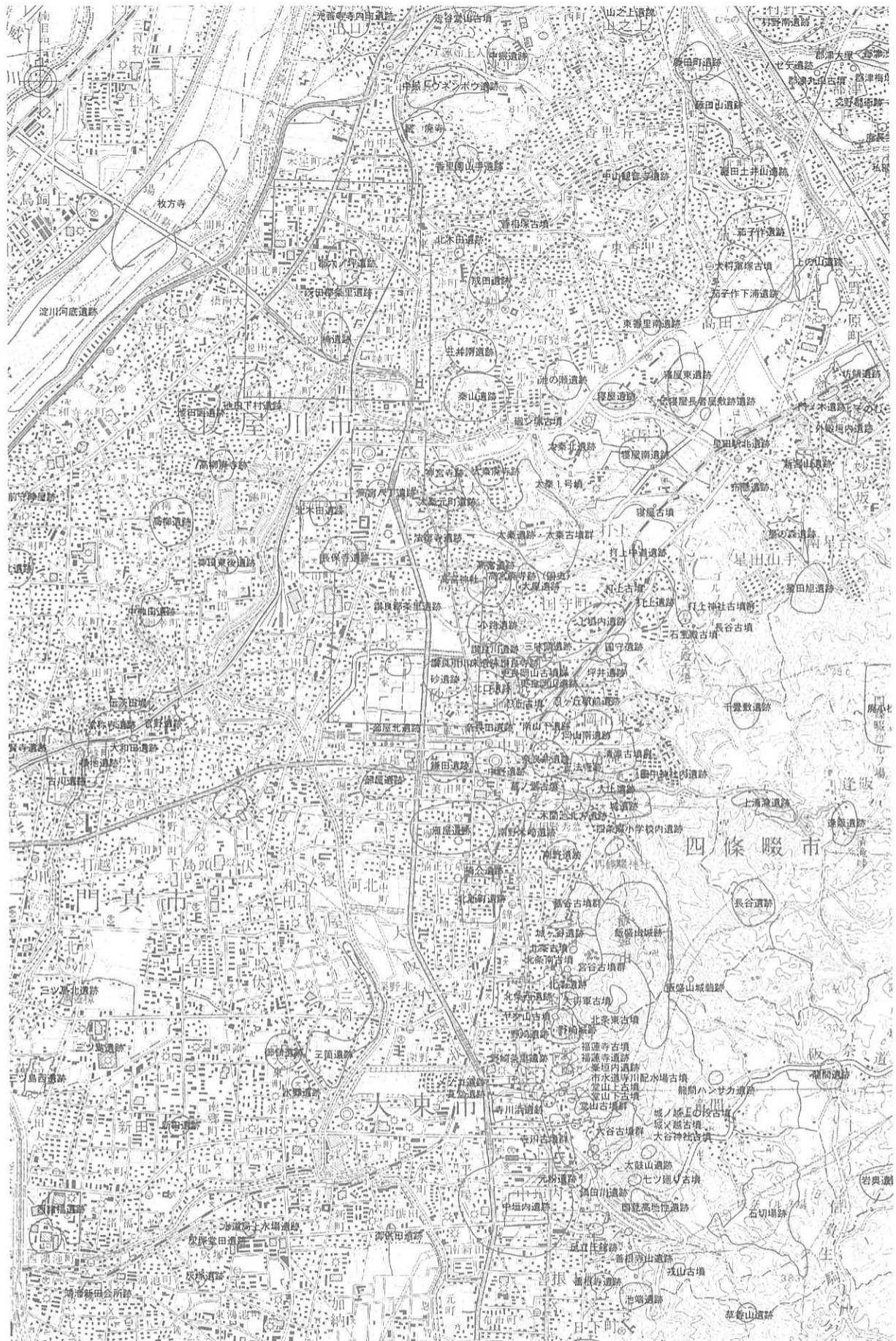
2. 歴史的環境

高宮遺跡は旧石器時代の遺物の散布地として旧知であるが、また、先史時代より中世に至るまで脈々と人々の生活が営まれてきた複合遺跡でもある。

ここでは特に、高宮遺跡を取り巻く歴史的環境を考える上で、重要と思われる周辺の遺跡を取り上げて記述するものとする。また、高宮遺跡は国郡里制の設かれた古代にあっては讃良郡に含まれることから、古代以前については交野郡、茨田郡を含む広い地域を同一丘陵に連なる北河内地域ととらえて記述し、古代以後は高宮遺跡の含まれる讃良郡について述べるものとする。

旧石器時代 高宮遺跡の立地する枚方丘陵周辺では多くの旧石器時代の遺跡があげられる。

高宮遺跡は国府型ナイフ形石器の散布地として知られているが、同じく国府型ナイフ形石器の出土し



第2図 高宮遺跡調査位置図 (1/50,000)

た遺跡には以下の遺跡があげられる。

生駒山地の北端となる男山丘陵上に位置する枚方市の樟葉東遺跡では国府型ナイフ形石器の他、チャート・サヌカイトの有舌尖頭器等を出土している。生駒山地を源とする穂谷川周辺ではサヌカイトの国府型ナイフ形石器、小型ナイフ形石器、搔器等を出土した津田三ツ池遺跡が位置する。三ツ池遺跡の対岸にはキャンプサイトと考えられる炉跡遺構を検出した藤阪宮山遺跡が位置し、チャート製のものも若干含まれるがサヌカイトを主として国府型ナイフ形石器、小型のナイフ形石器等を出土している。交野市では神宮寺遺跡で国府型ナイフ形石器や有舌尖頭器等が出土し、布懸遺跡では小型のナイフ形石器が出土している。高宮遺跡と同一丘陵上に位置する太秦遺跡では、国府型ナイフ形石器が古墳の盛土内より採集され、更に東側となる寝屋川市打上の市立第四中学校裏手の丘陵端でも国府型ナイフ形石器が表面採集されている。また、四條畷市と寝屋川市の境界を流れる讃良川河床に形成された四條畷市更良岡山遺跡でも礫器や国府型ナイフ形石器等を出土している。

縄文時代 縄文時代には早期の編年基準として有名である尖底の押型文をつけた「神宮寺式土器」を出土した交野市神宮寺遺跡や後続する編年標識である爪型文の「穂谷式土器」を出土した早期～中期の穂谷遺跡などが立地する。押型文をつける縄文時代早期の土器は四條畷市田原遺跡や大東市寺川堂山下遺跡でも採集されている。

縄文時代中期では、交野市星田旭遺跡において北白川上層式の影響の強い波状口縁をもついわゆる「キャリパー形土器」を検出している他、「船元式土器」を検出した四條畷市南山下遺跡や砂遺跡、寝屋川市讃良川遺跡などがあげられる。讃良川遺跡は、縄文時代中期初頭～後期初頭にかけての集落遺跡でドングリの貯蔵穴からは土器と共に獣骨・貝殻などが出土している。

また縄文時代後期～晩期には、穂谷川左岸の枚方台地の北縁に交北城ノ山遺跡が立地し、石剣や石棒などの石器や埋葬施設である埋甕遺構が検出されているほか、中津式・滋賀里式・船橋式といった後期の土器を出土した四條畷市更良岡山遺跡などがあげられる。

弥生時代 弥生時代前期には畿内第Ⅰ様式の土器を出土した四條畷市雁屋遺跡や田原遺跡前期遺跡があげられる。中期には高宮遺跡の北西にあたる寝屋川市高宮八丁遺跡で溝や土坑などが検出されているが、弥生時代中期で集落は廃絶し、高地性集落へと生活拠点が移動するようである。その候補としては寝屋川市太秦遺跡があげられる。畿内第Ⅱ様式の土器を出土した太秦遺跡は高宮遺跡の同一丘陵上の北東に位置し、中期には摂津地域と共通した口縁端部にキザミ目をめぐらす甕が出土するが、後期には集落自体が縮小するとともに、「河内の土器」の特徴を備えた簾状文をつけた土器が中心となることは興味深い。また高宮遺跡に東接する大尾遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓群を検出しており、あるいは竪穴住居のある太秦遺跡の墓域の可能性が考えられる。

弥生時代中期には遺跡数が増加し、防御的な性格の強い高地性集落が周辺地域にも数多く営まれる。なかでも大集落には、高床住居や方形周溝墓群を検出した穂谷川水系の枚方市交北城ノ山遺跡があげられる。また、交北城ノ山遺跡から穂谷川を挟む分村の枚方市田口山遺跡では、多数の鉄器が出土している。

弥生時代後期には遺跡数は膨大なものとなり、中期の遺跡の周辺部に多くの集落が営まれるようになる。田口山遺跡の東側の丘陵に高地性集落の枚方市長尾西遺跡が立地し、ベッド状遺構や焼失住居を検出している。その他、枚方丘陵周辺では墳丘墓の検出や小形重圏文鏡、分銅形土製品の出土で注目される枚方市鷹塚山遺跡、六角形竪穴住居とベッド状遺構が確認された枚方市山ノ上天堂遺跡などの集落が

営まれ、瀬戸内地域までに広がる交流を示す遺跡として知られている。また高地性集落だけでなく、居住域が低位段丘上にも進出するようになり、古墳時代まで継続して発展する枚方市茄子作遺跡などの集落が形成され始める。

古墳時代 北河内では、生駒山地を源とし主に交野市から枚方市にかけて流れる天の川水系に安定した勢力基盤が形成されていることが古墳の分布より窺える。寝屋川市に東接する交野市の地名である「交野」は「新撰姓氏録」に記載されている肩野物部連の居住地であり、饒速日命にぎはやひのみことの河内降臨神話をもつ磐船神社が存在することなど、古墳時代の大豪族である物部氏に関わる多くの伝承をもつ。また「日本書紀」には継体天皇の樟葉宮（現在の枚方市樟葉に推定されている）での即位等が記載されているなど、淀川水系の掌握が大和政権にとって重要視されていたことが想定される。

前期古墳には、バチ形前方部が認められる雷塚古墳を含む交野市森古墳群、碧玉を中心とした玉類を出土した妙見山古墳、天の川や付近の平野を一望できる香里丘陵東端部に立地する藤田山古墳等が築造されている。また淀川をのぞむ台地にも万年寺山古墳が築造されており、椿井大塚山古墳と同範関係をもつ三角縁神獣鏡を含む8面の青銅鏡を出土している。また、古墳時代には前期後半に築造された独立丘陵上に立地する四條畷市忍ヶ丘古墳があげられ、北河内の前期古墳の中では竪穴式石室を有するものとして知られている。

中期の古墳には天の川水系に禁野車塚古墳、穂谷川水系に牧野車塚古墳の枚方・交野市域の2大前方後円墳が存在するが、消滅した陪塚を含めて内容は明らかでない。また天の川水系には、森古墳群に続く首長系譜と考えられている車塚古墳群が後期初頭まで引き続いて造営されている。遺跡に近接する地域では太秦遺跡を含めた周辺に古墳群が形成される。太秦遺跡では中期から後期にかけ数多くの古墳が築造されていたことが出土遺物より明らかであるが、神武東征伝承と「野見宿禰の墓」伝承をもつ太秦高塚古墳（トノ山古墳）を除き、墳丘上部は現存しない。太秦高塚古墳は二段築成の円墳で周濠がめぐらされており、主体部は組合式木棺でありテラスには円筒埴輪が立てられ、また造り出し部分には形象埴輪も立てられていた。また、四條畷市においては更良岡山古墳群が中期～後期にかけて営まれるほか、大東市堂山古墳群の1号墳は大量の鉄製品と共に初期須恵器をもつことで知られている。

淀川左岸流域では仁徳天皇の時代に「茨田堤」が築かれ、「茨田三宅」が設置されたと「古事記」や「日本書紀」に伝えられるが、こういった大規模な土木工事には古墳時代中期頃の渡来人の技術が大きな役割を果たしたであろうと考えられている。

渡来人の足跡を傍証するものとして韓式系土器や初期須恵器の出土や馬の飼育・製鉄に関する遺構・遺物の検出があげられ、北河内地域にもこれらの共通項を含む遺跡が数多く発見されている。交野市では鍛冶遺構を検出した古墳時代後期の森遺跡などの諸集落が営まれているほか、枚方市域でも牧野車塚古墳に隣接する地域に竈や甗を検出した小倉東遺跡や茄子作遺跡など、初期須恵器や韓式土器を出土する遺跡が多数存在する。寝屋川市では、淀川に通じる寝屋川沿いに立地する楠遺跡や長保寺遺跡において韓式系土器や初期須恵器等が出土している。長保寺遺跡では、井戸枠に準構造船の船材が転用されており興味深い。高宮遺跡の周辺では、大量の製塩土器を出土した四條畷市中野遺跡や古代馬の骨を出土した奈良井遺跡、双方が出土する葎屋北遺跡、竈・甗・甕の3点セットを出土した岡山南遺跡などがあげられる。

古墳時代後期には各地で群集墳が築かれるようになるが、高宮遺跡の周辺では「河内名所図会」にも「八十塚」として紹介されているが開墾によって姿を消した寝屋川市打上古墳群や、木棺直葬を主体と

した太秦古墳群、四條畷市更良岡山古墳群など、見晴らしのよい斜面地を中心に数多くの群集墳が築かれた。

寝屋川市には高宮遺跡の北側に「太秦」という地名があり、古墳時代の渡来系氏族の代表的存在である「秦氏」との関連が伝承されている。遺跡の周辺では古墳時代後期に、北河内最大規模の横穴式石室を有する寝屋古墳が打上古墳群の中心的存在として築かれ、古墳時代終末期（飛鳥時代）には花崗岩の割り抜き式の横口式石槨をもつ石の宝殿古墳が、飛鳥時代後半には高宮廃寺が立地する。

古代～中世 高宮遺跡の含まれる讃良郡の郡衙や設置場所、条里については今後の成果が待たれるところであるが、讃良郡には四カ所の古代寺院があげられ、そのうちの一つである高宮廃寺は高宮遺跡の北側に隣接する。

高宮廃寺は^{おおもりみみや}大杜御祖神社の敷地内に存在する。昭和54年度に寝屋川市教育委員会で寺域確認調査がおこなわれ、薬師寺式伽藍配置と復元されている。出土した素弁八葉蓮華文軒丸瓦や単弁八葉蓮華文をもつ平城宮式軒丸瓦と唐草文の軒平瓦から飛鳥時代後半に創建されて奈良時代まで存続し、火災により平安時代には一度廃絶したと考えられている。廃絶後の高宮廃寺は、鎌倉時代後期に、^{あめのよるぎたまのみこと}天萬魂命を祭神とする延喜式内社大杜御祖神社の神宮寺として北辺の旧講堂に当たる地に建立された。

この高宮廃寺の周囲に広がる高宮遺跡からは、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての大集落が検出されており、高宮廃寺を創建した古代氏族の居住域と推定されている。この大集落は、丘陵上の見晴らしのよい土地に寺院を建立するために廃絶し、現在の高宮の集落が位置する西側の丘陵裾部へと居住域を移動したものと考えられている。検出された遺構には一辺1mもの掘方をもつ大形掘立柱建物や、石組の井戸、柵列によって隔たれた一辺4mの竪穴住居などがある。

一方、氏神としての大杜御祖神社は、旧宮地伝承地が神社北西約50mに残されており、昭和55年の発掘調査において2間×3間の掘立柱建物が検出され、高宮廃寺創建期の神社社殿遺構の可能性も考えられている。現在の大杜御祖神社が鎮座している社殿は江戸時代に高宮廃寺西塔上に移動したものであり、古代では氏寺と氏神が東西に並び建てられていた。このような例には渡来系である百済王一族により天平時代に創建された枚方市の百済寺と百済王神社がある。百済寺は高宮廃寺と同じく薬師寺式伽藍配置であり、共通する点が多く興味深い。最近では、九頭神廃寺と九頭神遺跡との関連で郡寺・郡衙というセットも注目されている。

平安時代の高宮遺跡では井戸が検出され、瓦器碗や土師器皿と共に「保延六年」（1140年）と墨書された曲物が出土している。

高宮遺跡のこの成果は本調査区より北西側、現在の高宮の集落域であり、寝屋川市教育委員会により昭和55年に発掘された。

また、高宮廃寺が敷地内に存在する大杜御祖神社の西方約150mには讃良郡一の宮とされる天萬魂命の子孫を祭神とする延喜式内社高宮神社が鎮座する。この二社は共に延喜式神名帳旧事紀に記載されており、一つの集落に二つの親子関係の式内社をもつことは極めてまれである。このように一村に二社の式内社で親子関係の祭神を祭る例には京都市左京区の秦氏を祭神とする上賀茂神社、下賀茂神社の両社がある。

讃良郡の他の寺院には、太秦遺跡の北方に立地する「河内の秦寺」と推定される「太秦廃寺」、寝屋川市と四條畷市にまたがり、讃良川上流右岸に立地し讃良岡山遺跡に含まれる白鳳時代に創建された「讃良寺」、四條畷市清滝に所在する奈良井、中野遺跡の東側の高台に立地する白鳳寺院の「正法寺」な

どがある。

また、周辺の遺跡で注目されるものとして瓦器椀の生産遺跡である清滝遺跡があげられる。中世の瓦器椀の生産地域としては高宮遺跡には一番近接するものであり、高宮の集落にも供給されたであろうと考えられる。

(小暮)

《参考文献》

- 寝屋川市教育委員会 1998 『寝屋川市史』第1巻
- 寝屋川市教育委員会 1998 『寝屋川市史』第2巻
- 大阪府教育委員会 1988 『高野街道』歴史の道調査報告書 第2集
- 大阪府教育委員会 1988 『京街道』歴史の道調査報告書 第5集
- 寝屋川市教育委員会 1979 『片町線複線化工事に伴う国守遺跡調査概要報告』寝屋川市文化財資料
- 寝屋川市教育委員会 1980 『高宮遺跡発掘調査概要報告』寝屋川市文化財資料2
- 寝屋川市教育委員会 1985 『高宮遺跡発掘調査概要報告VI』寝屋川市文化財資料8
- 寝屋川市教育委員会 1986 『高宮遺跡発掘調査概要報告』寝屋川市文化財資料9
- 寝屋川市教育委員会 1993 『長保寺遺跡－(株)伊藤喜工作所開発に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』寝屋川市文化財資料19
- 宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭 2001 『大阪東北部地域の地質』地域地質研究報告
5万分の1地質図幅 京都(11)第51号 NI-53-14-8
- 枚方市 1985 「枚方市文化財分布図」
- 編集 枚方市史編纂委員会 発行 枚方市 1967 『枚方市史 第1巻』
- 編集 枚方市史編纂委員会 枚方市 1986 『枚方市史 第12巻』
- 枚方市教育委員会 1985 『枚方の遺跡と文化財』
- 瀬川芳則・中尾 芳治 発行 保育社 1983 『日本の古代遺跡 11大阪中部』
- 財団法人枚方市文化財研究調査会 1998 『新版 図録・枚方の遺跡』
- 平凡社 1986 『日本歴史地名大系 第28巻 大阪府の地名』
- 編集 交野市教育委員会 発行 財団法人 交野市文化財事業団 1995 『星田歴史風土記』
- 編集 片山長三 発行 原田誠一 1969 『交野町史 改訂増補一』
- 発行 四條畷市歴史民俗資料館 2002 『第17回特別展 みどりの風と古墳』
- 編集発行 大字高宮財産管理委員会 1998 『ふるさと 高宮今むかし』

第3節 調査方法

調査は、下草・竹・雑木を伐採することから始め、その後表土層、近年の盛土、および近・現代の耕土層を重機にて除去後、人力による掘削、精査により遺構の検出に努めた。

調査は、財団法人 大阪文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』¹⁾を基準とし、国土座標軸に則った基準線を遺物の取り上げ、遺構図面作成に用いた。

地区割りは国土座標軸（第VI座標系）を基準とし、第I区画から第VI区画の6段階でおこない、大阪府全域を共通の地区割りで統一するものである。今回の調査では第IV区画までを使用した。第I区画は1万分の1地形図を利用したもので、1区画は東西8km、南北6kmとなる。第II区画は2,500分の1地形図を利用する。第I区画を東西、南北各4分割し計16区画に分けたもので、1区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第III区画は第II区画を東西20分割、南北15分割する一辺100mの区画となる。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10分割した一辺10mの区画となる。遺物の取り上げ作業は、全てこの第IV区画を基準に行った。

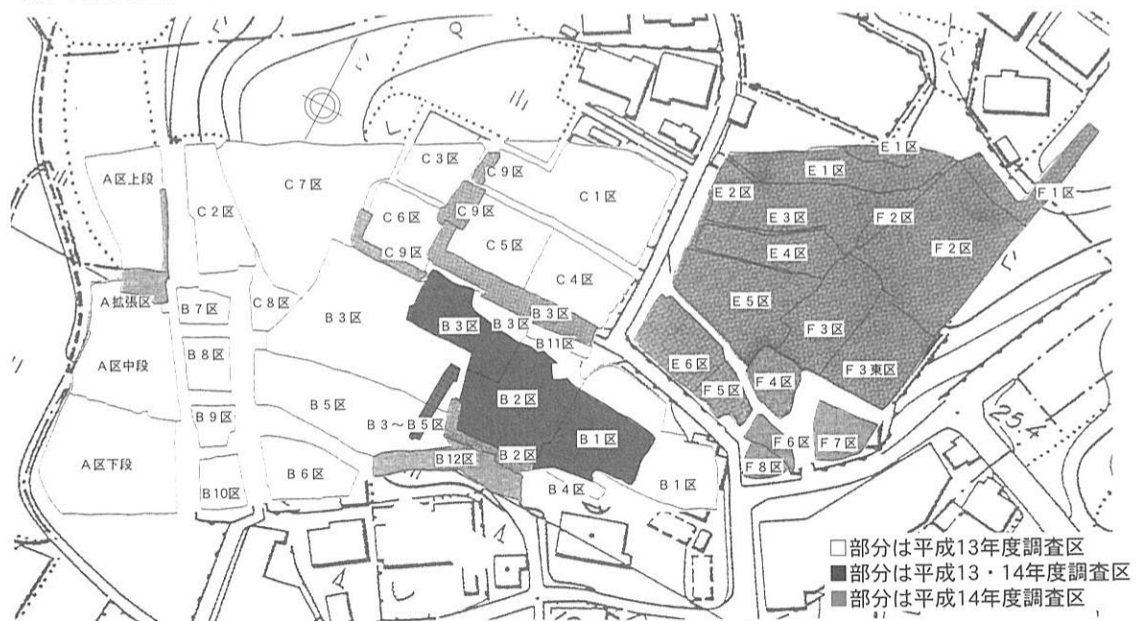
方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。

遺構の平面測量はヘリコプターによる写真測量を行い、1/50の平面図とそれを縮小編纂した1/100の遺構全体図を作成した。精度が要求される遺構については、基準線をもとに、1/20、1/10の図面を随時作成した。

調査については、小路遺跡（高宮地区）と高宮遺跡（その3）が丘陵裾から丘陵上にかけての同一地点の調査区であることから共用し、大きくは丘陵裾から上へA～C区と呼称し、途中で追加したE・F区は丘陵斜面から上へ割り振り、年次の調査別には平成13年度分がA区上・中・下段、B1～B11区、C1～C8区、平成14年度分がE・F区の本体調査区とともに、平成13年度分の補足調査分のB1～B3区の一部重複部分の他、A区拡張区、B12区、C9区である。（合田・一瀬）

註

1) (財) 大阪文化財センター 1988 『遺跡調査基本マニュアル』



第3図 調査区設定図 (1 : 1,600)

第2章 調査成果

第1節 基本層序

高宮地区は広い丘陵斜面地になっており、自然に生成した段丘崖を利用しながらも籬壇を造成することによって大小の平坦面を作り出している。

中でも大規模な平坦面は丘陵頂部に造成されたF2・F3・E4・E5区を中心とする平坦面と、東西に伸びたB1～B3区を中心とする籬壇である。後者の平坦面は古代の大形掘立柱建物の造成にともなうものと考えられる。層序は丘陵斜面地と裾部において基本的に異なり、丘陵斜面地南側のA区・B区では赤色シルトが南に向かって下降し、その上部には扇状地性の斜面堆積物が厚く残存する。一方斜面地北側のC・E・F区では基本的に赤色シルトの下層の黄色シルトが南西に向かって下降しながら堆積しており、頂部ではさらにその下層の黄褐色シルトが露出している。例外的にE1区のみ調査区の北側に池が存在し、北方向へと黄色シルトが下降して斜面堆積物がやや厚く堆積する。

丘陵裾部であるA区は耕作地として利用されており、バック・ホーによる機械掘削で現代耕土を除去した。耕土層除去後面はA区上段、中段では山側にあたる調査地東側は地山に至り、低地側にあたる西側は扇状地性の斜面堆積物が厚く残存する状態で検出される。調査地東側の地山は黄色シルト～礫層であり、大阪層群上部に相当すると考えられる。西側斜面堆積物は11層とした灰白色シルトに後期旧石器が含まれることからその上位は沖積層にその下層の礫層は洪積層に相当すると考えられる。

丘陵斜面地であるB区は籬壇造成された宅地の跡地であり、地区割りも基本的に宅地の区画を踏襲したものである。各区画のうち、尾根側にあたる区画北側では地山に至り、斜面側にあたる区画南側では中・近世耕土層や奈良時代～中世遺物包含層が斜面堆積する。地山では基本的に上位に赤色シルトが、下位に黄色シルトが南西へ向かって下降する状態で堆積しており、両者とも大阪層群上部に相当すると考えられる。

丘陵頂部であるC・E・F区は宅地造成によって大小の平坦面がつくられており、中・近世の整地土をとりぞくと黄色シルトの地山か下層の黄褐色シルトの地山が露出している。この黄褐色シルトの地山も大阪層群上部に相当する。その地層変換ラインはおおよそC1・E4・F2区より以北である。

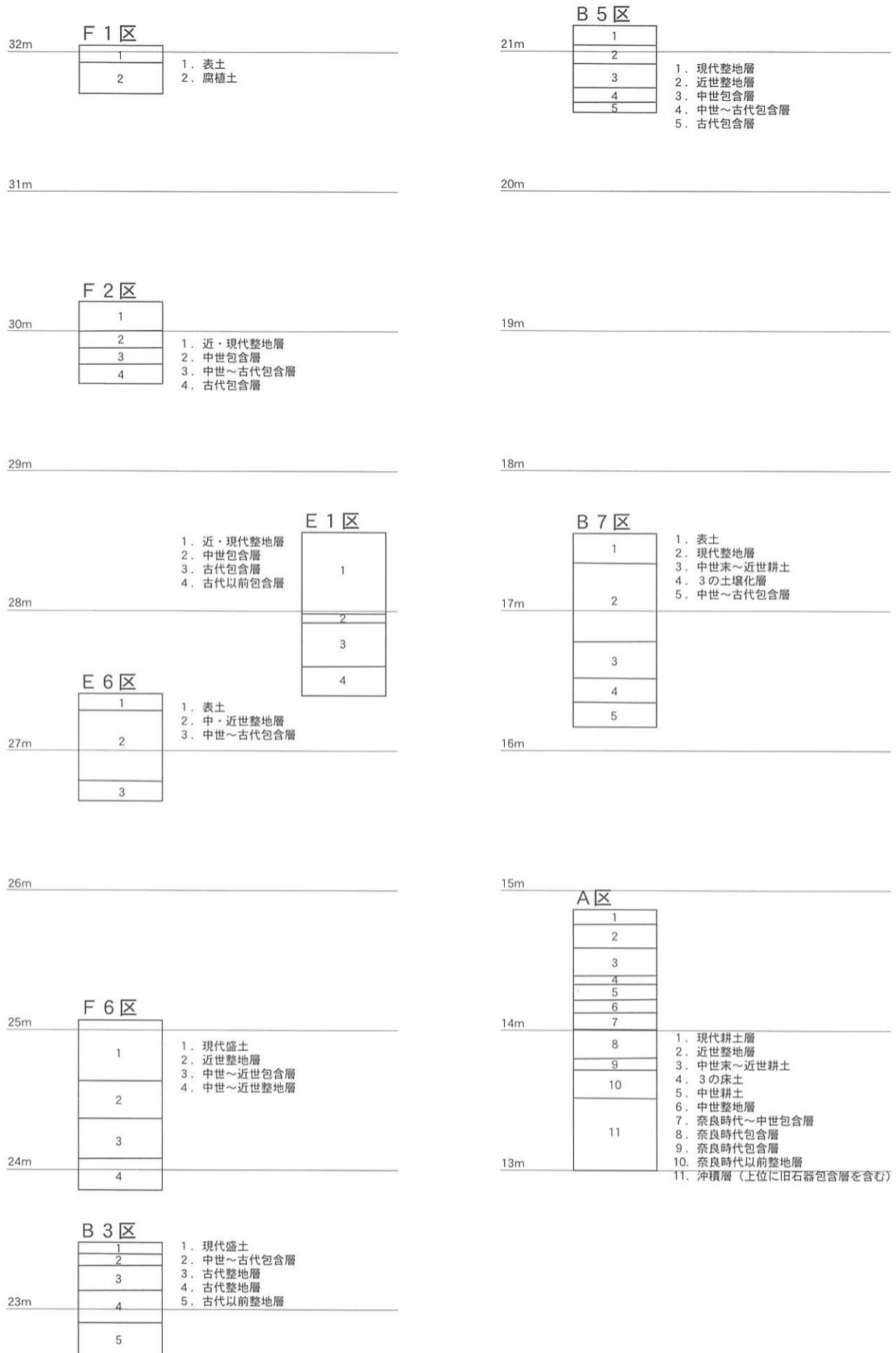
また、F1区は本調査区の中ではもっとも高所の急斜面であり、黄褐色の地山より更に下層の砂層、礫層が露出している。この地山も大阪層群上部であり、地層変換ラインはF1区より以北である。遺構は今回検出されなかった。

以上の状況より、A区については包含層が厚く堆積するため、各調査区ごとに基本層序を記した。B区は高宮地区において東西に長い中央の平坦部を中心とし、基本層序がおおよそ共通するため、1層－近世～近代耕土または整地層、2層－中世耕土または包含層、3層－古代以前包含層とした。C・E・F区は、B区よりも丘陵頂部となり、斜面堆積が少なくB区でいう1層と2層の薄層を除去すると黄色シルト、黄褐色シルトの地山にいたり、同一面で中世から古墳時代までの遺構を重複して検出する。よって、2層除去後面である2面の中でそれぞれの時代に分けて記載するものとする。

赤色シルト、黄色シルト、黄褐色シルトは大阪層群上部に相当し、遺物を含まない。以上の状況により基本層序は基本的にほぼ共通化が可能であり、斜面地の北側から最も堆積している南側まで段階的に層序を抽出して柱状模式図にあらわした。

(小暮)

第1節 基本層序



第4図 基本層序 (T.P)

第2節 小路遺跡（高宮地区）の調査

1. A区

A区は北へ高くなる雑段に合わせ、下・中・上段と呼称して調査を行ったが、急斜面が雑段造成されていることから、各段で遺構面の残りにかかなりの差が認められる。

A区下段

北東半部は現代耕土層除去後、しまった黄色シルト～細砂の地山類似層に至り、包含層は調査区南西半部にのみ残存する。南西半部では包含層下からまとまった遺構が検出された。調査区南西半部では上層から、現代耕土層、1層茶灰色シルト（奈良時代遺物包含層）、2層黄灰色微砂～シルト（奈良～古墳時代遺物包含層）、3層（河川堆積による礫層）が堆積しており、現代耕土層除去後面を0面、1層除去後面を1面、2層除去後面を2面、3層除去後面を3面として調査した。

0面

0面では南北方向にはしる鋤溝、溝を検出した。鋤溝、溝の埋土は灰色シルトであり、瓦器片を含むことから中世以降の耕作面と考えられる。鋤溝の方向は北北西－南南東方向にやや傾いており、鋤溝の幅は30cmである。

1面（第5図）

1面では掘立柱建物2棟の他、多数のピット、溝を検出した。

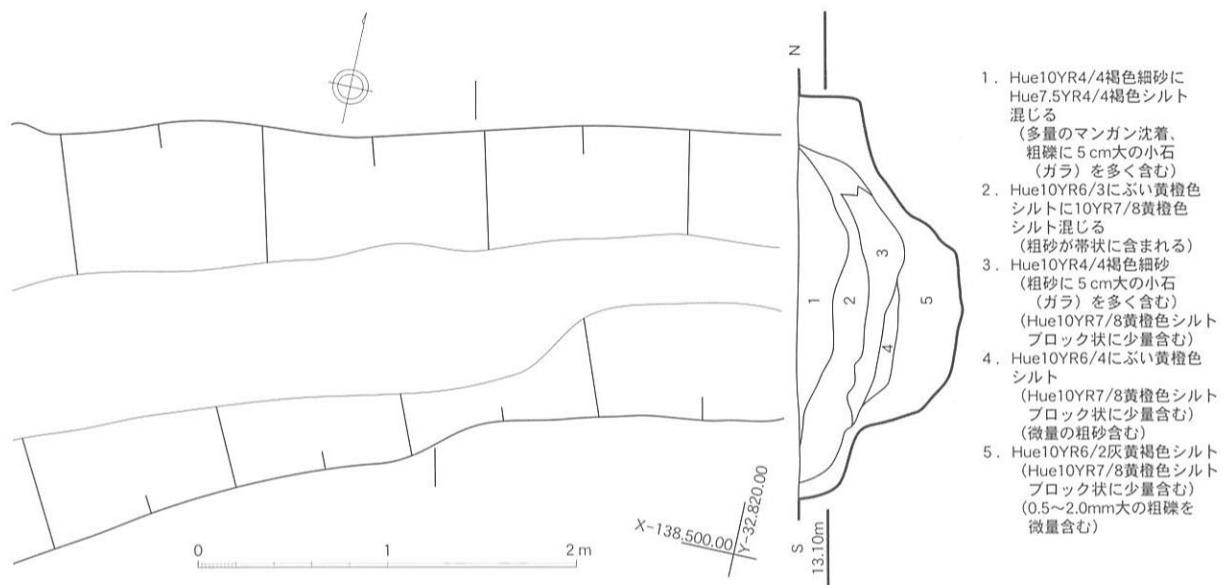


第5図 A区下段1面 遺構配置図

掘立柱建物 1 2間×1間以上（柱間1.8m）の総柱の掘立柱建物であり、調査区の西側に遺構は続くと考えられる。北へ庇がのびる可能性がある建物の主軸は北北西から南南東にもち、ピットの大きさは一辺が約45cm、深さ1mの正方形である。包含層の遺物が奈良時代であることから奈良時代の建物と考えられる。

掘立柱建物 2 2×2間（柱間1.8m）の総柱の掘立柱建物である。建物の主軸は掘立柱建物1と同じ北北西から南南東である。ピットの大きさは隅柱で一辺が約50cm、深さ1mの正方形である。東辺中央のピットの柱痕上より長岡京期に属する完形の土師器坏が出土したことから奈良時代後半期の建物と考えられる。

溝 1（第6図） 調査区南側で湾曲して東から西へ流れる溝1を検出した。溝は幅2.1m、深さ約90cmである。埋土は上層が荒い礫、下層が粗砂～小礫である。上層から出土した遺物は縄目叩き、布目のついた平瓦1点と土師器片である。溝1は調査区南半を大きく湾曲する河道状遺構の埋土上層とみられる。



第6図 A区下段1面 溝1 平・断面図

2面（第7図）

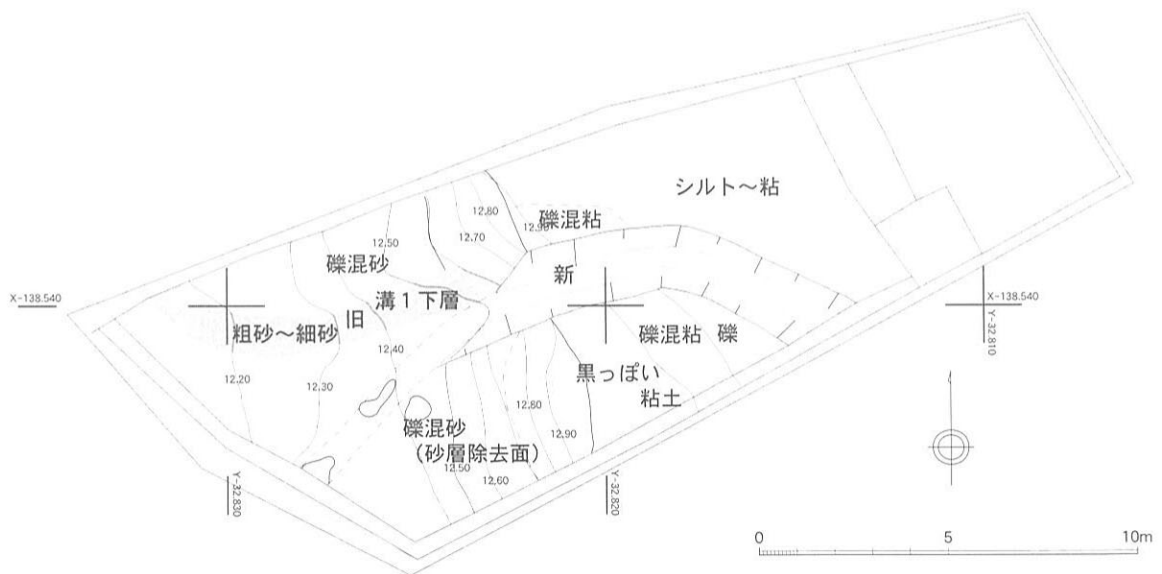
2面では、ピット、土坑のほか、切り合いのある溝を検出した。切り合い関係からは溝1→溝4→溝5、溝2→溝3、溝2→溝6の変遷がおえる。溝3・6は東西の溝であり調査区内では高低差がほとんどなく地形的にみて東側が削平されており西方向へ流れるものと考えられる。溝4は北から南へと流れる。2面からの出土遺物は少ないものの、溝2からは6世紀後半の須恵器坏蓋が出土しており古墳時代後期の面が主体であると考えられる。しかし、溝5については埋土が溝1の下層部分に連続性を持ち、屈曲部からナイフ形石器が出土することから溝1の下層の縄文小河川の氾濫によってできた溝と考えられ北西方向より南西方向の溝1への屈曲部へと連続する。溝の幅、深さは溝2が幅90cm～1m、深さ30cm、溝3は幅70cm、深さ23cm、溝4は幅1m、深さ30cm、溝5は幅1～1.5m、深さ40～50cm、溝6は幅80cm～1.2m、深さ10～30cmである。

3面（第8図）

1面の溝1下層は、沖積層に由来する礫・砂層を検出し、平成12年度の確認調査で検出された縄文時代河川に連続する可能性があるため、下層確認を実施した。2層下では北東から南西へと層厚を増すしまった礫層（3層）が確認され、その下の砂層中より縄文時代中期船元式の深鉢下半～底部が出土し



第7図 A区下段2面 遺構配置図



第7図 A区下段 段丘砂層除去後面 遺構配置図

た。出土状況は溝1の下層の小河川によってできたよどみに複数の土器片が溜まったという状況であり、遺構に伴うものではなく上流から押し流されたものであろう。（小暮）

A区中段

東半では、上層より現代の宅地造成に伴う整地層および現代耕土層、1層黄灰色シルト（近世～近代耕土）、2層茶灰色シルトと黄灰色シルトのブロック土（1層耕土の基盤となる近世整地層）が全域に堆積し、その下層に5・6層（以上8層まで西半で後述）の中・近世耕土が堆積し、7層シルトの硬化層（古代後半～中世包含層）、および8層シルト（奈良時代包含層）の薄層がみられ赤色シルトの地山に至る。西半では東半同様、2層までの堆積がみられ、その下層に3層灰色シルト（中世末～近世耕土）、4層黄灰色シルト（3層耕土の床土）、5層茶灰色シルト（中世耕土）、6層明茶灰色シルト（中世耕土土壌化層）、7層茶灰色微砂～シルト（古代後半～中世包含層、上部にマンガン斑沈着）、8層茶灰色シルト（奈良時代包含層）、9層淡茶灰色シルト（飛鳥～奈良時代包含層）、10層にぶい黄橙色細砂（古墳時代整地層）が堆積する。6層まではほぼ水平堆積であり、7層以下が北東から南西へと下降する斜面堆積である。10面は調査区の西辺に沿って整地層がみられる状態であり、11面は11層（灰色シルト）の整地層除去後に赤色シルト下層の黄色シルトの地山面を検出する。

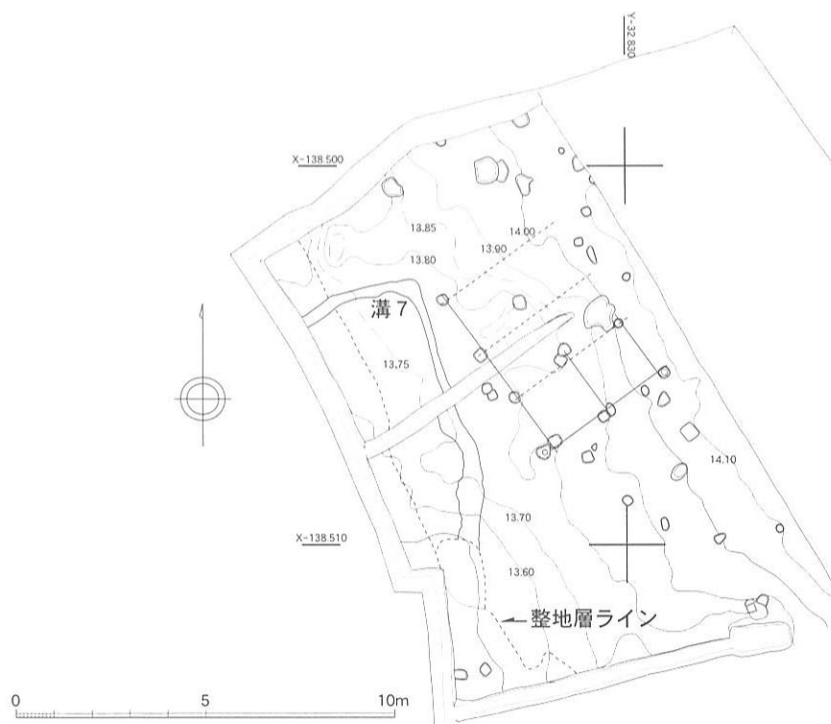
3～5面

3～6層までは水田耕作にともなう堆積層である。堆積の厚さは40cmにもおよび3層までは近代の陶器片を含むが、下層の6層へ近づくにつれて瓦器碗の破片や下層から巻き込んだ奈良時代の須恵器片等を多く含む。3～6層まで水田の区画、及び鋤溝はやや北西－南東方向に傾いた方向軸に沿っている。3面では調査区西側で隅丸正方形の土坑を検出した。また、3～5面に至るまで調査区南側中央付近で水田の水口は同一であり鋤溝も同一方向で検出され、中世から近世に至るまでその水田区画は踏襲されて

ていたことが明らかとなった。また調査区の北端では灌漑用と考えられる溜池を検出し、磨耗した古代の須恵器の他、近世の陶磁器片を出土した。

7・8面（第9図）

7面では調査区の北西では約直径30cm、深さ20～25cmの円形のピットを数カ所と土坑、小溝を検出した。また、調査区の南東でも同様な円形のピットをまとめて検出したが建物を構成するには至らなかった。時期については包含層中の遺物より平安時代～中世と考えられる。



第9図 A区中段8面 遺構配置図

8面では調査区の北西にL字状の区画溝7と奈良～平安時代のピットを検出した。溝は幅12cm、深さ10cmであり、埋土は灰色の微砂である。溝7は北より南に流れる。A区中段では谷の深部が中央部西側にあり、ピットが検出された東側に広がる遺構面のその落ち際に設けられた排水溝であろう。ピットの形状は、一辺が約30～40cm、深さ30cmの隅丸方形が中心であり、柱痕より復元すると柱の太さは17～18cmである。ピットの配置および埋土の観察から、3間×2間（柱間約1.8m）程度の小規模な建物が複数回同じ場所に再建されるか、もしくは根ぐされした柱の補強があったと考えられる。

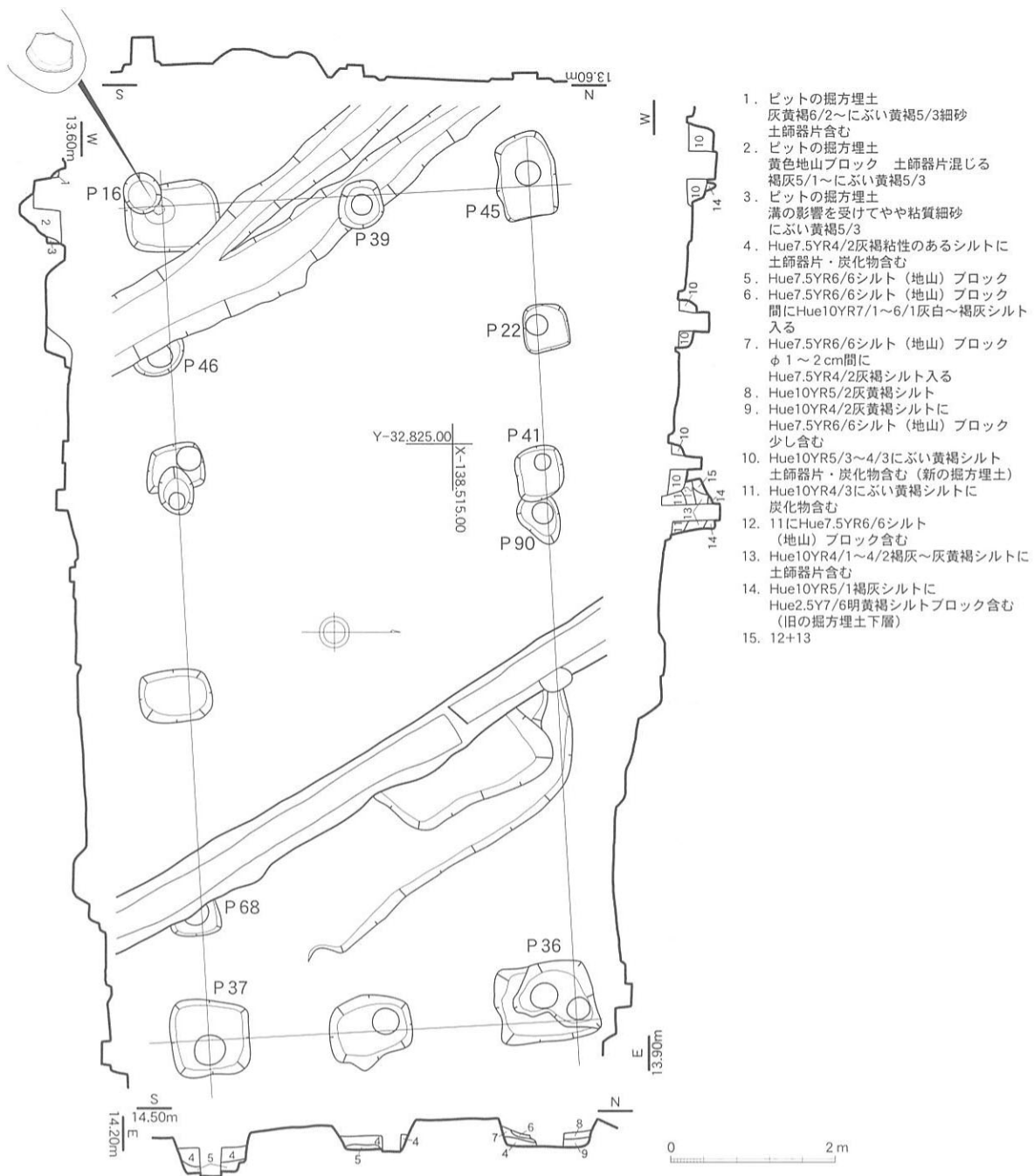
9面（第10図）

9面では、掘立柱建物3・4の2棟、土坑1のほか多数のピットを検出した。出土遺物は須恵器の甕や土師器の甕が多く、緑釉が施された須恵器の甕なども出土した。

掘立柱建物3（第11図） 東西に主軸をもつ掘立柱建物（5間×2間、柱間約2m）である。隅柱は一辺約1m、深さ約60cmの方形である。包含層の出土遺物より建物の存続時期は8世紀中葉と考えられる。



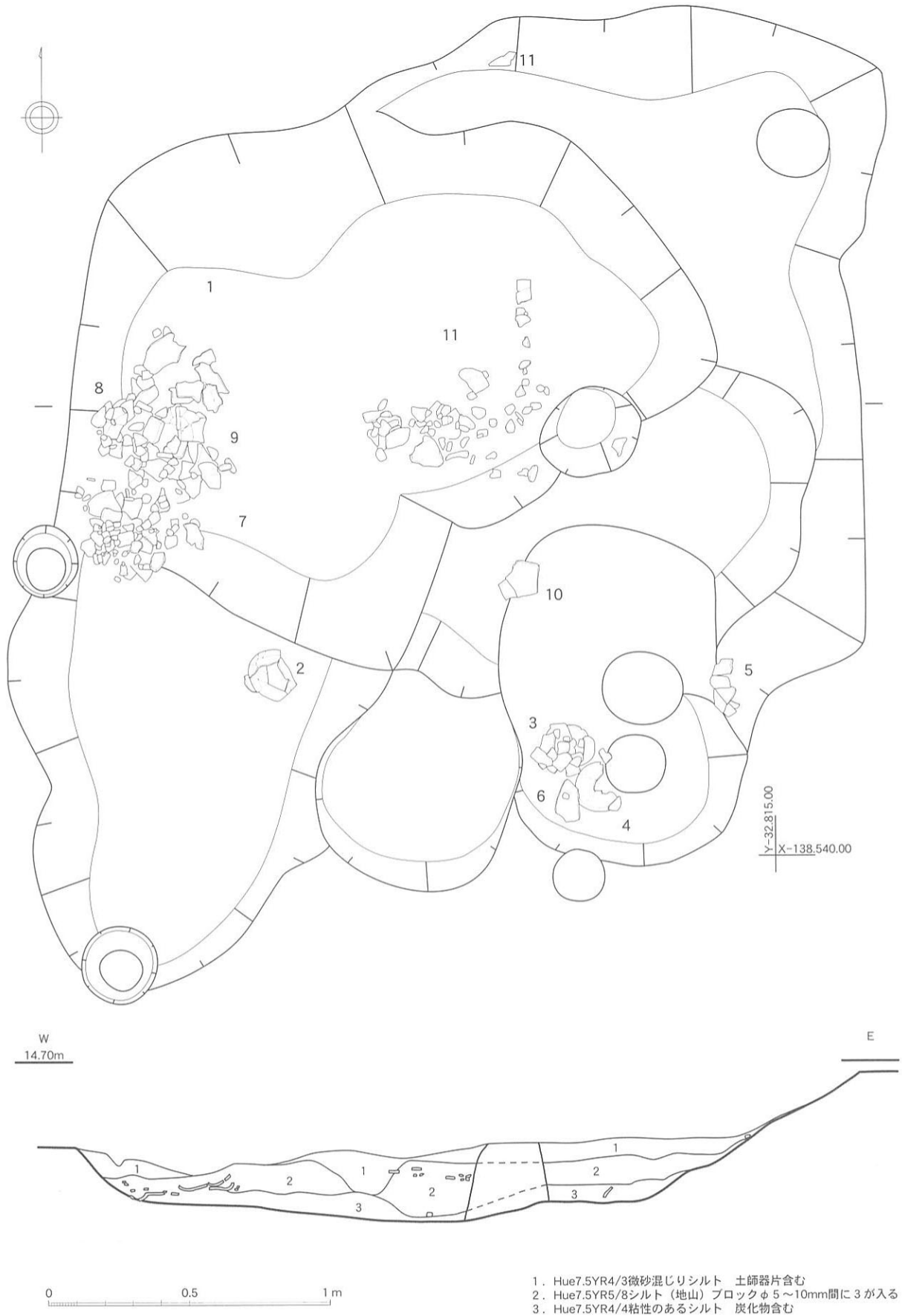
第10図 A区中段9・10面 遺構配置図



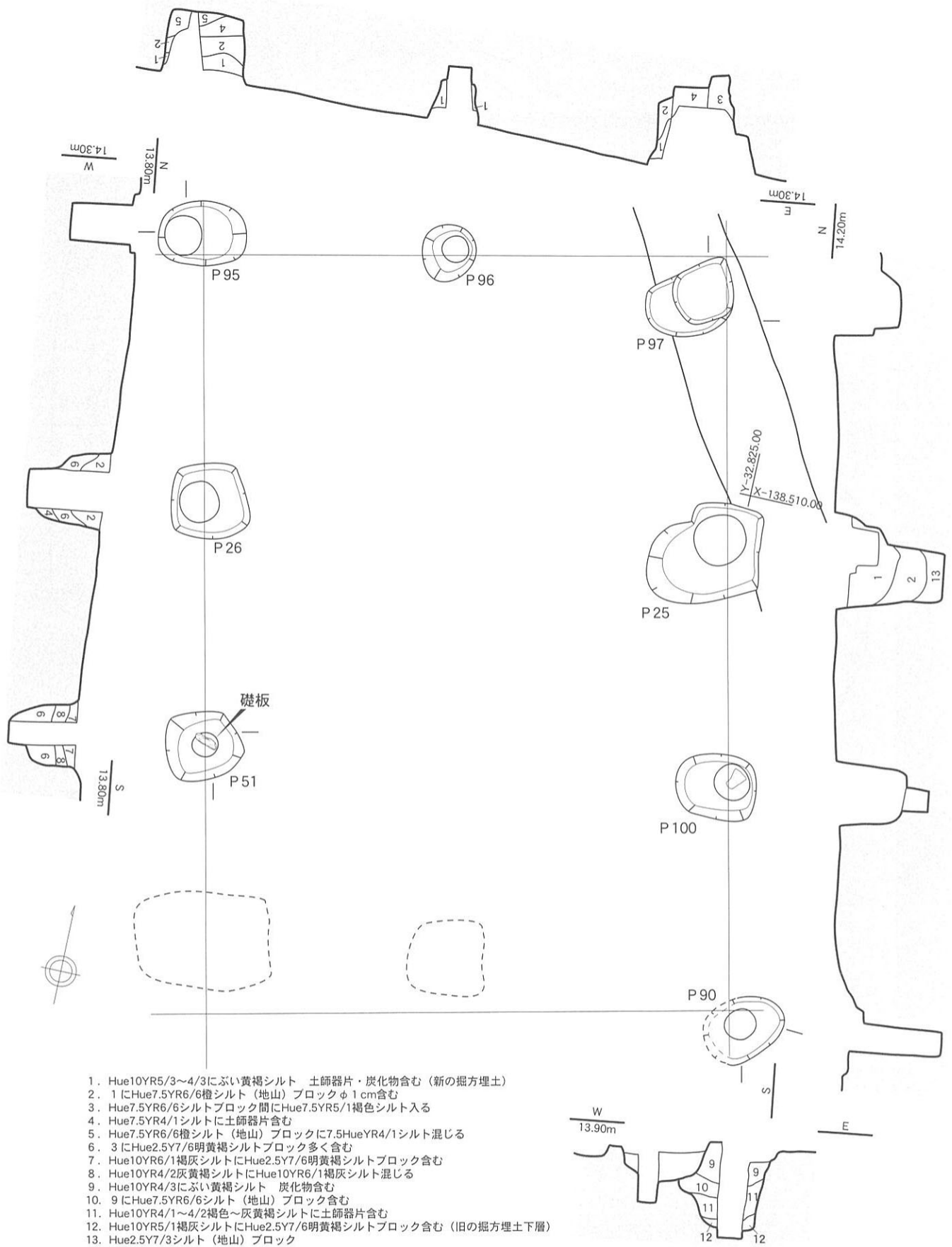
第11図 A区中段9面 掘立柱建物3 平・断面図

土坑1（第12図） 掘立柱建物3の東側では不整形な円形の直径約3m、深さ23cmの土坑1を検出した。土坑1からは奈良時代の土師器杯・甕類や須恵器杯等を大量に出土した。8世紀後半の土師器杯を中心とするが完形のもの無く、埋土中に炭化物なども含むことから、建物3の廃絶に伴う廃棄土坑と考えられる。

掘立柱建物4（第13図） 掘立柱建物4は少なくとも2回以上、掘立柱建物3の下層で立て替えられており、主軸は北北西-南南東にもつ。2間×2間以上の規模で、柱穴は一辺または直径が50~60cm、深さは深いもので70cm前後の方形~隅丸正方形の掘方であり、柱間は約2mである。柱穴には礎板が出土したのも存在する。包含層の出土遺物から7世紀~8世紀前葉にかけての建物と考えられる。



第12図 A区中段9面 土坑1 平・断面図



第13図 A区中段9面 掘立柱建物4 平・断面図

10面（第10図）

10面ではA区下段の溝2につながる溝2・8・9、複数のピット、波板状痕跡を検出した。溝2・8・9は、谷の深部である調査区中央付近の西端へ向かって流れる。溝2は、幅1.5m、深さ20cmであり、溝8は、幅1.2m、深さ20cmである。溝9は、幅75cm、深さ10cmで埋土は茶灰色明砂である。溝8の西肩部、溝2の東肩部では東西方向の波板状痕跡が数条ほぼ等間隔で検出された。波板状痕跡は長さ1m、幅40cm、深さ15cmであり、くぼみの底には黄色シルトの地山に由来すると考えられるチャートの玉石が固まって沈んでいた。10面は黄色シルトの地山上面に細かい礫と砂層が硬化した面であり、溝2・8は道路の側溝になる可能性がある（道路状遺構）。ただし、溝2・8の埋土は異なるため、それぞれが東側溝となり、時期は2時期にわたる可能性がある。溝2は少なくとも2回以上、軸を西側へ振れている。溝9は両溝間にはしる小溝であり、上面で6世紀後半の須恵器坏身が出土した。

（小暮）

A区上段

基本層序はA区中段と同様であり、3～6層は水田耕作にともなう堆積層である。7面において中世の屋敷、8・9面においては古代～飛鳥時代、10面において古墳時代の遺構を検出した。当調査区においても6層までは水平堆積、7層以下は調査区の東側においては西側が谷の深部となる斜面堆積であり、標高の高い地点ほど堆積が少なく、包含層の薄層を除去すると直下が地山となる。

3～5面

3～5面では、A区中段と同一方向の鋤溝、隅丸正方形の土坑を検出した。出土遺物は近世陶磁器、中世瓦器片、奈良時代の須恵器、土師器片等であり、いずれも下層より耕作時に巻き上げられたものと考えられ、中近世より現代に至るまで水田耕作地であったと考えられる。

7面（第14図）

中・近世耕土除去後面である7面では調査区の南半部を中心として中世の屋敷跡を構成すると考えられる柱穴を多数検出した。

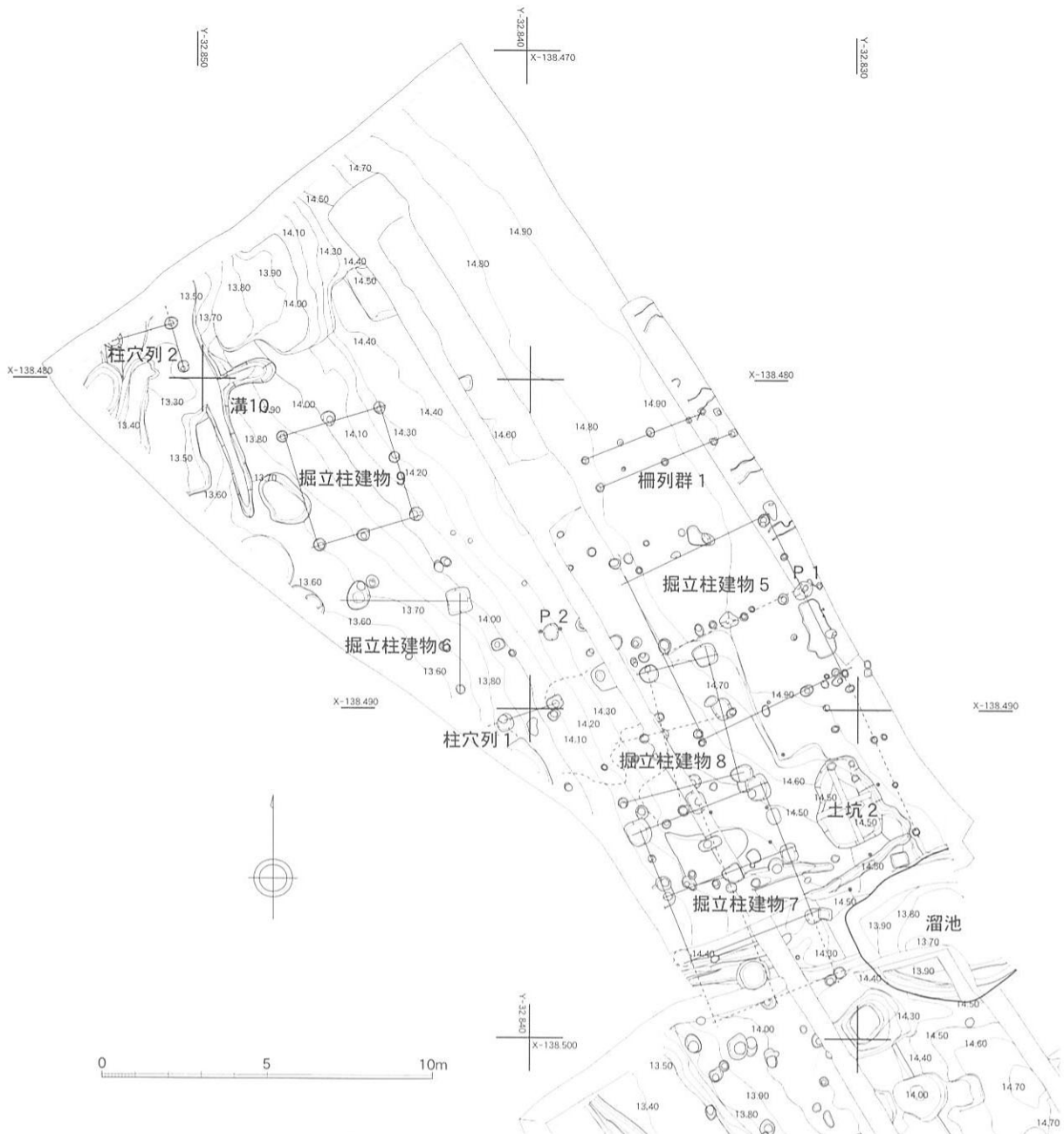
掘立柱建物5 掘立柱建物5の規模は2間×2間（柱間約2.5m）であり北西から南東に主軸をもつ。柱の掘方は隅柱で直径50cmの円形であり、深さは約25cmである。また建物の北西側2.5mの位置で北西－南東方向にのびる2列の柵列（柵列群1）を検出し、主屋を囲う垣根と考えられる。主屋の柱穴は根石をもつものが多い。根石の代わりに使用されているピットP1内の平瓦は調査区内において12～13世紀の瓦器碗と共伴する平瓦と同一系統である。

掘立柱建物6 掘立柱建物6の規模は1間×1間（柱間約3m）以上である。北東の隅柱と考えられるピットは一辺80cmの方形、他のピットは直径60～70cmの円形であり、直径40cmの比較的大きな根石をもつピットも存在する。

8面（第14図）

8面では、調査区南西半で南北に位置する掘立柱建物2棟のほか土坑およびピットを多数検出した。8層での出土遺物は8世紀の須恵器・土師器である。

掘立柱建物7・8 掘立柱建物7・8ともに2間×2間である。掘立柱建物7は柱間が2mであり、掘立柱建物8は柱間が1.8mである。軸方向は共に北北東から南南西にもつ。柱の掘方は一辺が70～80cmの方形であり、深さは40～50cmである。掘立柱建物7は北側の掘立柱建物8に先行し、柱の掘



第14図 A区上段7～10面 遺構配置図

方は掘立柱建物7では隅がより直線的な長方形であるのに対し、北側の掘立柱建物8では隅がより丸く楕円に近い長方形の掘方である。また、掘立柱建物8では同じ場所で2回以上の立て替えがみられた。また南側の掘立柱建物7は建物の東側にA区中段土坑1に類似する不整形な長楕円形の土坑2がみられ、焼けた炭などと共に8世紀中葉の土師器坏などを検出した。

柱穴列1・2 1間分の柱穴列（柱間約1.5m）を2箇所検出した。調査区北端の柱穴列2は調査区の北側に建物が展開することが考えられる。柱穴列1の上面では掘削時には8世紀の土師器小形甕を一個体分転んだ状態で検出した。柱穴列1の掘方は直径40cmの円形、柱穴列2の掘方は直径50cmの隅丸方形である。柱穴列1は掘立柱建物8を削平して立てられている。

9面（第14図）

9面では、調査区北西半で掘立柱建物1棟を検出した。またその他に掘立柱建物になり得る柱穴列を

検出しており、建物が他にも多数展開することが予測される。

掘立柱建物 9 建物の規模は2間×2間（柱間約1.5m）であり、主軸を北東から南西にもつ。柱の掘方は直径40cm、深さ30cmの不整形な円形である。8面では検出しなかったこと、並びに6世紀の整地層の上に建物が建てられていることから、出土遺物はないものの、おおよそ7～8世紀の建物と考えられる。

10面（第14図）

10面においては調査区北西部において北西に流れる幅50cm、深さ30cmのL字状の区画溝10を検出した。埋土は9層のシルトであり、調査区北西部から西は斜面地となっており平坦面の落ち際の溝と考えられる。10層中からは古墳時代の初期須恵器の高坏と土師器高坏が出土した。10面で検出した溝はA区中段で検出した道路状遺構と同時期に存在していたと考えられる。

ピット P 2（第15図） 11層を伴わない地山直上の調査区南東部では古墳時代の遺構と同じレベルで不整形円形の縄文時代のピット P 2を検出した。ピットは長径59cmのすり鉢状であり、深さは20cmである。ピットの上部には縄文時代後期（北白川上層Ⅲ式～元住吉山Ⅰ式）の深鉢の口縁から腹部にかけての破片が突き刺さった状態で出土した。深鉢の刺さったピットの底にはチャートの礫が敷き詰められていた。調理に伴うピットの可能性もある。

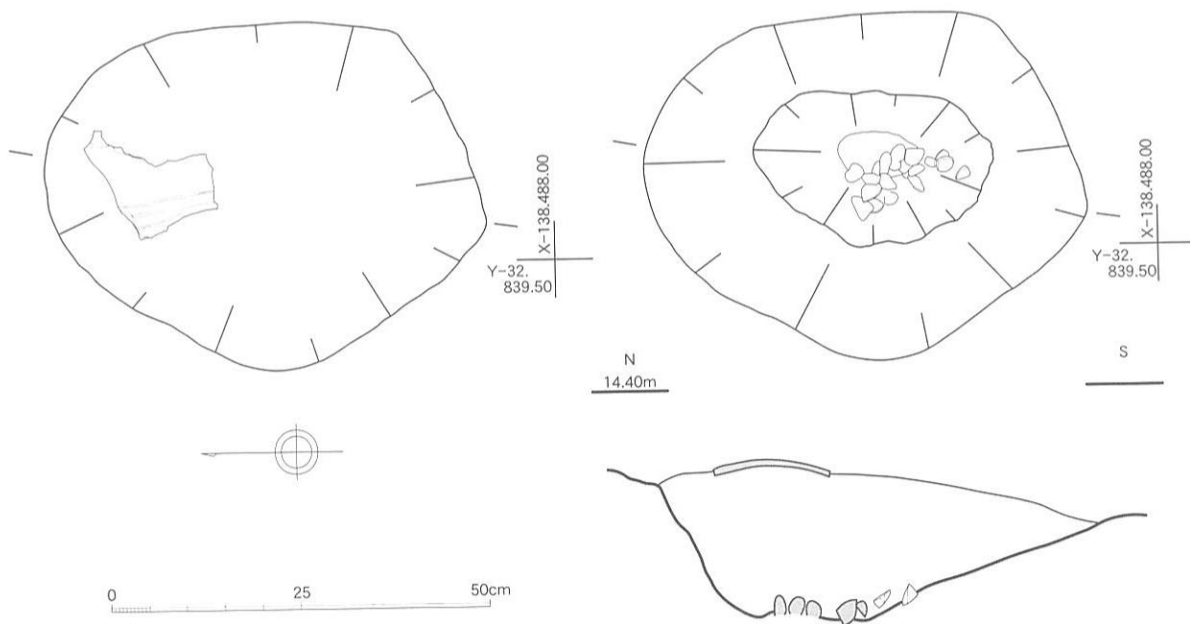
11面

10層掘削中、サヌカイト剥片を検出したため、調査区北西部において下層確認をおこなったところ、11層とした灰白色シルトから切り出し状のナイフ形石器およびサヌカイト剥片数点が出土した。

（小暮）

A区まとめ

- ・遺構と遺物の時期には大きく旧石器時代、縄文時代、古墳時代後期、飛鳥～奈良時代、中世がある。
- ・古墳時代後期には道路状遺構が検出された。これは奈良時代初めまでは存続する可能性がある。当調



第15図 A区上段10面 ピットP2 平・断面図

査区は高宮廃寺の南門推定地の南に位置することから関連する遺構と考えられる。

- ・比較的大形の掘立柱建物 3・7 は 8 世紀中葉に廃絶する。その後平安時代にかけては比較的小規模な建物が数回繰り返して建てられた。2 棟の建物は柱間が 2 m で東に廃棄土坑をもつという点において共通する。
- ・中世前半期は比較的小規模な屋敷地が広がる。
- ・中世後半期から近世にかけては水田耕作が繰り返しておこなわれた。

（小暮）

2. B区

B区は東西に細長いテラスを持つ雛段になっている上、B2区を中心に谷が入り込み、西側には急な斜面を擁するため、各遺構面はかなり複雑な様相を呈している。

B1区とB2区は現在の造成によって区画されたものであるが、同一の地層堆積傾向をもち、調査もほぼ同時期に行い、同じ経過をたどったため、まとめて記述する。ただし、B1区は中世の包含層である2層の堆積がB2区よりも厚く、その下層の遺構面が中世の屋敷地造成によって著しく削平されているのに対し、B2区は近世の雛壇造成によって一段下げられているために中世の包含層の堆積が著しく削平されているが、B1区よりもB2区の方がはるかに谷の深部であるために古代の包含層が若干厚めであるという違いがある。

北半は機械掘削後、中世包含層である2層の薄層が堆積し黄色シルトの地山面に至り、中世遺構を検出した。黄色シルトの地山は赤色シルトの地山の下層にあたり、南半では赤色シルトの出現する3面目で検出面は終了となる。北半の平坦面は中世以降、古代以前において赤色シルトの地山を足がかりに造成した南半の平坦面を更に北側に拡張したものと考えられ、赤色シルトの下層である黄色シルトの地山が露出している。赤色シルトと黄色シルトの地層変換ラインでは古代から中世の遺構を重複して検出したが、北側の黄色シルトの平坦面が安定した地点になると中世の遺構のみを検出した。

南半は北から南へと下降する傾斜地であり、1～3層が薄いところでは約10cm、厚いところでは80cm程度堆積していた。南側に傾斜するにつれ包含層の堆積が厚くなり、中世から古墳時代までの遺構を重複して検出した。この南側へ傾斜する谷状地形はB1区西半で落ち、B2区南側が谷の深部となりB3区東端に向かって上がるものと考えられる。

1層は中・近世の整地土であり、遺物は古代～中世の遺物を下層から巻き上げた細片を含む。南半の1層除去後面では遺構は検出されなかった。北半の1面と南半の赤色シルト上面の遺構が同じ中世の遺構であるため、両面を合わせて2面として記述する。ただし、B2区の南半では中世の遺構面の削平が著しく、1層が厚く堆積しており、これを除去すると2層が部分的にしか存在せず3層が出現する状況であり、南半において中世のまとまった遺構はほとんど検出されなかった。B1・B2区の北半は中世面のみで遺構の検出は終了し、南半は2面において中世の遺構、3面において古代の遺構と古墳時代の遺構を重複して検出した。3面については(1)古代の遺構、(2)古墳時代の遺構として述べることにする。

(小暮)

B1区 (第16～18図)

B区東端の区域である。

2面

2面では、中世の溝、井戸、土坑、礎石建物、掘立柱建物、ピットを検出した。傾斜した地山の上を整地して短期間に複数の建物や土坑、小溝が重複して設置されたようであり、削平が著しく、多数のピットを検出したものの明らかな掘立柱建物を構成するに至らなかった。礎石建物は少なくとも2棟以上存在したと考えられる。ピットP3・P4を含む建物は、柱間が2mであり、ほぼ正方位に主軸をとる。また、掘方が直径50cm、深さ10cmのピットP5からは直径12cmの正円形の削り込みがある礎石が1点出土した(写真図版6)。その他、ピットP6からは青磁合子が出土し、ピットP7では高宮廃寺と同範である平城宮式の軒平瓦を基礎に使用していた。ピットP8からは土師器皿が重なって出土したこ

とから隅柱の可能性はある。他に溝11西側の土坑には、甲状となった凝結物がある。これらの特色あるピット・土坑はいずれも溝11の西側50m²に密に検出されていることからこの地点の周辺に主屋が存在することが想定される。また、2層の包含層からは主に12～13世紀の瓦器椀が出土していることから、当区画に構築されていた建物は12～13世紀に所属する。一方、溝11より東側では炭化物を含む整地土が複雑に切り合っていることから、火所となる施設が累積したと考えられる。

溝11 溝11は平面形がY字形と逆U字形が密着した形状で南方向に流れ、中世屋敷地の区画溝となる可能性がある。溝の幅は60cm～1m、深さは30～60cmである。溝11からは瓦質羽釜が出土し、井戸1とも近いことから炊事施設が周囲に存在したと考えられる。

井戸1 素掘りの井戸であり、上面円形の掘方から一段下がったところで隅丸方形の平面形となる。一边は1.2mであり、深さ30cmより水が湧き、それ以上は掘削できなかった。瓦質三足釜、瓦器椀がまともに出て出土し、廃絶時期は14世紀頃と考えられる。

溝12 溝12はB1区では西進し、B1区の西端でB4区に向かって南進する。上部を削平されていたために深さがなく、B1区では溝芯を残すのみであった。幅は70～80cm、深さ10cmである。

3面

(1) 古代の遺構（第17図）…古代の大形総柱掘立柱建物を2棟検出した。

大形総柱掘立柱建物4・5（第19・20図） 調査区中央部で大形総柱掘立柱建物4（3間×3間、柱間約1.8m）と大形総柱掘立柱建物5（2間×2間、柱間約1.5m）の2棟を検出した。柱穴は方形で大形総柱掘立柱建物4が一边約1.2mであり、大形総柱掘立柱建物5が一边約1.1mである。大形総柱掘立柱建物は後述するB2区と同一方向軸で東西方向に並んで検出した。柱痕から想定すると柱の直径は両建物とも約40～50cmである。出土遺物はなく、下層の古墳時代の摩滅した土師器片などを掘方にわずかに巻き込む程度であった。

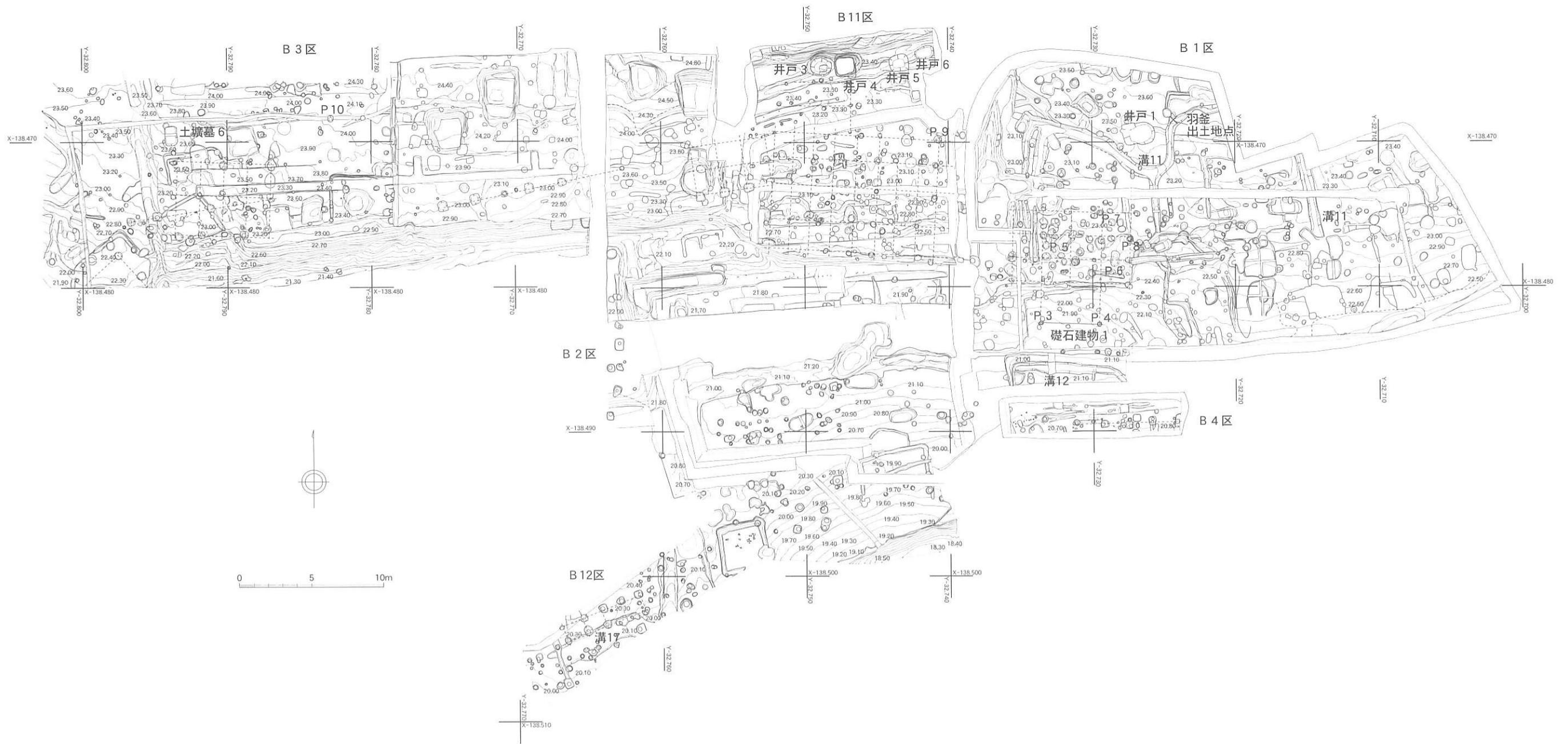
溝13 調査区南側において谷の深部に向かって急激に南西方向へ傾斜する落ち際に東西方向にのびる幅1mの溝を検出しており、大形総柱掘立柱建物群にともなう区画溝と考えられる。溝13は2面において検出された溝12の下層であり、中世の屋敷地の区画溝設置に際して再利用されたものと考えられる。溝12・13の遺物は上層で少量の瓦器椀片、下層では古墳～奈良時代の須恵器細片、土師器細片があるが、いずれも摩滅していた。 (小暮)

(2) 古墳時代の遺構（第18図）…古墳時代中期中葉の竪穴住居1～4を検出した。竪穴住居1～4は北から南へとゆるやかに下降する赤色シルトの地山をカットして作られた主柱4本の方形竪穴住居であり、共に南辺は整地土に床を貼っていたと考えられ、削平によって検出できなかった。

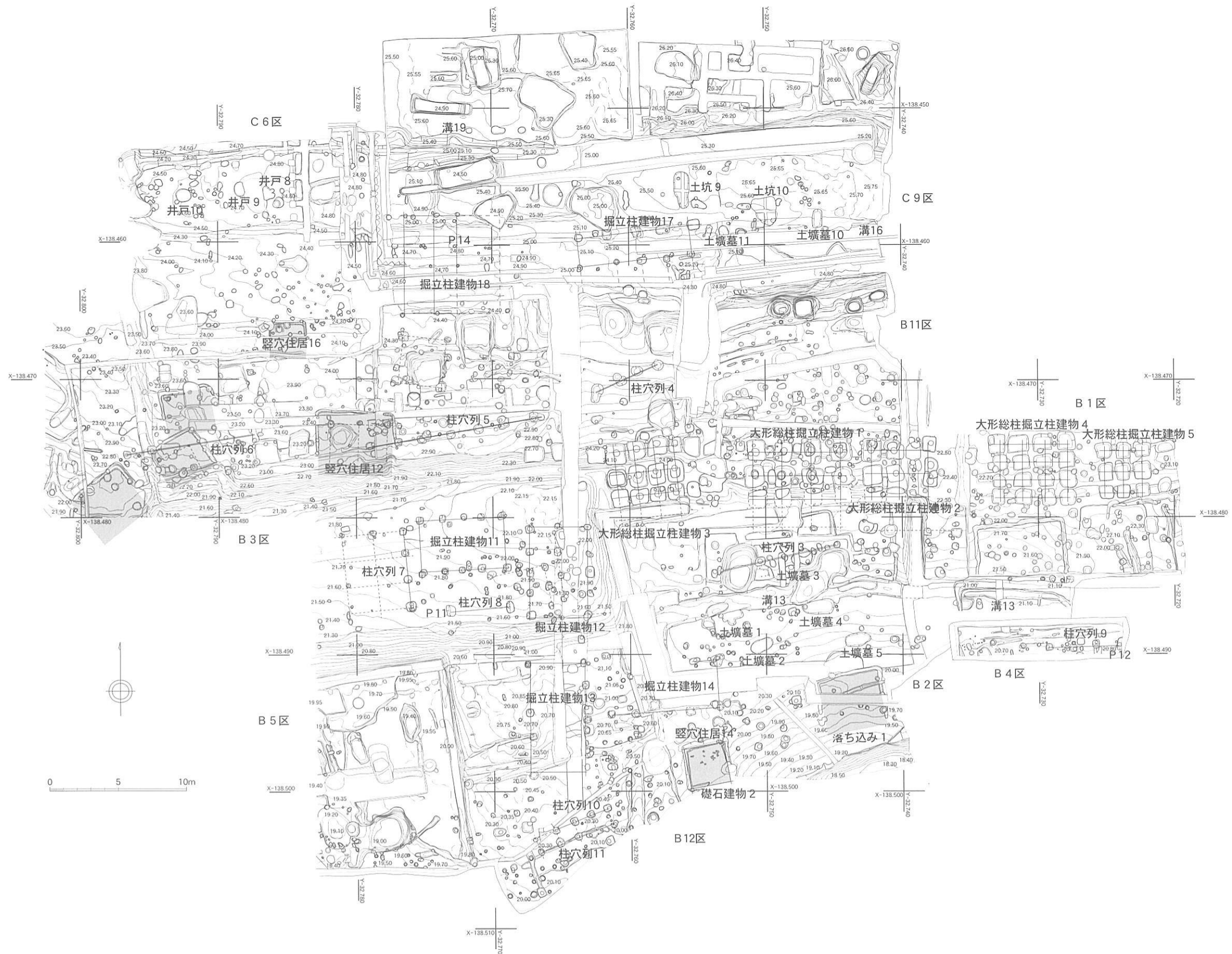
竪穴住居1（第21図） 東端の竪穴住居1は一边が5mの方形であり、4本柱の主柱に斜路の入り口、その対面に竈があった痕跡であるすり鉢状のピットと脚部に使用されたと考えられる2次焼成を受けた土師器を上向きで検出した。壁溝等の痕跡は見当たらないが、おそらく竪穴住居を拡張した際に、東辺斜路の北側に竈を作り直したと考えられる。

北から南へとゆるやかに下降する斜面において北・東・西辺を検出した。ほぼ南北方向に軸をもつ平面方形の竪穴とみられる。埋土は、灰黄褐色シルトであり、初期のものを含む須恵器、韓式系土器、土師器が多く出土した。床土は灰黄褐色シルトブロックに竪穴の基盤土である赤色シルトブロックが混じり、やや粘性をもつ。

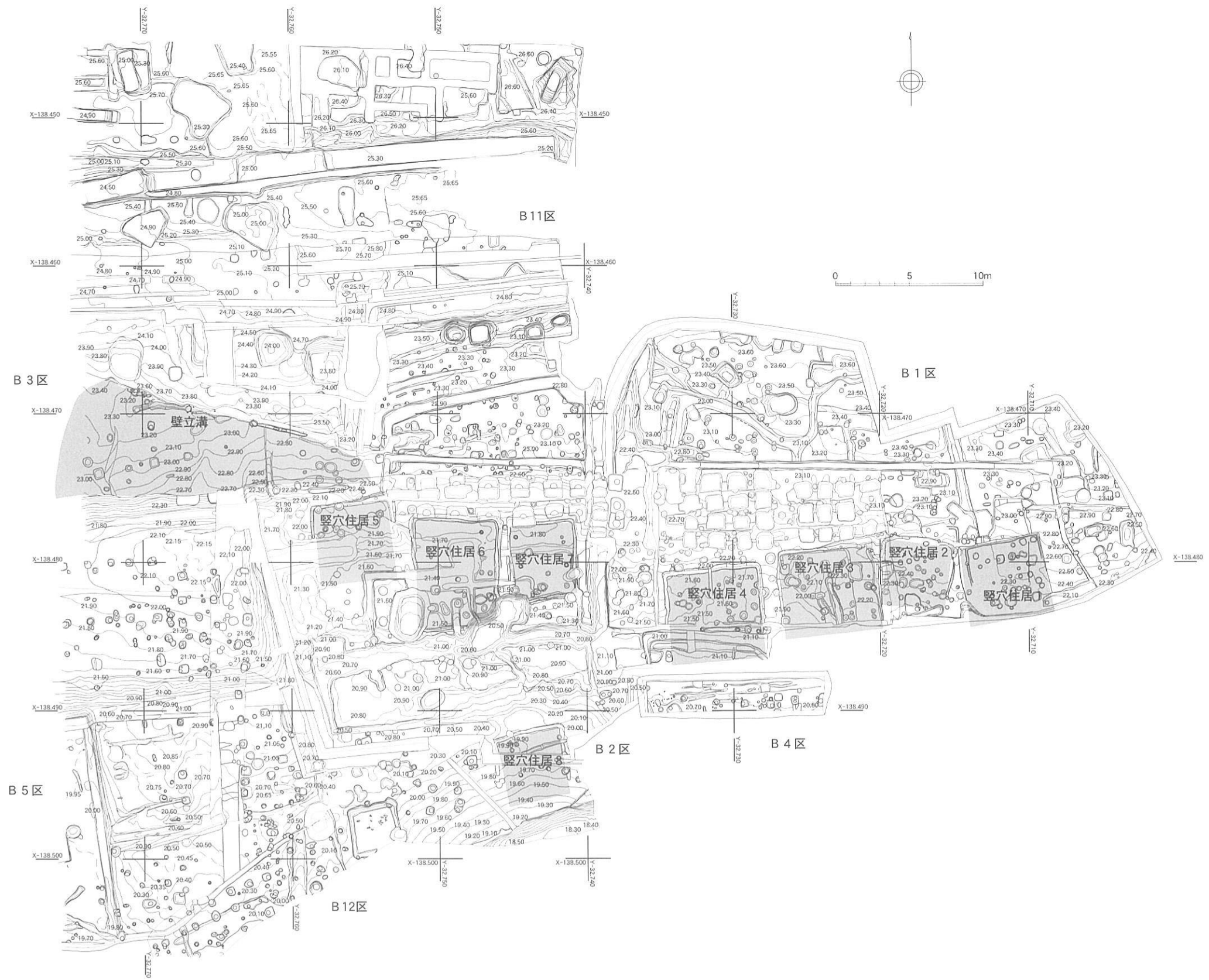
当初、西辺は外側すなわち西側のみの検出であったが、床面において内側すなわちその東側から壁溝



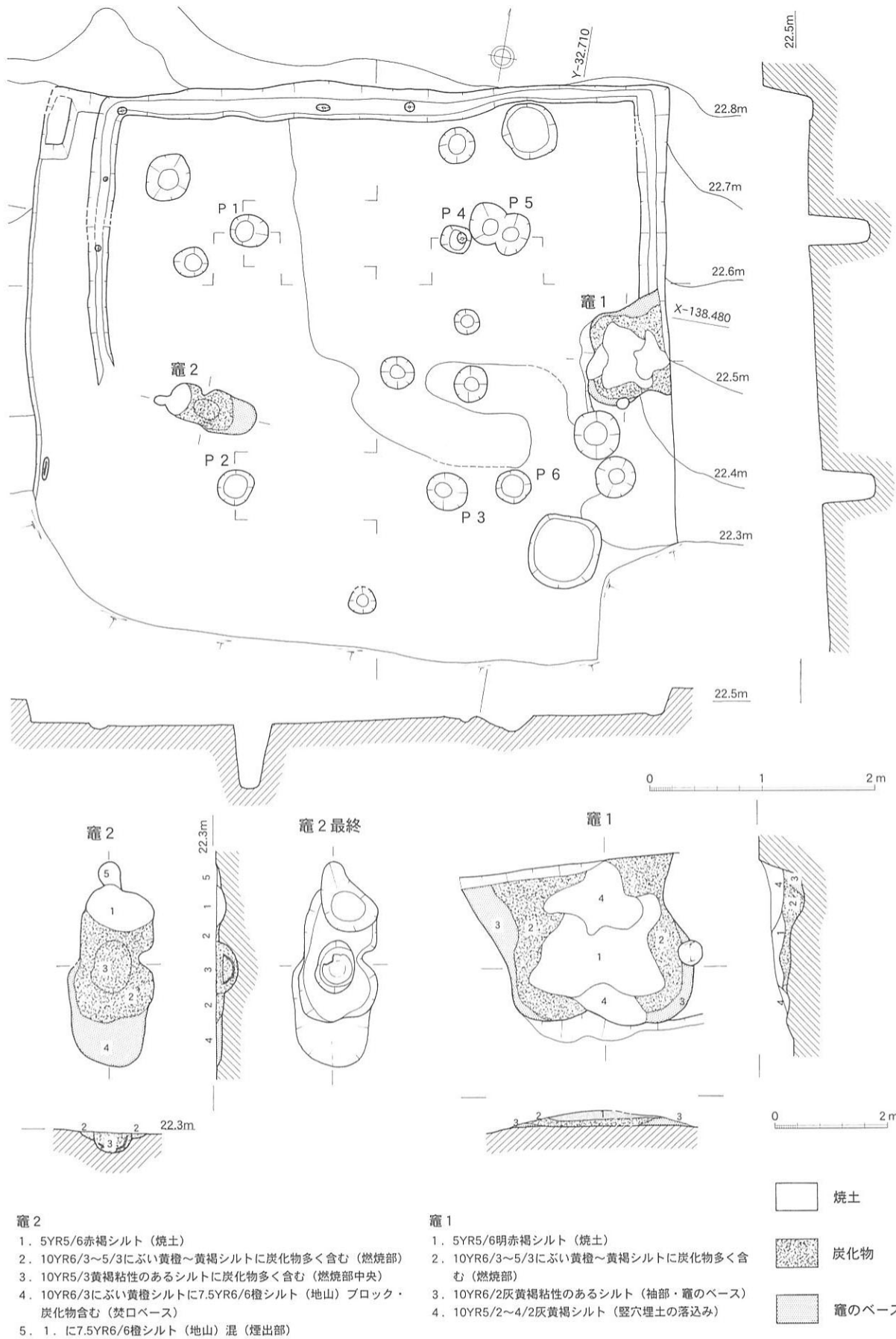
第16図 B1～B4・B11・B12区(中世) 遺構配置図



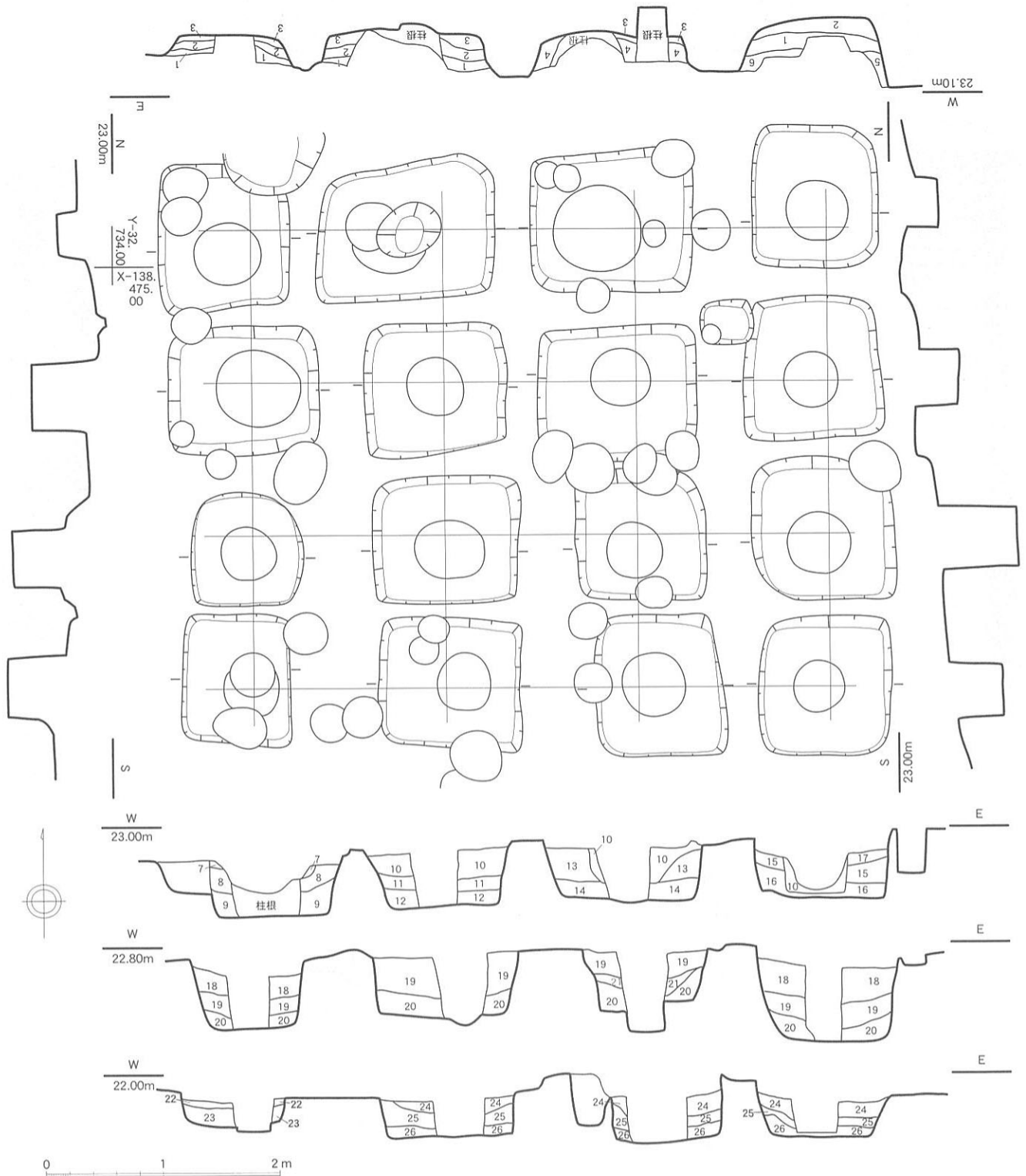
第17図 B1～B5・B11・B12・C6・C9区(中世～古墳時代) 遺構配置図



第18図 B1～B5・B11・B12区(古墳時代) 遺構配置図



第21図 B1区3面 竪穴住居1 平・断面図

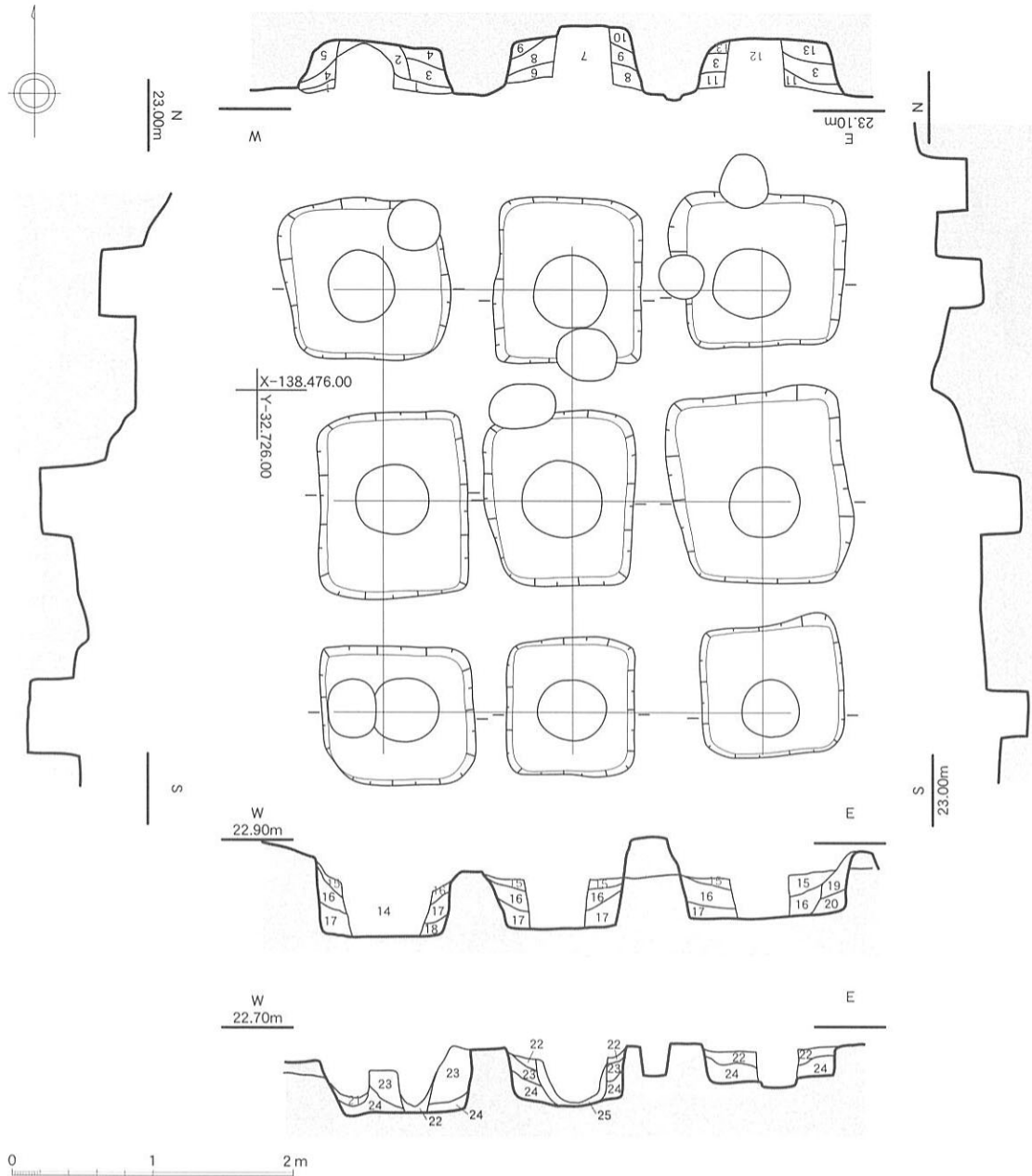


- 1. Hue10YR4/6
Hue10YR4/2~4/3の粘質シルトをブロック状にはさむ粗砂
- 2. 大きい石・礫をかむ砂質土 Hue10YR 3/1~3/2
マンガンやや多く含む
- 3. 1と同じでHue10YR7/8が多い
- 4. Hue2.5Y6/8・5/2・5/3
- 5. Hue10YR5/8・4/3
- 6. 5よりも黄褐色の砂質土が多い
- 7. Hue7.5YR4/4~5/8 やや軟質
- 8. 7に小石(白)粒を多く含む
- 9. 7と同じだがやや硬質
- 10. Hue7.5YR5/1・5/8 やや軟質

- 11. 10+Hue10YR7/8
- 12. 10の5/1がやや強い
- 13. Hue5YR5/8 均質なシルト 白い小石粒が入る
- 14. 13にHue10YR6/8・4/8混じる
- 15. Hue7.5YR4/4・Hue10YR7/8
- 16. 17+Hue7.5YR5/8
- 17. 15+Hue7.5YR5/2
- 18. Hue5YR5/8・5/1
- 19. 18+Hue10YR7/8 白い小石粒を多く含む
- 20. Hue7.5YR4/4 マンガン粒子を含む

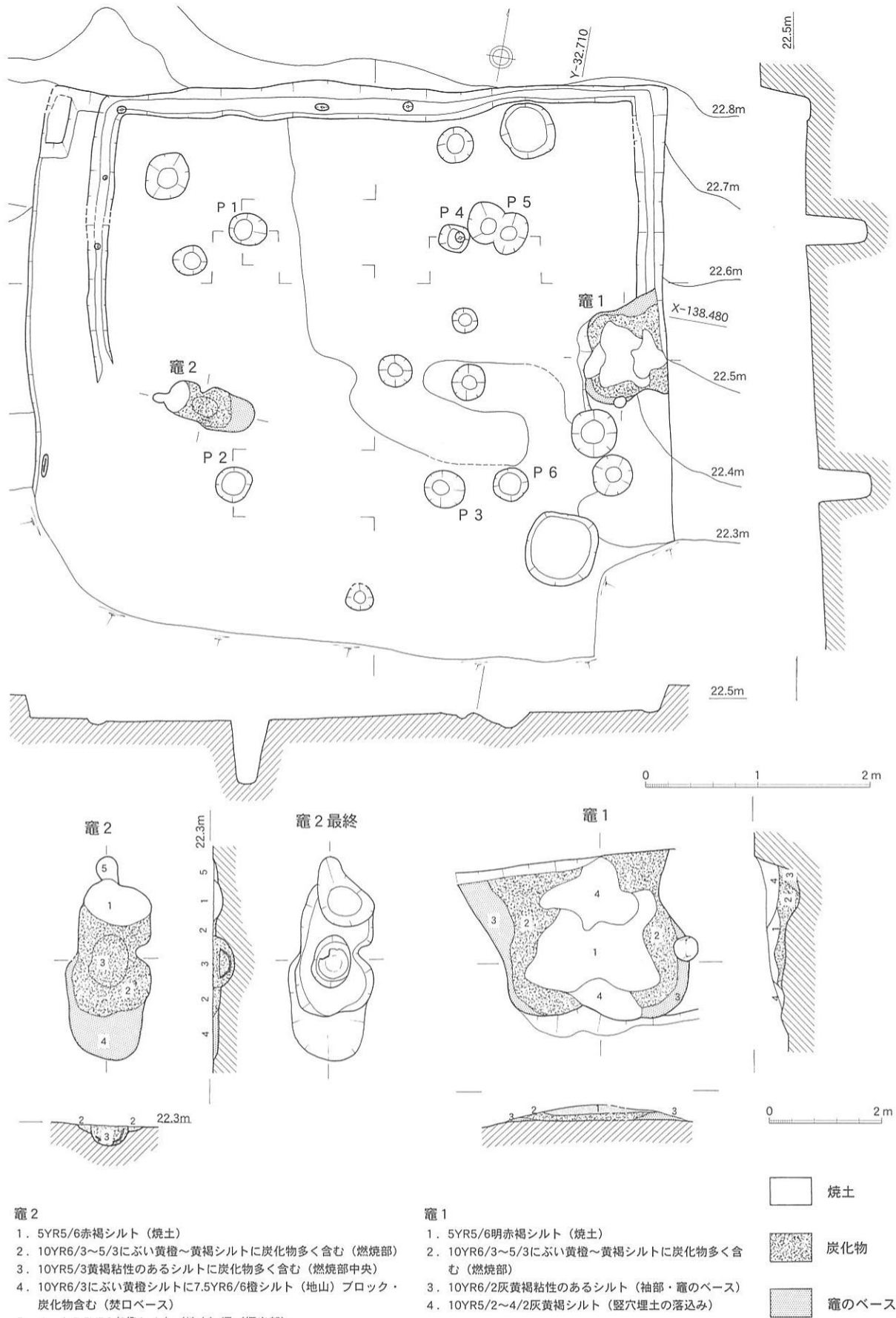
- 21. 19の灰色シルトが少ない
- 22. Hue5/8・5/1
- 23. Hue5/8・5/1+3/6
- 24. Hue5YR5/8・4/4・5/1
- 25. 24+Hue7.5YR7/8
- 26. 25+5/8

第19図 B1区3面 大形総柱掘立柱建物4 平・断面図



- | | |
|---|--|
| <p>1. Hue5YR6/8・6/1 砂質土
 2. 1+Hue5YR6/8
 3. Hue7.5YR6/1・6/8 砂質土
 4. 3+4/4 マンガン入る
 5. Hue7.5YR6/8・5/8・4/4 10YR7/8黄地山ブロック入る
 6. Hue10YR5/8・4/3 硬質砂質土
 7. 4に同じ 4/4が多い
 8. Hue10YR4/3・5/6・6/8 硬質砂質土
 9. 2+4/4 硬質砂質土
 10. 間に6/1の砂をかむ 3に同じ
 11. やや軟質で白い小粒の砂礫が多い 3と同じ色
 12. 5/8 やや軟質で均一な土色
 13. Hue7.5YR6/1・5/8・4/3 硬質シルト 4/3が多い</p> | <p>14. 軟質シルト Hue10YR6/2・6/8
 15. Hue7.5YR6/8・4/4 軟質シルト
 16. 15+4/2 マンガンブロック
 17. Hue10YR5/3~5/6
 18. 17+4/4
 19. やや軟質で明褐色のシルトが多い+灰色シルトが多い
 20. やや軟質で明褐色のシルトが多い
 21. Hue7.5YR6/4・5/1 軟質シルト
 22. Hue7.5YR4/3・8/6 軟質シルト
 23. Hue7.5YR4/3・5/6・6/8 やや軟質の砂質土
 24. 23+4/4
 25. 22よりも硬質 土色は22に同じ</p> |
|---|--|

第20図 B1区3面 大形総柱掘立柱建物5 平・断面図



第21図 B1区3面 竈穴住居1 平・断面図

が検出され、その東側が2～3cm下がることがわかった。西辺には壁溝が伴わず、当初、ベッド状遺構の可能性を考えたが、床面で検出された壁溝の内側で竈2が検出されたことから、西辺の拡大がなされ、それに伴い竈も西辺の竈2から東辺の竈1へ作り直されたものと判断した。したがって、内側の壁溝に伴い竈2をもつ竪穴を旧竪穴、西辺拡大後の竈1をもつ竪穴を新竪穴と呼称する。

旧竪穴は、北辺および東辺を新竪穴と共有し、北辺5.1m、東辺1.8m、西辺2.6mである。床面は北辺から南へ最長5.1mまで検出したが、この間に壁溝はみとめられず、南辺はこれより以南になるものと想定される。床面では壁溝、ピット、竈2を検出した。

壁溝は、幅14～34cm、深さ6cmであり、底部において直径4～6cm、深さ5cm前後の小穴を北辺および西辺で検出した。北東および北西隅部はほぼ直角に屈曲し、とくに北東隅部は壁溝の内外ともに直角である。これとともに西辺はやや外側に湾曲するのに対し、東辺は直線であることから、当初、北辺および東辺を基本とした竪穴の構築がなされたと考えられる。

ピットは、18カ所を確認した。いずれも旧竪穴の床土をある程度除去した段階で検出したものであり、また、切り合いもみとめられないことから、新、旧竪穴のいずれに属するものかは明確ではない。ピットP1・P2は直径30～35cm、深さ48～55cmであり、支柱穴とみられる。掘り直した形跡はとくにみとめられず、旧・新竪穴をとおしての支柱穴であった可能性が高い。支柱が4本の場合、ピットP1・P2に対応する位置にピットP3～P6があるが、いずれも深さ10cm前後の浅いすり鉢状のピットであり支柱穴と判断するには至らない。他のピットも浅いすり鉢状のものである。

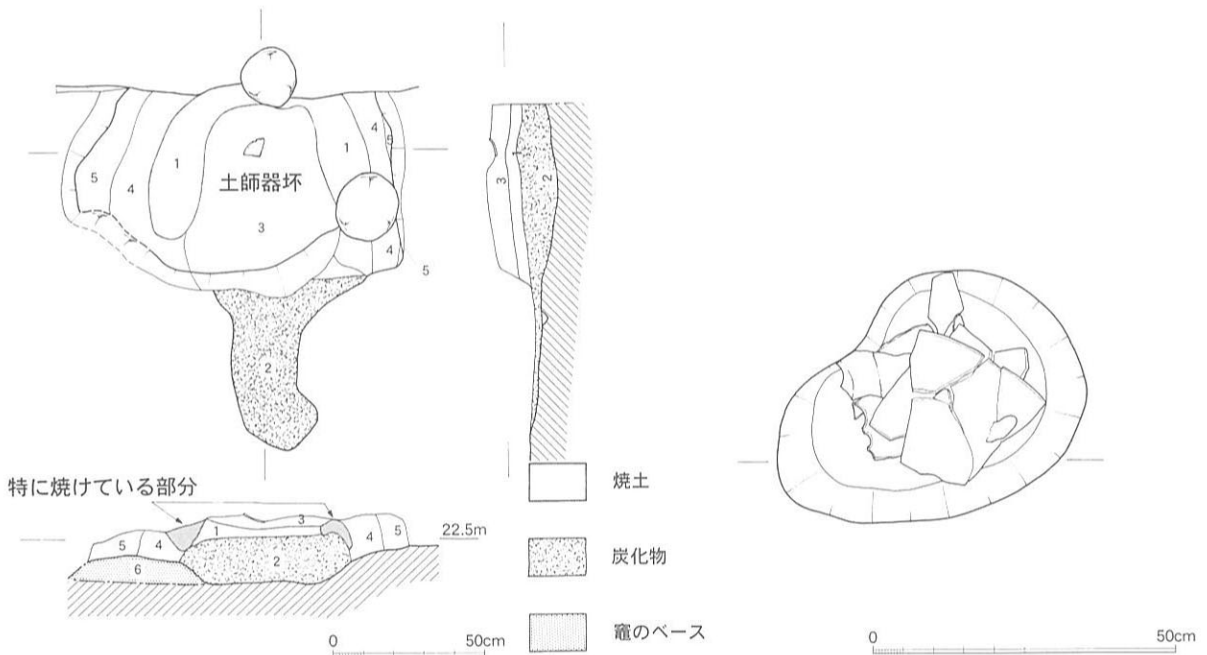
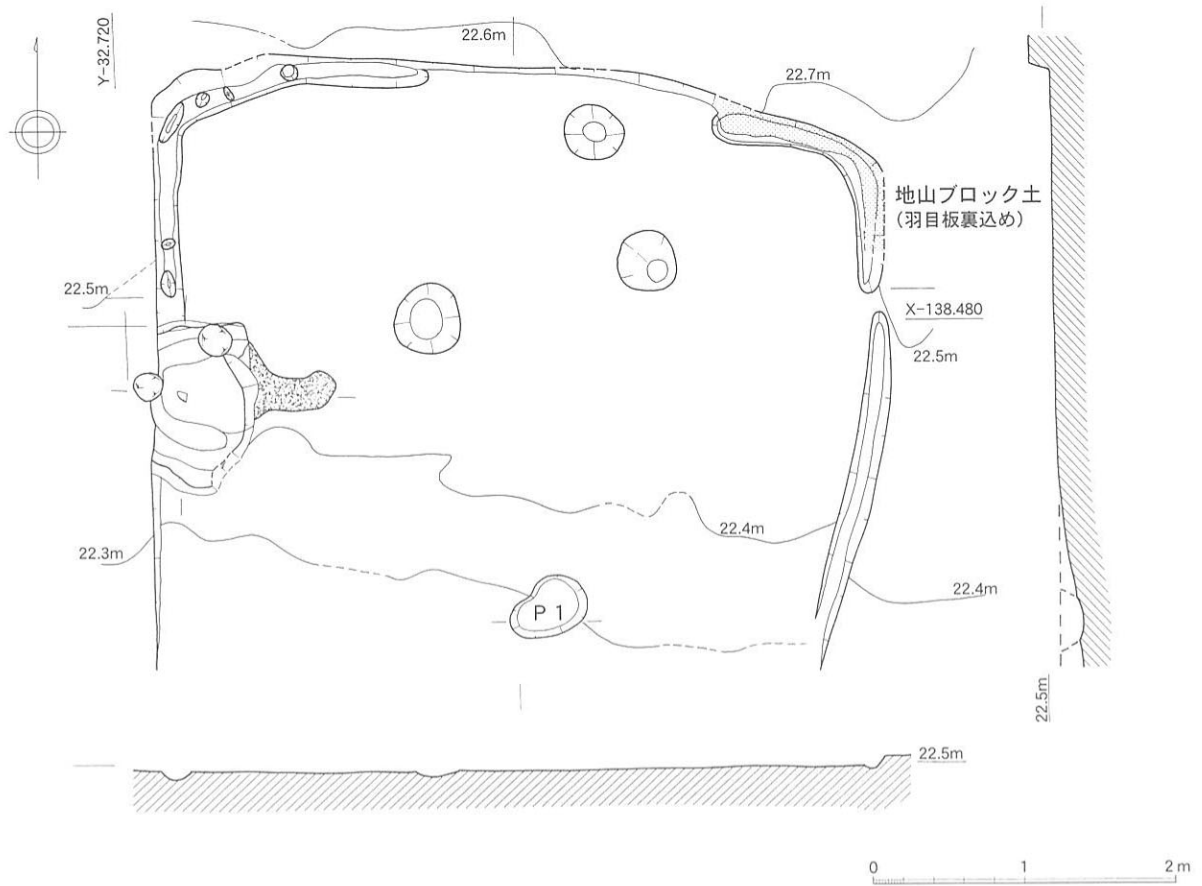
竈2は、西辺、北西隅から2.6m南の箇所位置する。竈2は、新竪穴床面において焼土、炭化物に床土が上面に貼り付く状態で検出されたものであり、新竪穴改築時に上部構造物は削平され、竈は対面の竈1へ作り直されたものと考えられる。竈2は、残存部幅40cm、長さ94cmである。中央部には炭化物を多く含む黄褐色シルトがひろがり、これを除去すると円形の窪みに据えられた状態で高杯杯部が一個体正位で出土した。杯部外面に炭化物はみとめられないことから、竈構築当初に据えられたものとみられる。その手前では炭化物を含む基盤土ブロックが、壁溝側では炭化物を多く含む黄褐色シルトの上位で焼土が検出された。中央部の炭化物が燃焼部、手前の炭化物を含む基盤土ブロックが焚口部ベース、壁溝側の焼土が燃焼部後方の天井部が崩落したものとみられる。

新竪穴は、北辺および東辺を旧竪穴と共有し、北辺5.5m、東辺4.1m、西辺3.6mである。北辺の壁高は44cmである。西辺は壁溝を伴わない。北西隅部で一段長方形に基盤土が掘り残された部分を確認した。掘り残された部分は上面が40cm×15cm、底面が50cm×20cm、高さ20cmである。床面では、新、旧竪穴への帰属を峻別しがたいピットのほか、竈1を検出した。

竈1は、東辺、北東隅から1.8m南の箇所位置する。幅80cm、長さ80cmである。中央部では焼土が、その周辺に炭化物がひろがり、左右両端で灰黄褐色シルトが検出された。焼土の下には炭化物がひろがり、炭化物は灰黄褐色シルト上に堆積することから、炭化物が燃焼部、焼土が天井部が崩落したものの、灰黄褐色シルトが袖部のベースとみられる。

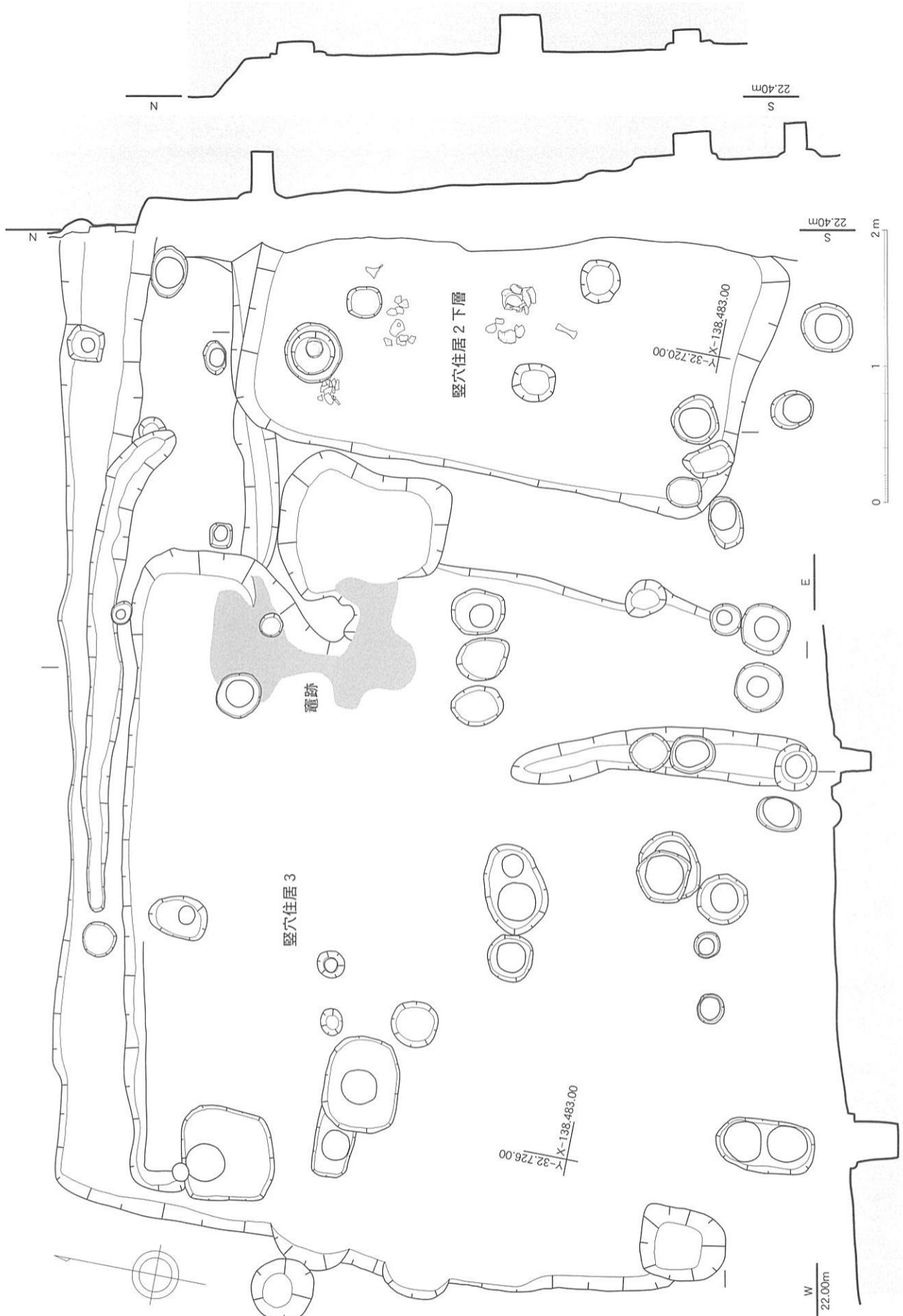
床面に伴う遺物はみとめられず、遺物から新旧竪穴の時期差は明確にできないが、新竪穴埋土出土遺物からは、古墳時代中期、初期須恵器併行期に位置づけられる。

竪穴住居2（第22～24図） B1区の南東隅部、竪穴住居1の西に位置する。竪穴住居2は少なくとも2回の作り直しが行われている。上層の竪穴住居2は一辺が約5m、下層は一辺が約4mである。上層では西辺中央に作り付けの竈が作られている。下層でも西辺より焼土や炭化物が検出されたものの竈

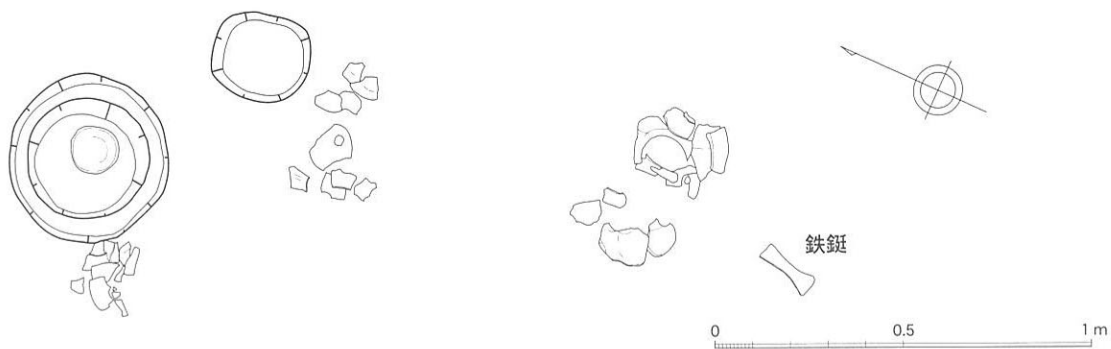


1. 5YR5/6明赤褐シルト (燃烧部周囲の焼土)
2. 7.5YR5/1褐灰シルトに炭化物φ1cm・焼土塊多く含む (燃烧部・焚口部)
3. 7.5YR6/6橙シルトに10YR7/2にぶい黄橙シルト混 (廃棄時に入れた土?)
4. 7.5YR6/6橙精緻なシルト (袖部ベース)
5. 4. ブロックに10YR5/2灰黄褐シルト (竖穴埋土類似) 混 (袖部外側補修)
6. 10YR5/2灰黄褐微砂混シルト (竖穴床土又は竈ベース)

第22図 B1区3面 竖穴住居2上層 平・断面図



第23図 B1区3面 竪穴住居2下層・3の切り合い関係 平・断面図



第24図 B1区3面 竪穴住居2下層 遺物出土状況

はつぶされており、痕跡を残すのみであった。出土遺物は多彩である。中央よりやや南側の土坑からは多孔の甑が一個体出土した。上層遺物～下層遺物までの時間差はほとんどなく、古墳時代中期前葉～中葉に収まる。埋土上層からは初期須恵器、格子叩きをもつ韓式系土師器片のほか、初期須恵器に特徴的である有段の高坏脚部を模して菅笠を2段重ねにしたような形状の土師器高坏などが出土した。また、下層の床面直上からは丸底の土師器甕、有段の大形土師器高坏、鉄鋌などを出土した。また、下層の北西の主柱穴からは完形の土師器の鉢を検出した。

竪穴住居2の上層についてさらに詳述すると、北から南へとゆるやかに下降する斜面において北・東・西辺を検出していることになる。ほぼ南北方向に軸をもつ平面方形の竪穴住居とみられる。埋土は、灰黄褐色シルトであり、初期須恵器を含む須恵器・韓式系土器・土師器が多く出土した。床土は灰黄褐色シルトブロックに竪穴の基盤土である橙色シルトブロックが混じり、やや粘性をもつ。

北辺4.9m、東辺3.4m、西辺3.8mである。北辺の壁高は13cmである。床面は北辺から南へ2.5～2.8m、ほぼ竈前面までは平坦に検出され、これ以南は南へ下降する。床土は竈の南側袖部下およびピットP1北側まではみとめられるがそれより以南ではみとめられず、T.P.22.4m以南の床土は後世流出したとみられる。床面では壁溝、ピット、竈を検出した。

壁溝は、幅16～20cm、深さ5cmで、北西隅部では底部において直径8～10cm、深さ5cm前後の小穴を検出した。西辺はほぼ直線的にのび、北辺、東辺はやや外湾する。北辺中央および東辺では一部途切れる。北東隅部では、竪穴掘削の際、壁際で基盤土ブロック土がみとめられ、これを除去後床面において壁溝を検出すると、壁際に基盤土ブロック土が幅8～18cmでめぐり、その内側で壁溝埋土が幅3～8cmでめぐり状態であった。これより、基盤土ブロック土は羽目板の裏込め土であり、壁溝埋土の部分に羽目板があった可能性が考えられ、その場合、羽目板の厚さは3cm前後と想定される。

ピットは、4カ所を確認した。北半の3カ所のピットは直径35～45cm、深さ10～15cmの浅いすり鉢状であり主柱穴と判断するには至らない。ピットP1は、床土が半ば流出した床面南半ほぼ中央で検出された。長径52cm、短径38cm、深さ13cmである。底面に円形孔をもつ土師器甑が横位につぶれた状態で1個体出土した。

竈は、西辺、北西隅から1.4m南の箇所に位置する。幅1.14m、長さ1.24mである。焼土が幅15cmをもってU字形にめぐり、内側中央部には基盤土に類似する橙色シルトに黄橙色シルトが混じったものを、焼土の外側には基盤土に類似する橙色シルトを、その外側には橙色シルトブロックに竪穴埋土類似土が混じったものを検出した。中央部の黄橙色シルト混橙色シルトの下部は焼土であり、その下層には焼土

塊が混じる炭化物が堆積する。これより、炭化物が燃焼部、U字形の焼土が袖部内側の強く火を受けた部分、その外側の橙色シルトが袖部、その外側の橙色シルトブロックに竪穴埋土類似土が混じった部分は袖部外側の補修部分、中央部の黄橙色シルト混橙色シルトは天井部の崩落したもので、下部が被熱のため焼土化しているものと考えられる。ただし、中央部の黄橙色シルト混橙色シルトには掛口に相当する部分がみられず、土師器杯片が出土していることから、竈廃棄時に入れた土の可能性も考えられる。

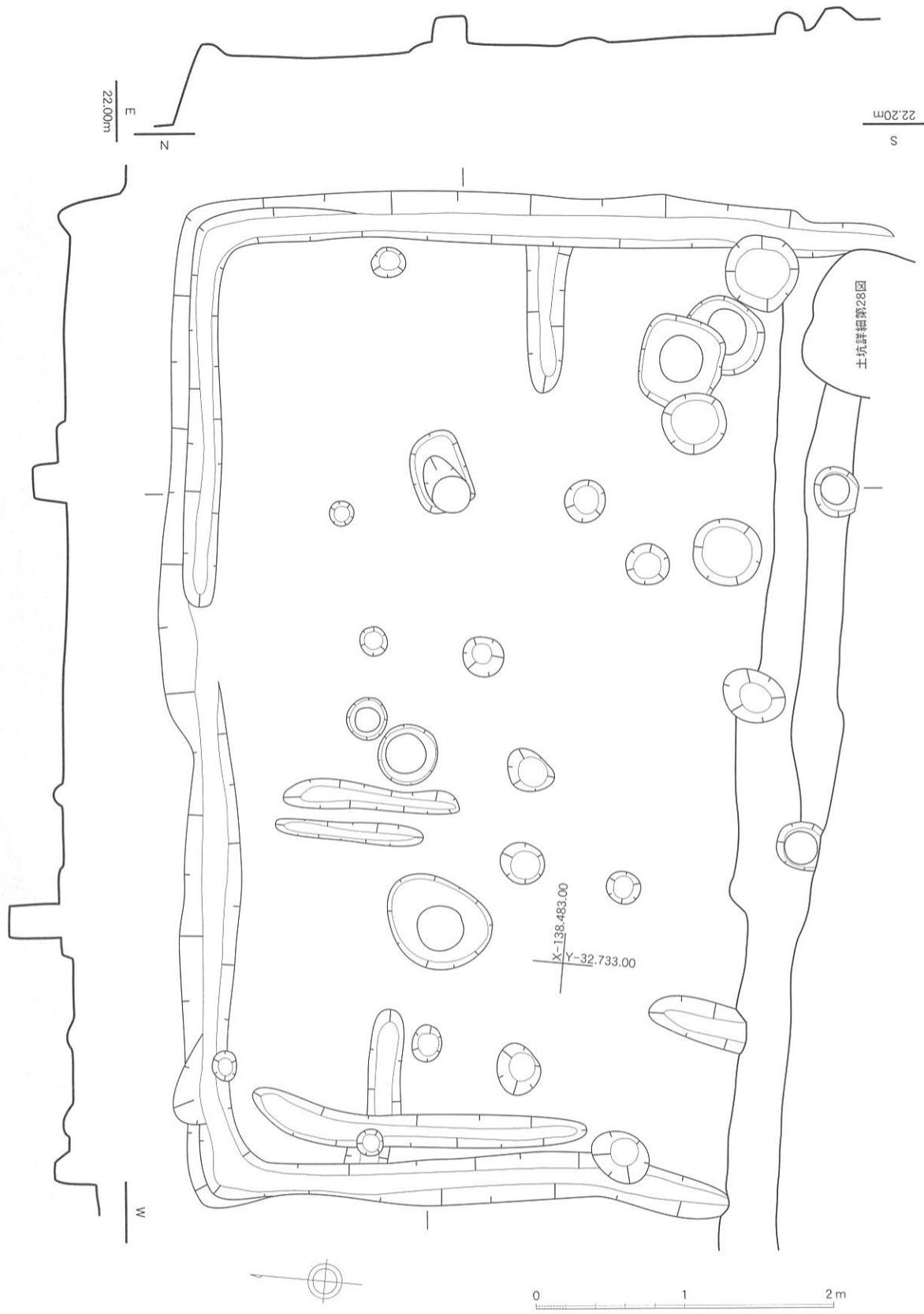
古墳時代中期、初期須恵器併行期に位置づけられる。 (合田)

竪穴住居 3 (第23図) 竪穴住居3は上面の中世の土坑により削平を受けて殆ど平坦になっており、わずかな壁溝のくぼみ、および竈の痕跡と考えられる炭化物を含む楕円形のくぼみを東辺中央部で検出し、遺物は土師器片を出土したのみである。また北側壁溝が数条重なって検出されており数回の作り直しがおこなわれたと考えられる。一辺は最大で5.5m前後と考えられる。

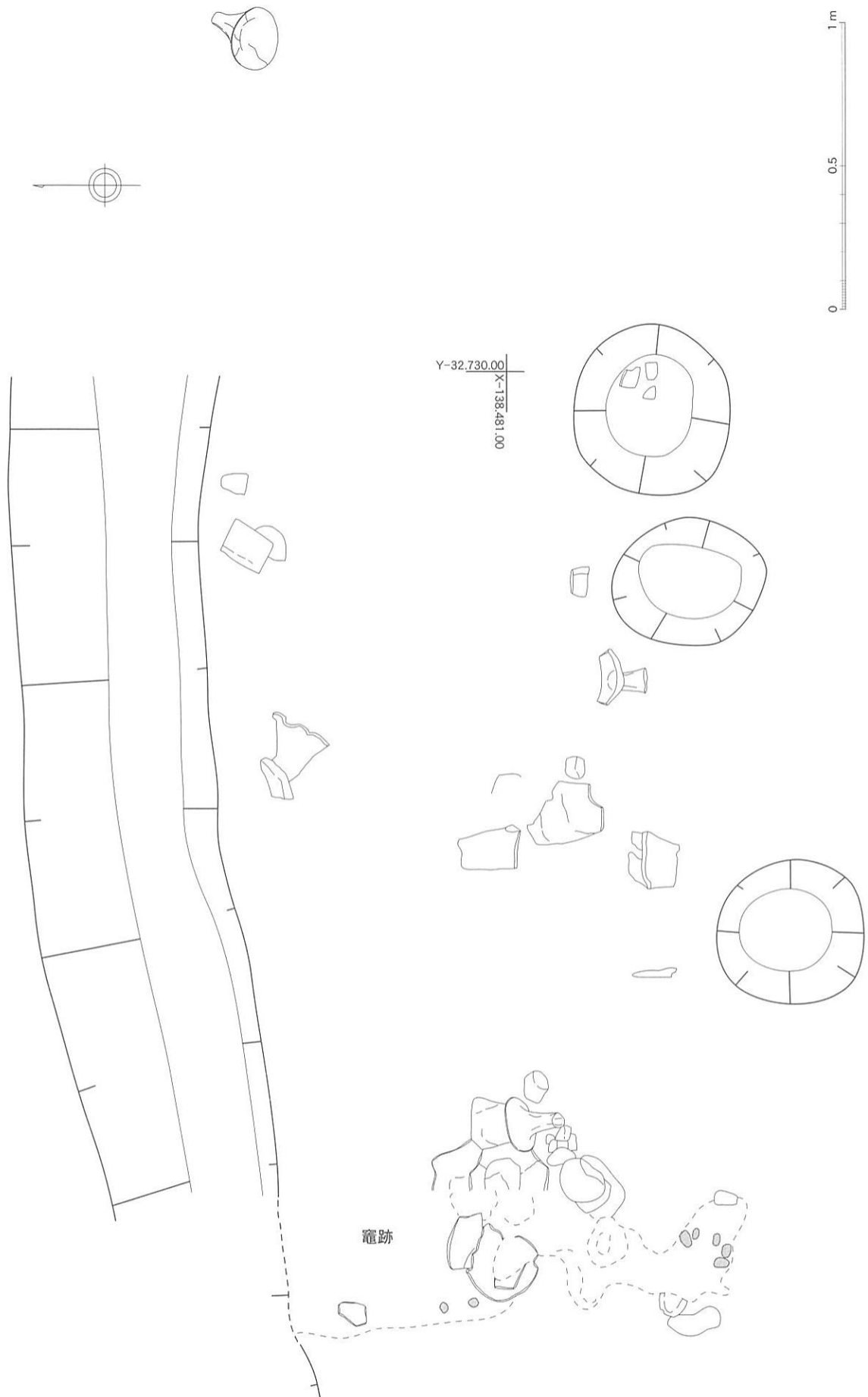
竪穴住居 4 (第25～28図) 竪穴住居4は床面の中央部付近に数条の壁溝の痕跡がみられ、数回の作り直しを受けているようである。最大の大きさは一辺約6.5m×5mの長方形であるが、住居の西半でも壁溝の痕跡がみられることや北辺の中央部に竈の設置後、破壊された痕跡が検出されたことなどを考え合わせると、当初一辺5mの竪穴住居であったものを、東西に拡張したものと考えられる。埋土からは甕の破片などの初期須恵器片、格子叩きをもつ韓式系土器の土師器甕や須恵器甕、土師器の有段高坏などを多数出土した。竪穴住居1・2と同様な時期である。 (小暮)

第1表 高宮遺跡検出の竪穴住居一覧表

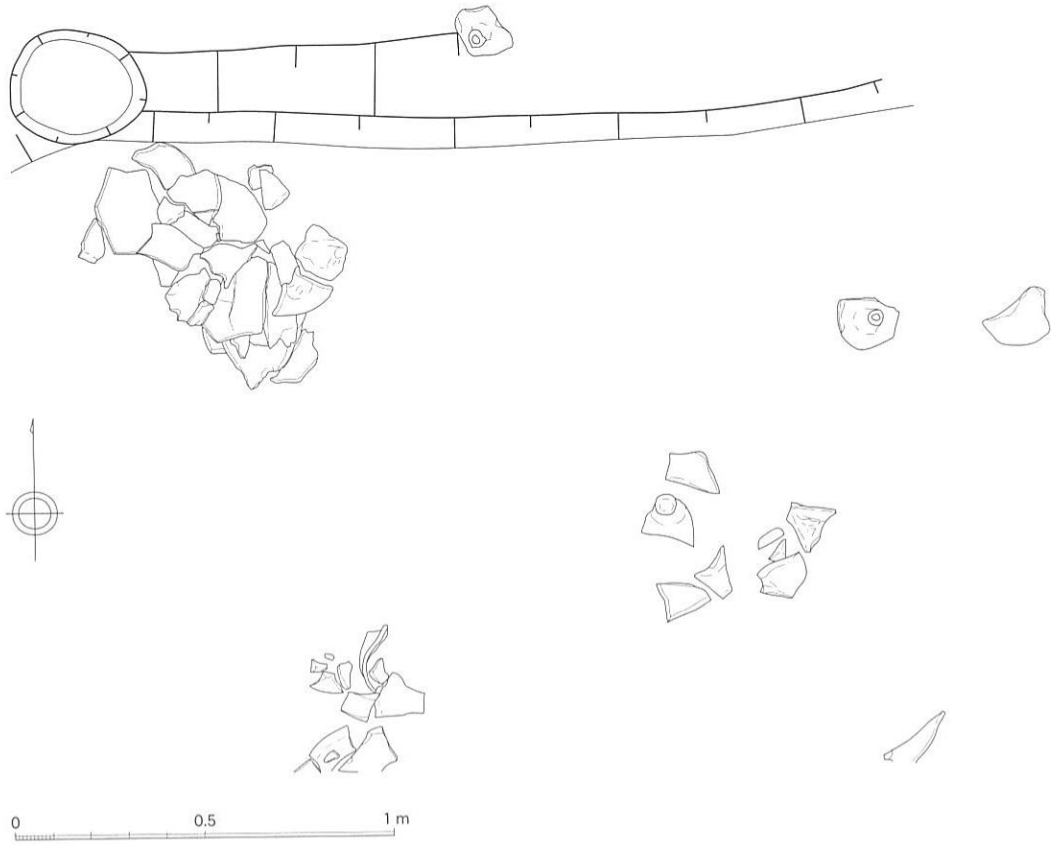
竪穴住居	地区	一辺の残存長 (m)	最大深さ (cm)	方向	竈の位置	出土遺物	時期	備考
竪穴住居1	B1区	旧: 5.1×5.1 新: 5.6×5.1	44	北-南	旧: 西 新: 東	土師器、初期須恵器、韓式系土器	古墳時代中期	床面の拡張に伴う竈の作り直し
竪穴住居2	B1区	上層: 4.9×3.8 下層: 4×4	13	北-南	西	土師器、初期須恵器、韓式系土器、鉄鏝	古墳時代中期	上層で異形土師器高坏、下層床面で鉄鏝が出土
竪穴住居3	B1区	5.2×5	20	北-南	東	土師器	古墳時代中期?	北辺壁溝が数条あり、竪穴住居の作り直しが考えられる
竪穴住居4	B1区	旧: 5×5 新: 6.7×4.8	40	北-南	北	土師器、初期須恵器、韓式系土器	古墳時代中期	竈には破壊された痕跡あり
竪穴住居5	B2区	5.5×2.2	30	北-南		土師器	古墳時代中期	南半部は削平される
竪穴住居6	B2区	6.2×8	40	北-南		土師器	古墳時代中期?	大形総柱掘立柱建物の下層
竪穴住居7	B2区	5.8×4.9	50	北-南		土師器	古墳時代中期?	大形総柱掘立柱建物の下層
竪穴住居8	B2・B12区	4.9×2.5	15	北-南		土師器	古墳時代中期	
竪穴住居9	B3区	4.3×2.8	30	北西-南東	北西	土師器、初期須恵器	古墳時代中期	
竪穴住居10	B3区	3.2×3.1	15	北西-南東		土師器、初期須恵器	古墳時代中期	
竪穴住居11	B3区	4×2	10	北-南		土師器	古墳時代中期	
竪穴住居12	B3区	旧: 4.3×2.2 新: 5.7×3	30	北-南		土師器	古墳時代中期	
竪穴住居13	B5区	3.9×2.4	34	北北西-南南東			古墳時代中期?	
竪穴住居14	B12区	3.5×3.4	30	北-南	東	土師器	奈良時代	上層で四隅を同じくした礎石建物あり
竪穴住居15	C1区	4×4		北-南		土師器	古墳時代中期	上部は削平される
竪穴住居16	C9区(西)	2.7×1		北-南	北	土師器	古墳時代中期	
竪穴住居17	C7区	3.2×2	50	北東-南西	北西	土師器、須恵器	古墳時代中期	
竪穴住居18	C7区	4.4×4.4	上層: 40 下層: 70	北東-南西	上層: 南東 下層: 北東	土師器、須恵器	古墳時代中期	下層の竈は竪穴壁面から斜面上部へのびる煙道が残存
竪穴住居19	F2区	4.8×4.6		北北西-南南東	北	土師器、韓式系土器	古墳時代中期	主柱穴が重複し、竪穴住居の作り直しが考えられる
竪穴住居20	F2区	4.5×4.5		北-南			古墳時代中期?	
竪穴住居21	F2区	6.3×2		北北西-南南東			古墳時代中期?	
竪穴住居22	F3区	5.1×4.5	15	北-南	北	土師器	古墳時代中期	
竪穴住居23	E1区	6.8×2.7		北北西-南南東		土師器	古墳時代中期	
竪穴住居24	E1区	3.2×2.6	20	北東-南西	北	土師器	古墳時代中期	
竪穴住居25	E3区	3.8×3.2	25	北-南	東	土師器	古墳時代中期	竈の西側1mの位置でまとまった焼土ブロックを検出
竪穴住居26	E3区	6.4×5	35	北西-南東	北東	土師器、韓式系土器、鉄鏝、砥石	古墳時代中期	竈は焼土と炭のブロック土が盛り上がった状態で検出
竪穴住居27	E3区	3.3×2.4	35	北-南	北	土師器、韓式系土器、銅形石製品	古墳時代中期	竈は炭と二次焼成を受けた土師器片からなる層が重複
竪穴住居28	E3区	3.7×3.5	15	北西-南東	南	土師器、初期須恵器	古墳時代中期	竈を囲む直径20cmの柱穴を検出、支脚は三角形の石
竪穴住居29	E5区	4.3×2		北西-南東		土師器、韓式系土器	古墳時代中期	南辺の北側に壁溝あり、竪穴住居の作り直しが考えられる



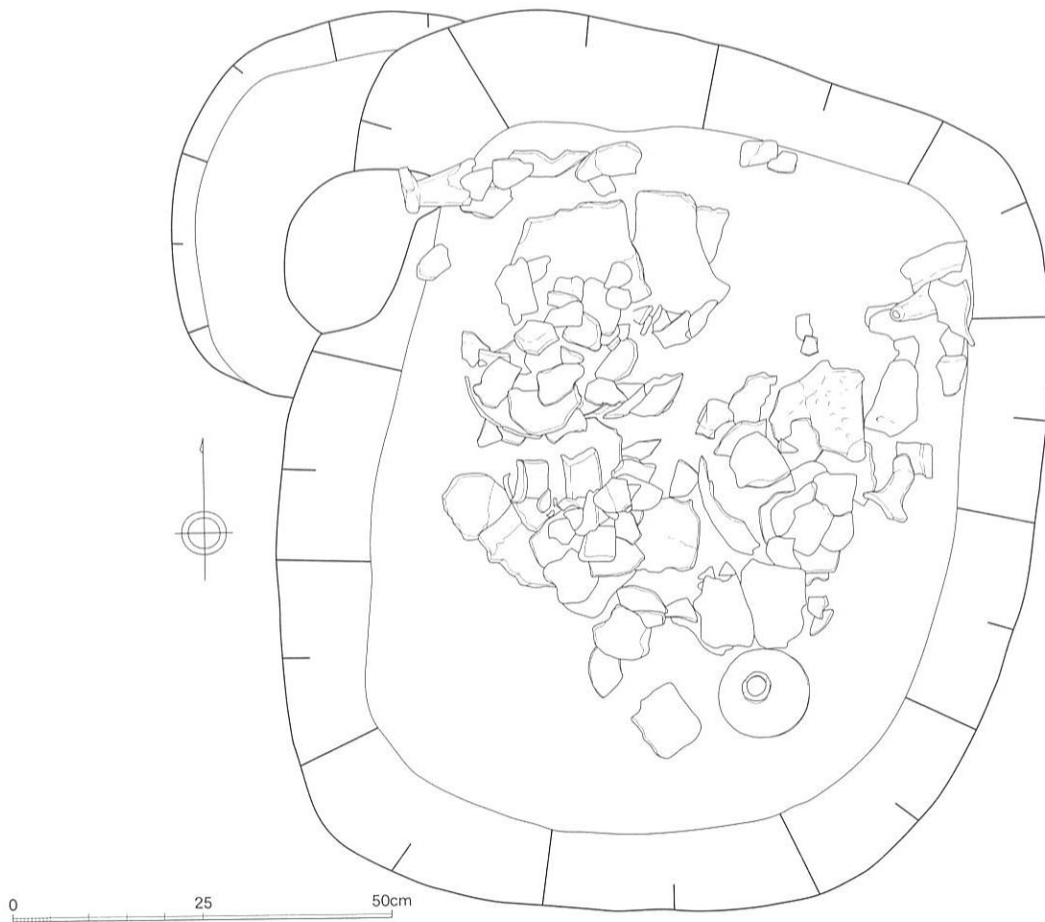
第25図 B1区3面 竪穴住居4 平・断面図



第26図 B1区3面 竈穴住居4 竈・遺物検出・出土状況



第27図 B1区3面 竪穴住居4 遺物出土状況



第28図 B1区3面 竪穴住居4上層に伴う土坑 遺物出土状況

B 2 区（第16～18図）

B 区やや東よりの地域で、谷状地形にあたる。

2 面

北半は機械掘削後1層の薄層が堆積し地山面にいたる。地山面では溝、土坑、ピットなどの中世遺構を検出した。南半ではB 1 区で検出した溝12の下層のつづきである溝13を東西方向で検出した。中世の遺物を含むピットは北半を中心に検出し、明確な掘立柱建物は不明であるがB11区で後述する井戸の南側に中世の屋敷の主屋が立てられていた可能性がある。

ピット P 9（写真図版 9） 径約60cm、深さ40cmの不整円形のピットであり、土師器碗が上向きに重ねた状態で埋納されていた。古代後半に属すると考えられる。

溝13 B 1 区で触れた溝12の下層に流れる溝であり、B 1～B 2 区にかけてほぼ正方で東西に流れ、西へ流れる。3面で触れる木炭柳を切っており、8世紀後半以降の年代が与えられる。遺構埋土はA区の7層にあたる古代後半～中世の埋土と灰褐色の粗砂であり、8世紀の甕片や中世の瓦器片を含む。3層の大形総柱掘立柱建物群とほぼ同一方向であり、区画溝である可能性も考えられ、中世まで存続していたと考えられる。

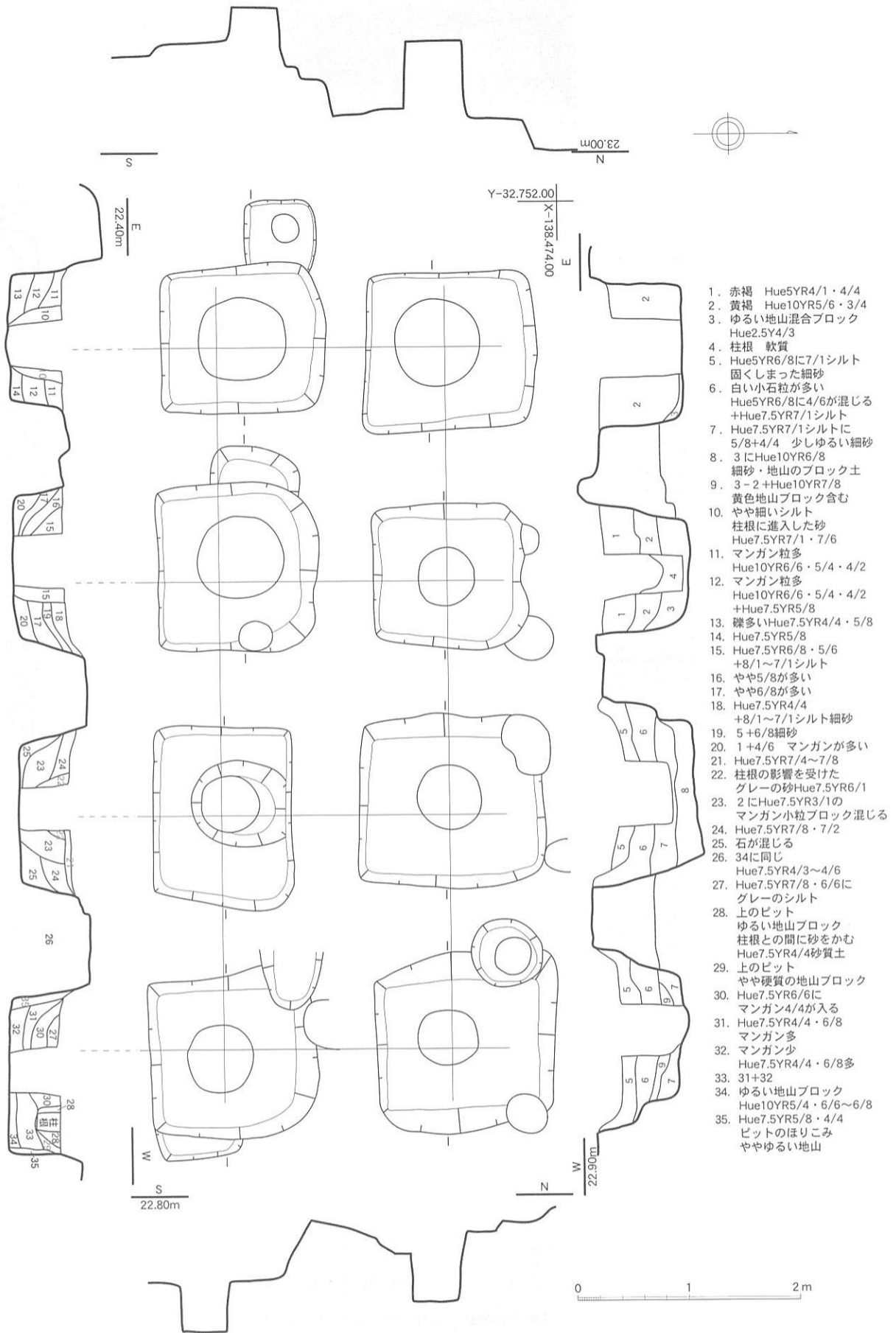
3 面

（1）古代の遺構…中央部では、B 1 区につづく大形総柱掘立柱建物1（3×3間、柱間約1.8m）と大形総柱掘立柱建物2（2間×2間、柱間約1.5m）、大形総柱掘立柱建物3（3×3間、柱間約1.5m）の計3棟を検出した。間数はいずれも復元値である。また、その両側では長楕円形の土壙墓を5基確認した。

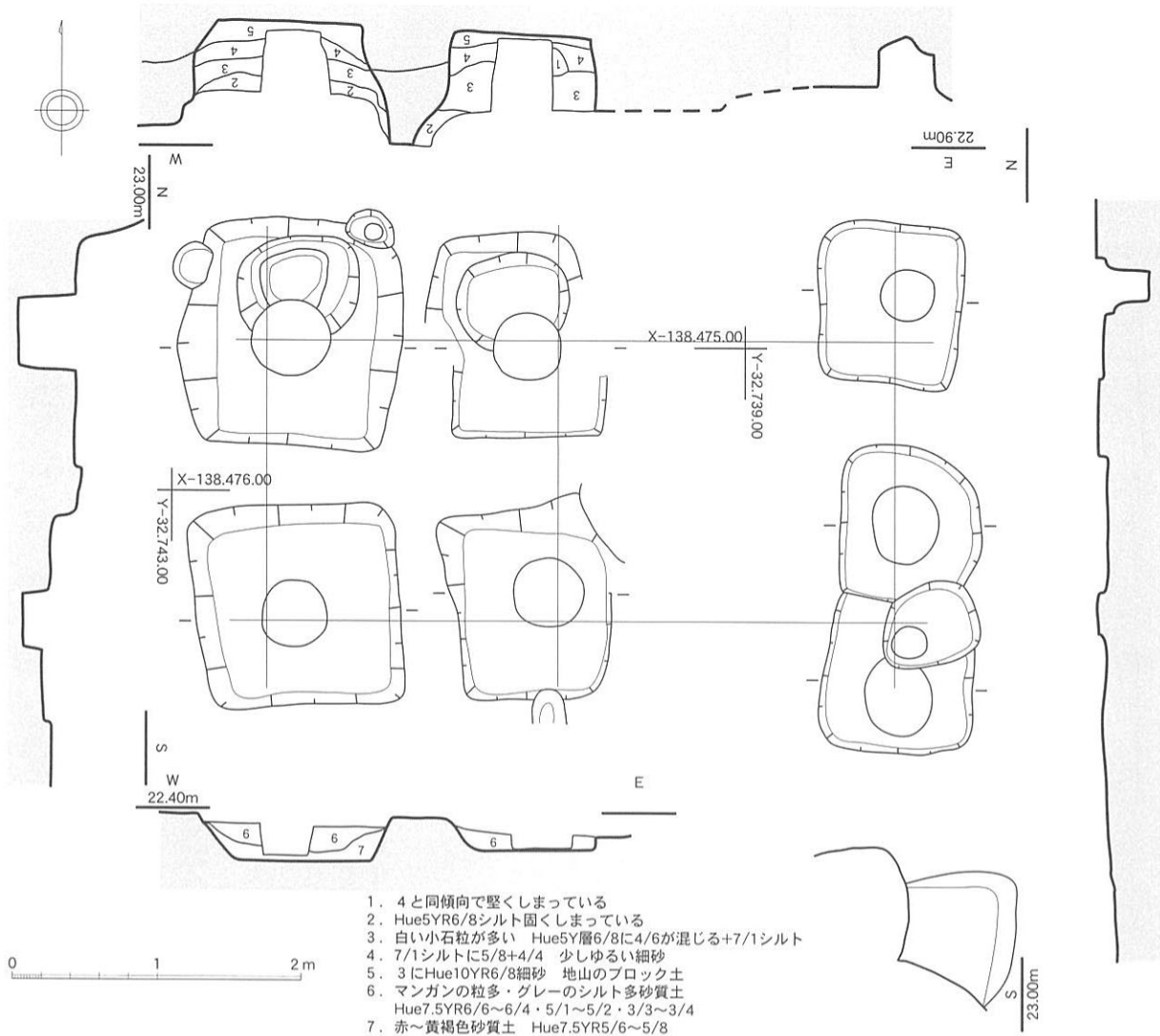
大形総柱掘立柱建物1～3（第29・30図） 柱穴は方形で一辺約1.5mである。大形総柱掘立柱建物1・2は東側と南側が現代の宅地造成に伴うブロック擁壁に著しく削平されており南側および大形総柱掘立柱建物2の東側はわずかな柱穴の痕跡を検出するにとどまった。大形総柱掘立柱建物3は北および西側から下降する傾斜面を造成した面に建てられており、傾斜面のくずれによって遺構面は荒れており、柱穴の痕跡を残すのみにとどまった。この建物は赤色シルトの地山の上に構築されており、赤色シルトの地山の平坦面を造成した際に出た土を整地に使用していた。掘方からはほとんど遺物が出土せず、下層から巻き上げた古墳時代遺物の破片をわずかに検出したのみである。しかし、3層包含層中からは主として7～8世紀中葉の遺物が出土しており、この建物の年代もその範疇に含まれるものと考えられる。大形総柱掘立柱建物1・2の方向軸はほぼ正方であるが大形総柱掘立柱建物3は北北西－南南東へ軸がふれる。

柱穴列3 大形総柱掘立柱建物の南側で東北東－西南西へ軸をもつ一辺が60cm、柱間1.5mの隅丸正方形のピット列を5?間分検出した。柱穴の中には栗石の礫を底に敷くものも存在した。北側は削平された可能性があるが南側には柱穴列を検出しなかった。埋土からは8世紀の土師器甕片などを検出し、大形総柱掘立柱建物群と同時期に存在した付属施設となる可能性がある。

土壙墓1～5（第31～35図） 土壙墓1～5は大形総柱掘立柱建物群の南側でほぼ東西の向きで群をなして検出された。うち土壙墓4・5は谷深部に近い傾斜面にあり削平と土砂の流れ込みによって内部はすでに無く、くぼみを検出したのにとどまり形状と方向、位置によって土壙墓であると考えた。土壙墓1～3では木炭を検出した。土壙墓1（第31図）は長軸が約1.5m、短軸が約60cmの長楕円形であり、中世の溝13により上部が削平されており、下部の太い木炭のみを検出した。土壙墓2（第32～34



第29図 B2区3面 大形総柱掘立柱建物1 平・断面図



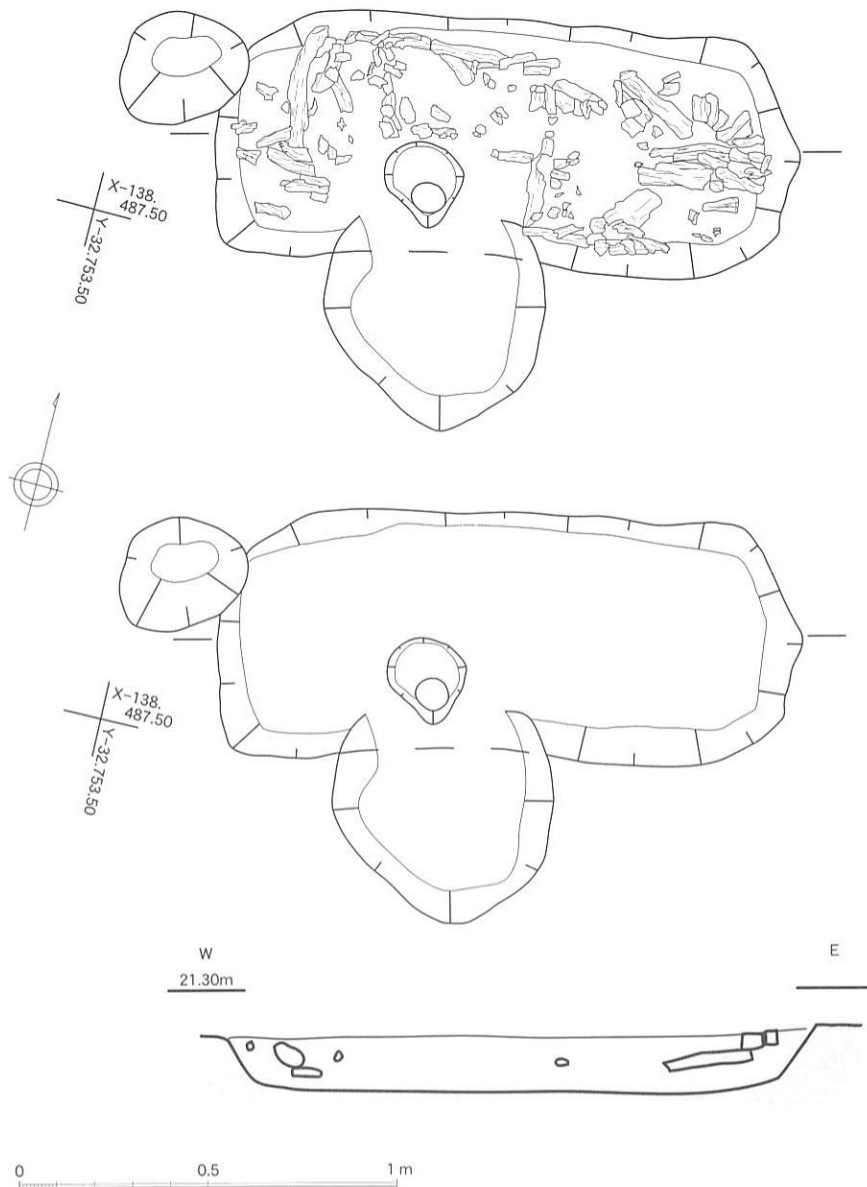
第30図 B2区3面 大形総柱掘立柱建物2 平・断面図

図)は長軸が約180cm、短軸が約95cmの長楕円形であり、土壌の内部は上層に木炭が細かいチップ状になって敷き詰められており、あるいは供献土器の一部となる可能性のある8世紀の土師器甕の破片が上層に数点みられた。墓壙は二段に掘り込まれており、下面では土壙墓の下端辺に太い木炭が沿う状態で、小口では放射状に入れられた状態で検出された。木炭除去後は炭や灰が敷かれていたと考えられる灰色シルトの薄層があり、薄層を除去すると木炭を小口に放射状に入れる際にできたと思われる平面が卵形の穴（直径約15cm）を検出した。土壙墓3（第35図）は西半分が近世の削平によって失われている。残存部は長軸が約120cm、短軸が約100cmの長楕円形であり、下面で敷かれた木炭を検出した。また下層の灰色シルトを除去したところ、木炭を立てたと考えられる平面が卵形の穴を検出した。

(2) 古墳時代の遺構…大型掘立柱建物の下層から3棟と、調査区の南端で1棟の計4棟の竪穴住居を検出した。

竪穴住居5（第36図） 竪穴住居5の南半部は近・現代の造成により削平されている。北辺は5.5mである。埋土からは古墳時代中期の土師器高杯・甕の細片を検出した。

竪穴住居6・7（第37・38図） 竪穴住居6・7は大形総柱掘立柱建物1・2の下層にあり、柱の掘方埋土と大形総柱掘立柱建物を設置した際の整地層を除去したところ地山にくいこんだ壁溝の下面をわずかに検出するにとどまった。主柱となる柱穴は不明である。この2棟の竪穴住居に伴う遺物は掘立柱



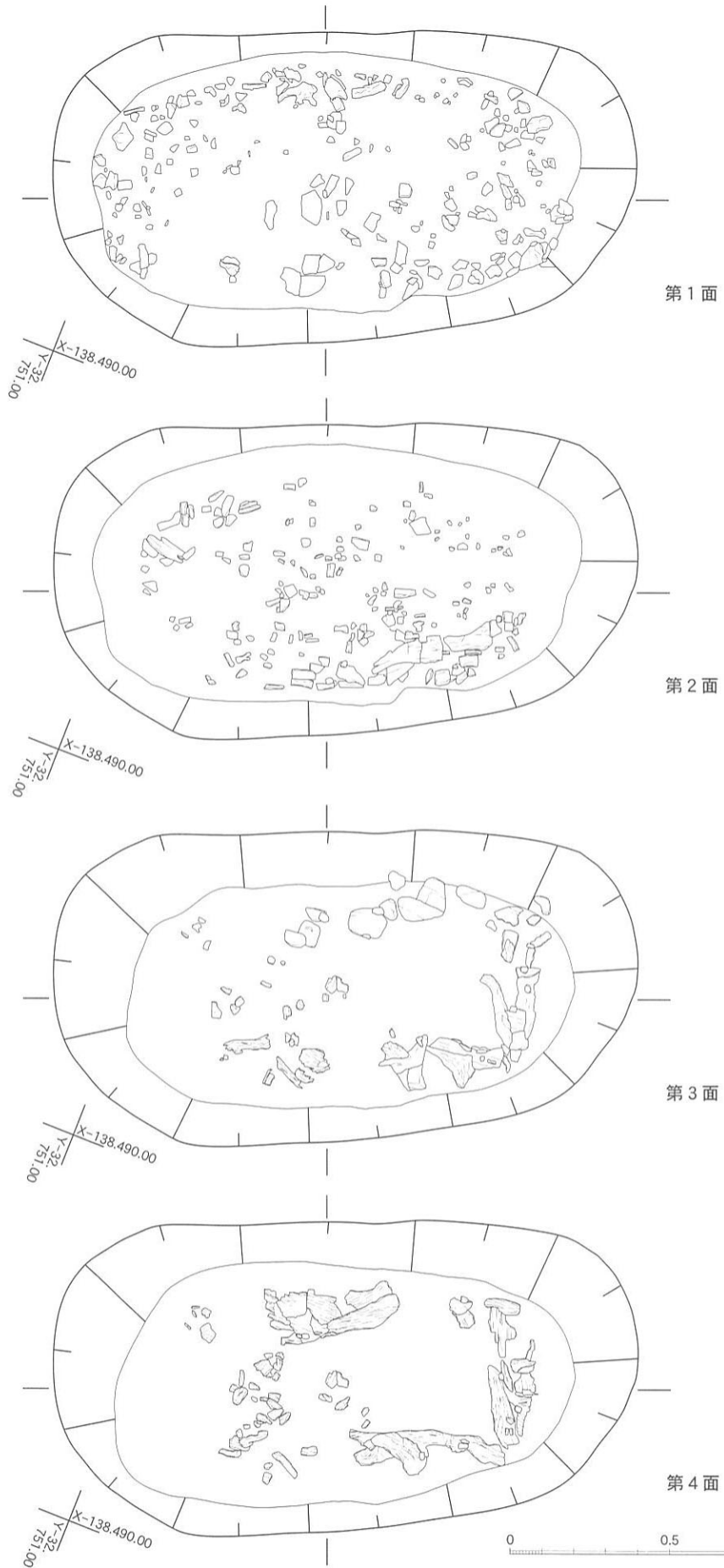
第31図 B2区3面 土墳墓1木炭柳 平・断面図

建物の柱穴掘方に含まれていた細片とみられ、これより竪穴住居6・7の年代は古墳時代中期と推測される。竪穴住居6は5.5m×8mの長方形であり高宮遺跡の竪穴住居の中では最大規模となる。竪穴住居7はが4.5m×5mと、方形に近い。

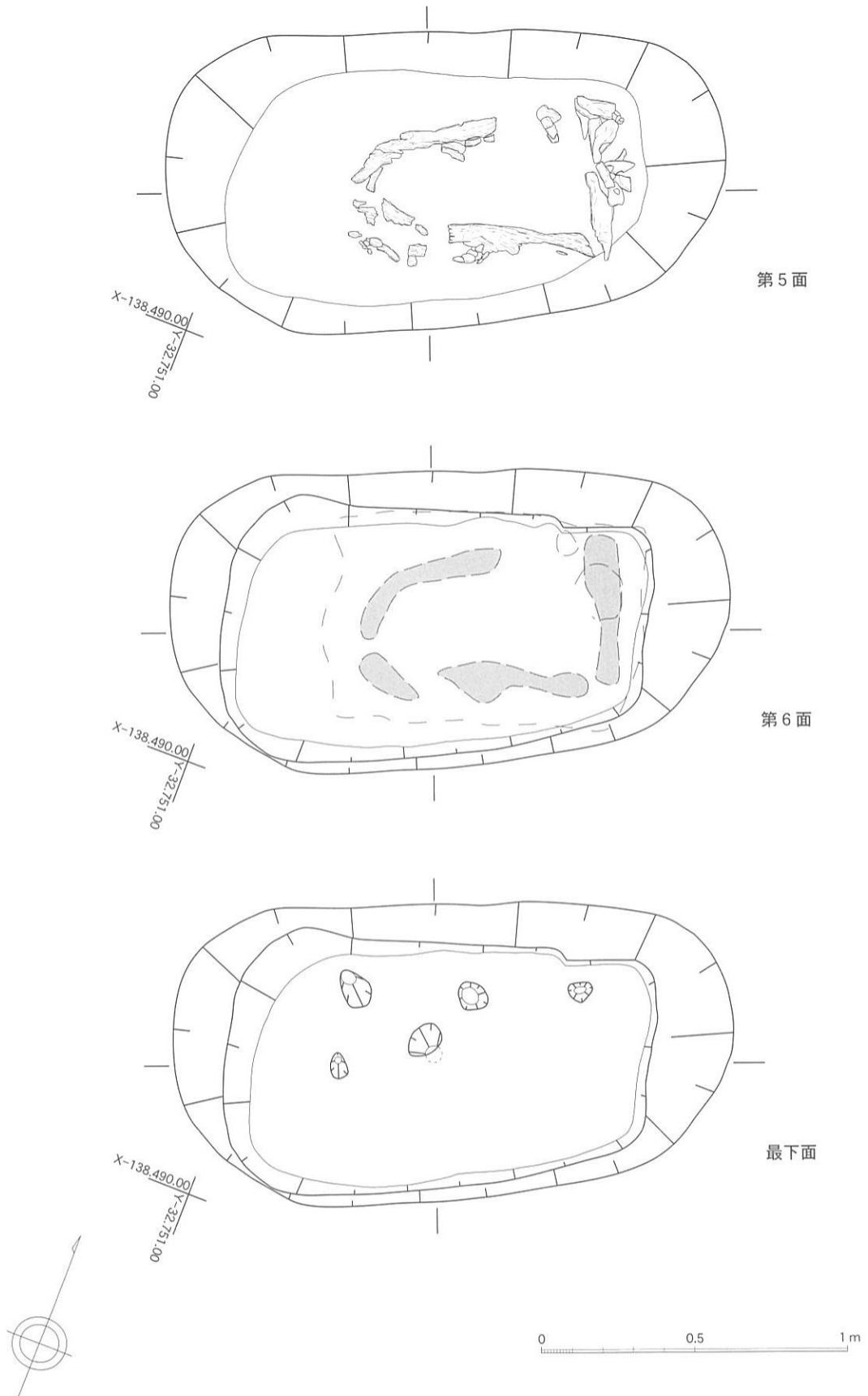
竪穴住居8（第39・40図） 竪穴住居8は調査区南端で検出し、一辺が4.5mの方形住居と考えられる。南半分はB12区にまたがって検出したが地盤の傾斜のためか南辺は失われていた。また中央付近で東西方向の壁溝が竪穴住居8の壁溝を切っており竪穴住居8のくぼみを足がかりとして上面でも竪穴住居1棟が存在していたと考えられる。床面では古墳時代中期中葉の甕・鉢が北壁に沿って上向きに据えられた状態で出土した。
（小暮）

B3区（第16・18・41・42図）

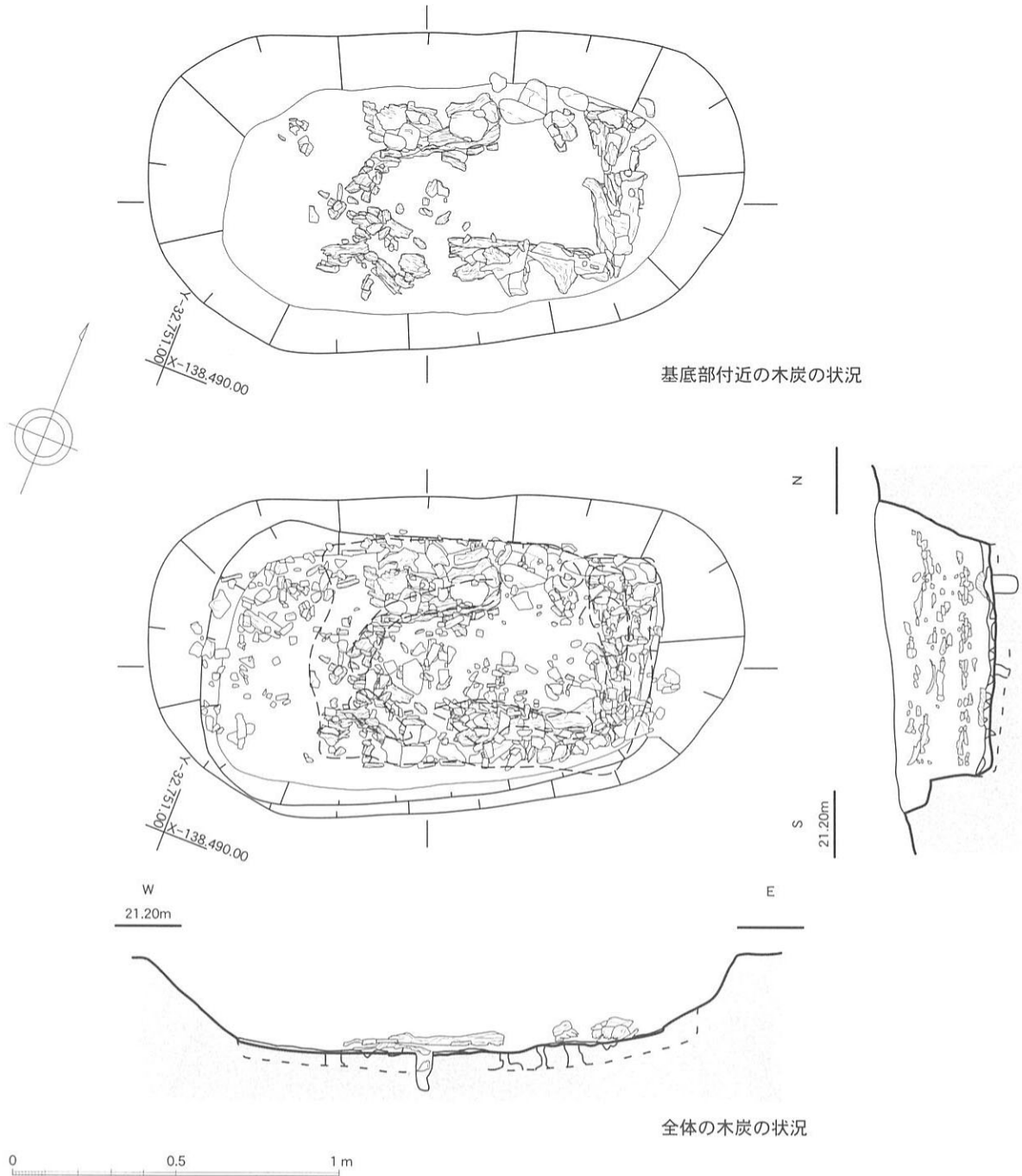
B2区の西側に位置し、谷の深部にあたるB2区より西方向へと上昇して傾斜しており、調査区の中央で東西にカット面が見られ、北段と南段の平坦面を造成している。調査区の東半分の下段では大形総



第32図 B2区3面 土壙墓2木炭櫛 木炭検出状況(1)

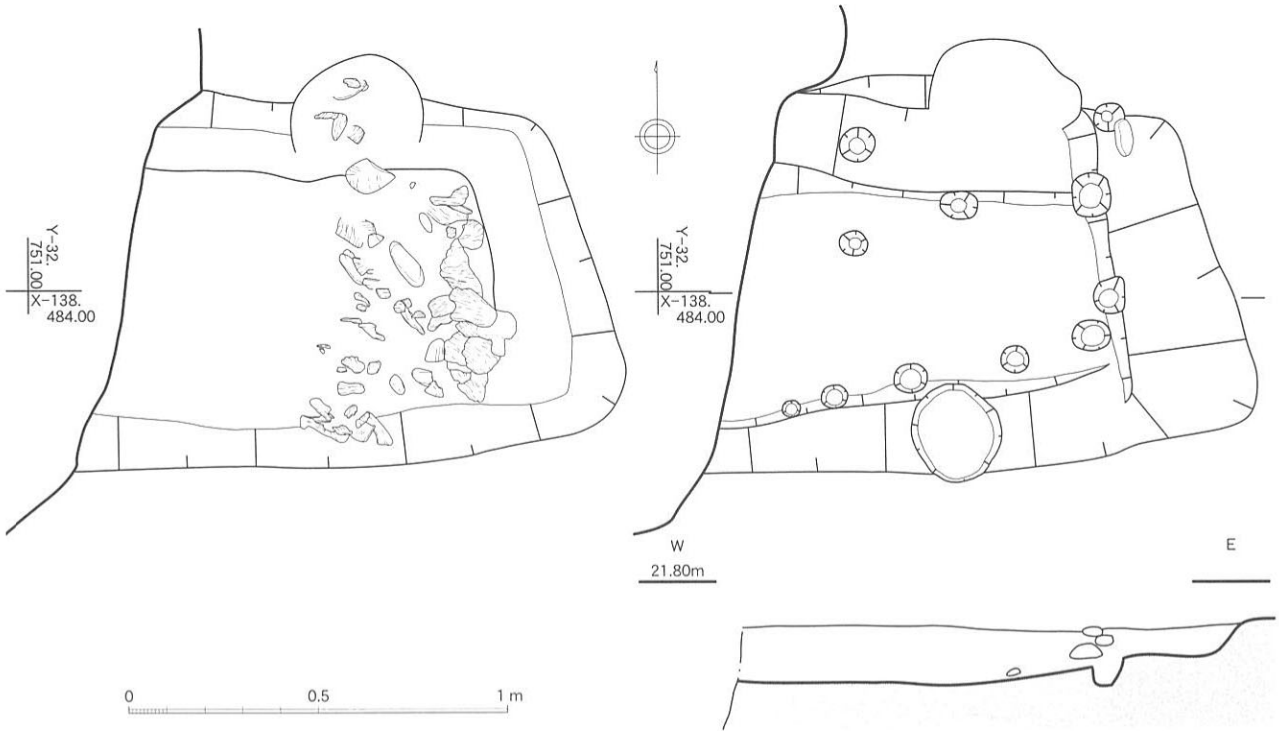


第33図 B2区3面 土墳墓2木炭塚 木炭検出状況(2)

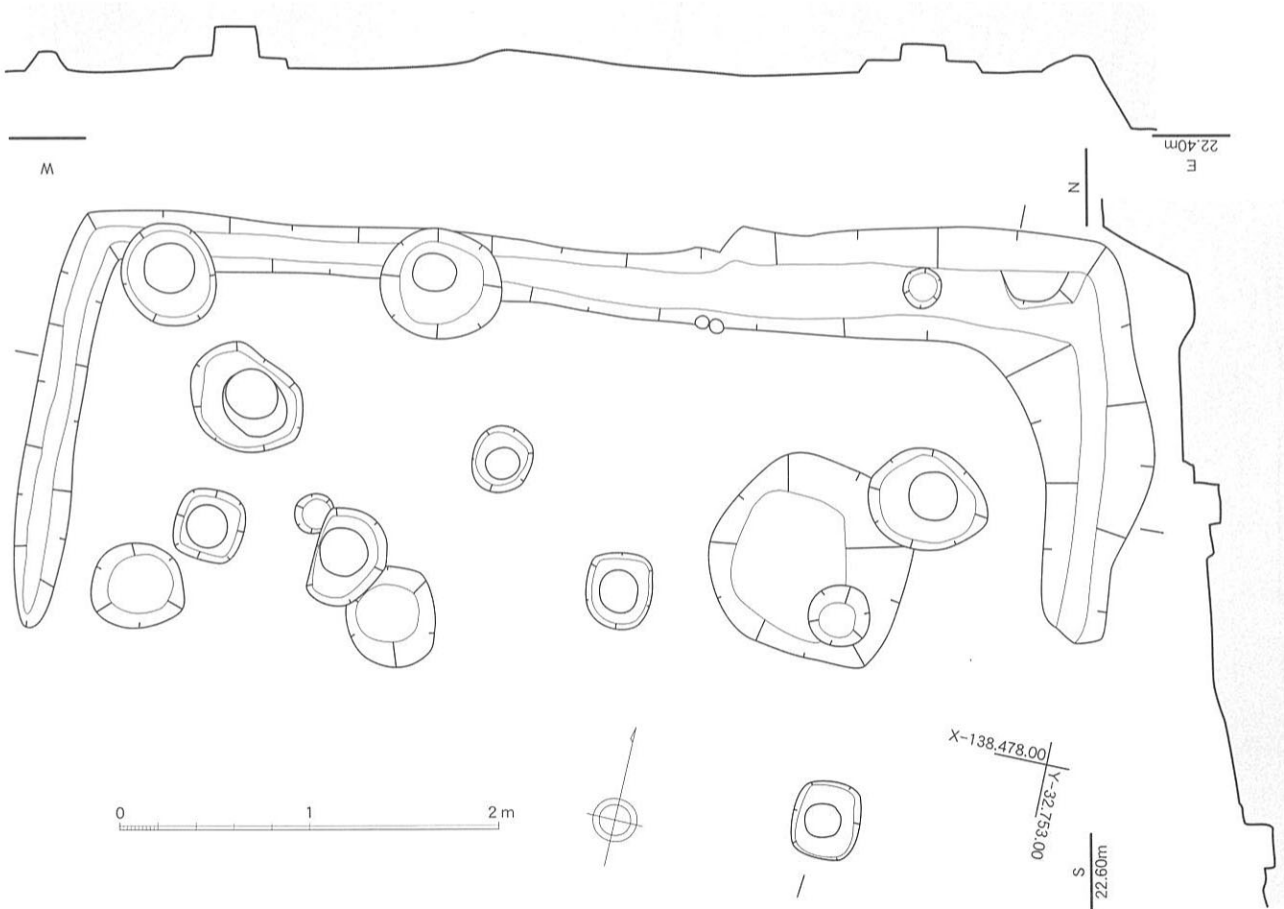


第34図 B 2区3面 土壙墓2木炭櫛 木炭検出状況（3）

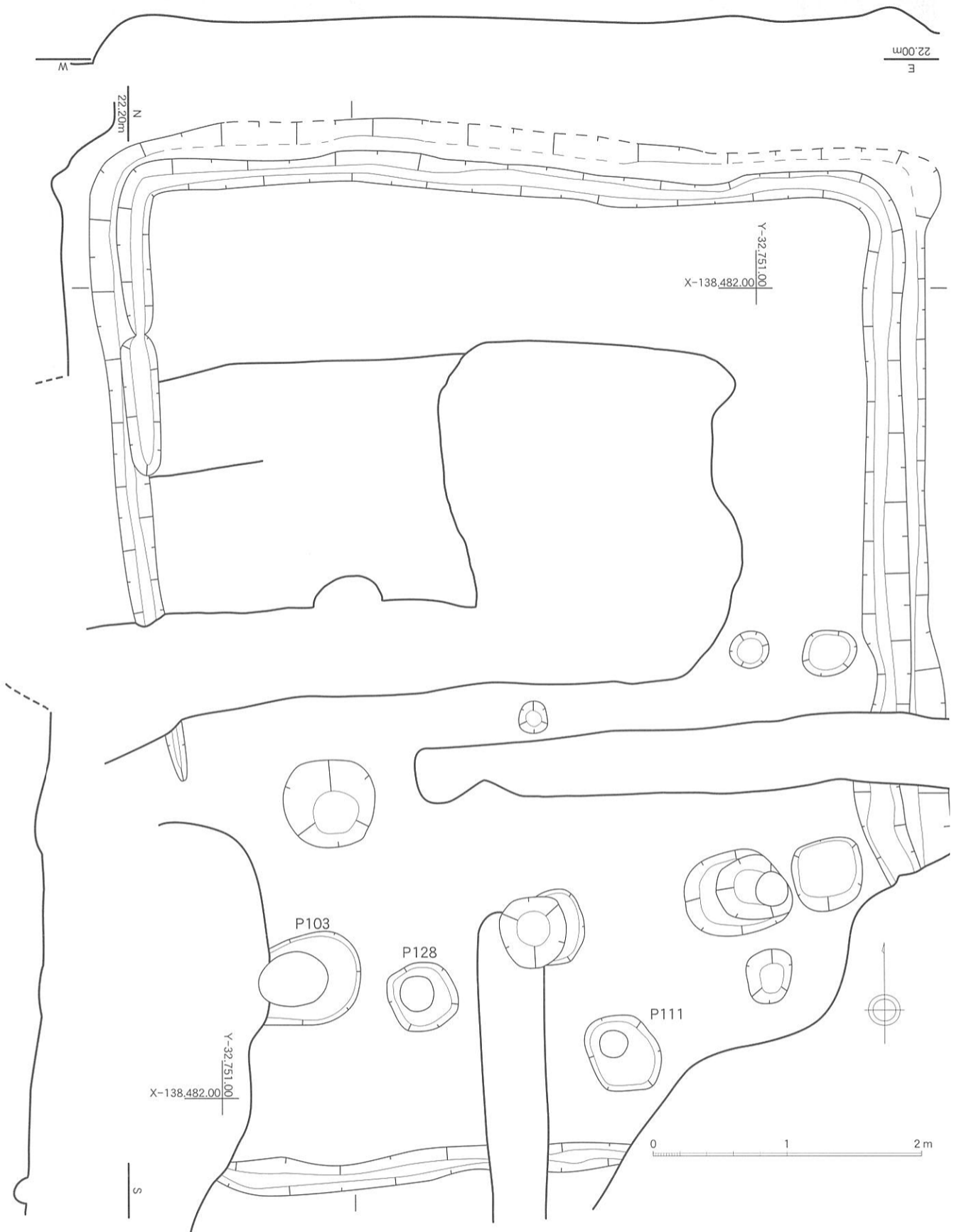
柱掘立柱建物につながる古代面を検出し、平坦面の造成は古代以前の造成と考えられ、一方西側では中世の遺構のみが検出されるため、中世の段階にいたってこの平坦面を西に拡張したものと考えられる。B 3区は丘陵の斜面地にあたるため包含層が極めて薄く、1・2層の中・近世整地土を除去したところ、赤色シルトもしくは黄色シルトの地山を直下に検出する状態であった。古代以前の整地では赤色シルトの地山をカットして整地し、平坦面を造成しているが、中世におこなわれた平坦面の拡張は赤色シルトの地山をさらにカットしており、下層の黄色シルトの地山が遺構面となる。調査の手順では2面目までのみの検出となるが遺構埋土の違いにより中世、古代、古墳時代の遺構の判別が可能であり、2面を中世の遺構面とし、3面を古代以前の遺構面とし、3面はさらに（1）古代の遺構（2）古墳時代の遺構として記述する。



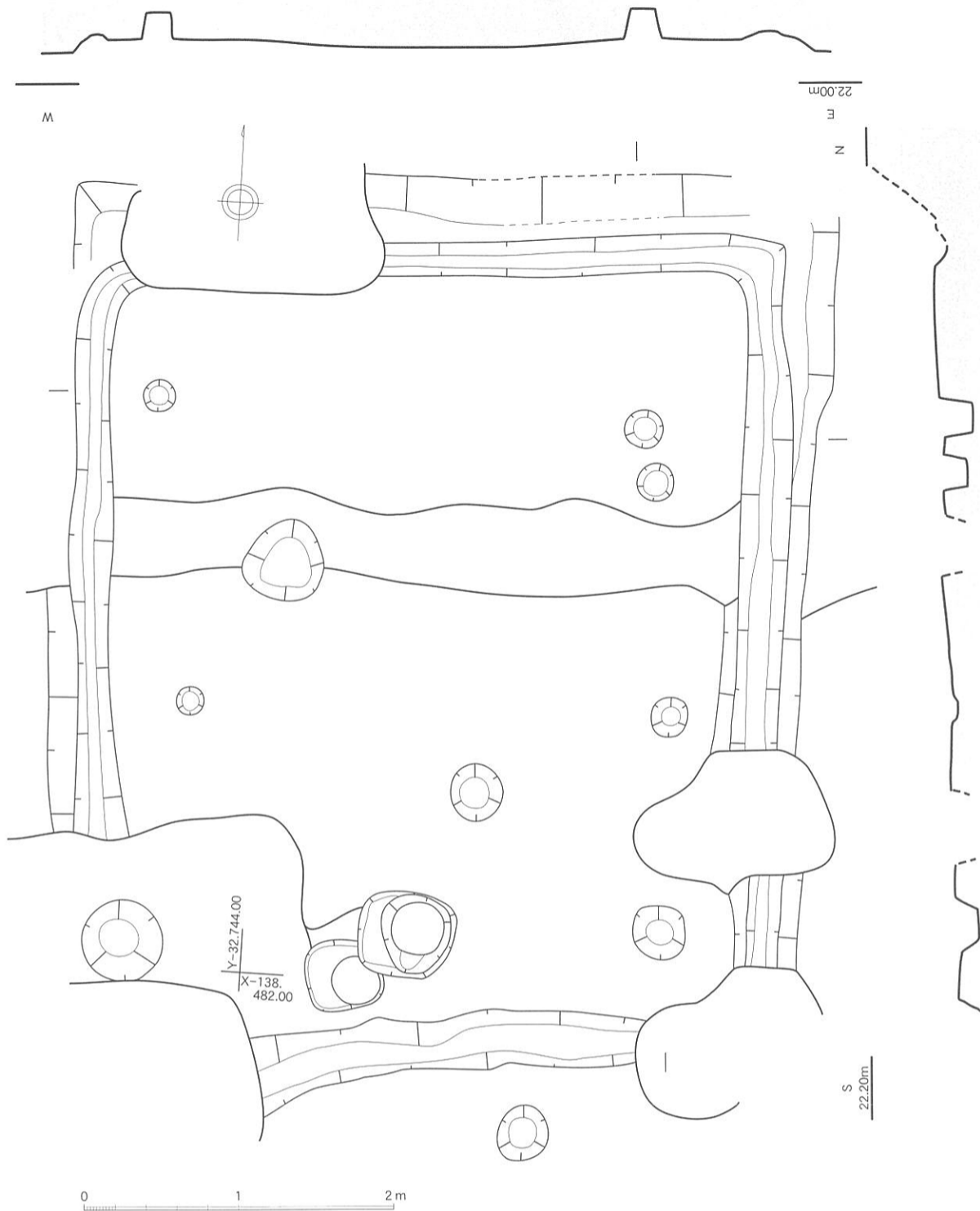
第35図 B 2区3面 土墳墓3 平・断面図



第36図 B 2区3面 竪穴住居5 平・断面図



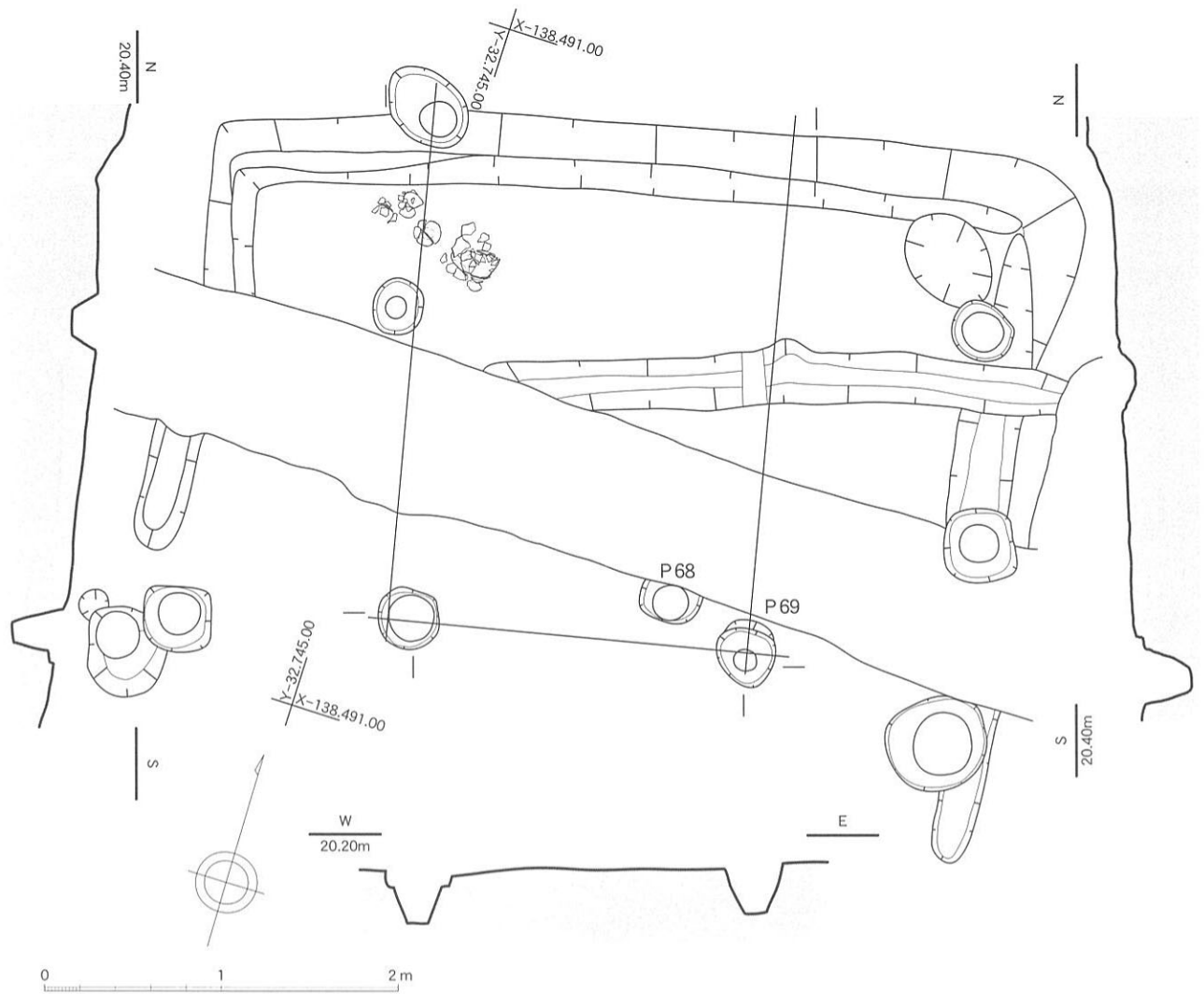
第37図 B 2区3面 竪穴住居6 平・断面図



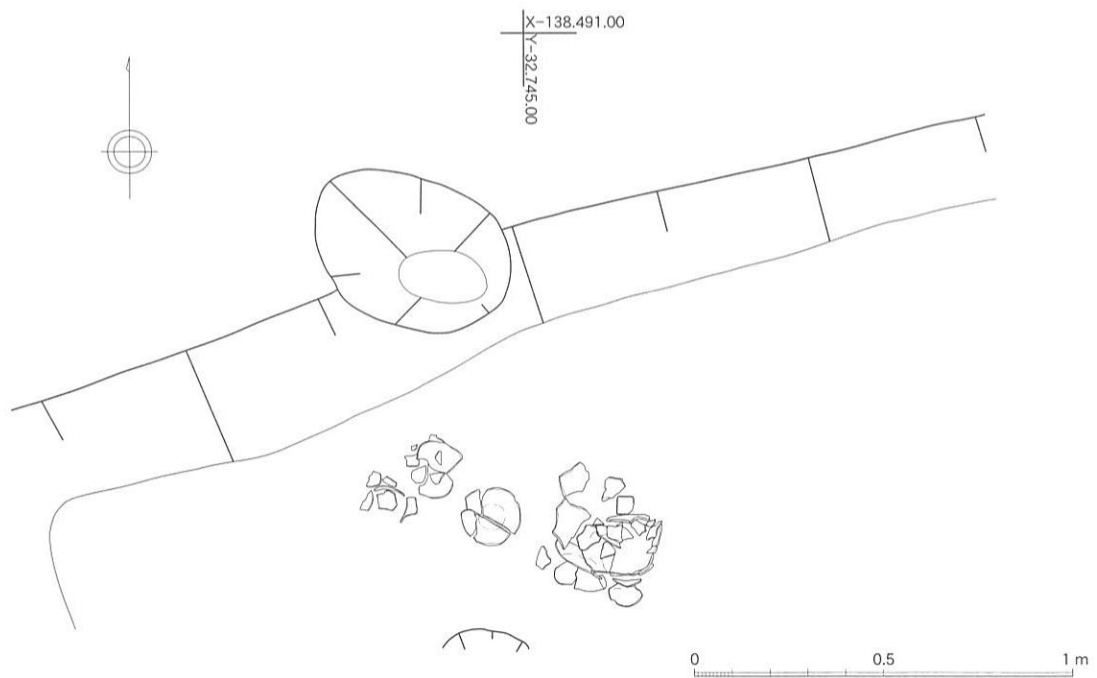
第38図 B2区3面 竪穴住居7 平・断面図

2面

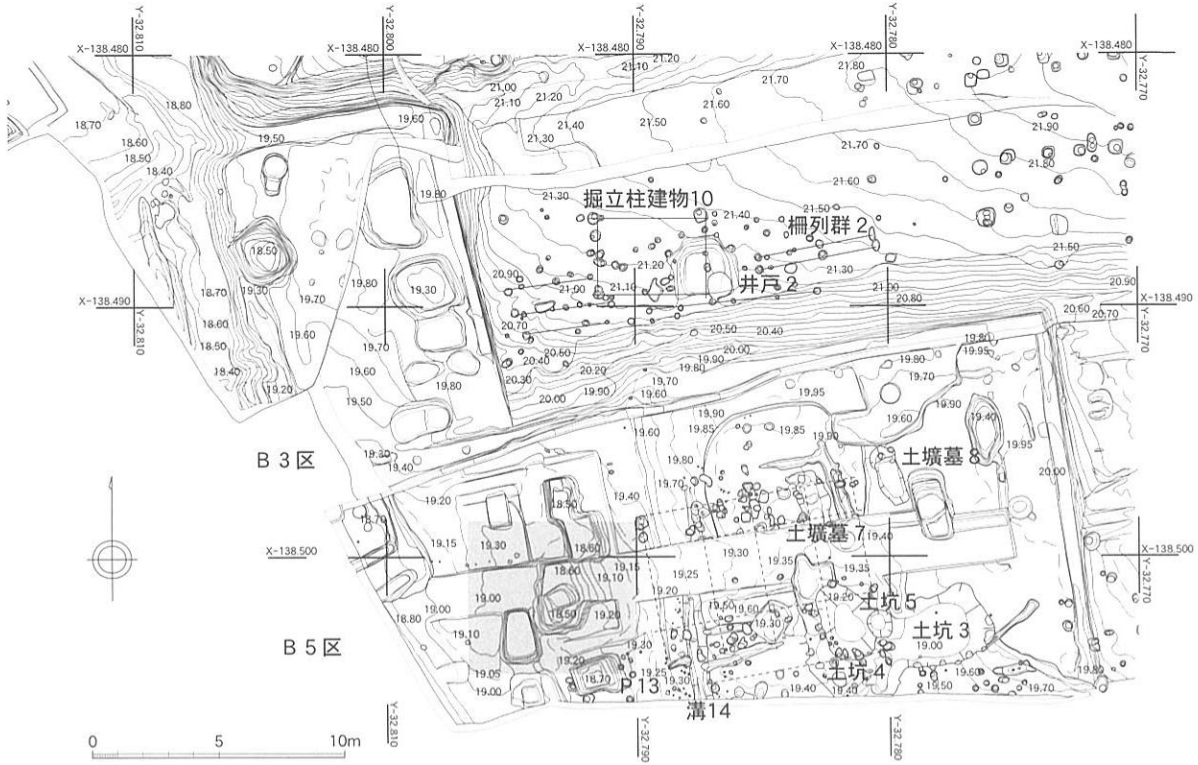
南段より一段あがった北段では土壙墓6（中世）と中世の屋敷地の一部となる柱穴を検出した。遺構の埋土は薄黄土色の砂地と、灰色の砂があり、柱痕は灰白色の粘質シルトである。2面の柱穴は主に土壙墓6よりも東側と北側で検出し、B3区の北側の調査区に展開するものと考えられる。また南段の西側でも、井戸、土坑および多数のピットを検出した。



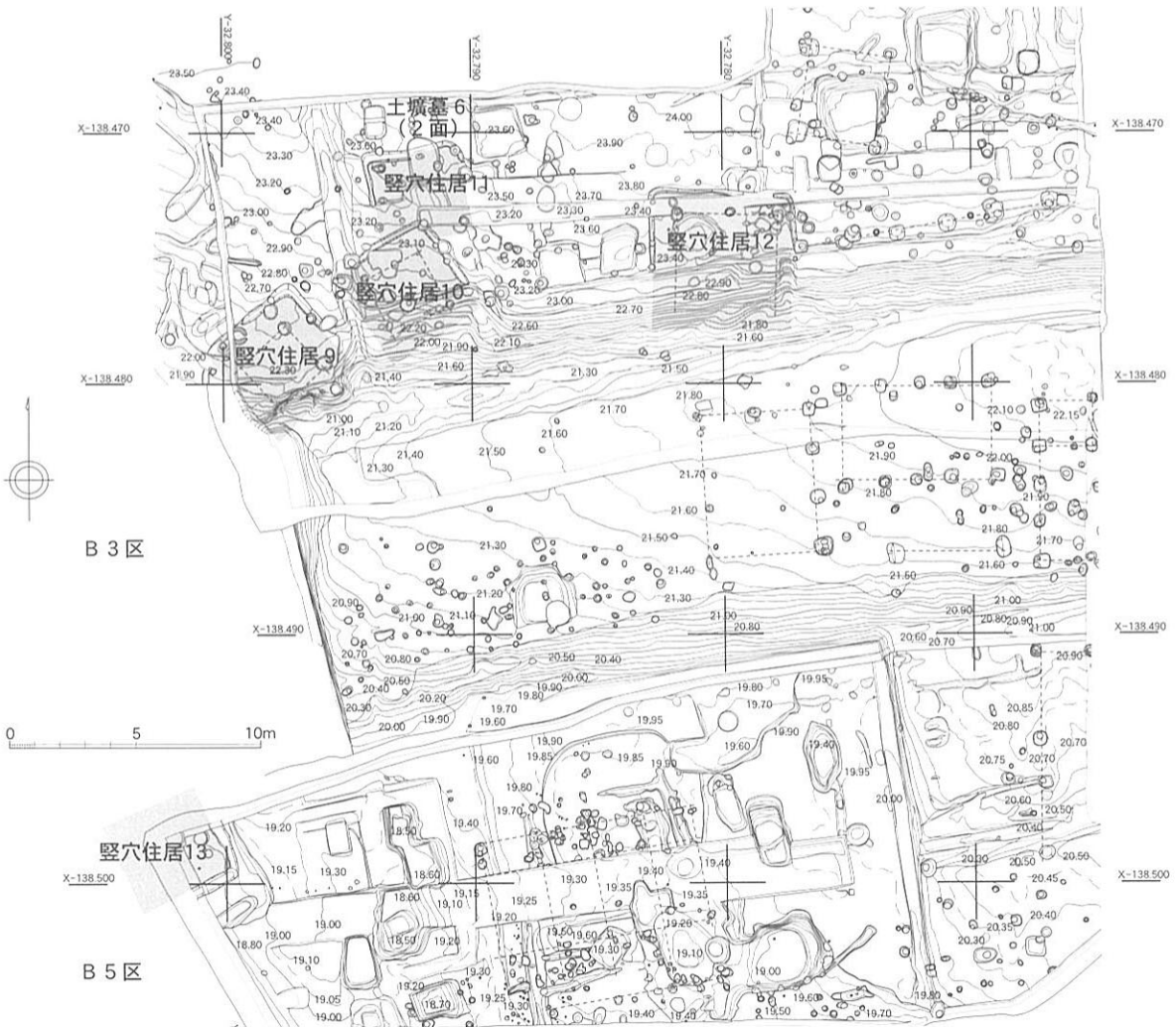
第39図 B 2・B12区3面 竪穴住居8 平・断面図



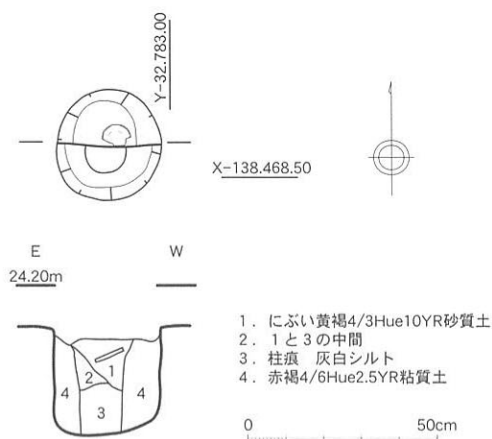
第40図 B 2・B12区3面 竪穴住居8 遺物出土状況



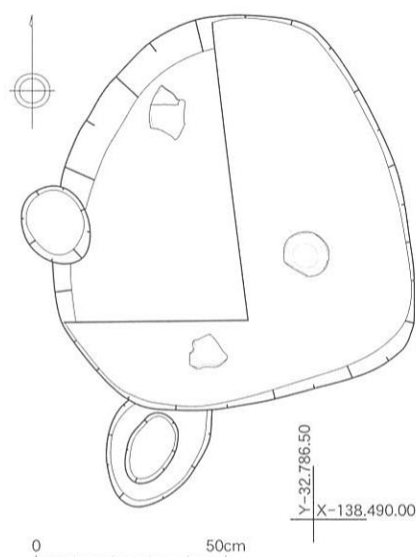
第41図 B3区南段・B5区2面 遺構配置図



第42図 B区西側3面 (古代・古墳時代) 遺構配置図



第43図 B3区2面 ピットP10 平・断面図



第44図 B3区2面 井戸2 平面図

ピットP10（第43図） ピットP10はB3区の北段に位置する直径30cmの円形ピットであり、北側のC区の中世遺構面で検出したピットと共に中世の建物に属すると考えられる。掘方の最上部に土師器皿一枚が上を向いて据えられていた。

掘立柱建物10 ほぼ正方に軸をとる2間×2間以上（柱間2m）の掘立柱建物である。南段の黄色シルト地山上で検出した。柱の掘方は40cmの円形で、隅柱は一回り大きい隅丸方形である。周囲には柵列と考えられるほぼ東西に並ぶピットを検出した（柵列群2）。また、調査区の西端でも13世紀の瓦器碗を含む柱穴があり、西側は削平されているものの建物が存在した可能性が高い。

井戸2（第44図） 掘方は一辺が1m、深さ30cmの隅丸方形であり、瓦器碗などを出土している。掘立柱建物10に伴う可能性がある。

土壙墓6（第45図） 土壙墓6は1.3m×90cm、深さ20cmの土壙である。烏帽子が北辺に下部を平行させ、逆三角形の状態出土した。その東側で瓦器碗が4個体重なって出土した。烏帽子付近に頭部があったとすると、瓦器碗は頭部の東に据えられたといえる。土師器皿は烏帽子と北辺の間に立った状態で10枚が出土しており、遺骸を入れた構造物の上から重なったまま転落したようである。また、土壙墓底面の北半には遺体由来と考えられる粘質のシルトがみられ、土壙墓南辺下端沿いに大腿骨が東西方向に遺存していることから、頭を北に向けた屈葬であったと推定される。底面の周縁には、幅3～4cmの溝状の圧痕が部分的にみられ、木棺の痕跡とも考えられたが、釘は出土せず断定には至らない。また、植物由来と考えられる筵状の凹凸をもつ粘質シルト層の痕跡がみられ、遺骸は籠のようなものに納められた可能性もある。土師器・瓦器碗より13世紀に属すると考えられる。

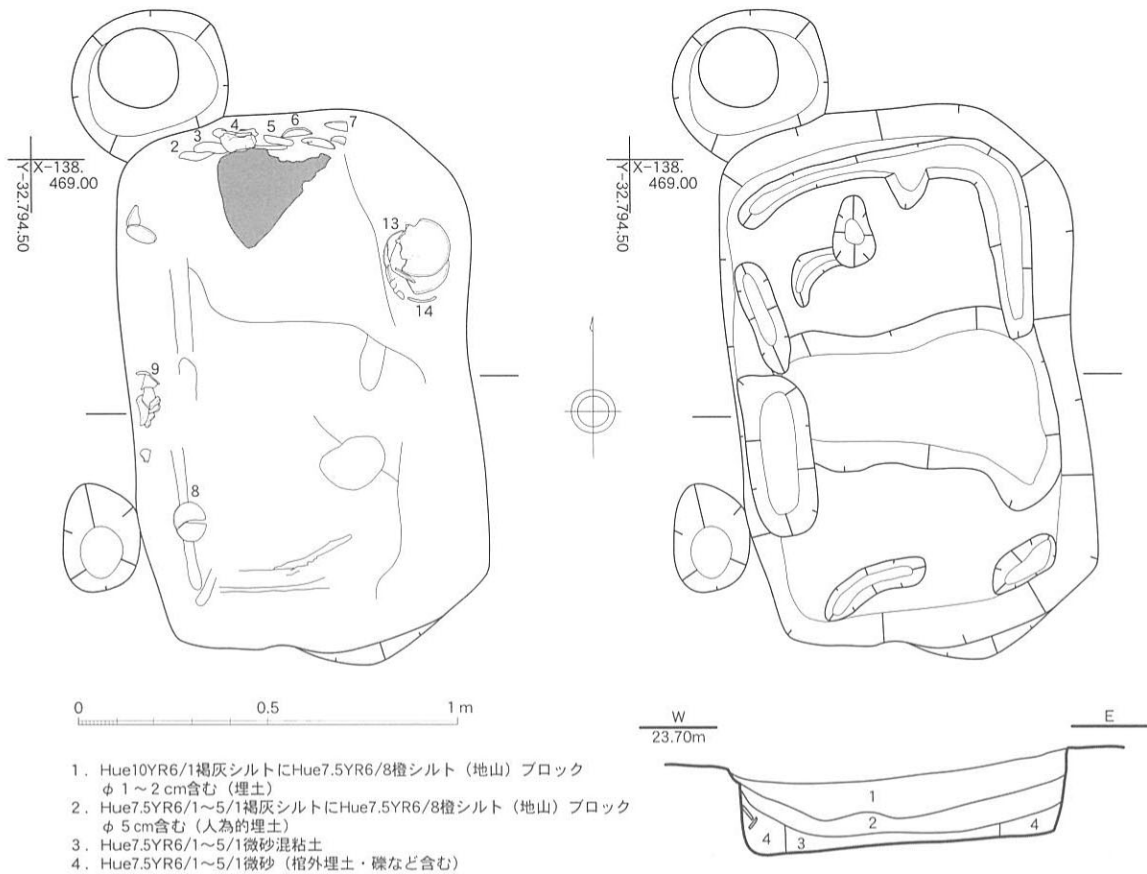
3面

層位的には2面目と同じであるが、およそA区と同じ茶褐色の包含層が遺構の埋土となっている。B3区の北段、南段の東側で古代の遺構と古墳時代の遺構を検出した。

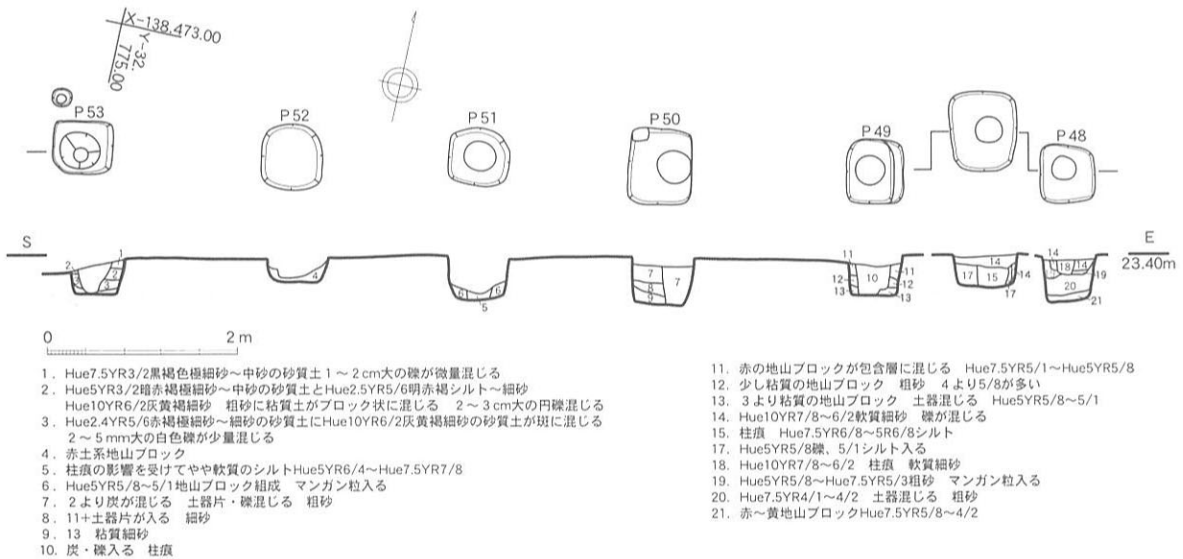
（1）古代の遺構…南段の東側では主軸が直交する奈良時代の掘立柱建物11～14、平安時代の柱穴列8を検出した。北段では柱穴列4～7のほか、多数の古代のピットを検出した。

柱穴列4 柱穴列4は柱穴の掘方が一辺80cm前後の正方形であり、柱間は1.5mと狭く、深さは1mにも及ぶ。軸は東北東から西南西にふれ、少なくとも2回以上の作り直しがおこなわれている。内部からは古墳時代の土師器破片などを出土した。対面する柱穴はみあたらないことから柵列の可能性もある。

柱穴列5（第46図） 柱穴列5は柱穴の掘方が一辺60cm前後の正方形であり、少なくとも2回以上の作り直しがおこなわれている。柱間は2mであり6間分を検出した。軸は、やや北にふれるもののほぼ



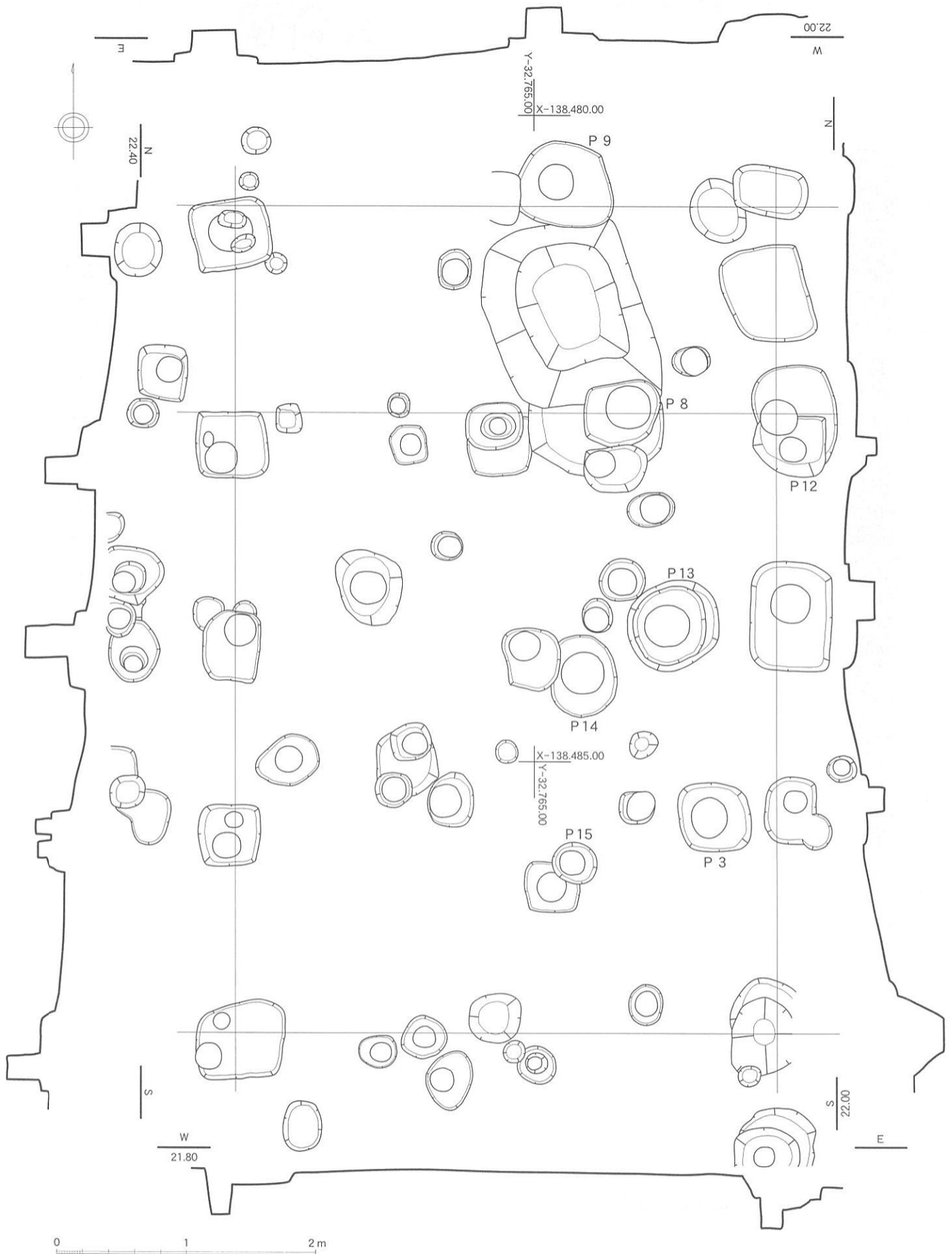
第45図 B3区2面 土墳墓6 平・断面図



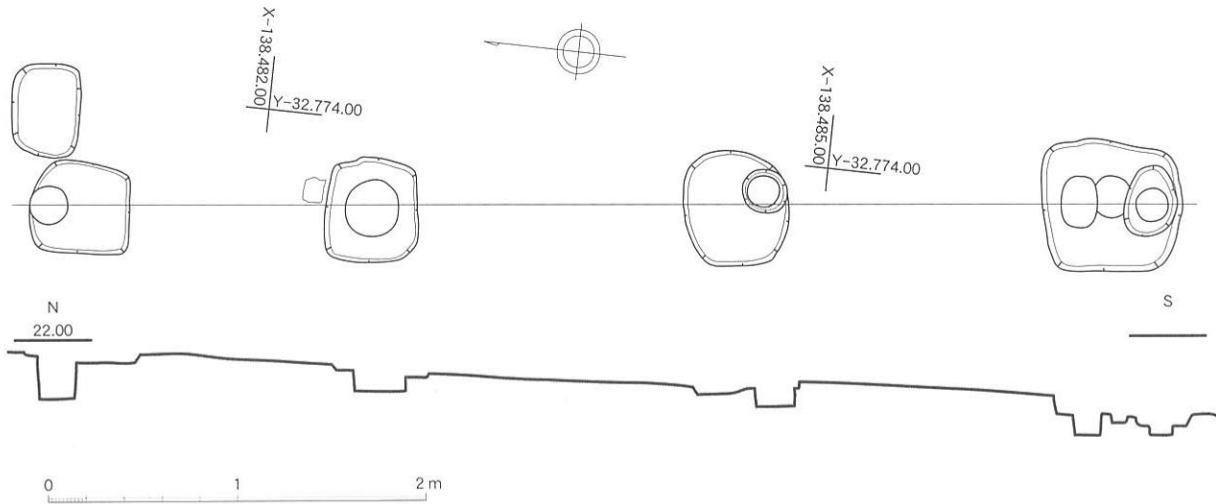
第46図 B3区3面 柱穴列5 平・断面図

東西方向に並ぶ。周辺を精査したが柱穴列北側の高台上には建物へと展開するような柱穴がそろわないことから、現在段落ちとなり、すでに削平されている南側に対応する柱穴があり、掘立柱建物であったかもしくは柵となる可能性が考えられる。

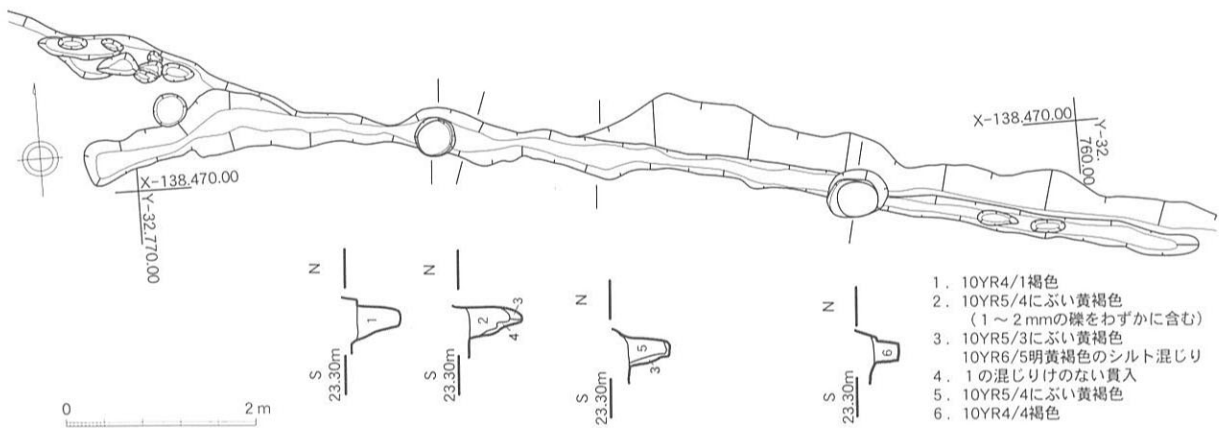
柱穴列6 柱穴列6は柱穴の掘方が一辺60cm前後の正方形であり、少なくとも2回以上の作り直しがおこなわれている。柱間は1.8mであり5間分を検出した。柱穴列6は、柱穴列5と同じ方向軸であり、柱穴列5同様掘立柱建物であったかもしくは柵となる可能性が考えられる。



第48図 B3区3面 掘立柱建物12 平・断面図



第49図 B3区3面 柱穴列7 平・断面図



第50図 B3区3面 壁立溝 平・断面図

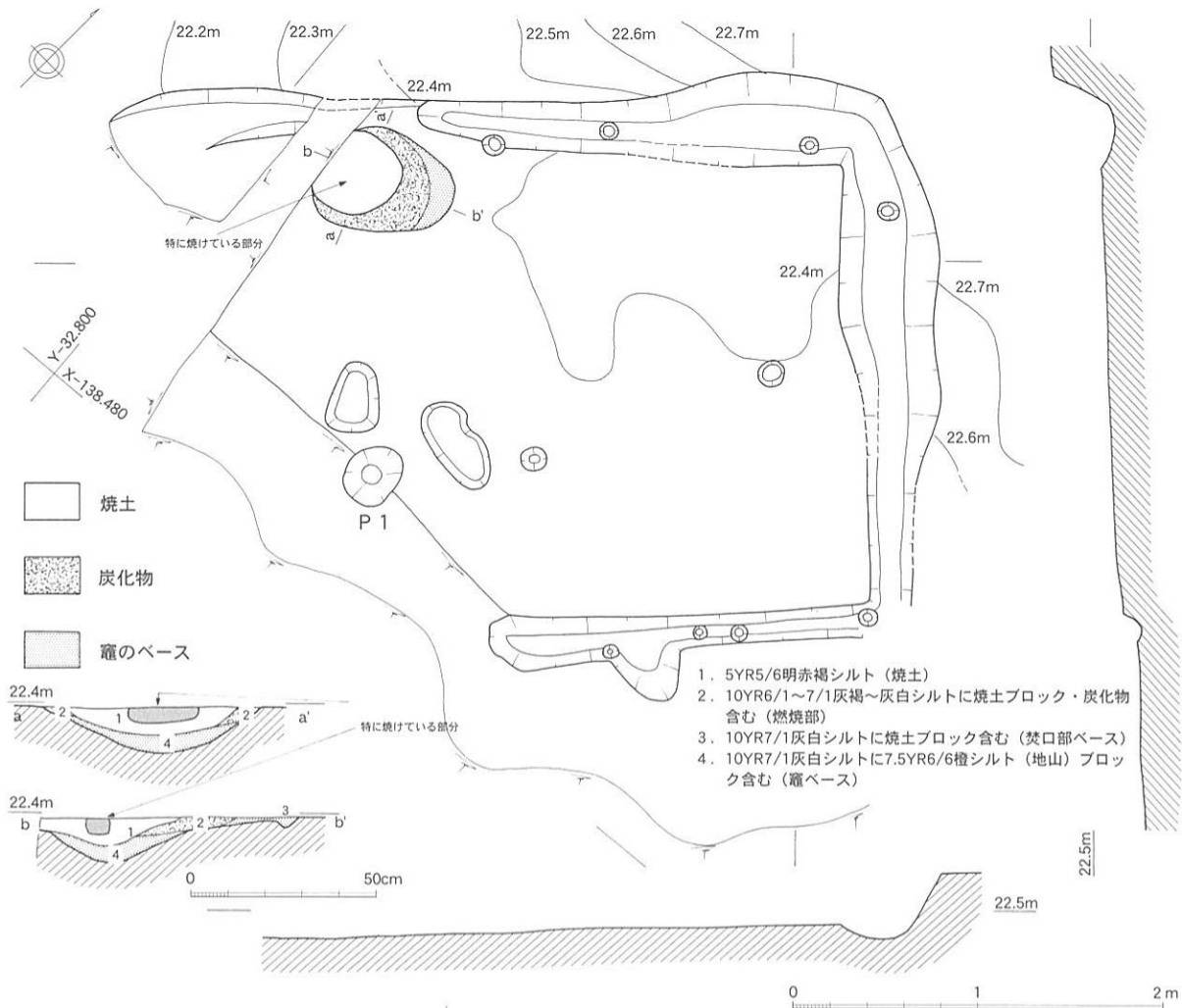
られる。燃烧部とみられる焼土ブロック・炭化物を含む層は、燃烧部中央ではみられないことから、竈廃棄時に燃烧部の炭化物がかき出された可能性が考えられる。竈が検出された箇所は竈穴検出面と床面がほぼ同じ高さで検出されていることから、竈袖部など構築物は削平されたものとみられる。

古墳時代中期に位置づけられる。

竈穴住居10 (第52図) B3区の北西隅部に位置する。B3区竈穴住居9の東側に約2mの間隔をおいてほぼ平行する位置関係にある。北西から南東へとゆるやかに下降する斜面において北西・北東辺を検出した。ほぼ北西—南東方向に軸をもつ平面方形の竈穴住居とみられる。埋土は、灰黄褐色シルトであり、須恵器・土師器が出土した。床土は灰黄褐色シルトブロックに竈穴住居の基盤土である黄色～橙色シルトブロックが混じり、やや粘性をもつ。

北西辺3.2m、北東辺3.1mを検出した。北西辺の端部は後世の柱穴および南北にのびる溝のため残存しないが、溝の西側で北西辺の延長部はみとめられないため、北西辺の長さは最大4mと考えられる。壁高は北隅部で最大10cm残存する。床面は北西辺から南東へ1.9～3mほぼ平坦に検出される。床面では壁溝、ピットを検出した。

壁溝は、幅18～40cm、深さ5cm前後で、北西辺、北東辺ともに底部において直径8～14cm、深さ5cm前後の小穴を検出した。



第51図 B 3区3面 竪穴住居9 平・断面図

ピットは、4カ所を確認した。ピットP 1以外のピットは直径または長径26～40cm、深さ5～10cmの浅いすり鉢状であり主柱穴と判断するには至らない。ピットP 1は、床面東半ほぼ中央、北東辺から96cm、北西辺から1.7mの箇所に位置する。直径30cm、深さ25cmであり、主柱穴となる可能性がある。本竪穴住居が2本の主柱をもつものと想定すると、ピットP 1の西へ1.6mの地点にいまひとつの主柱穴の存在が考えられるが、後世の柱穴が位置し不明である。

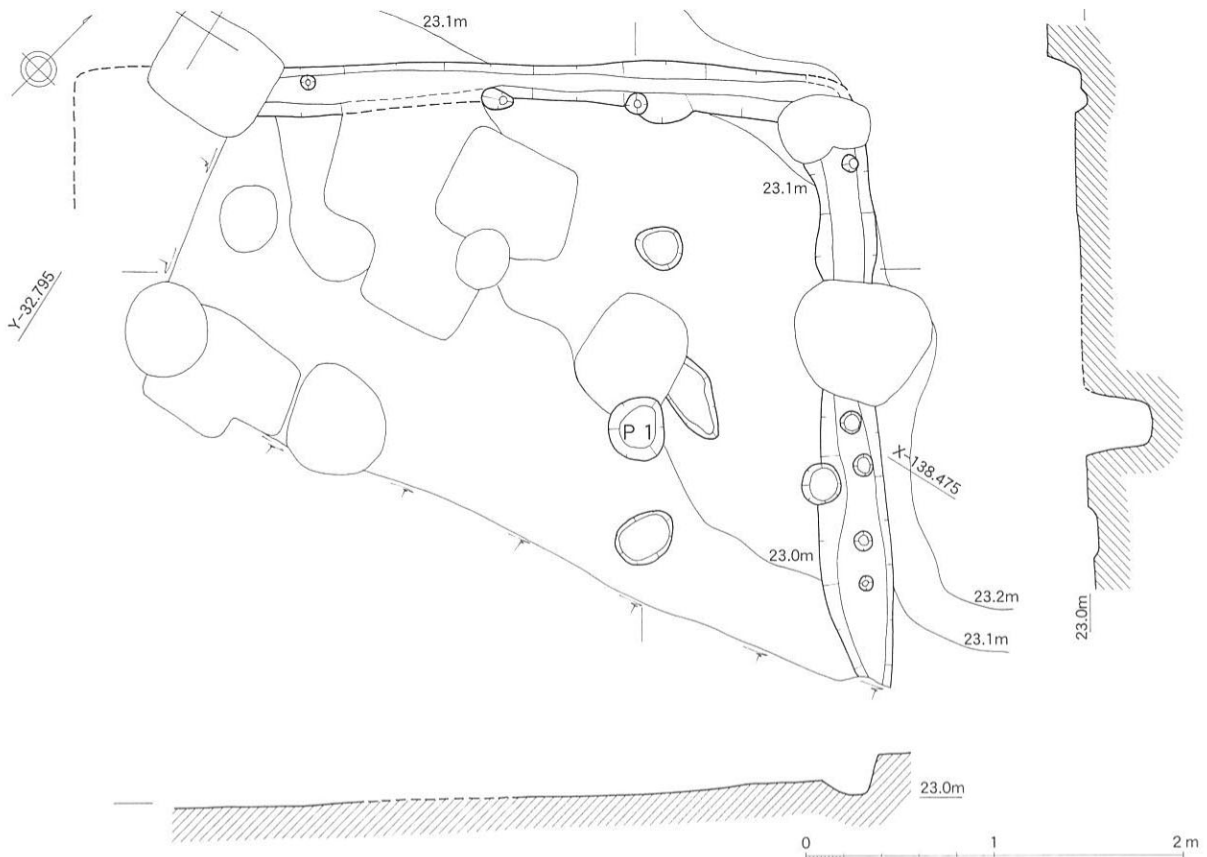
北東辺壁溝から初期須恵器とみられる須恵器高坏が出土しており、埋土出土遺物からも、古墳時代中期、初期須恵器併行期に位置づけられる。

竪穴住居11（第53図） B 3区の北西部、B 3区竪穴住居10の北側に位置する。北から南へとゆるやかに下降する斜面において北・東・西辺を検出した。ほぼ南北方向に軸をもつ平面方形の竪穴とみられる。中央やや東よりの部分を中世土坑によって切られる。埋土は、灰黄褐色シルトである。床土は灰黄褐色シルトブロックに竪穴住居の基盤土である橙色シルトブロックが混じり、やや粘性をもつ。

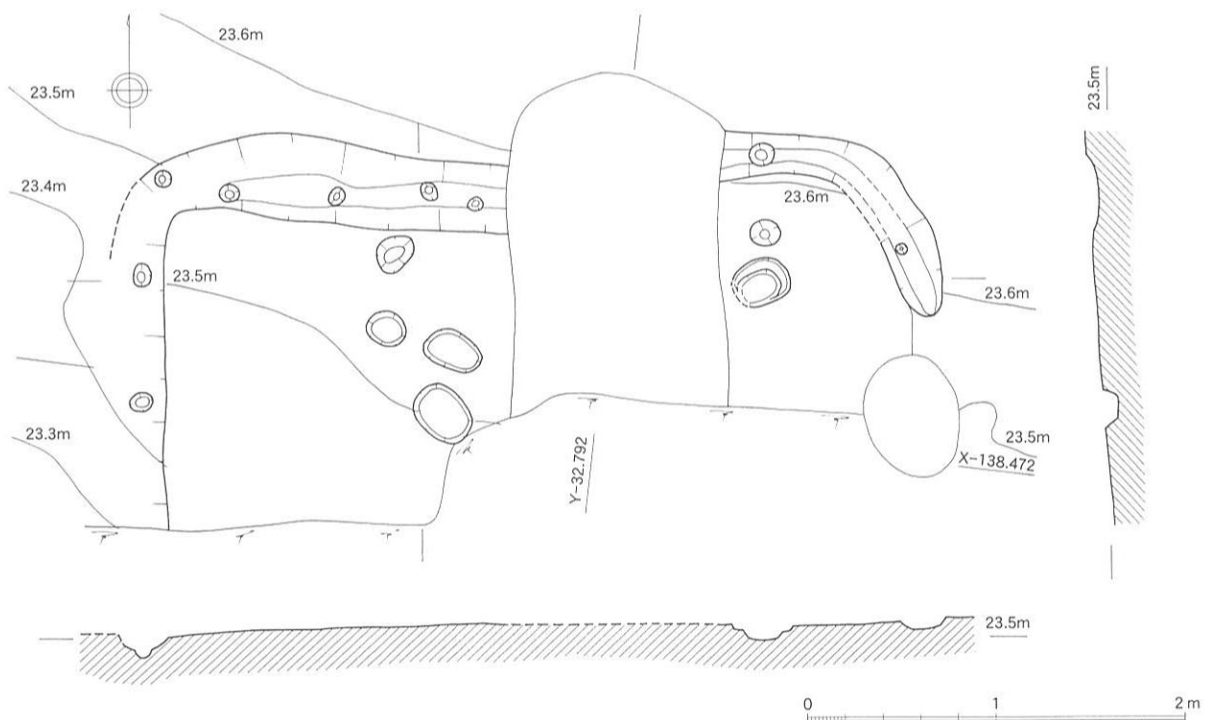
北辺4m、東辺1m、西辺2mである。北辺の壁高は10cmである。床面は北辺から南へ最長1.7mを検出した。床面では壁溝、ピットを検出した。

壁溝は、幅20cm、深さ5cmで、底部において直径6～10cm、深さ5cm前後の小穴を北・東・西辺で検出した。西辺は東肩部のみの検出である。

ピットは、6カ所を確認した。直径または長径16～34cm、深さ5～10cmの浅いすり鉢状であり主



第52図 B3区3面 竪穴住居10 平・断面図



第53図 B3区3面 竪穴住居11 平・断面図

柱穴と判断するには至らない。

床面に伴う遺物はみとめられない。竪穴住居埋土出土遺物は、古墳時代中期に位置づけられる。

竪穴住居12（第54図） B3区の中央よりやや北西よりに位置する。北から南へとゆるやかに下降する斜面において北・東・西辺を検出した。ほぼ南北方向に軸をもつ平面方形の竪穴住居とみられる。埋土は、灰黄褐色シルトであり、須恵器、土師器が出土した。床土は灰黄褐色シルトブロックに竪穴の基盤土である橙色シルトブロックが混じり、やや粘性をもつ。

当初、西辺は外側すなわち西側のみの検出であったが、床面において、内側すなわちその東側から壁溝が検出されたことから、西辺の拡大がなされたものと考えられる。したがって、内側の壁溝に伴う竪穴を旧竪穴、西辺拡大後の竪穴を新竪穴と呼称する。

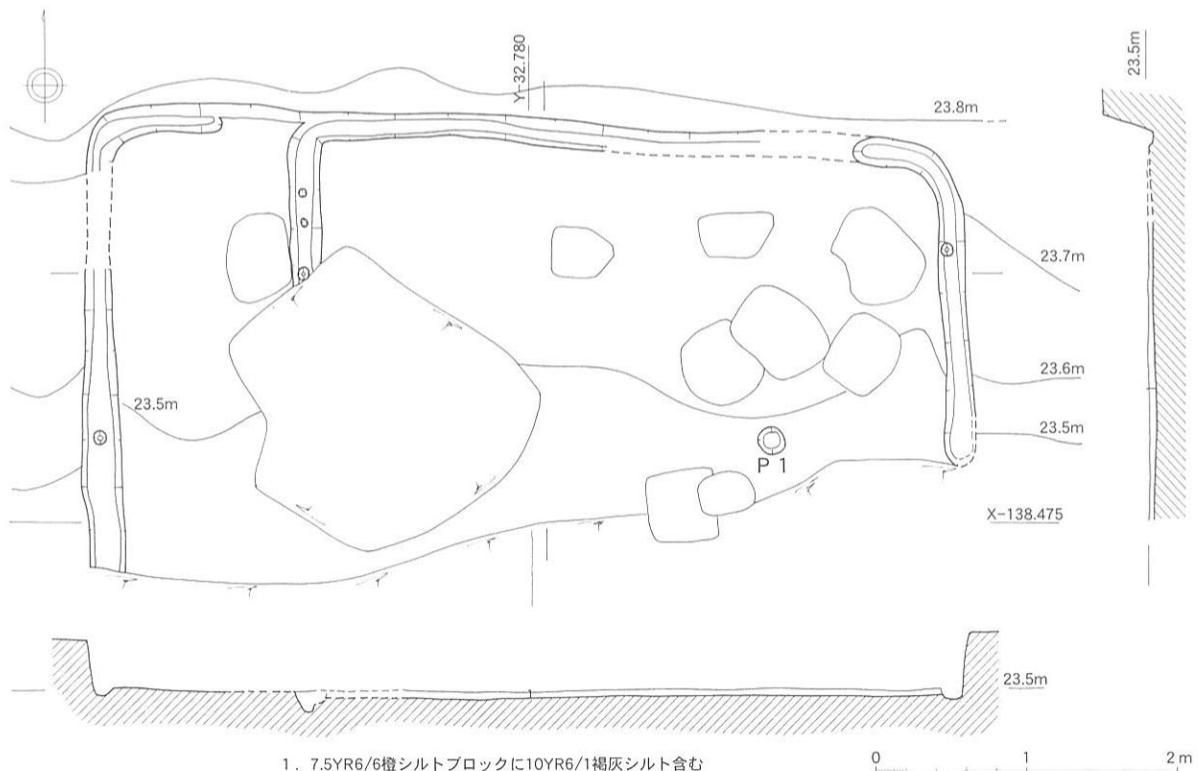
旧竪穴は、北辺および東辺を新竪穴と共有し、北辺4.3m、東辺2.2m、西辺1.2mである。床面は北辺から南へ最長2.9mまで検出した。床面では壁溝、ピットを検出した。

壁溝は、幅18cm、深さ5cmで、底部において直径5～10cm、深さ5cm前後の小穴を東辺および西辺で検出した。北西隅部の壁溝の内側はほぼ直角に屈曲する。

ピットは、1カ所を確認した。旧竪穴の床土をある程度除去した段階で検出したものである。ピットP1は直径20cm、深さ25cmであり、支柱穴とみられる。この場合、竪穴は2本支柱となる可能性があるが、対応する支柱穴が想定される箇所には深い攪乱があり、ピットP1に対応する支柱穴は検出できなかった。

新竪穴は、北辺および東辺を旧竪穴と共有し、北辺5.7m、東辺2.2m、西辺3mである。北辺の壁高は30cmである。床面では、壁溝を検出した。

壁溝は、幅18～28cm、深さ5cmで、底部において直径8cm、深さ5cm前後の小穴を西辺で検出した。



第54図 B3区3面 竪穴住居12 平・断面図

新竪穴の北壁に接する状態で土師器小形壺が1点出土した。床面に伴う遺物はみとめられず、遺物から新旧竪穴の時期差は明確にできないが、新竪穴埋土出土遺物は、古墳時代中期に位置づけられる。

(合田)

B4区 (第17図)

B区南東隅の調査区である。1・2層除去後、3層が調査区南辺に沿ってみられ、これを除去すると南辺沿いは南へわずかに下降する斜面となる。2面では数条の鋤溝を検出したが、下層の遺構の上端が顔を出す程に遺構面は荒れており、3面で8世紀の遺構を検出した。

(小暮)

3面

方形掘方をもつ柱穴列9、円形のピットなどを検出した。

柱穴列9 調査区の東半でほぼ東西方向にならぶ柱穴列9が検出された。柱穴は一辺が50cmの隅丸方形であり、柱間は1.8mである。桁行3間の東西棟の掘立柱建物となる可能性が考えられる。調査区東端のピットP12は他のピットより大きく隅柱と考えられ、掘方埋土より8世紀後半の土師器坏を検出した。

B5区 (第17・41・42図)

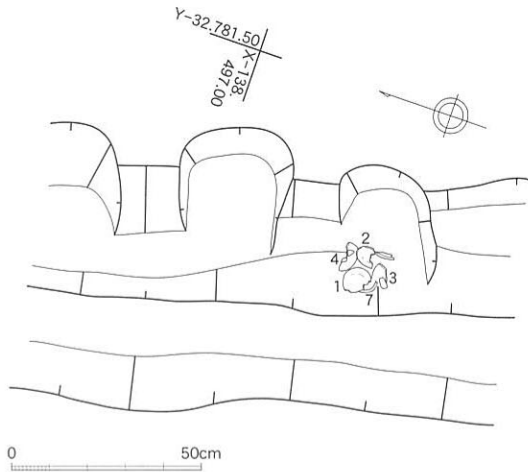
B区中央に位置し、東半が高く、西半が約70cmの比高差をもって落ちる。東半は西から東および北から南にかけてゆるやかな傾斜をもって下降し、1・2層が10~50cmの厚さで堆積し地山に至る。東端ではその下層に3層が10cm~20cmの厚さで堆積する。西半は1・2層が10cm~20cmの厚さで斜面に堆積する。遺構は(1)中世の遺構、(2)古代の遺構、(3)古墳時代の遺構の順に記述する。

(1) **中世の遺構** (第41図) …西半南側で建物跡に付随するような状況で土壇墓3基を検出した。ただし建物跡は、後世の削平のため柱穴がそろわず、明確にすることはできなかった。他に土坑、溝、ピット等がある。

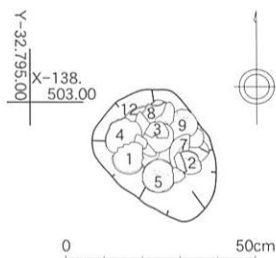
土壇墓7・8 西半の北側では並列する中世の土壇墓7・8を検出した。土壇墓7は南側が削平されているが長軸は2.1m以上、短軸が1.2m、土壇墓8は長軸2.3m、短軸80cmであり、2基は北辺隅に人頭大の石が置かれていたなどの共通項があるが、すでに攪乱によって主体部の中が荒れており、副葬品などは検出できなかった。2基の土壇墓間にはL字形の溝がはしる。また、土壇墓7の北および西側には復元直径6mの浅い落ち込みがあり、関連する可能性がある。埋土からは13世紀後葉~14世紀前半の瓦器片が出土した。

土坑3・4 西半の南側では直径3m×2.8m、深さ1.1m前後の大形の土坑3、直径3.2m×2m、深さ20cmの楕円形の土坑4を検出した。2基の土坑間には直径1m、深さ20cm前後の土坑5がある。土坑3を切って土坑4を作り、更に土坑5が作られたことを断面から確認できた。土坑5の底は礫が敷かれ、礫を除去すると湿った微砂が検出されたため、土坑5は井戸の可能性もある。土坑3・4には壁面に角材、丸太材の柱穴がめぐっており、壁面を押さえる施設があったと考えられる。埋土は黄色シルトの粗砂と粘土が粒状に入り混じったブロック土であり、人為的に埋められたようである。土坑3・4とも中層から瓦質三足釜、瓦器椀、土師器皿が多数出土しており、廃棄されたものと考えられる。14~15世紀を中心とする年代に廃絶したものと考えられる。

溝14 (第55図) 南北に流れる溝であり、幅90cm、深さ20cmである。溝14からは西側の溝肩部より



第55図 B 5区 溝14 平面図



第56図 B 5区
ピットP13 平面図

土師器皿が重なって出土した。上流とみられる北側は土壙墓7の北および西側でみられた浅い円形の落ち込みによって削平を受けていることからこれに先行すると思われる。

ピットP13（第56図） 溝14の西側に展開するとみられる建物に属する可能性を持つピットである。掘方内には土師器皿が丁寧に重なって出土しており、円形の曲げ物に納められていたような状態が想定される。出土した土師器皿は溝14で出土した土師器皿と同時期と考えられ、溝14を東辺とする12世紀頃の建物が展開していたと考えられる。

(2) 古代の遺構（第17図）…主に調査区東半で多数の柱穴を検出したが、建物にまとまるのは次の2棟である。

掘立柱建物13・14 掘立柱建物14は、桁行4間×2間（柱間1.8m）の東西棟であり、掘立柱建物13は桁行5間×2間（柱間1.8m）の南北棟である。共に、掘方は一辺が60cmの隅丸方形である。掘立柱建物13からは遺物はほとんど出土しなかったが、掘立柱建物14は調査区の東南に位置し、谷の深部に近いことから比較的掘方の深さが残存しており、掘方内からは8世紀の土師器甕片や黒色土器片が出土した。（小暮）

(3) 古墳時代の遺構（第42図）…調査区西端で竪穴住居が見られた。これにより、丘陵西斜面中腹にも住居が営まれていたことが分かった。

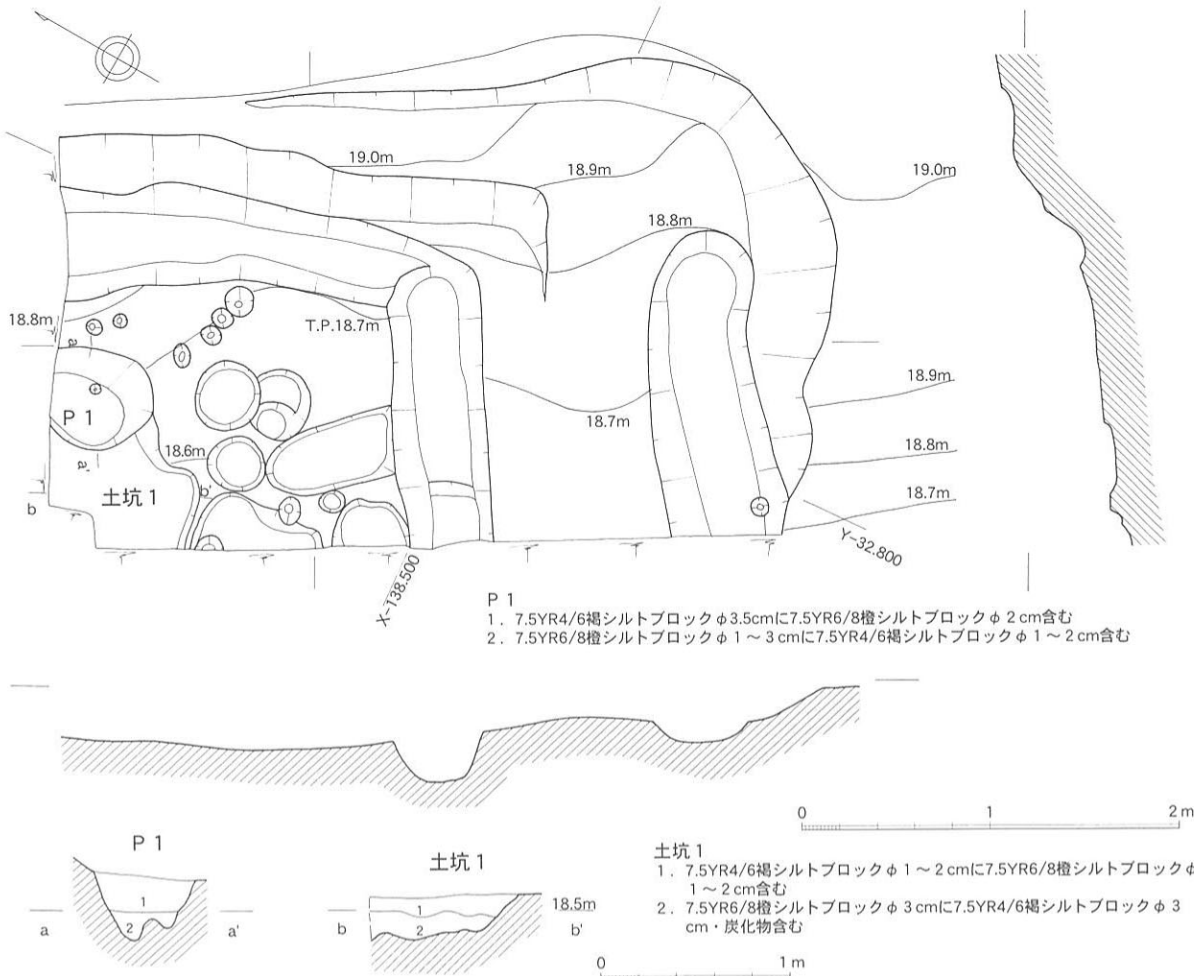
竪穴住居13（第57図） 西端の斜面で竪穴住居13を検出した。南東側4分の1の検出であり、様相は不明であるが一辺4mの平面方形の竪穴住居と考えられる。出土遺物はなく年代は不明であるが、覆土に古墳時代中期の甕把手や土師器高坏の脚部などが含まれることなどから古墳時代中期の可能性が高い。

東から西へと下降する斜面において東・南辺を検出した。北北西-南南東方向に軸をもつ。埋土は、褐色シルトブロックに橙色シルトブロックが混じるもので、竪穴住居群の中で1棟のみ異なる埋土である。床土は橙色シルトブロックに褐色シルトが混じり、やや粘性をもつ。

東辺3.9m、南辺2.4mである。東辺は幅30cmの平坦面を経て二段に落ち、南辺は幅50cm、深さ10cmの浅い溝および幅90cmのなだらかな傾斜面を経て壁溝に至っており、両辺とも垂直に近い壁面は認められない。東辺での検出面から床面までの高さは34cmである。床面では壁溝、ピット、土坑を検出した。

壁溝は、幅50cm、深さ10~20cmで、東辺に比べ南辺が深く、南辺では西へ向かって深さを増す。埋土は竪穴住居埋土に類似する。

ピット、土坑は、東辺壁溝近くでは直径10cm、深さ10cm前後のピットを6カ所、その西側ではほぼ床面全体にひろがる大小のピットおよび土坑を確認した。ピットP1は、直径50~60cm、深さ34cmである。土坑1は不定形であり、長さ80cm以上、深さ18cmである。両者とも埋土はブロック土である。



第57図 B5区 竪穴住居13 平・断面図

遺物は埋土、床面、遺構のいずれからも出土していない。

周辺には中世の遺構がひろがり、埋土中央は比較的中世遺構の埋土に類似することから中世に至っても落ち込み状を呈して存在していた可能性が十分考えられる。(合田)

B6区 (第58図)

B区の南西側にあたる地域で、宅地廃棄時の攪乱が激しく、西半にピットがかろうじて遺存する状況である。西南隅には2・3層が10cm前後斜面に堆積する。その下面で灰色の砂を埋土とする瓦器片を含むピットを検出することから、調査区の南側へ中世の建物は展開する



第58図 B6区 遺構配置図

可能性が高い。掘方は2つの柱を据えた長径60cm、短径30cmの柱穴などがある。また、調査区西辺では、古代包含層と考えられる茶褐色の埋土をもつ直径40cmの円形ピットが検出された。西側の里道へと建物が展開するようであるが、削平されている可能性が高い。(小暮)

B 7～B 9区（第59図）

B 5・B 6区よりも西側に一段下がる南北に細長い平坦面であり、B 7～B 9区は現代の宅地によって分断されたことによる区分けである。北側の調査区であるC 2区よりも一段低い。

着工前は外観上、宅地造成によって平坦面を成していたが上面の近・現代層、ならびに近・現代整地層を除去したところ、南西へと下降する赤色シルトの地山の傾斜面が検出された。東端では赤色シルトの地山は既に削平されており、その下層の黄色シルトの地山が平坦に露出しており、現代構造物の基礎に伴う穴以外は検出されなかった。赤色シルトの地山の傾斜面では宅地解体に伴う攪乱が至るところで見られたが、南西端部1m程度では傾斜が強くA区の5・6層にあたる中世の水田耕作土層が水平堆積しており、その下層の傾斜面には3層が20～40cm残存していた。B 5・B 6区西端の落ち際の様相から考えると、北西－南東方向は約30mであるが北東－南西方向は7～8mという極めて狭い平坦面しか存在し得ないにもかかわらず、中世の段階では整地し、耕作地として利用されていたようである。3層からは古代から古墳時代にかけての土師器甕・高坏、須恵器片がB 7・B 8区で多く出土したが、遺構面の状態は悪く、中世のピットと古墳時代の遺構を重複してわずかに検出したのみである。B 9区は、



第59図 B 7～B 10区 遺構配置図

南半分では傾斜がゆるくなり、3層包含層の堆積は少なく、南東半を中心に中近世に属する数個の柱穴を検出したにすぎない。

3面

溝15 B7区では傾斜面に堆積した3層中より古墳時代中期の土師器甕を検出し、その南東にあたるB8区の北側で溝15を検出した。溝はL字状に北西-南東方向から北東-南西方向へと曲がり、傾斜の深くなる南西側で消滅した。一番深い北西側部分で幅60cm、深さ30cmである。溝から遺物は出土しなかったものの溝の内側にあるピットの位置関係や他で検出した遺構と比較すると、竪穴住居に伴う壁溝である可能性が高い。その場合、赤色シルトの地山の西側への傾斜をを削平して平坦面を確保し、西半は傾斜する地山の上に整地土を貼って生活面としていたことが考えられる。これはB5区西端の竪穴住居と同じ造作であり、軸方向も同じであることから同じ古墳時代中期の竪穴住居である可能性が高い。その場合、先述したとおり近接して古墳時代中期の土師器甕が出土していることから、古墳時代中期に属する可能性が高い。(小暮)

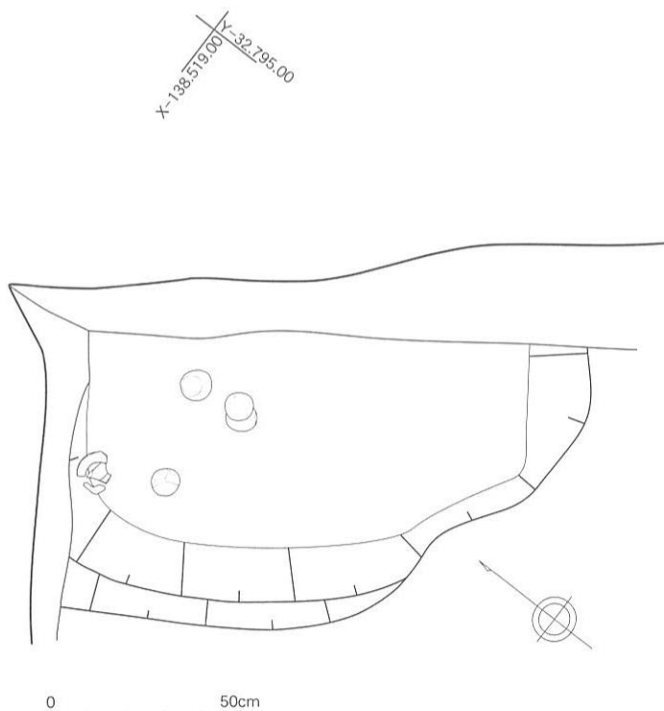
B10区 (第59図)

層厚10~30cmの2層除去後地山面に至る。B9区の南東側に位置し、地山面はほぼ平坦面であるが南西隅部、即ちA区下段の東側に向かってゆるやかに傾斜しており、A区下段は耕地化に伴う平坦面造成のための削平以前はB10区から連なる張り出しであった可能性が高い。3層の堆積は見られず2面において遺構を検出した。包含層の出土遺物は土師器、黒色土器、瓦器片などであり、主に古代後半~中世にかけて建物が建てられていたと考えられる。

2面

調査区の北東側30m²程度に柱穴が密集しており、北西から南東方向へ軸をとる掘立柱建物の存在が考えられ、掘方の小さい柱穴列はその庇となる可能性がある。

土坑6 (第60図) 北隅部において、不整形な一辺が70cm、深さ10cmの正方形の土坑6を検出し、2枚重なる土師器皿が分散して置かれた状態で出土した。地鎮に伴う可能性が考えられる。



第60図 B10区2面 土坑6 平面図

掘立柱建物15 北西から南東方向へ軸方向をもつ2間×2間(柱間1.5m)以上の掘立柱建物である。土坑6の南側に位置する北隅の柱穴は根石をもち、土師器皿片を出土した。(小暮)

B11区 (第16図)

B2区北側の小さな調査区である。B11区の北側はC区となり、C区のレベルとB2区の間には3mもの比高差がある。B11区の南側はB2区北半の平坦面をへてB2区南半の谷の深部へと急激に落ち

る。地形の高低差を利用しながら、北側斜をカッティングして南側に平坦面を造成することが明らかになっている。B11区は、調査前はB3区の頂上部とほぼ同じレベルであったが、現代整地層、中・近世整地層を除去すると遺構面はB2区の大形総柱掘立柱建物群の検出面と同レベルであり、北端は垂直にたちあがって検出された。遺構面の地山は黄色シルトであり、北端で井戸4基と中世のピットを検出した。また大形総柱掘立柱建物の背面9mにあたる部分で、東西に走る溝16を検出した。

(1) 中世の遺構…谷状地形の上位置にあたるためか、井戸を多く検出した。

井戸3～6（第61図）

井戸3～6が東西方向に並んで検出され、井戸3・4からは13世紀後半の瓦器椀、東播系播鉢、瓦器羽釜がまとまって出土した。井戸5・6は浅く、3・4に先行する可能性がある。井戸6は井戸の底のみの検出と考えられ、さらに井戸3は井戸4に先行するため、井戸6→井戸5→井戸3→井戸4の順に作られたと考えられる。井戸3は大きさが1.5m×1.2mの楕円形で深さ90cm、井戸4は一辺が1.5mの正方形で深さ1m、井戸5は一辺1mの正方形で深さ10cm、井戸6は底部のみの検出であるが1.2m×0.8mの楕円形で深さ5cmである。ピットP9などを検出したB2区の北半に展開する中世の遺構に伴った井戸と考えられる。これら井戸群のある地山をカットした屈曲部は調査中も高地側からの湧水がはげしく、井戸群は平坦面への水漏れを防ぐ役割も果たしてきたと考えられる。

(2) 古代の遺構…旧谷状地形に沿って古墳時代に属するとも考えられる溝がある。

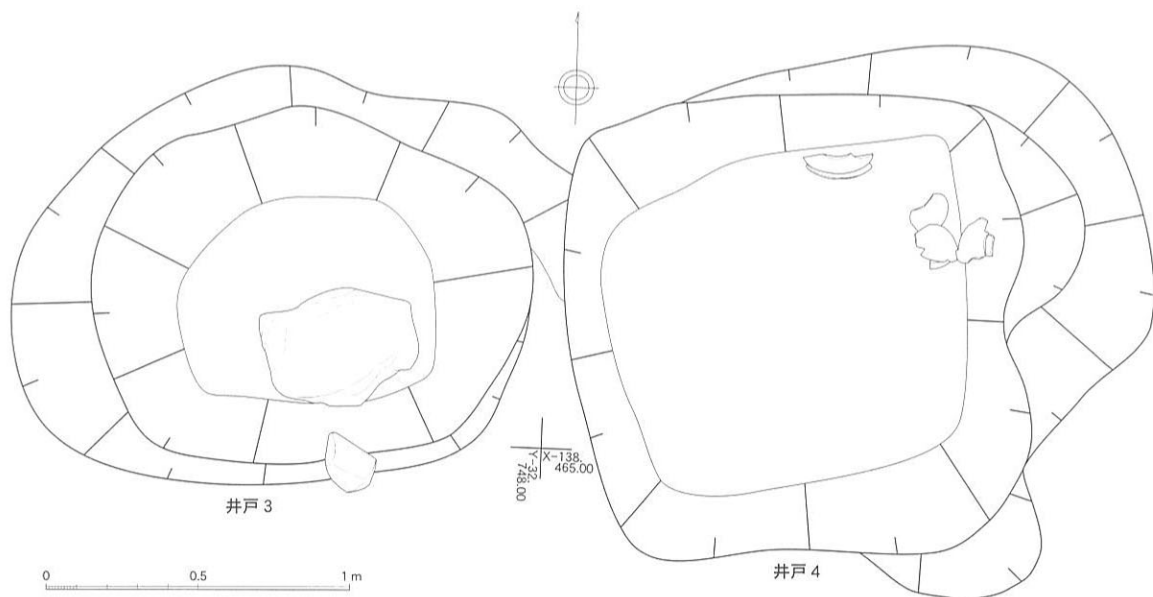
溝16 調査区の南端部では北から南へ落ちる斜面およびその下端に沿って走る溝16を検出した。幅は1.2m、深さは上部の削平のためか20cmであった。溝上面からは古墳時代後期の須恵器坏が出土した。

(小暮)

B12区（第16・17図）

調査区の南辺にあたり、東西30mの調査区である。南側は、B1・B4区から急激に落ちる谷の深部であり、西側はB5区のレベルに向かって上昇する。

調査区外の南側には現在も利用されている用水路が存在し、その付近は中・近世の整地層を除去する



第61図 B11区 井戸3・4 平面図

と南端は急激に用水路へ向かって南下する。調査区の東側は3層である古代の茶褐色包含層が厚く堆積し、B2区から続く遺構面の南端では、落ち込みを検出した。B5区に続く西側では、2層を除去した段階で中世の遺構と古代の遺構を重複して検出した。

2面

主に調査区西側で古代後半から中世のピットを重複して検出した。

(1) 中世の遺構…溝、ピットなどを検出した。

溝17 調査区の南西部で北東-南西方向に10m程流れ、南の用水路の方へと流れる溝である。上部は削平されており南北の幅2m、深さ約20cmである。下面より13世紀の瓦器片を含むピットなどが検出されており、中世後期以降につくられたと考えられる。

3面

(2) 古代の遺構…礎石建物、掘立柱建物、落ち込み、竪穴住居などを検出した。

柱穴列10・11 柱穴列10は溝17の北側に、柱穴列11は溝17に切られ、かつ柱穴列10と平行に位置する。柱穴列10は3間、柱穴列11は4間分を検出した。柱間は1.5mであり柱穴列10では根石をもつものも存在した。柱の掘方は一辺が50cmの隅丸方形である。柱穴列10と11の間は1m足らずであり、この2列が掘立柱建物を構成するとは考えにくい。

竪穴住居14・礎石建物2 (第62図) 奈良時代の土師器坏・甕を埋土に含む一辺が3.5mの正方形の竪穴住居を検出した。床面からも土師器坏が出土し、今回の調査地内では唯一の奈良時代の竪穴住居である。下面の古墳時代中期のものと比べ、はるかに規格的で整美である。主柱は4本であり、強固に焼けしまった竈を北東隅に作り付ける。上層では四隅を同じくして礎石建物が作られており、竪穴住居から礎石建物へと移行した例として注目される。

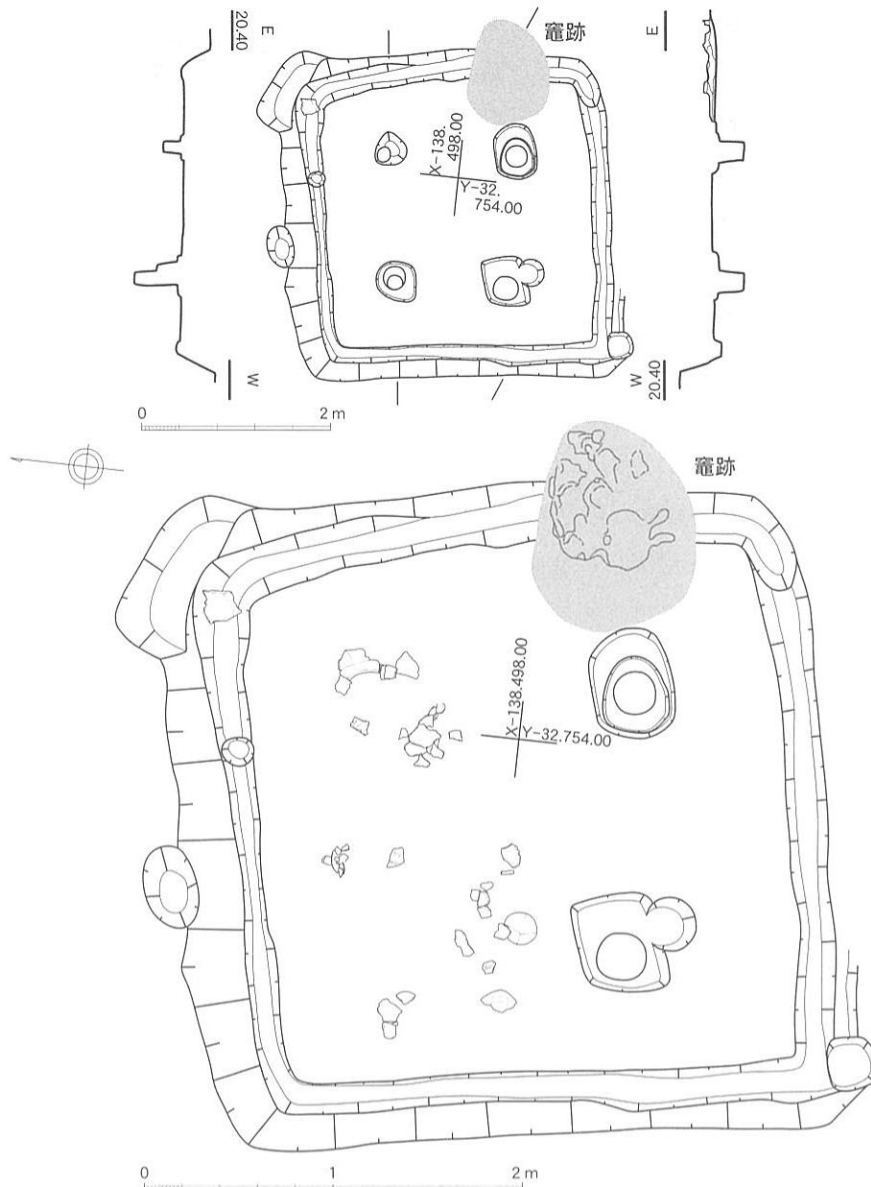
落ち込み1 (第63図) 最大幅2m以上、深さ30cmの東西の溝状の落ち込みである。東の始点は調査区外となるために不明であるが、西の終点は土層断面観察によるとB12区の谷の深部がB5区へと上がる手前で南進し、用水路際の斜面中へと続く。初期須恵器や韓式系土師器など古墳時代中期の遺物を若干含むものの、主として飛鳥～奈良時代の土師器甕、須恵器坏、瓦などが大量に出土した。古墳時代中期の遺物はいずれも細片で摩滅しており、B12区に接したB2区には竪穴住居が3棟位置し、B12区の北東端にはB2区で述べた竪穴住居8の南側がかかることから、古墳時代中期の遺物はこれら下層遺構からの混入と考えられる。北側に展開した奈良時代の大形総柱掘立柱建物群に伴う付属施設の廃棄場である可能性が高い。 (小暮)

B区まとめ

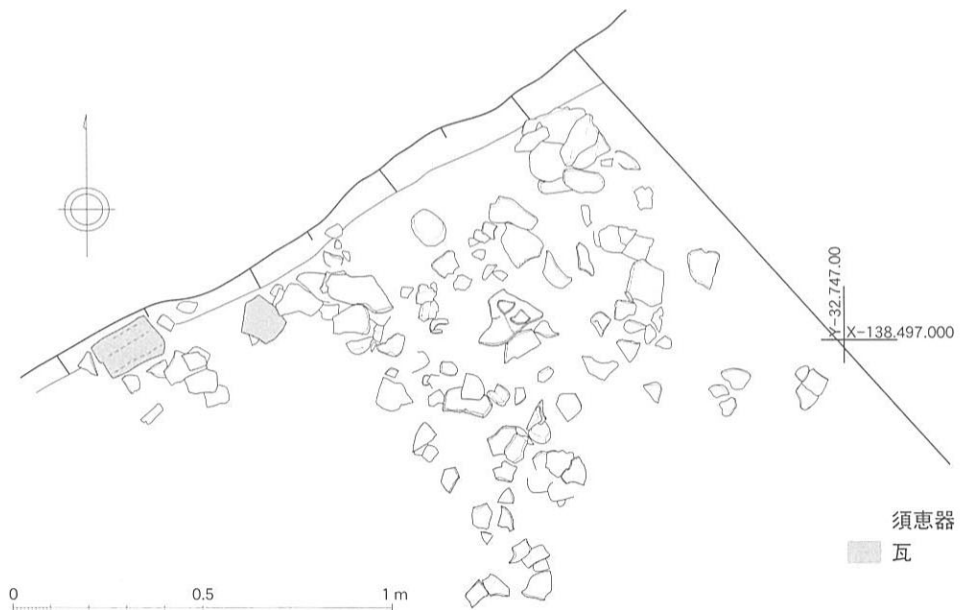
B区は小路遺跡(高宮地区)においてもっとも広い面積を占める。B区は東から西へとのびる丘陵端部の南西斜面地にあたり、眼下に平野部が広がることから建物を構築するには絶好のロケーションといえるだろう。B区の斜面地は大小に区分けされ階段状に造成されているが、その開発は古墳時代、古代、中世と幾度も繰り返されていることが遺構より明らかである。以下に要点を列挙する。

- ・12～13世紀を中心とする中世の屋敷地が東西方向に約20m間隔のまとまりをもって検出された。すなわち、B1区西～B2区・B5区南・B3区南段東・B10区～B6区西の範囲であり、約400m²級の屋敷地と考えられる。
- ・奈良時代に属する竪穴住居を1棟、古墳時代の竪穴住居を13棟検出した。

第2節 小路遺跡（高宮地区）の調査



第62図 B12区3面 竈跡住居14 平・断面図



第63図 B12区3面 落ち込み1 平面図

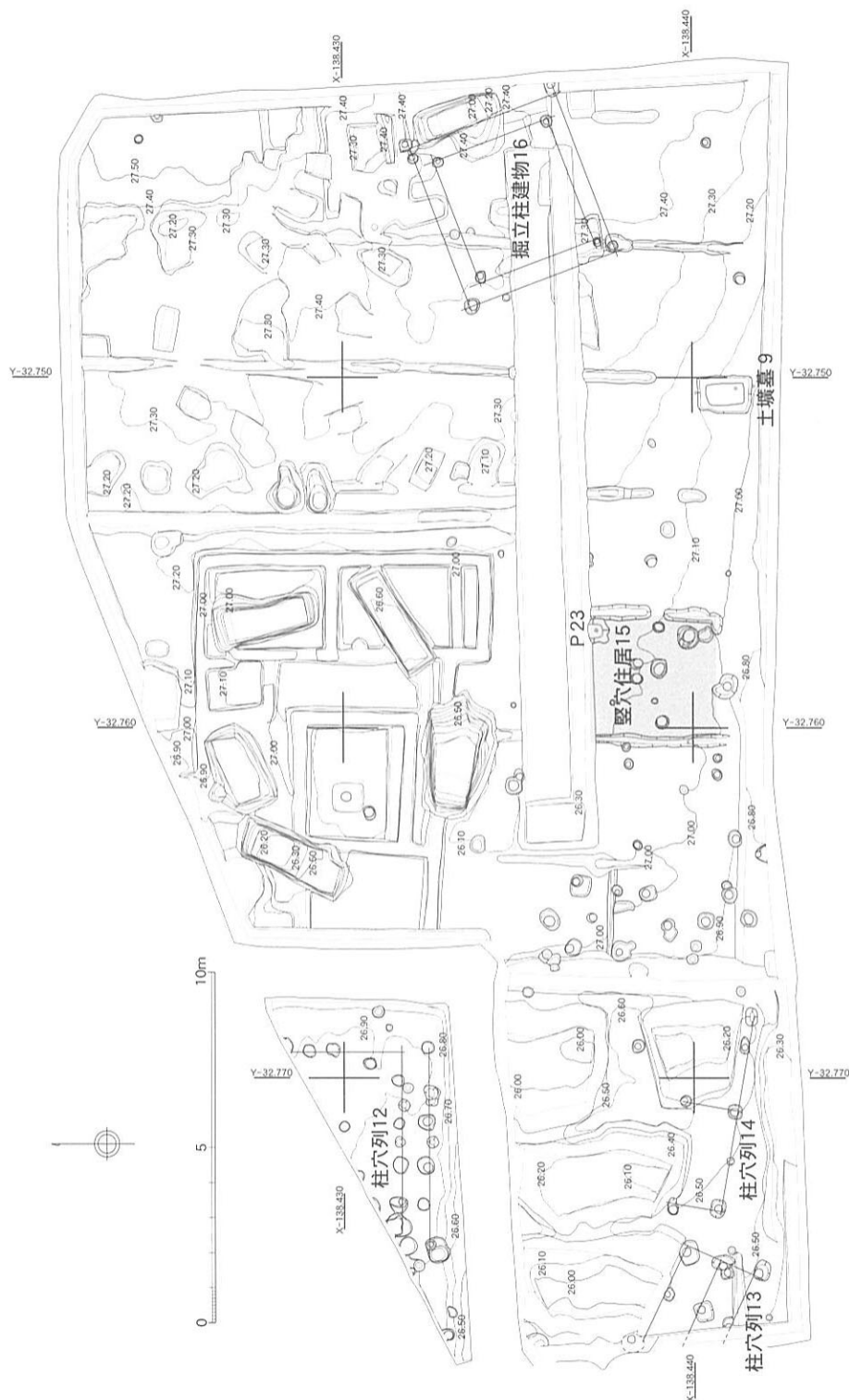
- ・赤色シルトの地山を足がかりに造成した古代の平坦面上で大形掘立柱建物を5棟検出した。大形掘立柱建物群の存続時期は掘方より出土した土器や周辺の遺構出土の土器群より飛鳥～奈良時代と推定される。
- ・大形総柱掘立柱建物群の西側では東西の配置をとる掘立柱建物を4棟以上検出した。この建物群の廃絶時期は遺構より出土した遺物から古代後半と推定される。
- ・木炭槨を主体とする土壙墓を南斜面の端で検出した。木炭槨は太安万侶墓で代表されるように、7世紀後半～9世紀にかけて、官人の埋葬施設とみられることから、当土壙墓群の被葬者も官人層であることが予想される。ただし群をなしており、墓誌も副葬品もなく終末期古墳の立地のように独立していないことなど、高位の官人層のものとみられる埋葬施設とは相違点をもつ。
- ・古墳時代中期の竪穴住居をB1～B3区でそれぞれ4棟、B5区で1棟の13棟を検出した。またB8区にも竪穴の周溝と考えられる溝を検出している。竪穴住居は各地区の傾斜面に沿って平行に地山をカットし床面を作り出し、カットして得た床面の下側はいずれも整地土により床面を確保したとみられる。そのため、整地土側の壁溝は流失または削平により検出に至らなかったと考えられる。これらの竪穴住居は韓式系土師器や初期須恵器を出土することや竈をもつなどの共通項をもつ。（小暮）

3. C区

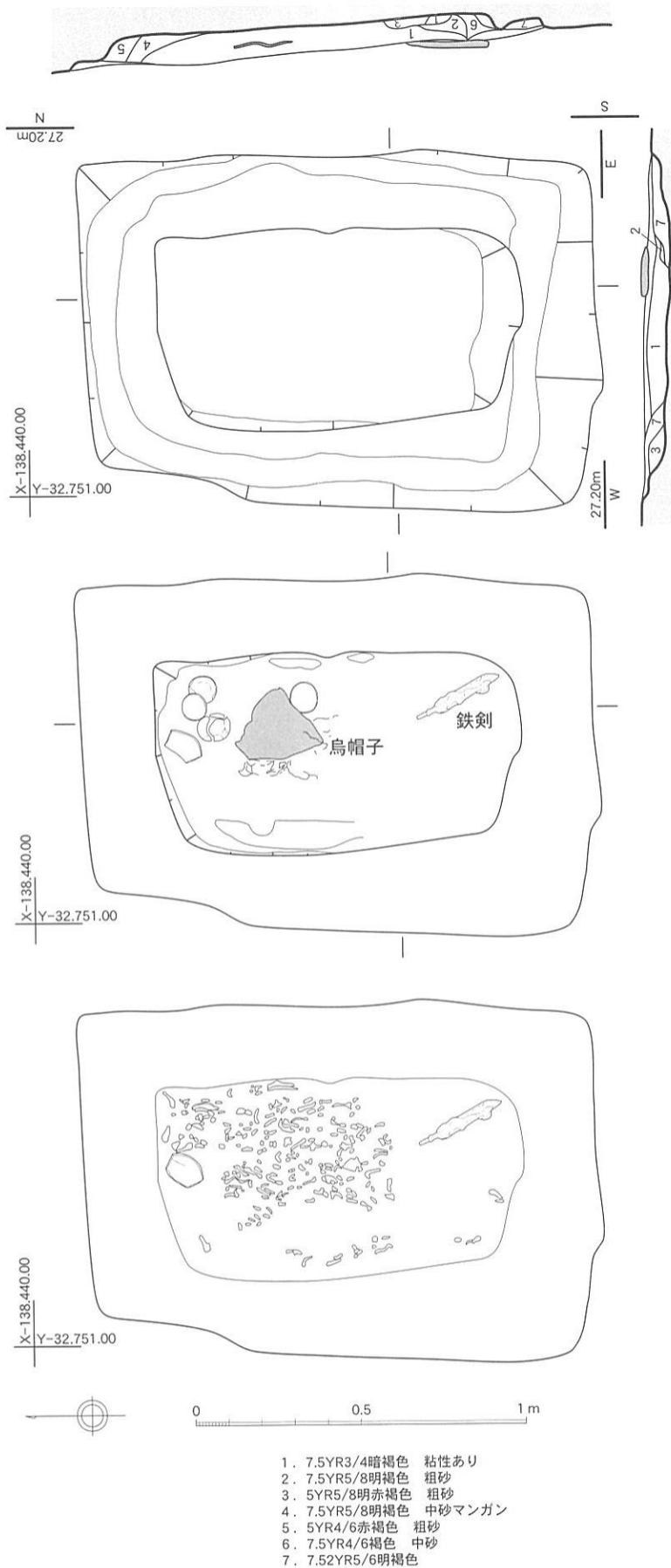
C区は今回の調査地内でもっとも高所に位置し、高宮廃寺とは谷を隔てて隣接する平坦面である。

C1区（第64図）

北半部と南半部に段差があり、北半は機械掘削後、黄色シルト下層の黄褐色砂質土の地山面に至り、ゆるやかに南側へと傾斜している。北半は宅地造成に伴う攪乱が著しく、遺構は希薄であった。南半では攪乱によって遺構の全体像を捉えることは非常に困難であったが、薄く2層の中・近世整地土が残り、



第64図 C1区 遺構配置図



第65図 C1区(1-2) 土墳墓9 平・断面図

中世～古墳時代中期の遺構を重複して検出した。(1) 中世の遺構、(2) 古代の遺構、(3) 古墳時代の遺構として記述するものとする。

2面

(1) 中世の遺構…土墳墓と柱穴を多数検出した。主に調査区の西側にまとまって検出され、古代後半から中世にかけて屋敷地であったと考えられる。

土墳墓9(第65図) 薄層の2層を掘削中、土墳墓埋土直上で鉄剣が出土した。土墳墓9は1.6m×1.1mの南北に主軸をもつ長方形の土墳であり、鉄剣、土師器皿6枚、烏帽子が出土した。烏帽子のある側を頭部と判断する。土師器皿は烏帽子の周囲にまとまっており、遺骸の頭部東側を中心に土師器皿を並べ置いたと考えられる。棺釘は出土せず、木棺の痕跡はない。B3区の土墳墓6と同じく遺骸は籠のようなものに納められた可能性がある。出土遺物は13世紀に属する。

柱穴列12～14 調査区の北西で逆L字状に並ぶ柱穴列12を検出した。出土遺物はなかったものの埋土より中世に属すると考えられる。直径50cmの円形のもの数箇所に見られ、その間に直径30cmのものが連続する。深さは30cm～50cmである。柱穴列13は一辺が60cmの隅丸方形の掘方であり柱間は1.8mで1間分を2条平行して検出した。北西-南東方向へ主軸をもつ2間×2間以上の建物の一部と考えられる。上部を削平されていたため深さは20cm不足であったが、形状や埋

土から古代後半～中世に属すると考えられる。柱穴列14は3mおきに掘方の直径50cm、柱根の直径25cmの柱穴が並び、その間に柱根の直径10cm足らずの柱穴が並ぶ。北側に対面する東柱が存在し、西北西－東南東方向へ主軸をもつ北側へ展開する建物と考えられる。掘方埋土と上層の遺物包含層から、中世に属すると考えられる。

(2) 古代の遺構…掘立柱建物を検出している。

掘立柱建物16 東端で掘立柱建物16を検出した。5m×4.5m（1間×1間）の規模である。外側に直径40～50cm、深さ40～60cmの円形のピットを4ヵ所、内側にやや小さめの直径30cm、深さ30cmの円形のピットを4ヵ所検出した。外側のピットが主柱、内側のピットが東柱または添柱と考えられ、楼閣状の建物になる可能性がある。

(3) 古墳時代の遺構…削平と攪乱が激しいものの、竪穴住居に伴う可能性がある溝を検出した。

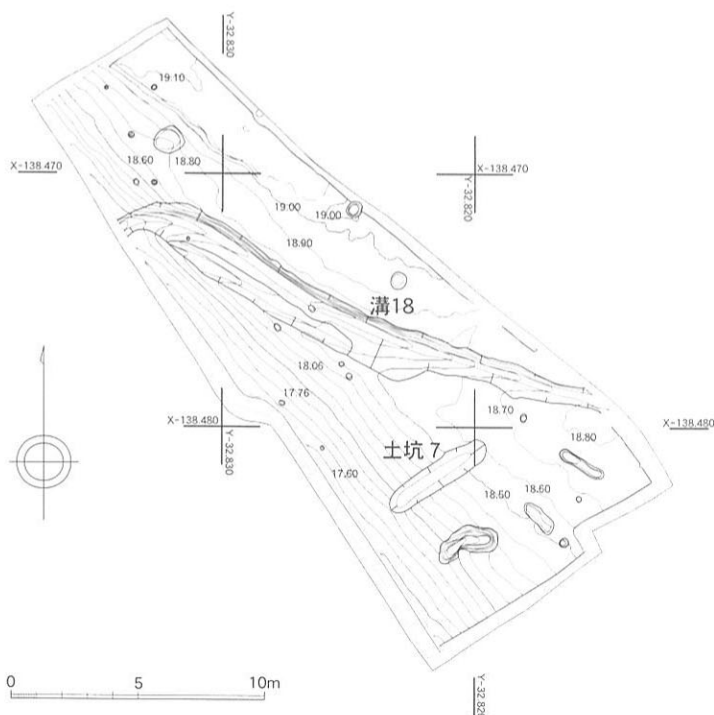
竪穴住居15 上部は削平されているものの壁溝と考えられる溝や古墳時代中期の土器が出土する柱穴を検出し、一辺が4mの竪穴住居と考えられる。主柱と考えられるピットからは土師器の小形丸底壺が1点出土した。また、竪穴住居北東隅で直径70cm、深さ40cmのすり鉢状の不整円形のピットP23を検出した。埋土はチップ状の炭と灰である。 (小暮)

C2区（第66図）

西側丘陵斜面の北半にあたる地域である。機械により表土を除去後、調査区北西隅から南東にかけて、南西に向かって下降する斜面の肩部を検出した。調査区西側の斜面上には1層から3層の堆積がみられたが、西端では遺構を検出できなかった。東側に上がるにつれ堆積は薄く、2層除去面で赤色シルトの地山に至り中世～古墳時代にかけての溝と溝状の土坑を検出した。(1) 中世の遺構、(2) 古墳時代の遺構として記述する。

2面

(1) 中世の遺構…丘陵斜面直交軸からやや西にふる北西－南東方向の溝を検出した。



第66図 C2区 遺構配置図

溝18 調査区の南東から北西にかけて対角線上にはしり、北西へ流れ落ちる溝18を検出した。溝18の幅は1.8m、深さは50cmである。溝18は丘陵斜面に直交しており、北肩部がほぼ垂直であるのに対し、南肩部は不明瞭である。底面から瓦器片が出土した。

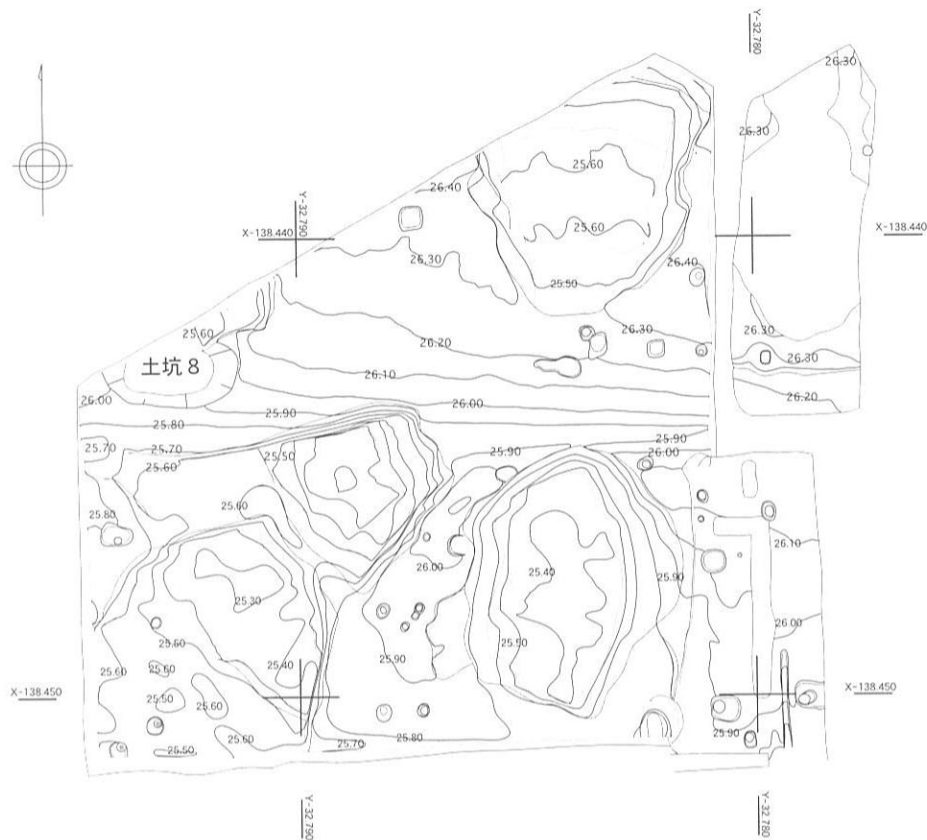
(2) 古墳時代の遺構…ゆるい落ち込み状の土坑を検出している。

土坑7 丘陵斜面に直交する溝状の土坑7を検出した。上層には多量の古墳時代中期の土師器高坏片などを含む。竪穴住居に関連する溝の底が削平後、土坑状に遺存したものではないかと考えられる。土坑7の大きさは長軸4.5m、短軸1m、

深さ25cmである。

C3区 (第67図)

調査地北辺中央であり、高宮廃寺が立地する丘陵と調査地間に走る谷を利用した谷池である。宮池の東側に接する位置である。宅地造成に伴う大きな攪乱によって遺構面は削平されていたが、1層の近・現代整地土を除去後、2層の中・近世整地土がわずかに薄層となって部分的に遺存し、これらを除去後地山の黄色シルトとその下層の黄褐色シルト上面で遺構を検出した。遺構は中世と古代に属し、削平によって全般的に深度が浅い。



第67図 C3区 遺構配置図

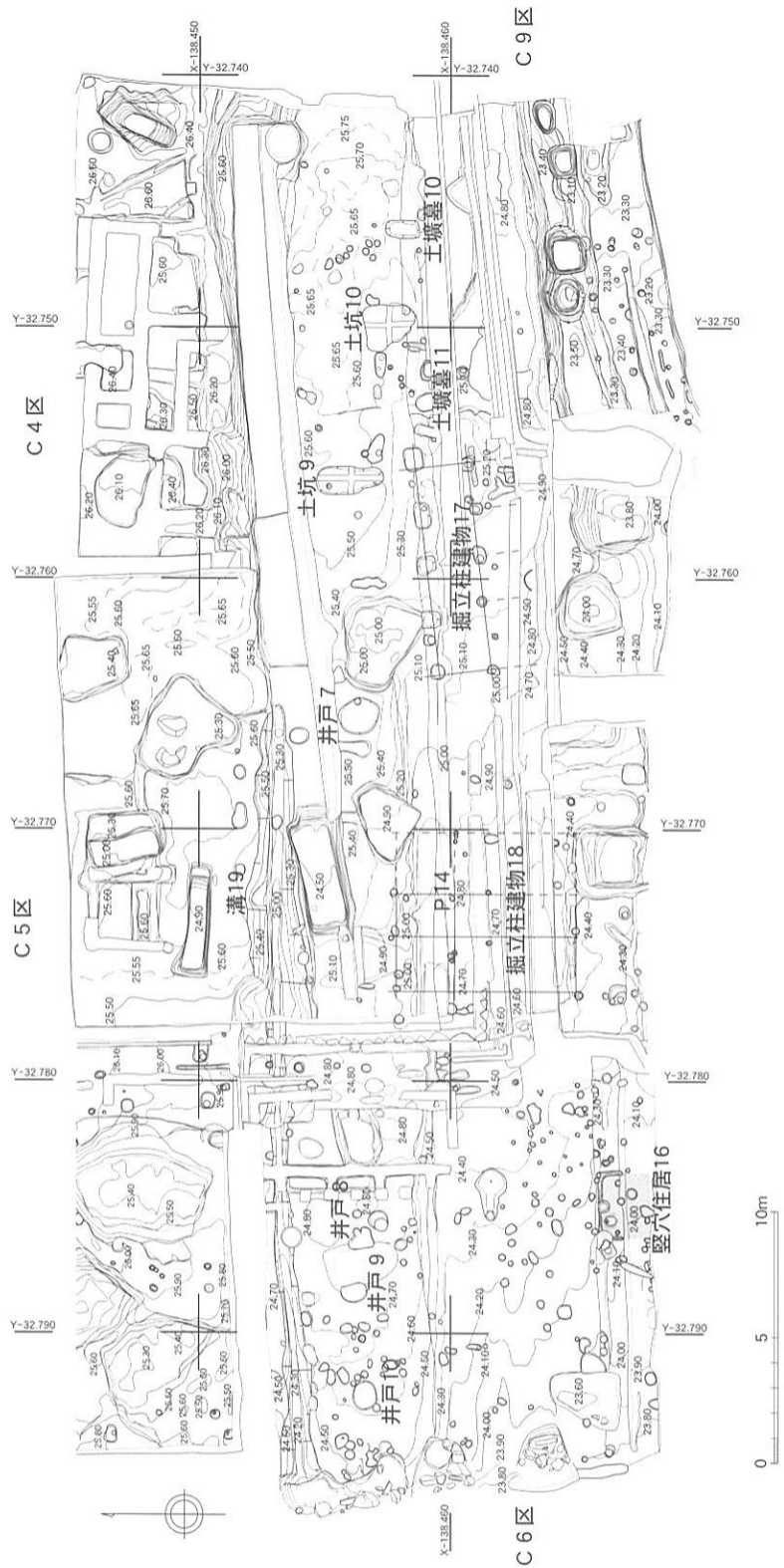
2面

調査区北西隅で土坑8を検出したほか、柱穴を検出した。隅丸方形の柱穴は一辺が約40cmである。攪乱が激しく建物の範囲、大きさを特定するには至らなかった。

土坑8 土坑8は掘削途上、埋土の茶褐色シルト中から瓦器椀・釜・甕、土師器皿の大きな破片がまとまって出土した。大きさは長軸が3m、短軸が1.5mの長方形に近い楕円形であり、深さは40cmである。底面で長方形にめぐる灰色粘土を確認し、灰色粘土からは瓦器片が出土した。土壙墓の可能性をもつ土坑が廃棄土坑として再利用されたものと考えられる。

C4・C5・C9区(東) (第68図)

C4区の北半は機械掘削後、黄色シルトの地山面に至り、建物基礎による攪乱も著しく、顕著な遺構はみられない。南半は宅地造成時の盛土を機械により除去したところ、北半より一段おちた高さで2層



第68図 C4～C6・C9区 遺構配置図

上面に至り、2層除去後地山面に至る。地山面では調査区南辺で南北方向に主軸をもつ長方形の土坑を複数検出した。また、東側で古代後半の土壙墓1基、西接するC5区、南接するC9区へのびる奈良時代の掘立柱建物を検出した。

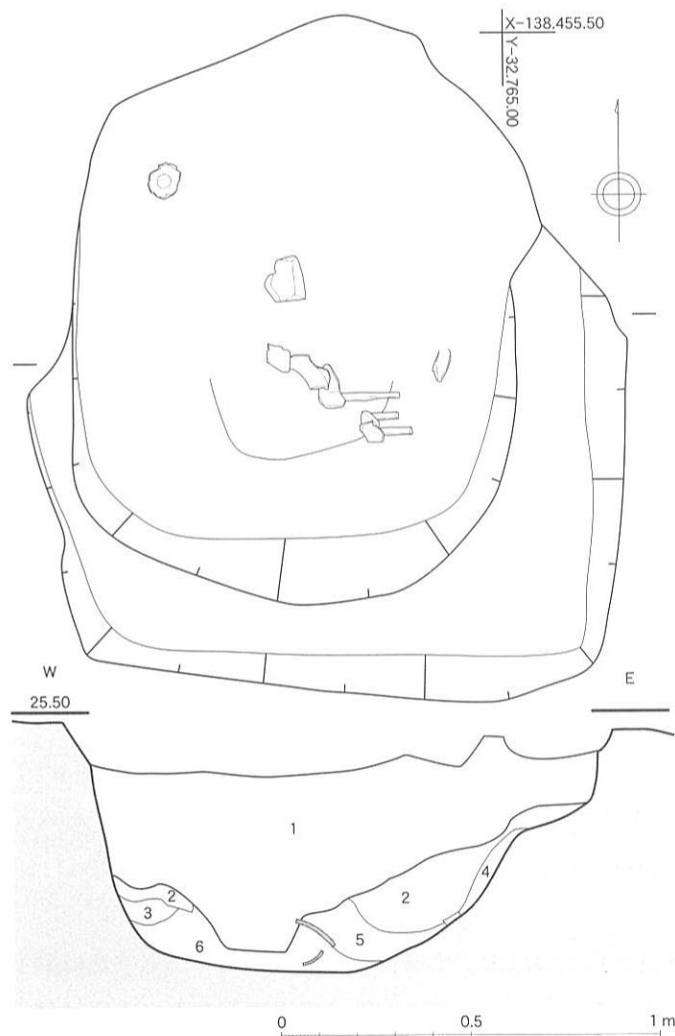
掘立柱建物と土壙墓の間には複数の不整形な土坑があり、現代のブロック擁壁と重なるために性格は明らかではない。掘立柱の抜き取り穴、あるいは土壙墓と考えられる。

C5区ではC6・C7区へと続く溝19を検出した。溝19はC4区では確認トレンチとほぼ重複し明瞭には検出できなかったが、確認トレンチの北肩部に溝19同様の埋土がみとめられることからC4区へ連続する可能性がある。

2面

(1) 中世の遺構…C5区では溝19より北側は攪乱によって遺構が検出されなかったものの、溝19より南側では中世のピットなどを検出した。C9区をはさみB3区の最も高所である北端を含む位置を南辺とする掘立柱建物が想定される。埋土からは瓦質三足釜や瓦器碗などが出土し、13世紀頃の建物と考えられる。

掘立柱建物18、ピットP14 ピットP14は溝19の南側に位置する直径30cm、深さ30cmの円形の掘方



1. Hue7.5YR4/6暗褐色土0.1~3.0cmの礫を含む粗砂
2. Hue10YR5/8黄褐色土にHue10YR4/6褐色混じり粗砂
3. Hue10YR4/6褐色にHue2.5Y6/4オリーブ褐色粘土少量含む粗砂
4. Hue10YR4/6褐色粘性あり粗砂
5. Hue10YR4/6褐色にHue7.5YR4/4褐色混じり粗砂
6. Hue10YR5/4にぶい黄褐色粘土にHue10YR4/6褐色ブロック含む細砂

第69図 C5区2面 井戸7 平・断面図

をもつ柱穴である。内部より瓦質三足釜の脚部が出土した。このピットは2mの柱間をもつ掘立柱建物18の主柱に含まれる。遺構面は攪乱によって荒れていたが3間×3間以上の建物が正方位で建てられていた可能性が高い。

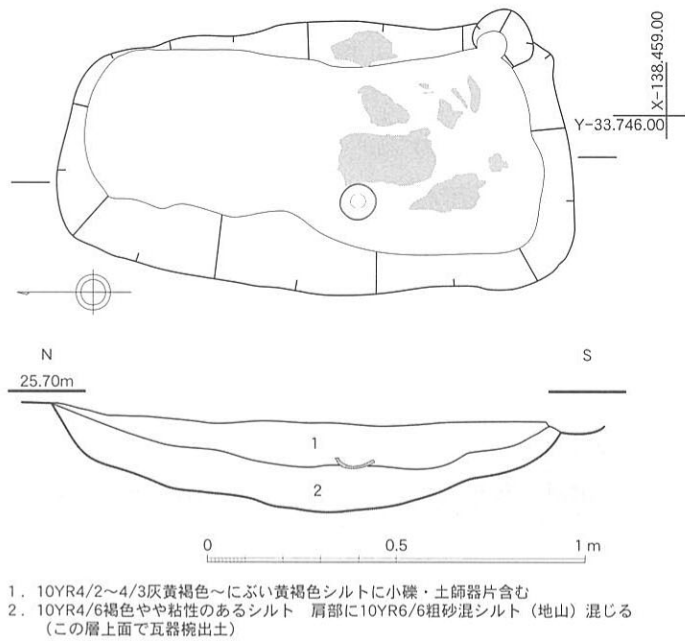
溝19 C5～C7区まで連続する溝であり、最も広く、深い場所で幅2.5m、深さ45cmである。西側の地区になる程削平のために浅くなる。出土遺物には中世の平瓦片などがある。

井戸7 (第69図) C5区の溝19の南側で井戸を1基検出した。直径が1.2mの円形であり、深さは70cmである。井戸の中からは瓦質三足釜が出土し14世紀頃に廃絶したと考えられる。

(2) 古代の遺構

土壙墓10 (第70図) C4区の東側に位置する、隅丸長方形の土壙墓であり、長軸1.5m、短軸70cm、深さ20cmである。出土遺物は平安時代後期の白色土師器皿が一枚のみであった。

土壙墓11 C4区の土坑10の西側に位置し、コンクリート壁に重なるため全形は明らか



第70図 C4区2面 土墳墓10 平・断面図

が検出され、建物に関わるものと考えられる。

掘立柱建物17（第71図） C4・C5区にまたがり、柱穴は南北で対になる柱穴を検出した。ほぼ東西に主軸をもつ4間×1間以上の規模があり、柱間は2.2mである。掘方は隅柱の可能性のある長方形のもので90cm×70cmの、隅丸方形のもので一辺60cmである。柵列の可能性も否定できない。（小暮）

C6・C9区（西）（第68図）

C区中央に位置し、1層・2層の中近世整地土を除去するとC6区の調査区北から2/3は黄色シルトの地山に至り、南側の1/3は赤色シルトの地山となる。北端ではC5区からつづく東西にはしる溝19の底部を検出した。溝の上半は近世以降に削平されたようである。黄色シルトの地山上では主として中世の遺構を検出し、赤色シルトの地山上では古墳時代～中世の遺構を検出した。

2面

（1）中世の遺構…黄色シルトの地山上では井戸や柱穴など中世の遺構を検出した。C6区の北西部から南東部には柱穴が集中する。

井戸8～10（第73～75図） 井戸8～10は出土遺物に明らかな時期差はなく、12～13世紀の間につくられている。井戸8・9は近接しており攪乱によって半分が欠損していた。井戸8・9は直径は1m、井戸10は径95cmの円形である。井戸8は深さ40cm、井戸9は50cm、井戸10は60cmであり、徐々に傾斜が下降する西側へと移動し、深く掘削したものと考えられる。

（2）古墳時代の遺構

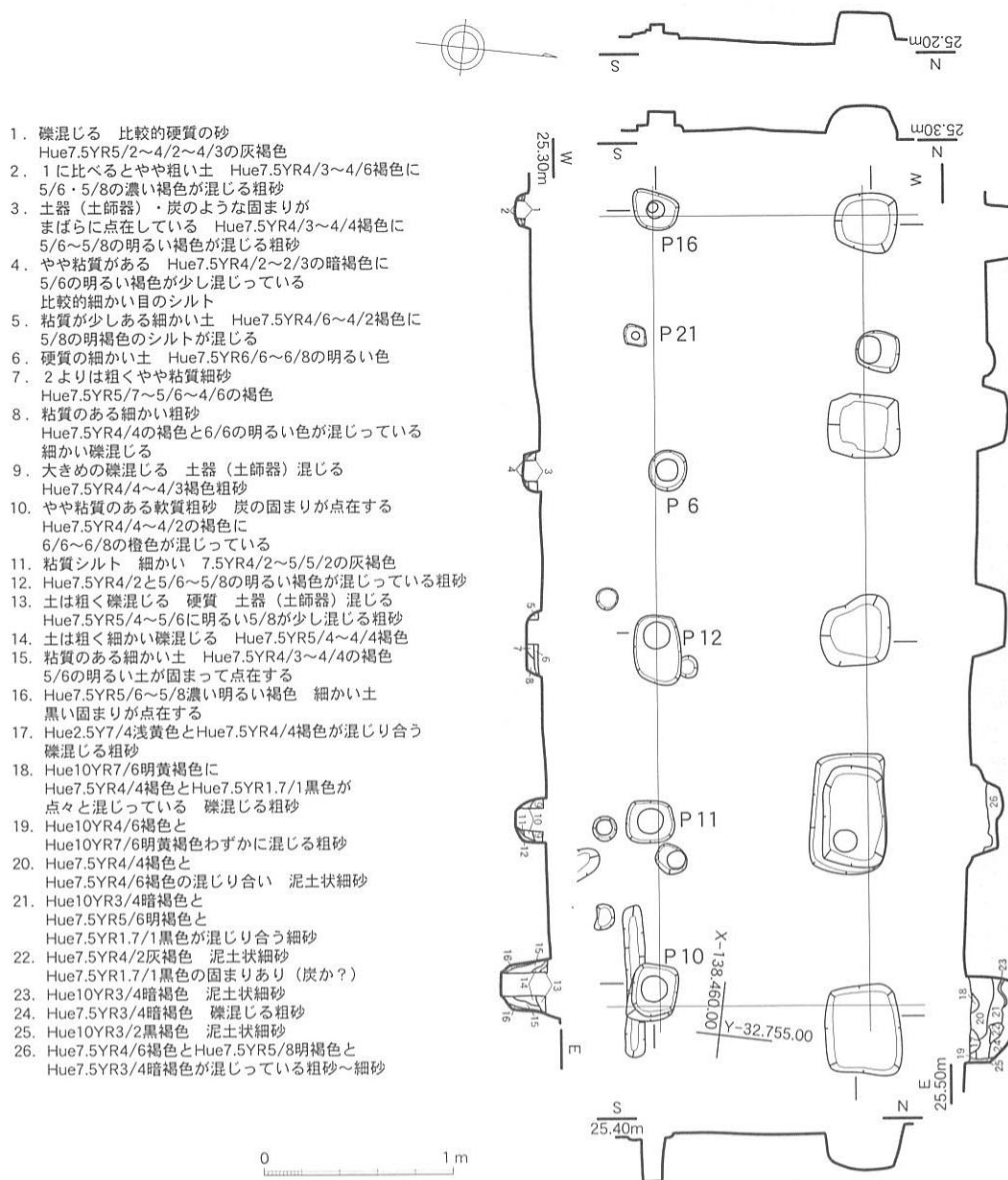
C6区の調査区南側よりC9区にかけての赤色シルトの地山上では古墳時代～古代の円形または隅丸方形のピットのほか、古墳時代の竪穴住居を検出した。遺構は主にC6区の南東隅部からC9区に集中する。

竪穴住居16（第76・77図） B3区の竪穴住居群の北側にあたり、古墳時代中期の竈をもつ竪穴住居1棟を南半分は削平された状態で検出した。北辺は約3mである。竈は北辺の西隅に位置し、支脚には

でないが、埋土の特徴から土墳墓10と同規模、同時代であると考えられる。長軸70cm、短軸70cm、深さ20cmである。埋土にはサヌカイト製の縄文時代のものとみられる有茎石鏃を巻き込んでいたが、ほかの遺物等は出土しなかった。

土坑9 長軸2m、短軸1m、深さ70cmの隅丸長方形であり、南に50cmほど突き出した形状および断面観察から柱の抜き取り穴と考えられる。埋土からは須恵器、土師器が出土し、飛鳥～奈良時代に廃絶したものと考えられる。

土坑10 長軸2.5m、短軸1.5mであるが、削平のため、深さは20cm程度しか残存しない。四隅に直径30cmの楕円形のピット



第71図 C9区2面 掘立柱建物17 平・断面図

土師器高坏が使用されていた。

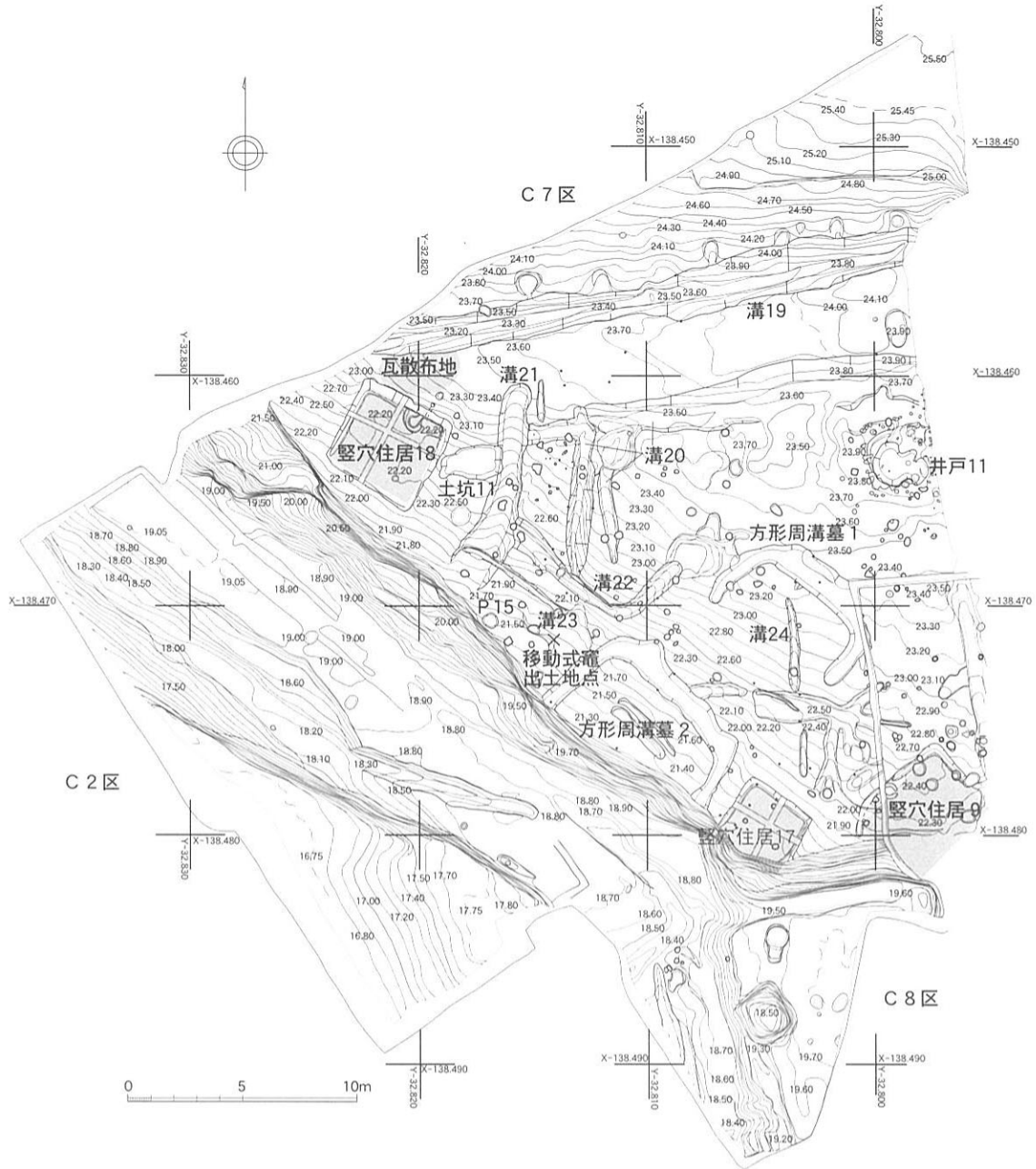
(小暮)

C7区

調査地北辺であり、宮池をはさんで高宮廃寺伽藍推定地に対面する。高宮廃寺造営の際に宮池よりC7区へと上がる斜面地で瓦窯が築かれ、本調査区北端の丘陵頂部では、大量の瓦が採集されたとの地元の言い伝えが残っており瓦窯に関わる施設の検出が予測された。しかし、北西端で瓦を多く検出したものの、瓦窯に関わる施設は検出されなかった。

調査区はC6区と同じ堆積環境であり、1層・2層の中・近世整地土を除去すると北側2/3は黄色シルトの地山に至り、南側の1/3は赤色シルトの地山となる。北端のレベルが最も高く、ゆるやかに南西方向へ下降し、段丘崖となって急激にC2・B3区の南段へと落ちる。

2面において中世、古代、古墳時代、弥生時代の遺構を検出した。



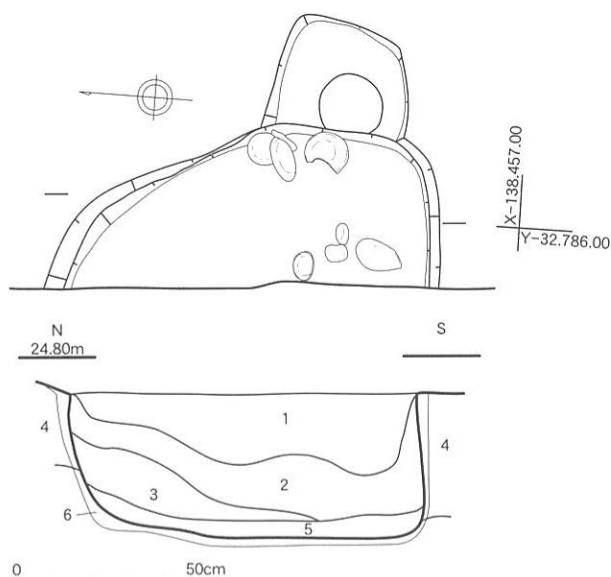
第72図 C2・C7・C8区 遺構配置図

2面

(1) 中世の遺構…中世の遺構は溝、井戸、ピットなどを検出した。前述した溝19がC6区より続き、東西に流れる。これに平行して溝20が東西に流れ、これに直交する溝21が南北に流れる。

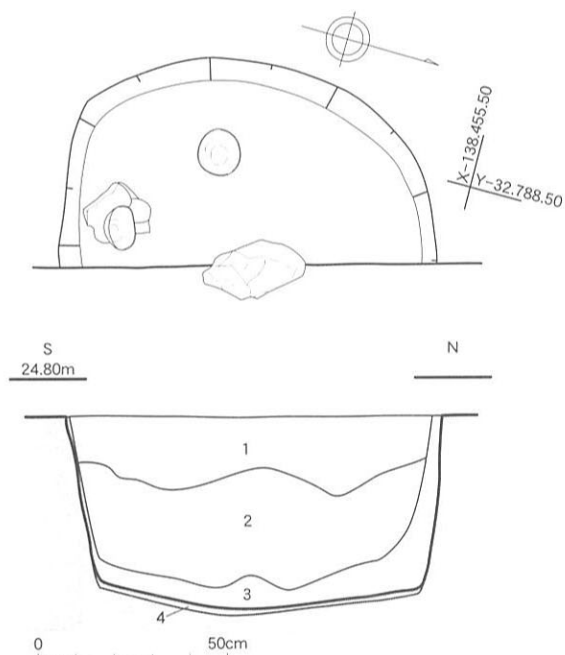
溝20・21 溝20は溝19の南側に平行して流れ、溝19と同じ幅、深さの幅2m、深さ20cm～30cmであることや、削平によって肩部が明瞭でないことから、溝19に先行して存在していたが、屋敷地の北側への拡張などに伴って廃絶した可能性が高い。南側にほぼ直角に曲がる2条の小溝が南流する。溝21は溝20より用水を南側へ引く。埋土からは瓦器片などを検出し、中世の屋敷地の区画溝と考えられる。溝21は幅広く深い部分で幅2m、深さ10cm、溝22は幅1m、深さ10cmである。溝21では長さ22cm程度の人間の足跡を検出した。

井戸11 溝20の南側の調査区東端で検出した。現代の攪乱によって残存状況は良くないものの、底部



1. 遺物包含層 地山ブロック入る Hue7.5YR4/3 砂質土 土師器・瓦器片含む
2. マンガン入る Hue7.5YR3/2マンガン 土師器・瓦器片含む
3. 灰色 N/5~Hue7.5YR6/8 縞状に重なる土師器・瓦器片含む
4. 粘質シルト 色が5と同質だが褐色化している Hue7.5YR6/3
5. Hue2.5Y7/1 粘土 大礫含む
6. 灰白色粘土Hue2.5Y8/1

第73図 C6区2面 井戸8 平・断面図

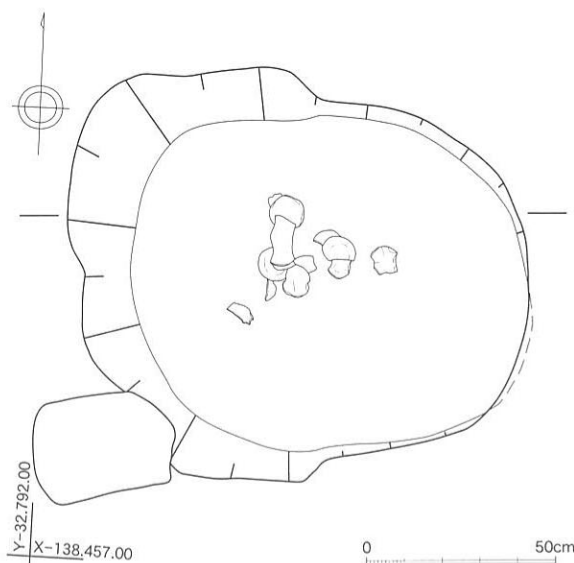


1. 地山ブロック入る (白礫粒含む 土師器・瓦器片混じる) 粗砂~礫 Hue7.5YR4/3~5/1
2. 地山ブロック入る (白礫粒含む 土師器・瓦器片混じる)+炭 微砂~粗砂 Hue7.5YR6/1
3. 地山ブロック入る (炭混じる) 粘土 N6/
4. 白色微砂 N8/

第74図 C6区2面 井戸9 平・断面図

では竪穴住居18を検出した。竪穴住居9・10は南向きの斜面に立地するが、竪穴住居17・18は丘陵の西端部に立地するため、それぞれの地形に合わせて軸をふる。また溝23も竪穴住居にかかわる周溝となる可能性がある。

竪穴住居17 (第78図) C7区の南端部、B3区竪穴住居9の西に位置する。一辺が3.5mのやや小さ



第75図 C6区2面 井戸10 平・断面図

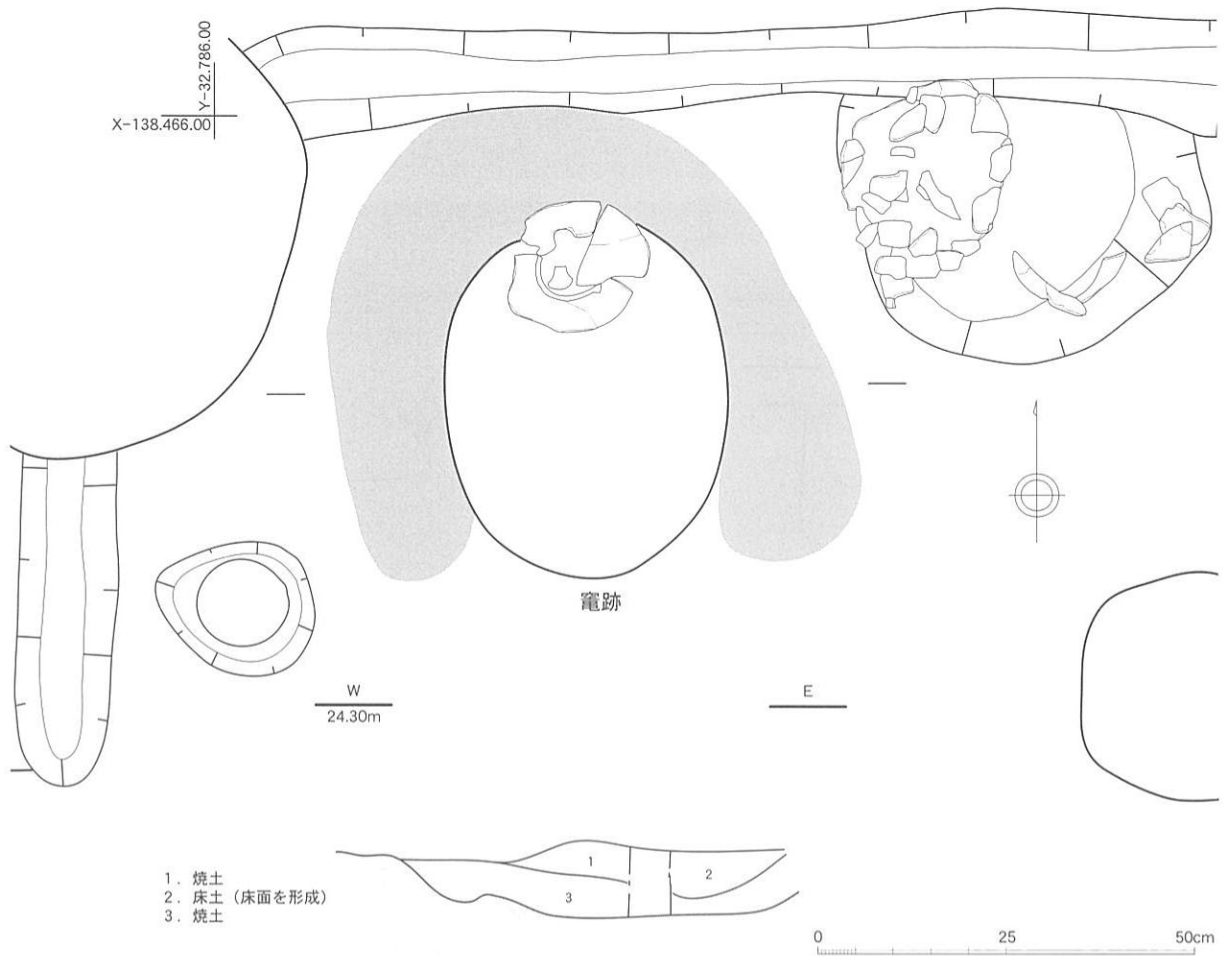
で直径1m、深さ40cmの井戸である。周囲に放射状の柱穴が多数残り、柱穴の埋土から瓦器片が出土していることから中世の井戸と考えられる。

(2) 古代の遺構…調査区北西端で瓦の散布が認められた。

瓦散布地 2m×2mの範囲で瓦が散布していた。後述する竪穴住居18の上部にあたり、竪穴住居廃絶後にできたくぼみに廃棄されたような出土状況であった。瓦は平瓦が主体であり、格子叩きを有するものも認められ、瓦の種類はB1区2面ピットP7出土の瓦と同一系統である。ほかに須恵器甕体部片が出土し、飛鳥~奈良時代に属すると考えられる。完形のものではなく、小さな破片が多く、火を受けたものがみられる。瓦窯で一般的に出土する焼成時の焼け歪みや癒着などがみられる遺物は検出されていないことから、周囲に存在した建物の廃絶に伴う遺物であろうと考えられる。

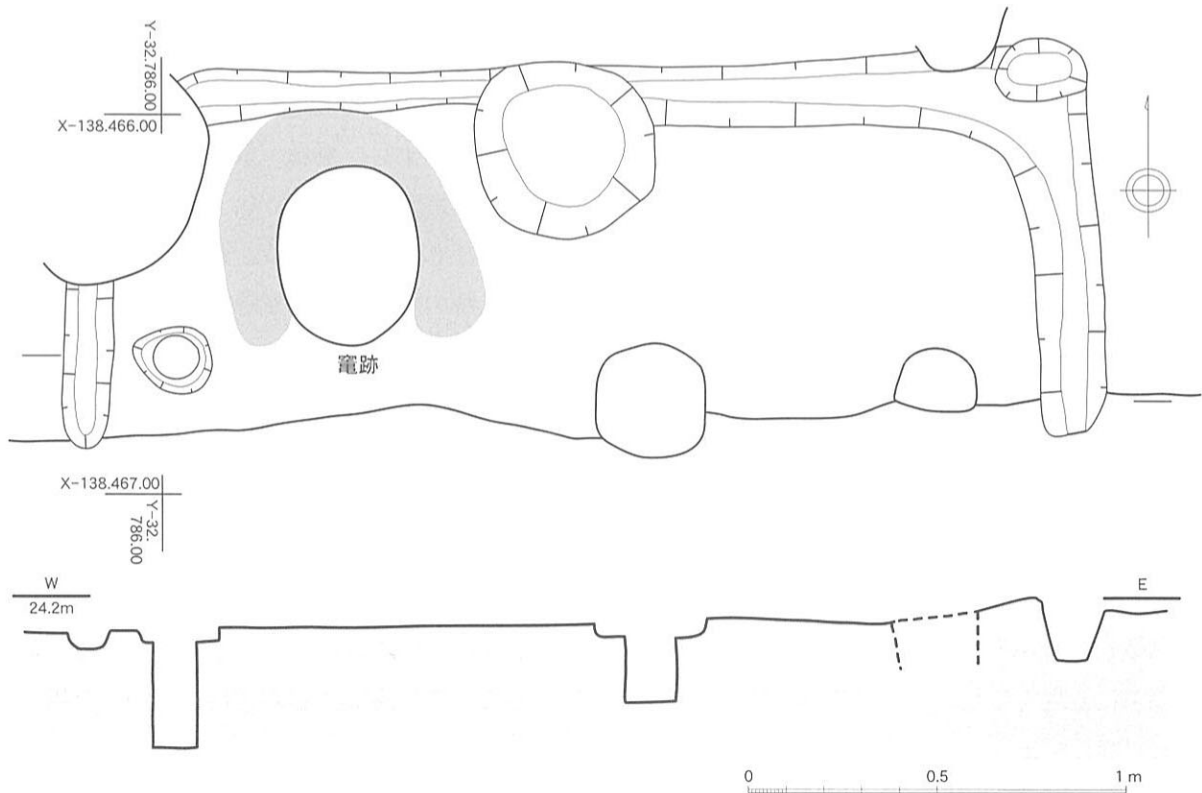
(3) 古墳時代の遺構…丘陵の端部にあたる黄色シルトの地山の傾斜面において、B3区の竪穴住居9・10の西に続く竪穴住居17を検出した。後述する方形周溝墓を避け、前述した瓦散布地の下部

(小暮)



竈断面図

第76図 C 6区 2面 竈穴住居16平面図、竈平・断面図

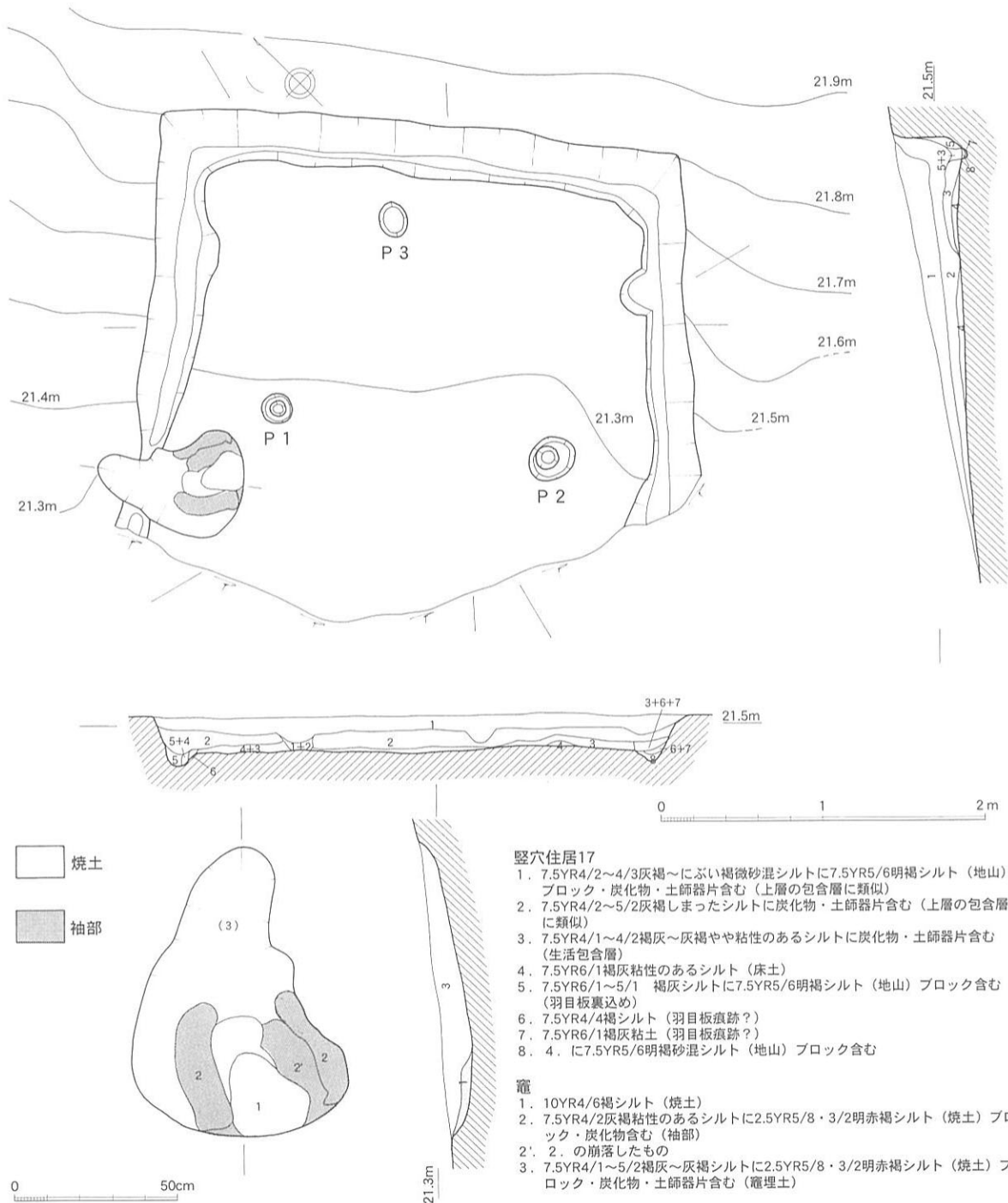


第77図 C 6区 2面 竈穴住居 16 平・断面図

い竪穴住居である。南側を斜面によって欠損していたが、炭だまりの痕跡より、竈は西南隅につくられていたと考えられる。埋土からは古墳時代中期の土師器高坏などを検出した。

北東から南西へとゆるやかに下降する斜面において北東・北西・南東辺を検出した。ほぼ北東-南西方向に軸をもつ平面方形の竪穴とみられる。埋土は、灰褐色シルトであり、須恵器、土師器が出土した。床土は褐灰色シルトであり、やや粘性をもつ。竪穴住居北半および東半には、床土上に炭化物、土師器片を含む生活包含層とみられる褐灰色シルト層が層厚5cm前後でひろがり、竈周辺には床土と生活包含層が混在した状態でひろがる。

北東辺3.2m、北西辺2.6m、南東辺2mである。北東辺の壁高は50cmである。床面は北東辺から南



第78図 C7区 竪穴住居17 平・断面図

西へ2～2.8m、ほぼ平坦に検出した。床面では壁溝、ピット、竈を検出した。

壁溝は、幅23～40cm、深さ5cmで、底部に小穴はみとめられない。北隅部から南西へ80cm、東隅部から南西へ80cmの相対する箇所壁溝の幅が40cmとふくらむ点が興味深い。北東辺では壁際にそって基盤土ブロック土を含む褐灰色シルトがみとめられ、羽目板の裏込め土となる可能性が考えられる。壁溝が幅広く検出されるのは、羽目板の裏込め土が崩落した状態で竪穴が埋積しており、当初、竪穴を設ける際の掘方を検出しているためと考えられる。

ピットは、3カ所を確認した。ピットP1・P2は掘方の直径20～30cm、柱痕の直径10～14cm、深さ30cmであり、支柱穴とみられる。ピットP3は直径20cmの浅いすり鉢状であり支柱穴と判断するには至らない。

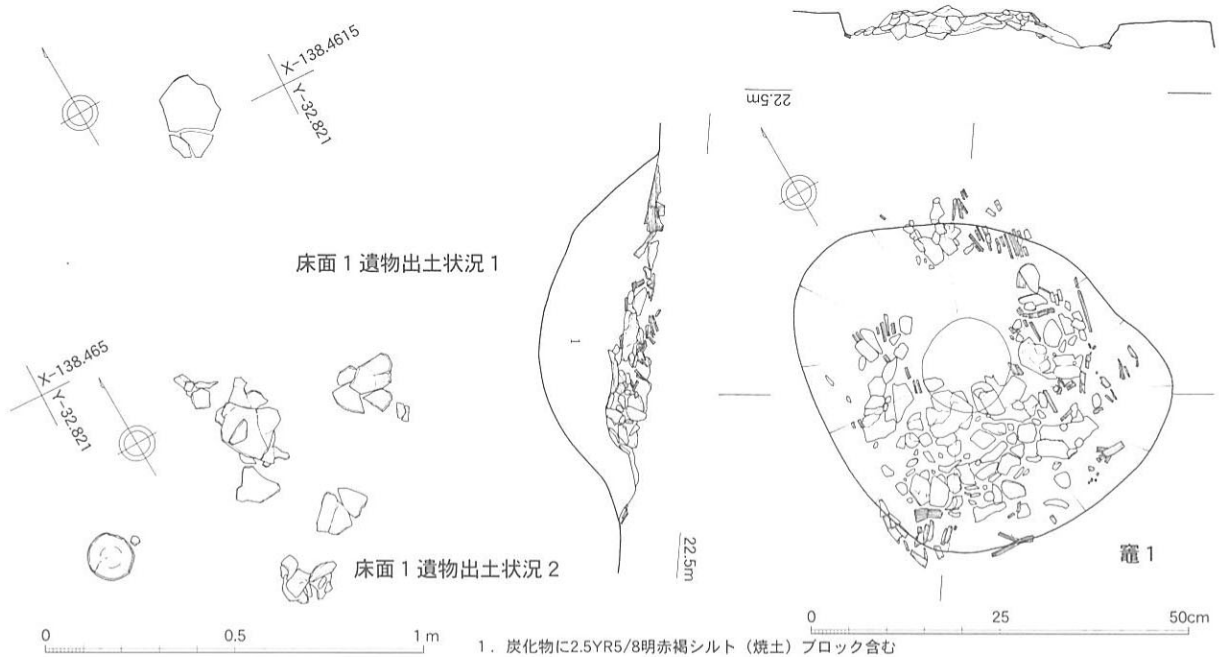
竈は、北西辺、北隅から2.2m南の箇所に位置する。幅68cm、長さ90cm、深さ9cmの土坑状に検出されたものであり、底面は竪穴外部へ向かってゆるやかに上昇する。端部は煙出部になるものとみられる。手前には焼土が長径27cmの長円形に、焼土の両側には灰褐色シルトに焼土ブロック、炭化物を含む層がひろがる。焼土は竪穴基盤土に貼り付く状態であり、焚口部の下部にあたるもの、その両側の層は袖部にあたるものと考えられる。古墳時代中期に位置づけられる。

竪穴住居18（第79～81図） C7区の西部、C7区竪穴住居17の北西約20mの地点に位置し、それとは軸方向がほぼ同じである。また、双方の住居間には、弥生時代中期の方形周溝墓があり、これらを避けて竪穴住居を構築したものと想定される。この竪穴住居は、上層、下層と2回の生活面をもつ。上層の生活面では東辺の中央部付近に竈をつくっていた。竈の底部はチップ状になった炭に二次焼成を受けた土師器高杯の細片がチップ状になり、びっしり詰まっていた。上層（床面1）では東壁に整地土が埋まっていた状況から東辺に煙道が存在したと考えられる。下層（床面2）の生活遺構は検出面から床面までの深さが50cmと残りが良く、北辺の中央部に煙道を検出した。竈の燃焼部から煙道の先までの高低差は80cmである。床面からは土師器の高杯、須恵器の甕体部片等を検出した。竈の上には掛け口に土師器の甕片で何度か補修されたのちに甕がかけられた状態で出土した。支脚には土師器の杯が二枚重ねで使用されていた。土師器の杯は初期須恵器の土釜型の杯と同じ形状であり、須恵器の手法でつくられたものであると考えられる。

さらに詳述すると、住居は北東から南西へとゆるやかに下降する斜面において北東・北西・南東・南西辺を検出しており、ほぼ北東－南西方向に軸をもつ平面方形である。埋土は、上層から炭化物を含む灰褐色シルト、基盤土類似土のブロック土、炭化物を含む褐色シルト、炭化物を多く含む褐色シルトである。ブロック土の上面で竈1および遺物のひろがりのみとめられたことから上層の本面を床面1とし、炭化物を多く含む褐色シルト上面で竈2などがみとめられたことから本面を床面2とした。ブロック土および炭化物を含む褐色シルトは床面1の整地層とみられる。

北東辺4.4m、北西辺3.8m、南東辺4.4m、南西辺4.3mである。北東辺の壁高は床面1では40cm、床面2では70cmである。

床面1では竈1を検出し、遺物のひろがりのみとめられた。壁溝は後述するように断面観察において床面1からの掘り込みのみとめられたが、平面ではこれを明らかにすることができなかった。西隅部から南西辺にかけては、床面1の基盤土であるブロック土が後世の流出のためか薄層となり斜面下にあたる南西辺ぞいでは遺存しないため、床面1のひろがり、北半から東半にかけての部分であり、南西部は遺存しない。



第80図 C7区 竪穴住居18 床面1 遺物出土状況、竈1 平・断面図

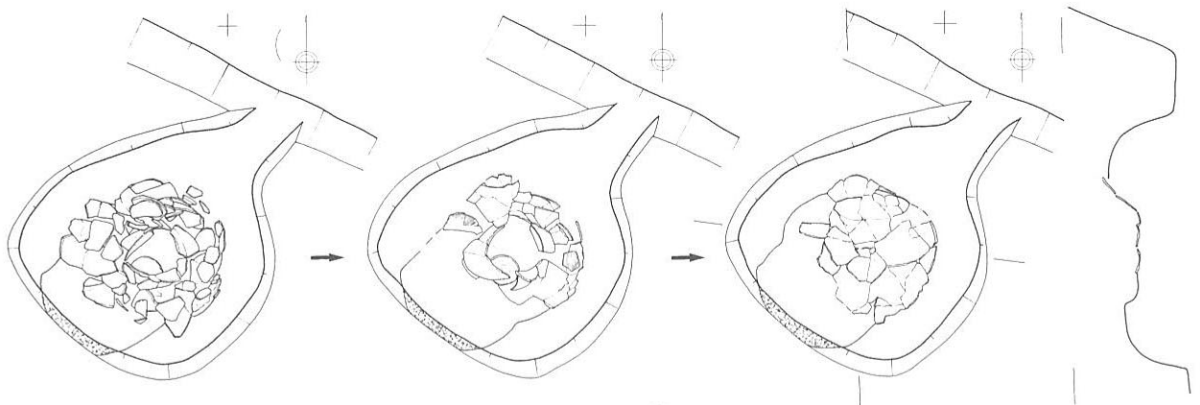
竈1は、南東辺、東隅から80cm南の箇所に位置する。北側で一部途切れる直径50cmのドーナツ状に、赤褐色の土師器片および炭化物がひろがる状態で検出した。土師器片は2～5cmの細片で、脆弱であり、同一個体片の可能性が高いが器種は不明である。土師器片および炭化物を除去後、北側にややのびる不整形の土坑を検出した。長径50cm、短径40cm、深さ12cmであり、埋土は炭化物に焼土ブロックを含むものである。袖部など構築物は検出できず、竈と断定できる検出状況ではないが、壁際であり、土坑には炭化物や焼土ブロックが埋積し火処であったことは確実である。

遺物は、北東辺中央よりやや北よりの箇所（出土状況1）と南隅部（出土状況2）で出土した。北東辺中央よりやや北よりの箇所では、土師器壺もしくは甕の体部片が出土した。南隅部では、土師器壺もしくは甕、高杯が80cm×70cmの範囲で出土した。高杯は杯部が正位で1個体出土しており、出土箇所は床面2で検出したピットP9の直上にあたる（第80図）。

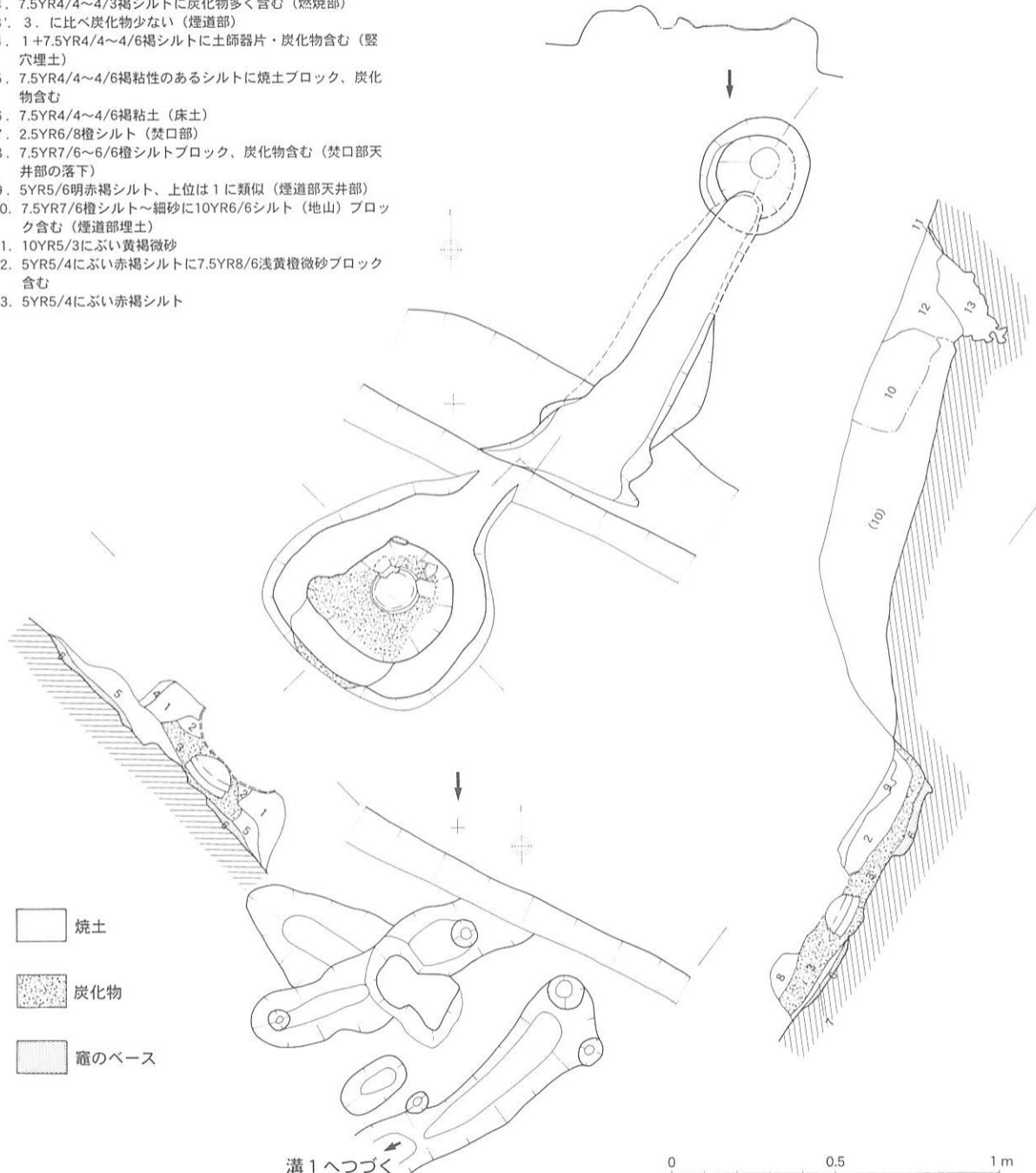
床面1ではピットP9を含めほかのピットも確認することはできなかったが、高杯の出土状況からはピットP9が床面1から掘り込まれていた可能性も考えられ、この場合、ピットP9の深さは約40cmとなり主柱穴となる可能性がある。

床面2では壁溝、ピット、溝1、土坑1、竈2を検出した。南西辺ぞいは生活包含層および貼床が遺存せず、かろうじて基盤面が遺存する状況である。

壁溝は、断面観察では床面1からの掘り込みが観察されたが、床面1において平面的に明らかにすることができなかった。床面2では竈2の両脇をのぞいた部分に壁溝がめぐる。南西辺では先述したように床面が遺存しないためか、検出されなかった。幅20～40cm、床面1からの深さ33cm、床面2からの深さ10cmで、底部に小穴はみとめられない。北東辺、南東辺では壁際にそって灰褐色シルトがみとめられ、羽目板の裏込め土となる可能性が考えられる。壁溝が残存する北東・北西・南東辺では、壁面は竪穴検出面から斜めに切り込まれ、壁溝が検出される床面より下部においてはほぼ垂直に掘削される。これは、C7区竪穴住居17と同じように、羽目板の裏込め土が崩落した状態で竪穴部分が埋積しており、当初、竪穴住居を設ける際の掘方を検出しているため壁面が斜めに検出されるものと考えられる。



1. 2.5YR6/8橙シルト (焼土)
2. 7.5YR7/6橙シルトに粗砂含む (内面の補修)
3. 7.5YR4/4~4/3褐シルトに炭化物多く含む (燃焼部)
- 3'. 3. に比べ炭化物少ない (煙道部)
4. 1+7.5YR4/4~4/6褐シルトに土師器片・炭化物含む (竈穴埋土)
5. 7.5YR4/4~4/6褐粘性のあるシルトに焼土ブロック、炭化物含む
6. 7.5YR4/4~4/6褐粘土 (床土)
7. 2.5YR6/8橙シルト (焚口部)
8. 7.5YR7/6~6/6橙シルトブロック、炭化物含む (焚口部天井部の落下)
9. 5YR5/6明赤褐シルト、上位は1に類似 (煙道部天井部)
10. 7.5YR7/6橙シルト~細砂に10YR6/6シルト (地山) ブロック含む (煙道部埋土)
11. 10YR5/3にぶい黄褐微砂
12. 5YR5/4にぶい赤褐シルトに7.5YR8/6浅黄橙微砂ブロック含む
13. 5YR5/4にぶい赤褐シルト



第81図 C7区 竈穴住居18 床面2・竈2 平・断面図

ピットは、11カ所を確認した。円形または長円形であり、直径または長径10～34cm、深さ3～36cmで、深さ10～16cmのものが多い。ピットP 4は深さ25cm、ピットP 10は深さ34cmであり、支柱穴となる可能性が考えられる。先述したようにピットP 9は、床面1の直上にあたる箇所が高坏坏部が正位で1個体出土しており、床面1のピットになる可能性が考えられる。

溝1は、竈2の東側袖部下から床面を対角線状にはしり、斜面下部へと向かう。幅6～23cm、深さ6～15cmであり、埋土は褐色シルト、下層は微砂混じりシルトである。暗渠状の排水溝とみられる。

土坑1は、東隅部で壁溝にそう状態で検出した。長方形であり、短辺20～32cm、長辺82cm、深さ40cmである。埋土は溝1埋土に類似する褐色シルトである。基盤層の礫層上面が底面となっている。埋土は均質であり遺物は含まれない。斜面上部側の竪穴住居壁面直下に位置し、排水溝とみられる溝1と掘削し礫面を底面とすることから、暗渠状の排水坑とみられる。

竈2は、北東辺、東隅から1.2m北の箇所に位置する。幅66cm、竪穴壁面までの長さ83cm、竪穴壁面から外部へと伸びる煙道部、煙出口を含めると長さ2.2mである。焼土が幅15～20cmをもってU字形にめぐり、内側中央部には土師器甕がつぶれた状態で出土した。焼土は袖部とみられる。土師器甕片は外縁で体部片が2～3重に立った状態で検出される箇所があることから、埋没する過程で自然に土圧でつぶれたものとするには疑問が残る。土師器甕の体部下半は一重であり、これを除去すると甕底部と接して土師器坏蓋が伏せられた状態で出土したことから、土師器坏蓋は支脚として用いられたものであろう。竈の断面を観察すると、竪穴住居の床土上に焼土ブロック、炭化物を含む褐色粘性のあるシルトおよび焼土による袖部がみられ、袖部内側には炭化物が堆積し燃焼部とみられる。袖部の焼土内側には焼土に粗砂を含む部分がみられ、外面の焼土に比べ焼け締まりがあまいことから、袖部内面の補修箇所もしくは被熱のためもろくなった部分と想定される。支脚とみられる土師器杯蓋は床面に接することなく燃焼部の炭化物中にあり、杯蓋内部にも炭化物がみられることから、竈設置当初より用いられたものではなく、使用途上で置かれたものであろう。燃焼部前面には炭化物上に炭化物を含む焼土ブロックがあり、焚口部天井部が落下したものとみられる。燃焼部後方の煙道部は竪穴内部から外部にかけて検出した。竪穴内部の煙道部は袖部同様、外面は焼土、内面は焼土に粗砂を含む比較的焼け締まりがあまい部分からなる。内部には炭化物がみられるが、燃焼部堆積物に比べ炭化物の量は少ない。竪穴外部の煙道部は、基盤土に煙道部埋土が帯状にのびる状態で長さ1mを検出した。竪穴壁面では幅50cm、先端にいくにつれ細くなり幅15cmである。埋土は橙色シルト～細砂に基盤土のブロックを含む1層のみであり、炭化物はみられない。検出面から埋土を掘削していくなかで、煙道部の西側では埋土が西側奥に入り込み、オーバーハングしている状態であり、天井部付近まで残存していることがわかった。断面形は天井部がやや曲面となる長方形であり、底面の幅約20cm、残存高約25cmである。底面は平坦であり、先端の煙出口に向けてゆるやかに上昇し、煙道部と煙出口の境では基盤土が5cm高くなっている。煙出口は直径33～37cmの円形に検出され、深さ30～35cmである。底面は水による浸食のためか細く埋土が入り込む状態である。埋土は上層からにぶい赤褐色シルトに基盤土類似土のブロックを含むもの、赤褐色シルトの2層であり、炭化物はみられない。煙道部埋土の橙色シルトおよび煙出口埋土の赤褐色シルトは竪穴埋土や基盤土ではみられない土であり、構造物として用いられた土が焼土には至らない程度の被熱のため変色したものである可能性が考えられる。竈本体および床土除去後の床面では、深さおよび高さが3cm前後の凹凸を確認した。袖部下は溝状に浅い窪みがみられ、東側袖部下からは竪穴住居床面を対角線状にはしる溝1がのびる。支脚とみられる土師器坏蓋の下部周辺は台状に高い。また、

直径7～10cm、深さ5cmの小穴を複数検出しており、竈構築時の支柱の痕跡である可能性が考えられる。

床面2に伴う遺物は竈2出土遺物に限られ、床面1出土遺物とともに古墳時代中期に位置づけられる。

(合田)

溝22 溝22は平面が逆L字形となる幅1.2m、深さ30cmの溝である。埋土には流れこんだ古墳時代中期の土師器などを含み、積極的に新しい様相は見当たらない為、位置的關係から竪穴住居の周溝、あるいは後述する弥生時代に属する方形周溝墓の周溝にあたる可能性が高い。

溝23 幅40cm、深さ10cmの溝を竪穴住居18と同じ方向で5m検出した。溝23の上層では古墳時代中期の土師器高坏などが密に含まれる包含層があり、竪穴住居に伴う埋土の可能性はあるが、既に削平のため床面の検出には至らなかった。直径70cmの円形のピットP15の埋土には大量の炭がチップ状になって含まれており、竈の下層の可能性はある。また、溝23の南端より1m西側の地点では底、把手のついた移動式竈を検出した。移動式竈は焚口を南西方向に向け据えられた状態であり、下面では炭化物の広がりが見られたことから、この地点で使用されたと考えられる。

(4) 弥生時代の遺構…調査区の東側中央部から南西の方向へ方形周溝墓2基を検出した。南西方向へは斜面地となるために南西辺が削平されており、平面はコの字形であり、屈曲部分が最も幅が狭く、辺の中央部分が最も幅が広い。

方形周溝墓1 北東辺は周溝の内側で4.5m、外側で5.5mであり、幅は最大1.5m、深さは30cmである。周溝の肩部からは弥生時代中期末～後期の器台および甕が出土した。

方形周溝墓2 北東辺は周溝の内側で6m、外側で7mであり、幅は最大1m、深さは30cmである。南西部を傾斜によって欠損しているが、北東辺周溝内側から1.2mの位置で周溝に平行する長さ3mの落ち込みを検出し、位置關係から主体部の痕跡とも考えられる。

(5) 弥生時代以前の遺構

溝24 溝24は幅40cm、深さ10cmの溝であり、ゆるやかな弧を描くことから円形竪穴住居の壁溝となる可能性が高い。埋土からはサヌカイト製の縄文時代の石鏃が1点出土した。

土坑11 竪穴住居18の東側で長軸2.5m×短軸1.5m、不整楕円形のすり鉢状土坑を検出した。埋土は風化した炭灰状の細砂であり、その上層からはサヌカイトの石器・剥片などが多く出土したことから、炉跡遺構の可能性はある。石器は小形のナイフ形石器、縄文時代早期～前期とみられる石鏃のほか、多くのサヌカイト剥片・チップからなる。

(小暮)

C8区 (第72図)

B区中央西側、B3区の南側平坦面より西側で更に一段落ち、C2区へとつながりに続く調査区である。1・2層を除去すると赤色シルト下層の黄色シルトが露出する。傾斜の深い西側では、2層がやや厚く堆積し、中世から古墳時代の遺物が出土した。遺構は西側で中世の瓦器碗片を掘方埋土に含むピットを検出したが、建物を想定するには至らなかった。

(小暮)

C区まとめ

C区の北側の黄褐色地山平坦面では中世から古墳時代までの遺構を検出するが、黄色シルトの地山平坦面ではほぼ中世の遺構に限られるため、調査区内の平坦面のうち黄色シルトの平坦面については、古

代後半から中世に造成された可能性が高い。調査地の位置する丘陵上ではもっとも高所で見晴らしのよい平坦部である。

- ・ C 6 区を中心に中世の屋敷地を検出した。
- ・ 中世の土壙墓を少なくとも3基検出した。古代後半以降、南斜面において南北方向軸で長方形の土壙墓が数基、築かれたものと考えられる。
- ・ 古代に属する掘立柱建物17はほぼ東西方向に2列の柱穴列が並び、北側では柱穴を検出しないことから、大形総柱掘立柱建物群に背面する塀の可能性も否定できない。
- ・ 古墳時代中期の竪穴住居18では竈の煙道部が良好に残存し、斜面に立地する竪穴住居の竈の構造を知る上で稀少な資料となる。
- ・ 古墳時代中期の竪穴住居となる可能性をもつ溝23付近で検出された移動式竈は、底部が据えられた状態で出土しており、移動式竈の使用状態を示す興味深い資料である。
- ・ C 7 区の西端は段丘崖であり、土坑11上層と竪穴住居17の北側を中心に小形のナイフ形石器、縄文時代早期～前期とみられる石鏃のほか、旧石器～縄文時代のサヌカイトの剥片を多数多く検出した。本調査区は段丘崖の突端にあたり、旧石器時代～縄文時代早期～前期の遺構・遺物が周辺に広がる可能性がある。

(小暮)

第3節 高宮遺跡（その3）の調査

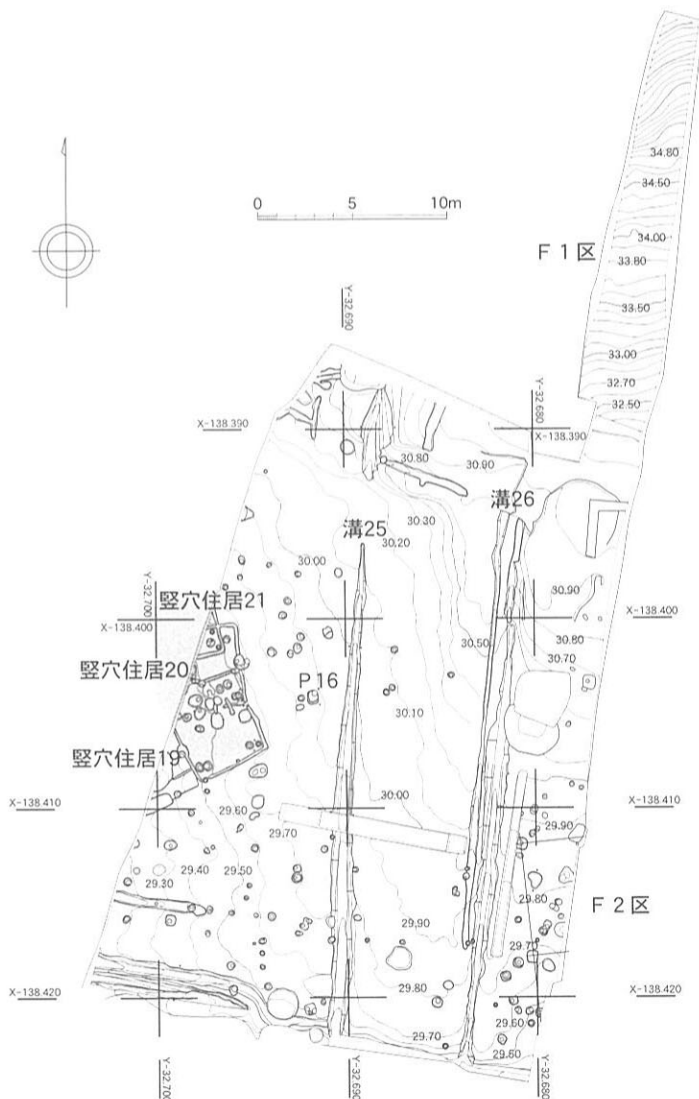
高宮遺跡（その3）の本体調査区は、平成13年度分の調査区である小路遺跡（高宮地区）と里道をはさんだ東側であり、丘陵の頂部の高所に展開する調査前の状況は、宅地造成によって削平を受け平坦部を呈していた。現代の盛土を除去すると、傾斜する部分に薄く包含層が残る他は地山となり、中世から古墳時代に至る遺構が同じ面で重複しての検出となる。また、傾斜面以外の遺構は深度がなく、削平のため消失した遺構も多く存在したと考えられる。以降、各調査区について時代毎に遺構を記載する。

1. F区

F区は今回の一連の調査区では最も高所に位置する。

F1区（第82図）

丘陵斜面地で傾斜の強い調査区である。竹藪に覆われており、盛土の下は大阪層群上部の黄褐色シルトとその下層の礫層であり、斜面地では遺構は検出されなかった。F1の地山面頂部と下端の比高差は4.6mである。



第82図 F1・F2区 遺構配置図

F2区（第82図）

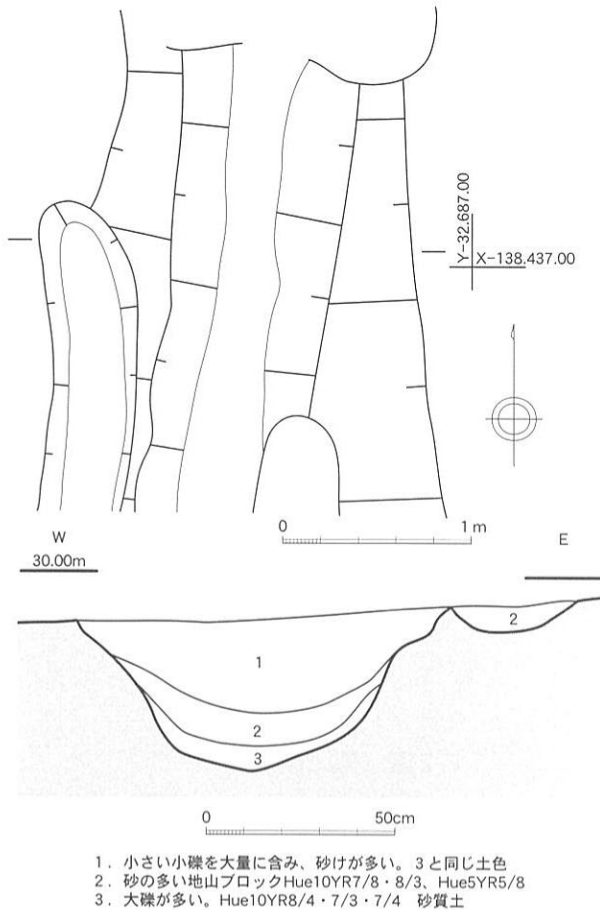
丘陵斜面地をカットして平坦面が造成されており、現代の住宅造成によって削平を受けていたものの1・2層を除去後、黄褐色地山面で遺構を検出することができた。北西側は調査区外の池の方向へ下がる斜面地である。竪穴住居3棟を含む斜面地では中世～古代のピットを検出した。また平坦面を中心とする東西の端では側溝を確認し、道路であった可能性がある。東側では奈良時代を中心とする柱穴を密に検出した。

(1) 古代以降の遺構、(2) 古代の遺構、(3) 古墳時代の遺構として記述する。

2面

(1) 古代以降の遺構…北北東-南南西方向に走る2条の平行する溝が見られた。

溝25・26（第83図） 溝25は平坦面の西側の溝であり、幅1m、深さ22cm、溝26は平坦面の東側の溝であり、幅1m、深さ25cmである。両溝は軸を北北



第83図 F 2区2面 溝25 平・断面図

東から南南西にわずかにふって南流する。溝25は調査区外の北側斜面から続いており、地山のカット面によって一度断絶し、再び出現している。埋土は地山のブロック土であり、人為的に一度に埋められている。出土遺物はほとんどなかったが、古代に属する摩滅した須恵器・土師器片をわずかに含み、中世以降の遺物は出土しなかった。2本の溝間は7mあり、その間の遺構は希薄で、中世の柱穴が数カ所存在するのみであった。これら溝の間はその掘削土を盛土し、本来、土堤状を呈していたと考えられる。

(2) 古代の遺構…古代のピットは調査区の南東側と西側にまとまっており、南東側の遺物包含層からは飛鳥時代のやや軟質の須恵器坏が出土している。調査区南東側では北北西-南南東方向に軸をもつ一辺50cmの柱穴列を検出したが、1間×1間のみであり、調査区の東側に展開していたと考えられる。また、調査区の西側でも竪穴住居を切る方形のピットが数カ所ある。

ピットP16 調査区西側では長軸80cm×短軸

60cmの隅丸長方形のピットを検出した。柱痕の上では奈良時代の須恵器坏蓋を検出し、隅柱と考えられる。ピットは削平によって浅く、建物として対をなすピットを検出するには至らなかった。

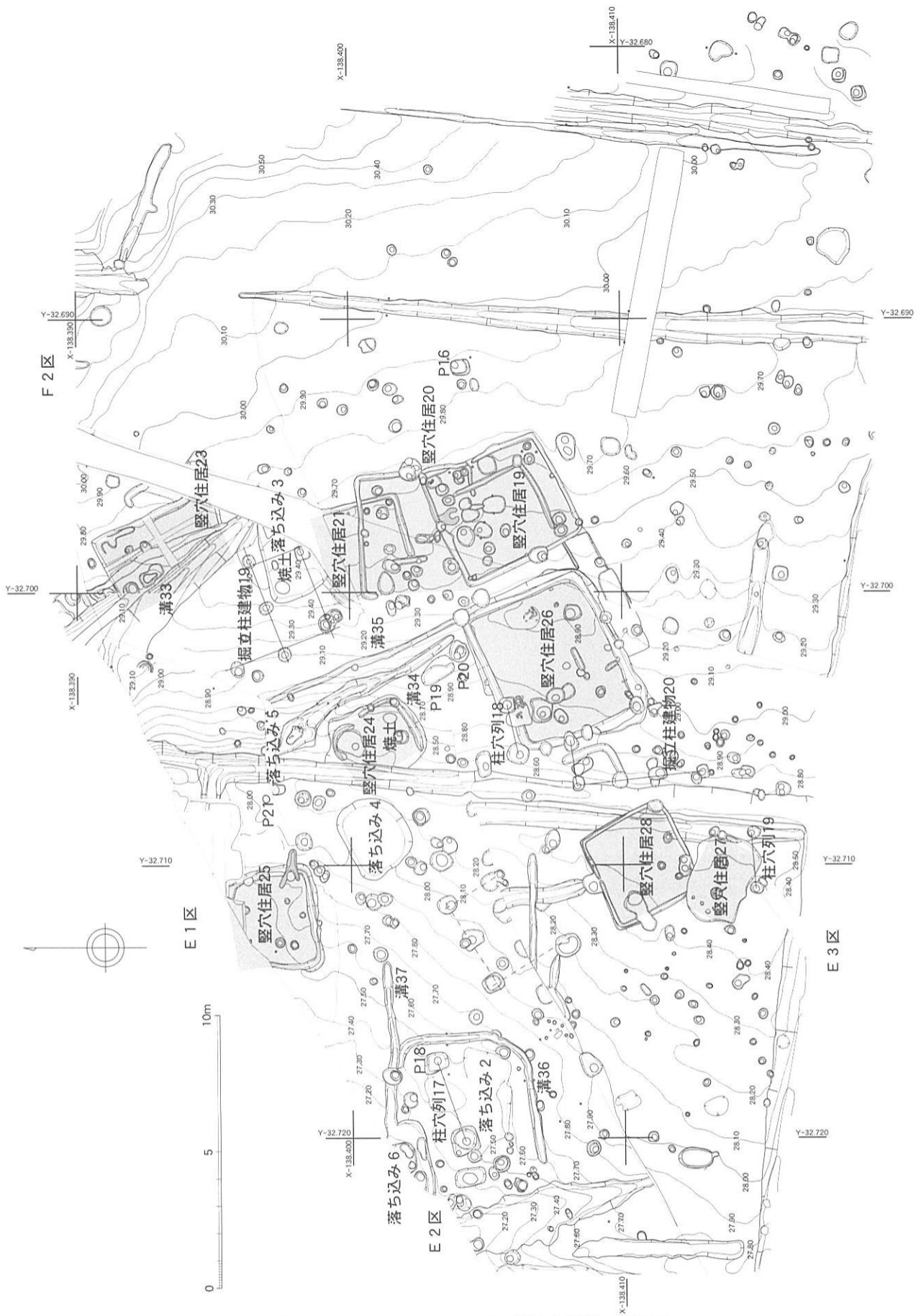
(3) 古墳時代の遺構

竪穴住居19 (第85図) 一辺が4mの竪穴住居である。竪穴19~21は重複して検出され、その中でも外周をすべて検出した竪穴住居19が一番新しいと考えられる。4隅のピットには重複が見られ、少なくとも2回以上の建て替えが考えられる。また、床土を除去後、壁溝の痕跡をさらに検出し、竪穴住居19は同一軸で1m西側に存在した竪穴を東側に作り直したことが想定される。竈は、北辺中央部に作り付けられる。床面では韓式系土器の破片や古墳時代中期の土師器高坏・甕などを検出した。また、四隅の支柱穴からも底部の丸い土師器甕などを検出した。

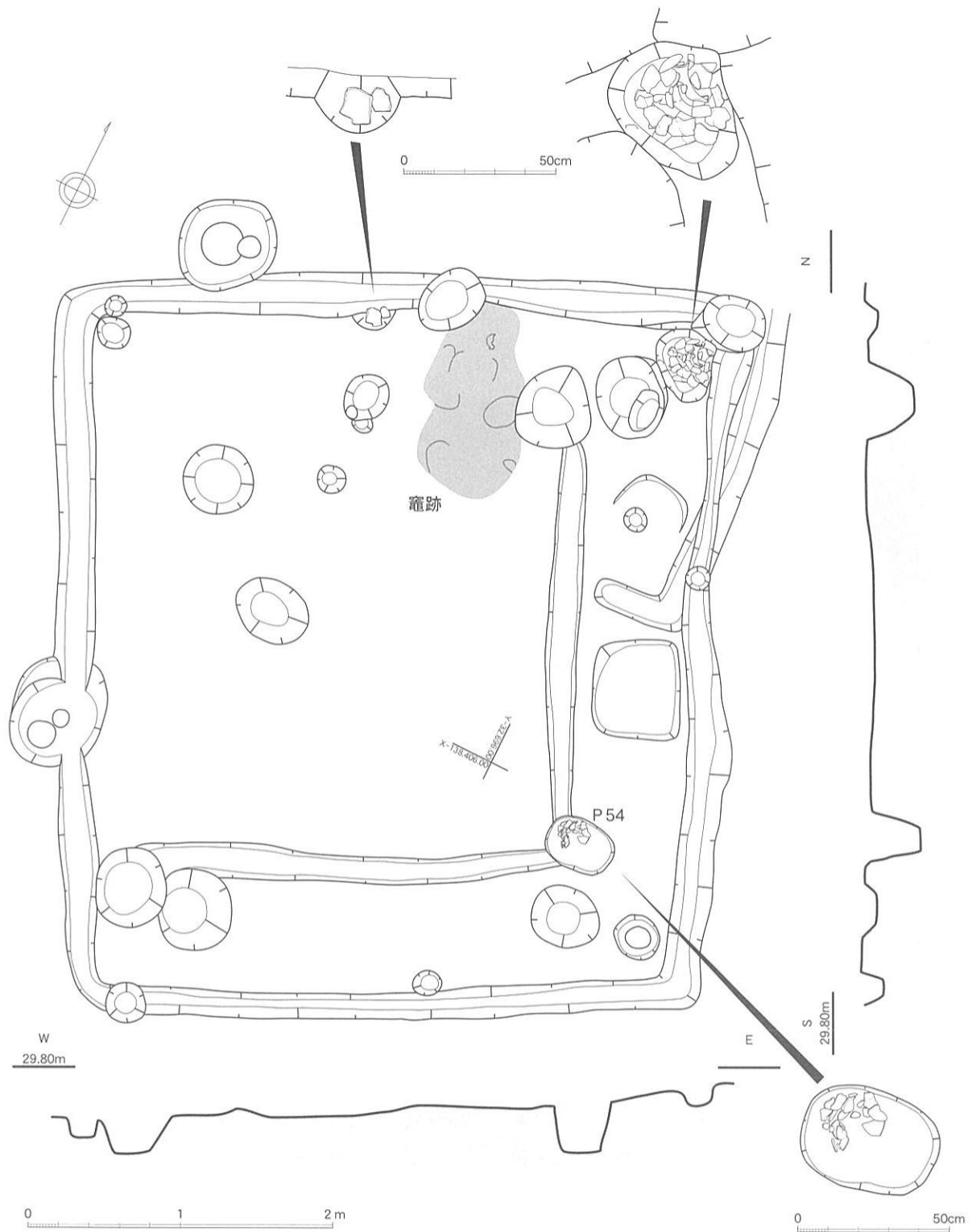
竪穴住居20・21 (第86図) 竪穴住居20は竪穴住居19に先行する一辺4.2mの方形竪穴住居であり、竪穴住居19によって南側を欠損しており、支柱や竈の位置を決定するには至らなかった。竪穴住居21は竪穴住居20に先行する東辺が5mのものである。西辺は斜面地となっており検出できなかった。落ち込み3が床面の範囲と考えられ、焼土や炭などの竈の痕跡が北辺で確認できた。

F 3区 (第87図)

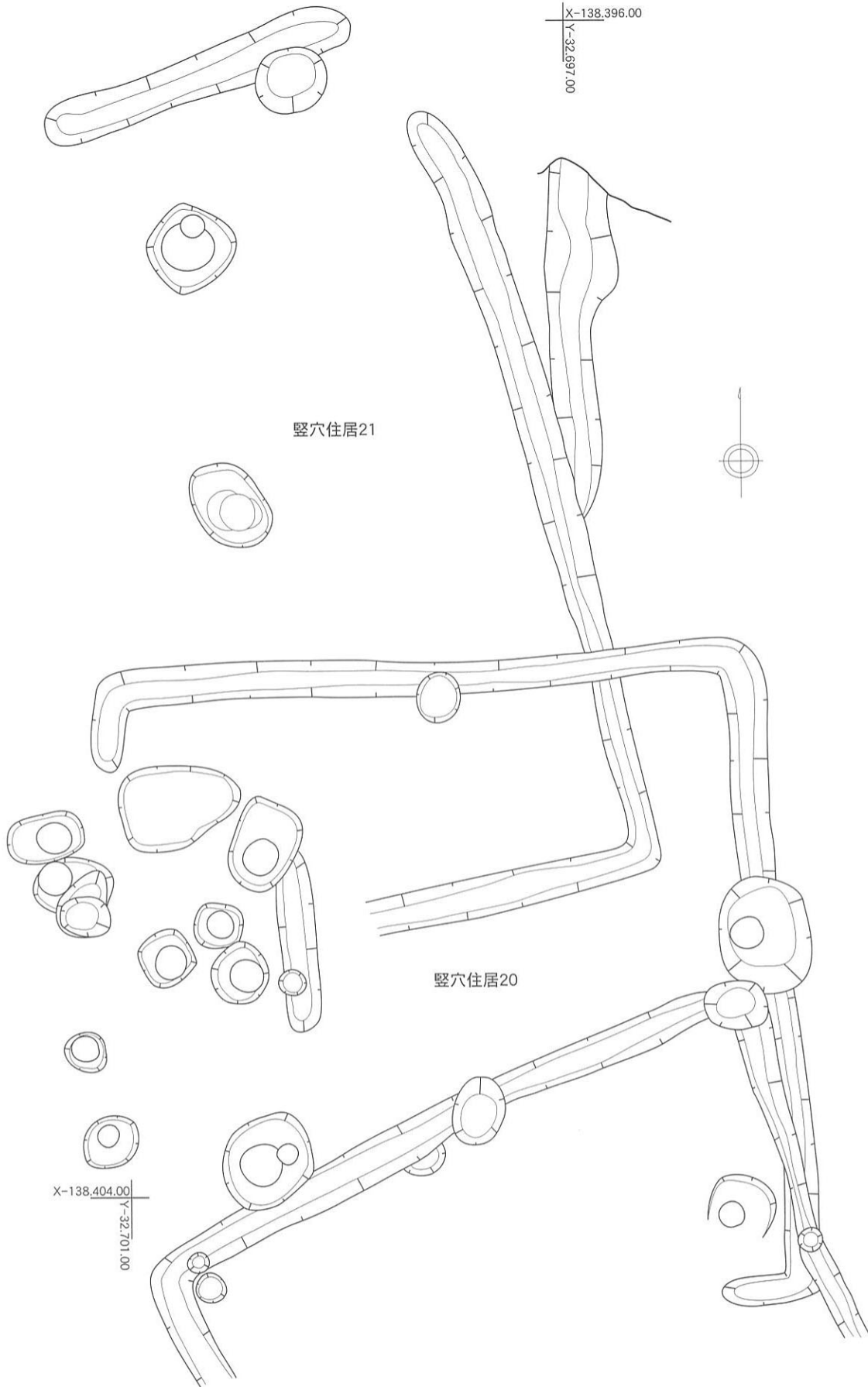
F 2区の南側の平坦面であり、F 2区とは現在の土地家屋の区画に沿って調査したため区別したものである。1層の中・近世から現代の整地層を除去したところ、現代の住宅解体に伴う大規模な攪乱によって遺構面が分断されているために建物の規模は不明であるが、F 3区の東側中央部は中世の遺構が比



第84図 F2・E1～E3区 竪穴住居群 平面図



第85図 F2区2面 竪穴住居19 平・断面図



第86图 F 2区 2面 竖穴住居20・21 平面图

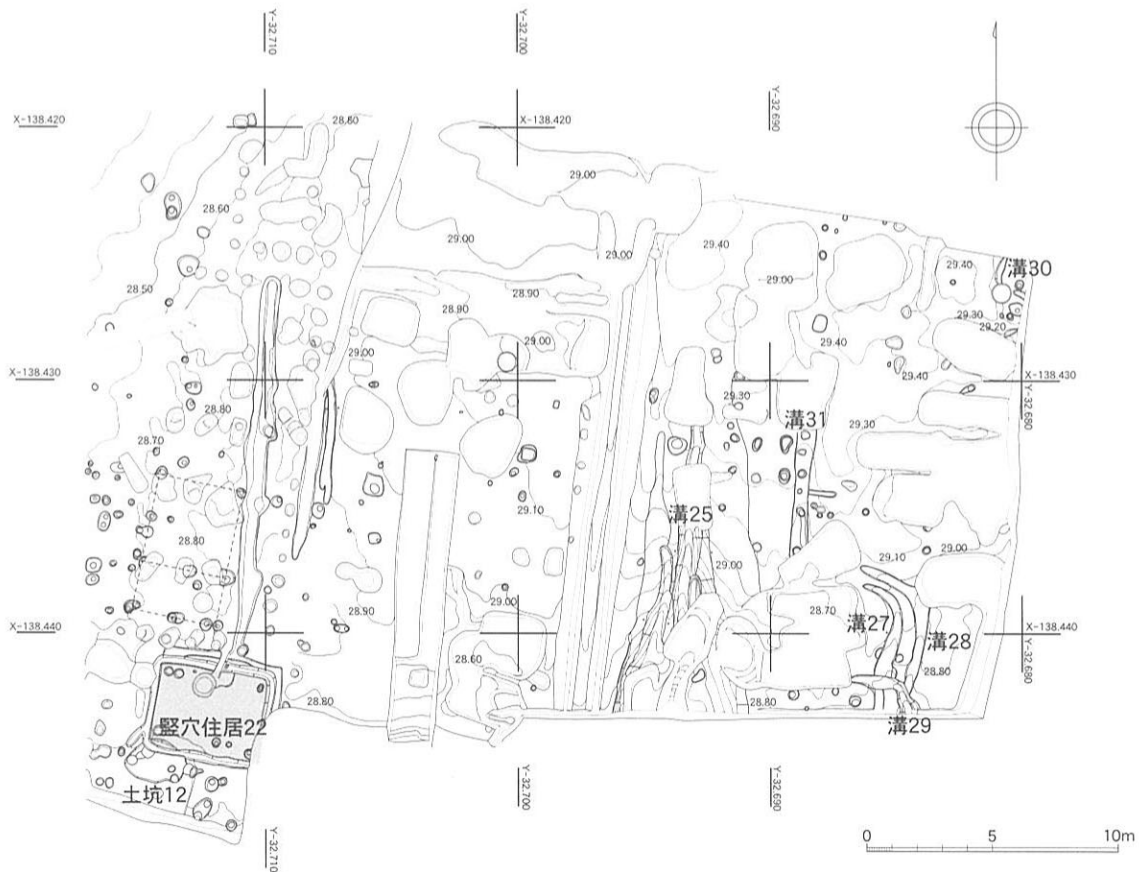
較的まとまっており、屋敷地であった可能性がある。その上層には溝31が南北に走り、中世以降は耕作地であったと考えられる。また、F2区で検出した道路状遺構の側溝である溝25の延長部、L字状に曲がる古代後半の溝27～29、奈良時代のピットと区画溝30を検出し、西側では古墳時代中期の竪穴住居22を1棟を検出した。溝25の南端は南方へ開く谷状地形へとつながっており、その埋没の過程で多数の南北方向の溝が錯綜する。

(1) 古代の遺構…区画溝と考えられるものを検出した。

溝27～30 F2区で検出した溝26のほぼ真南に古代後半以降の溝27～29が存在する。この3条の溝は、黒色土器、土師器皿片を埋土に含む溝である。溝27・28は両溝とも最大幅55cm、深さ10cmであり、埋土は明茶褐色の砂礫であった。両溝とも、北西方向よりゆるやかに逆L字形に曲がり、南西方向へと直進する。溝27・28を切って同じ形状の溝29が溝27・28より少し南側に始点をもち、同じ方向に走る。攪乱によって性格は明らかではないが、調査区南端に直径50cmの円形ピットが存在するため、雛壇造成によって地山をカットされる以前、古代の遺構面が南側の谷状地形に向かって展開したと想定すると、これを区画する区画溝であった可能性も考えられる。また、溝30は調査区の北東隅で検出した幅20cm、深さ10cmのL字形の溝である。調査区の北東隅は東に傾斜しており、奈良時代を中心とする古代の遺物を含む包含層が堆積していた。溝の内側のピットは一辺50cmの方形掘方とそれに伴う柱穴であり、溝30同様古代に属するものと考えられる。

(2) 古墳時代の遺構

竪穴住居22（第88図） 調査区の南西隅で壁溝とわずかに残る床面を検出した。5m×4mの長方形である。埋土からは飛鳥時代の須恵器坏が転落した状態で出土したが、壁溝内から古墳時代中期の土師

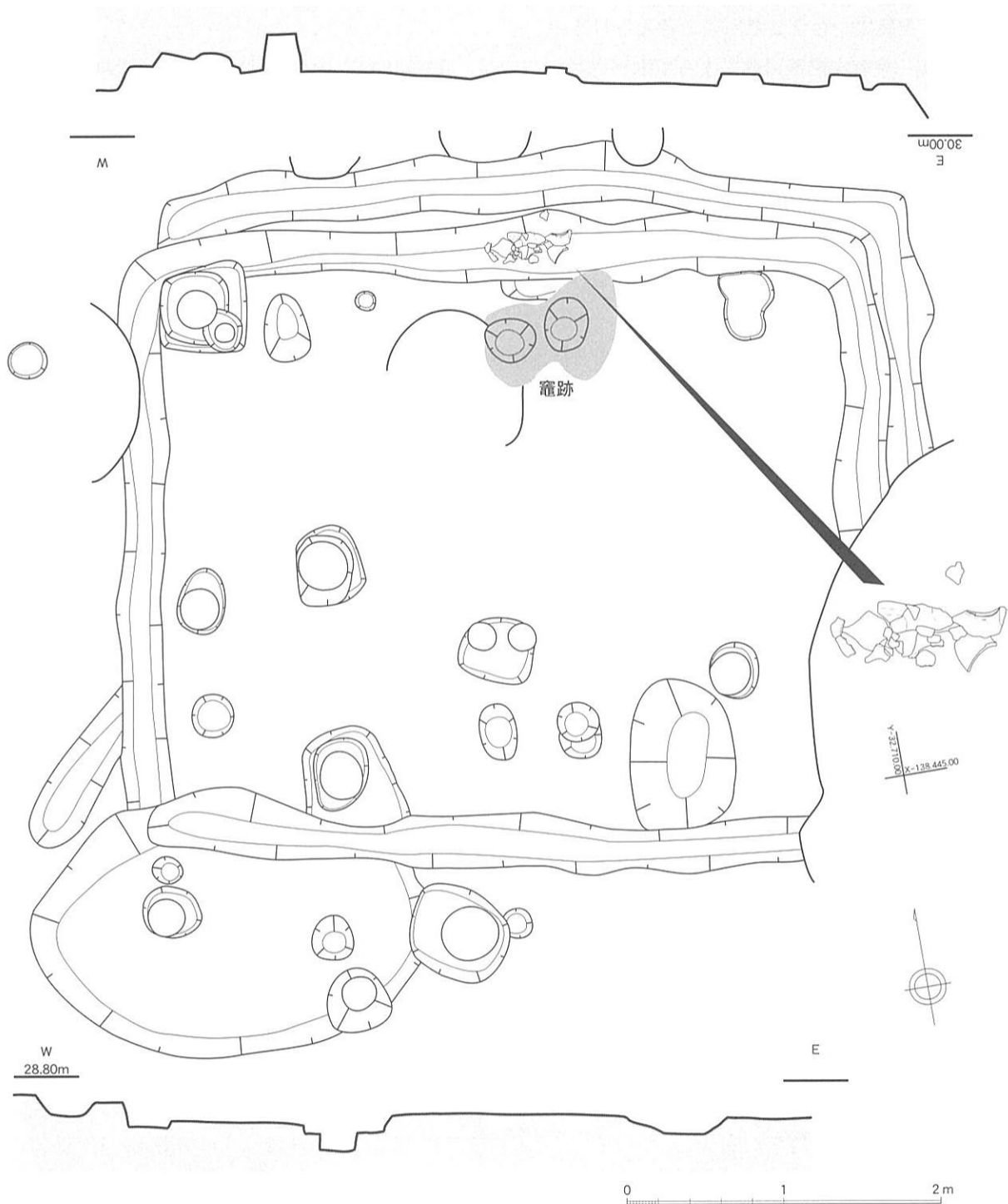


第87図 F3区 遺構配置図

器甕が出土しており、古墳時代中期の竪穴住居であると考えられる。竪穴住居22の西側に広がるE5区は古代の掘立柱建物が多く検出されており、竪穴住居22の南西隅も飛鳥～奈良時代の土器を含む2.5m×1.5mの楕円形の土坑12に切られている。

F4区

F3区より一段下がる平坦面であり、現在の盛土を除去したところ南側に傾斜する黄色シルトの地山を検出した。遺構、遺物は存在しなかった。



第88図 F3区 竪穴住居22 平・断面図

F 5・E 6区（第89図）

E 5区・F 4区より更に一段下がる南側に張り出した比較的面積の広い平坦面であり、現在の盛土を除去したところ南東に傾斜する黄色シルトの地山を検出した。北側では中世以降のピットを検出し、南側では奈良時代のL字状の区画溝32、柱穴列、土坑を検出した。

溝32 幅30cm、深さ10cmの溝である。調査区が谷の深部であるF 6・F 8区に向かって傾斜しているため、調査区の南側に存在した建物のために落ち際の区画溝を設定したものと考えられる。調査区南辺に、一辺60cmの方形の掘方をもつ柱穴が数ヵ所あり、現在は里道によって削平されているが、南側に展開する建物が存在したものと考えられる。

柱穴列15 東側を雛壇造成によって削平されているが、直径40cmの円形の掘方をもつ柱穴列15を柱間1.8mで2間分検出した。出土遺物はないが溝埋土より判断すると古代に属するものと考えられる。

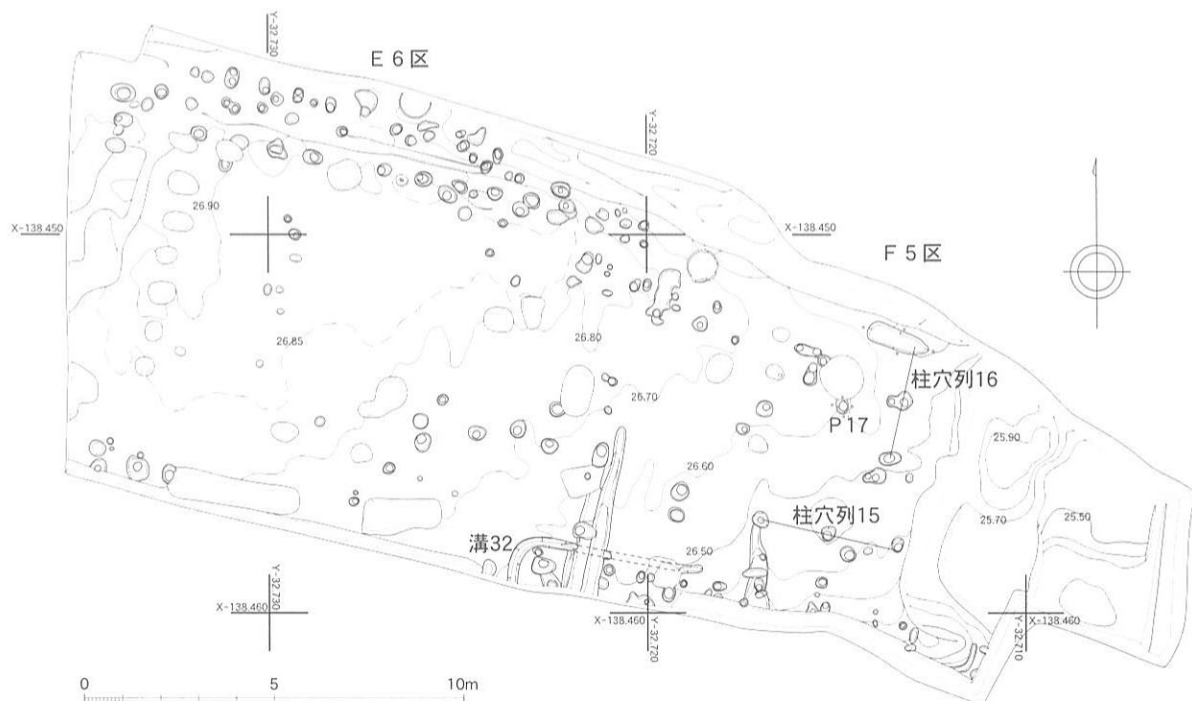
柱穴列16 柱間1.5mで2間分を検出した。掘方は直径50cmの円形のもの、抜き取りによる不整形な楕円形のものがある。また、建物を想定するには至らなかったが、柱穴列16の西側に位置する直径40cmの円形の掘方をもつピットP17では根石を検出した。

F 6・F 8区（第90図）

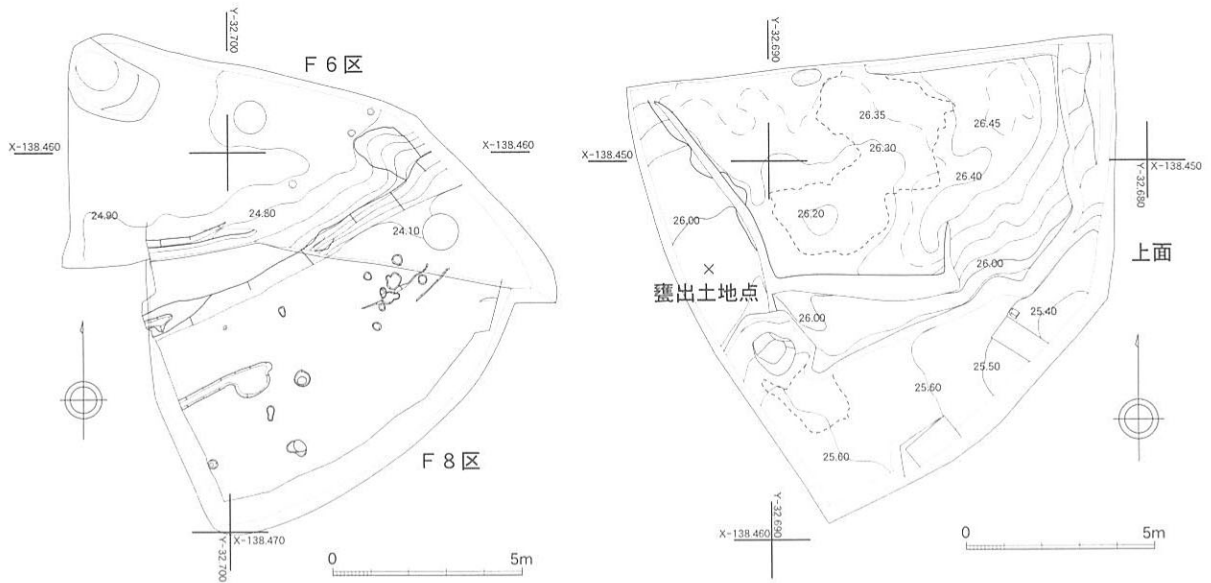
西側はF 5区の傾斜につながる黄色シルトの地山を削平して東西方向の平坦面を造成している。この造成はB 3区の壁立溝で見られた切り出しと形状が似ており、同じ系統の造成である可能性もある。中近世以降の削平によって遺構の深度は浅いが、埋土により、中世に属すると考えられる溝、ピットを検出した。

F 7区（第91図）

F 3区より一段下がる平坦面であり、F 4区とほぼ同じ高さであることから、現代の宅地造成による

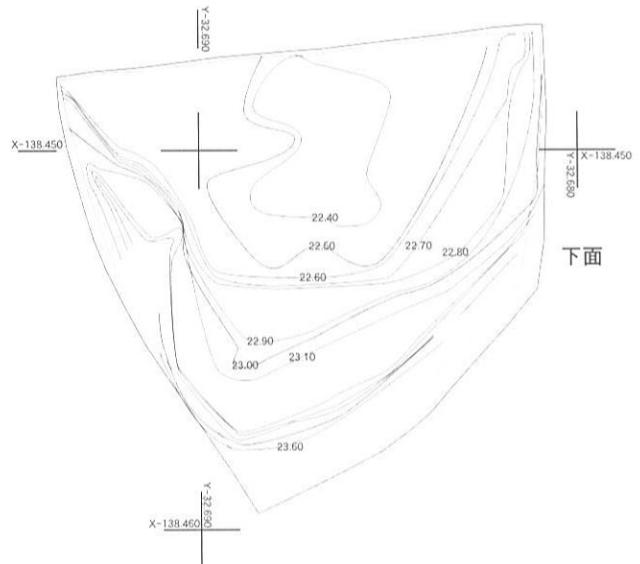


第89図 F 5・E 6区 遺構配置図



第90図 F 6・F 8区 遺構配置図

平坦面とみられる。F 2区から南流する溝25を中心とした谷状の落ちがさらに南西方向へと深く続くことが確認された。溝25は谷状の落ちの底にはりついて中世の須恵器壺の口縁部が出土しており、13世紀頃には存続していたと考えられる。(小暮)



第91図 F 7区 遺構配置図

2. E区

E1～E3区（第84図）

F2区の平坦面より北東方向に下降している斜面地である。1・2層を除去後、中・近世の溝、ピット、古代の掘立柱建物、溝、F2区の北東側で検出した竪穴住居群と一連の同時期の竪穴住居6棟を検出した。調査区外の北側には溜池が存在し、E1区は北側へ向かって傾斜しており、低いところでは3層の古代～古墳時代包含層が堆積している。E3区の西半は、近・現代の耕作地として造成されておりピットを数カ所検出したのみである。その西側に続くE2区も同一傾向である。

（1）古代の遺構…東半の高いところを中心に掘立柱建物、柱穴列を検出した。

掘立柱建物19 この建物は掘方埋土に古代の土師器片を含む柱穴を2間×1間検出した。柱間は1.8mで掘方の形状は直径が50cm、深さ30cmの円形である。遺構面上層からは古代後半の土器片が出土した。

掘立柱建物20 掘方埋土に古墳時代の土師器片を含む柱穴を3間×1間検出した。柱間は1.5mで掘方の形状は直径が50cm、深さ40cmの円形である。

柱穴列18 掘方に奈良時代の土器を含む柱穴を1間を検出した。柱間は2mで掘方の形状は直径60cmの円形であり、深さは60cmである。

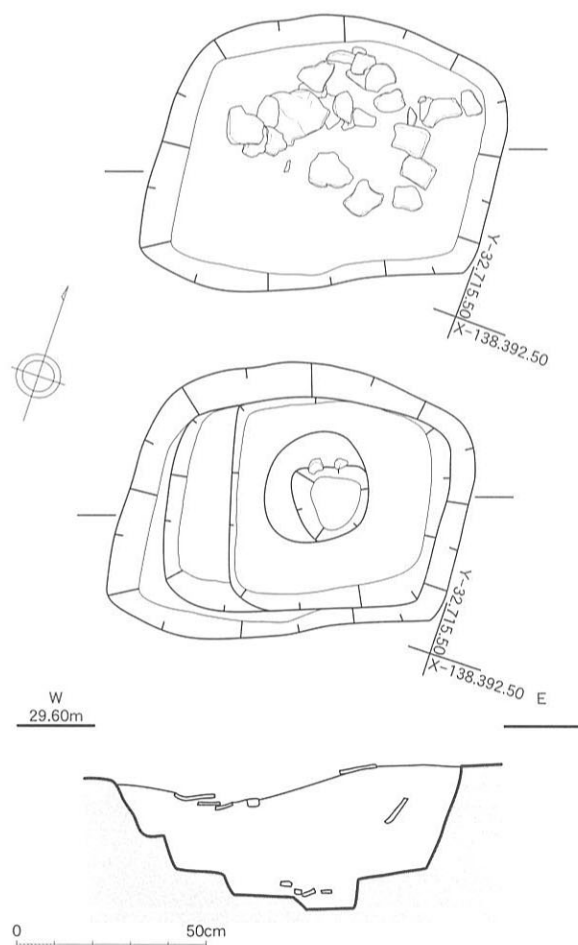
柱穴列19 出土遺物はなかったものの、掘方の形状と埋土からみて古代後半以降に属す可能性が高い。

柱間は2mで柱穴列を1間検出した。掘方は直径40cmの円形で、深さは30cmである。

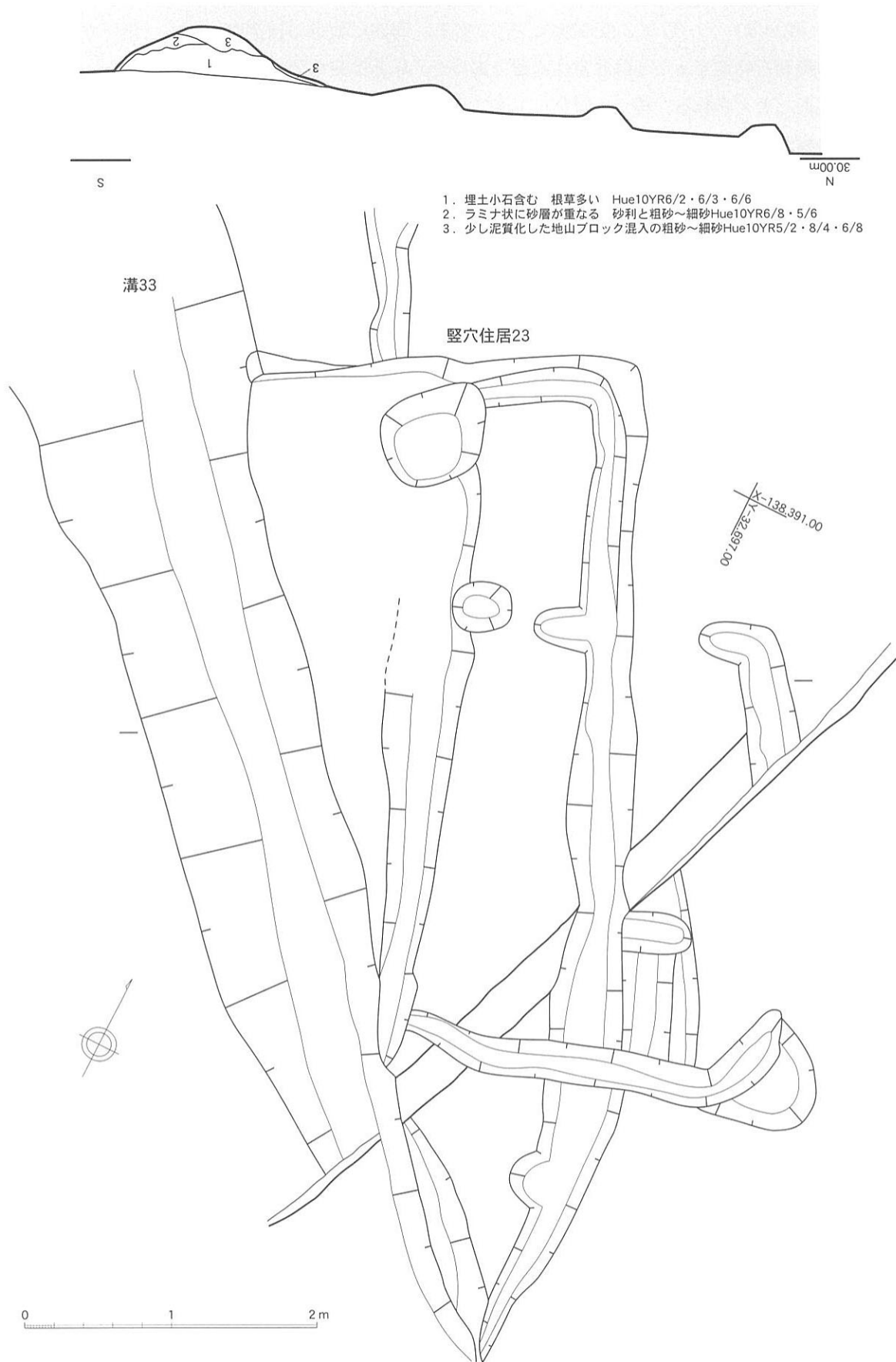
柱穴列17、ピットP18（第92図） ピットP18は溝36・37に囲まれた落ち込み2内で検出したピットであり、西側の同形状のピットと対を成し柱穴列17になると考えられる。掘方の大きさは長軸で1m、短軸で60cmの長方形であり、深さは40cmである。掘方埋土からは土師器甕片がまとまって立ち上がる状態で出土し、地鎮に使用された可能性が考えられる。

（2）古墳時代の遺構…E・F区の境界北半の地点を中心として、切り合いをもつ竪穴住居群を検出した。竪穴住居25は丘陵の北斜面地に立地することから、竪穴住居は北側の高宮廃寺側へ連続する可能性がある。

竪穴住居23（第93図） 一辺が5.6mの竪穴住居である。中世の溝33によって削平されており検出面は荒れていた。同じ方向軸で下層にも壁溝が存在し、壁溝内において古墳時代中期中葉の土師器高坏が、ピットの上面で伏せた状態で出土した。また、東側にも壁溝が存在し、古墳時代中期中葉の



第92図 E1区 ピットP18 平・断面図



第93図 E1区 竪穴住居23、溝33 平・断面図

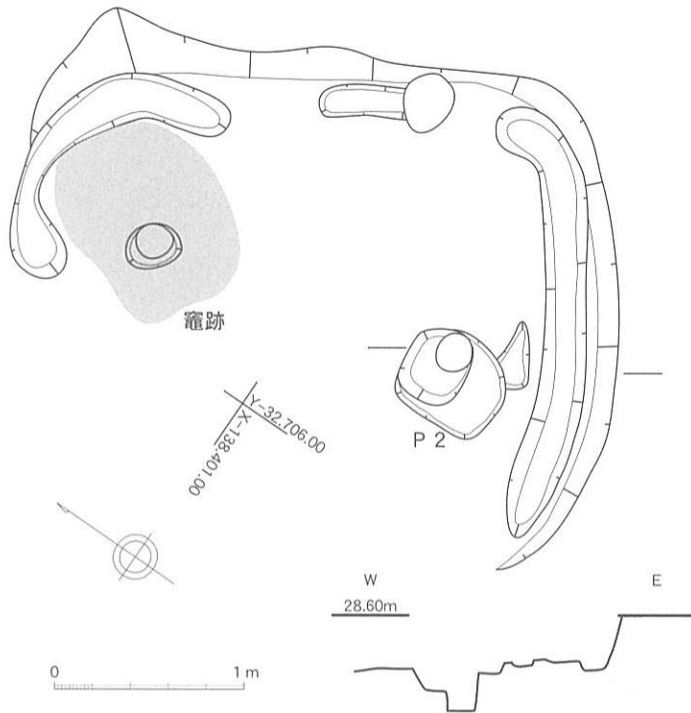
間に数回作り直しがおこなわれていることが明らかである。

竪穴住居24（第94図） 一辺が3mの竪穴住居である。周囲に数条の壁溝がめぐり、削平が著しく、本来の床面の範囲を特定することは非常に困難であった。床面は最小で一辺3mの方形、最大で落ち込み4を含む範囲と考えられる。埋土上層から下層に古墳時代中期の土師器高坏・甕などが出土した。上層では、竈の痕跡を南東隅で検出した。

落ち込み5（第95図） 竪穴住居の壁溝と考えられる幅50cm、深さ20cmの溝34が北端で幅1m、深

さ40cmの落ち込み状にふくらみ、古墳時代中期に属する多数の土師器高坏・甕・鉢、移動式竈の破片などが出土した。周辺には竪穴住居の壁溝と考えられる溝35や、炭、焼土が堆積するピットP19・P20、上面で古墳時代中期の高坏が伏せられた状態で出土したピットP21などがあり、一帯が竪穴住居に伴う施設と考えられる。出土遺物から短期間に幾度も竪穴住居が作り直されたことを示す痕跡と考えられる。

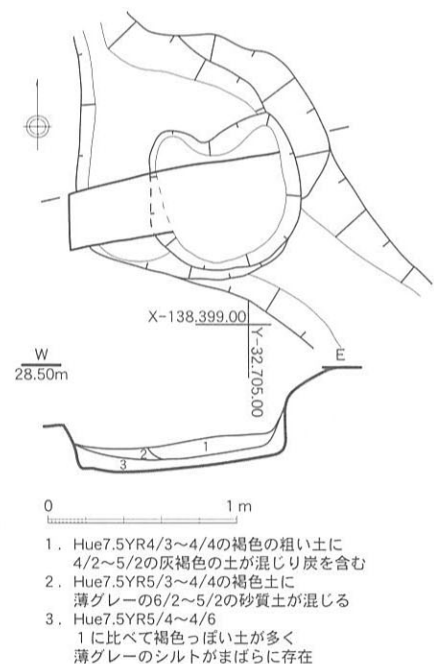
竪穴住居25（第96図） 一辺4mの方形竪穴住居である。埋土から古墳時代中期の土師器高坏などが出土した。東辺中央よりやや西寄りに竈が作られている。壁面の傾斜に沿って煙道が立ち上がる。支



第94図 E1区 竪穴住居24 平・断面図



第95図 E1区 落ち込み5 平・断面図



1. Hue7.5YR4/3~4/4の褐色の粗い土に4/2~5/2の灰褐色の土が混じり炭を含む
2. Hue7.5YR5/3~4/4の褐色土に薄グレーの6/2~5/2の砂質土が混じる
3. Hue7.5YR5/4~4/6
1に比べて褐色っぽい土が多く薄グレーのシルトがまばらに存在



第96図 E 3区 竪穴住居25 平・断面図

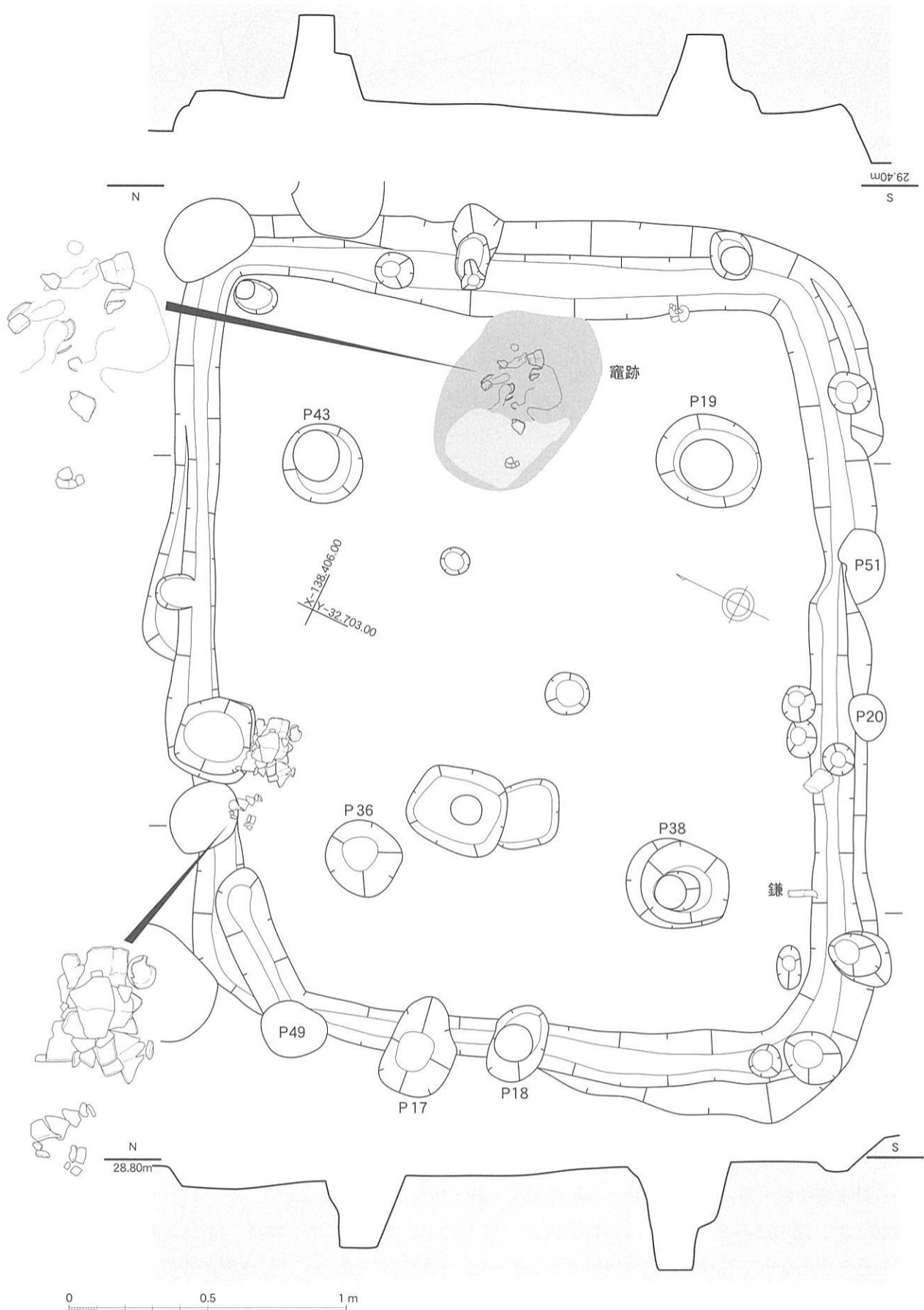
脚は存在しなかった。竈の西側1mの位置で竈の構築物が崩落したものとみられる焼土のブロックがまとまって検出された。

竪穴住居26（第97図） 6m×5mの長方形の竪穴住居である。東辺中央で竈の痕跡が検出された。竈は既に崩落しており、竈の構築物とみられる焼土と炭の塊からなるブロック土が盛り上がり残存していた。床面から古墳時代中期の土師器の中・小形甕類、鉄鎌、砥石などが出土した。また、韓式系土器である平底鉢が2個体分以上出土した。

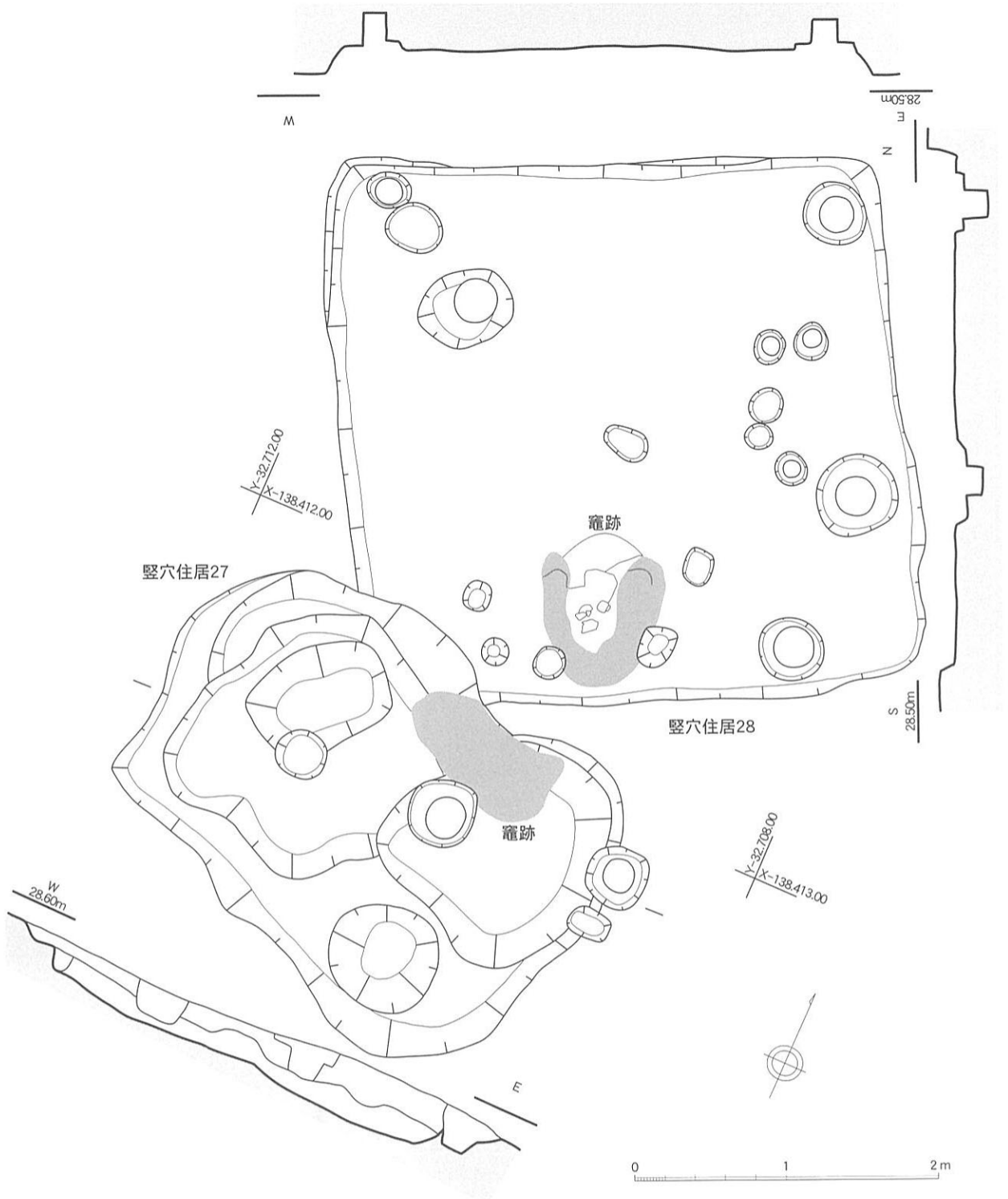
竪穴住居27（第98・99図） 長軸3m×短軸2.2mの隅丸長方形の土坑内で東西に2本並ぶ直径50cmの円形ピットを検出した。土坑内には細かい炭と二次焼成を受けた土師器片からなる竈状遺構が幾層にも重なり、幾度も火を使用した痕跡とみられる底面では、すり鉢状の土坑を複数重なった状態で検出した。最上層の土坑からは多孔の土師器甕が出土した。また、上面からは韓式系の平底鉢や土師器小形甕などが出土したほか、2cm大の碧玉製垂飾石製品が出土した。

竪穴住居28（第98・100図） 一辺3.5mの方形竪穴住居である。竈が南辺ほぼ中央に作られ、支脚には三角形の石が使用されていた。竈の周囲には直径20cm大の杭穴が竈を囲むように検出された。埋土からは古墳時代中期の土師器高坏・小形丸底壺・甕・甕などが出土した。

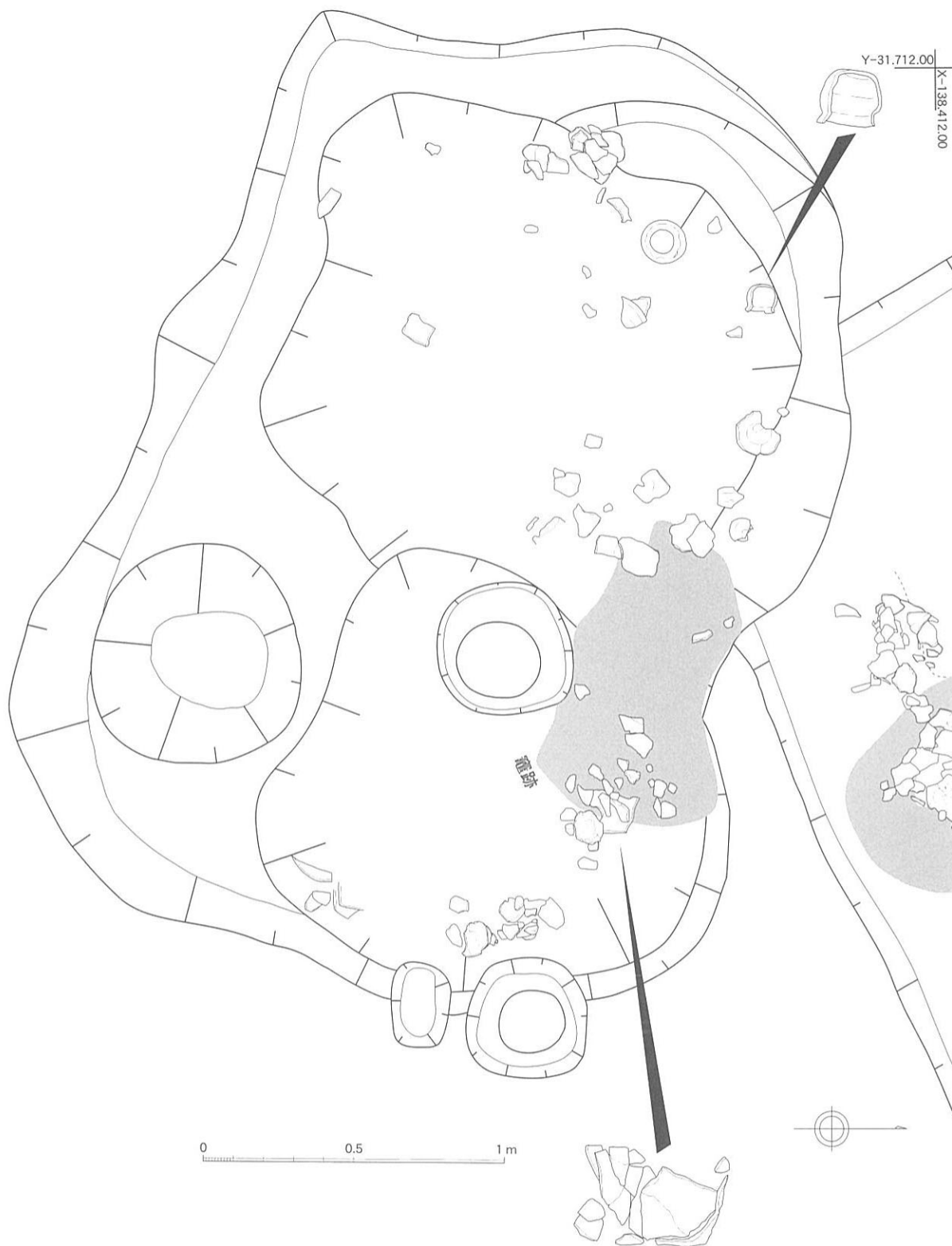
溝36・37、落ち込み6 溝36・37は幅20cm、深さ20cm、断面はコ字形の溝である。囲まれた区画は落ち込み状となっており、床面は検出できなかった。北側の落ち込み6は、底面がさらに北へと傾斜する。溝36・37は竪穴住居の壁溝であった可能性が高い。



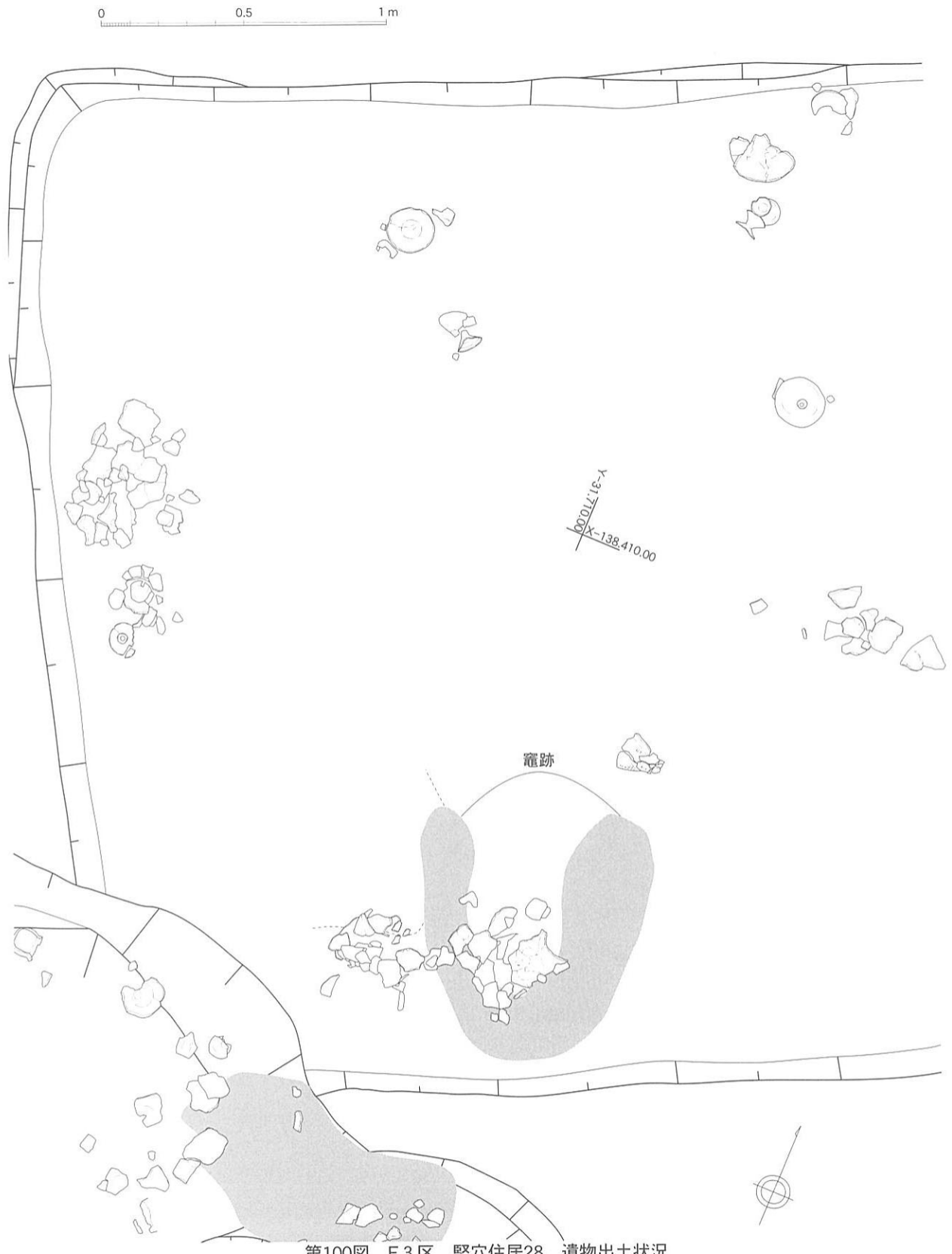
第97図 E 3区 竪穴住居26 平・断面図



第98図 E3区 竪穴住居27・28 平・断面図



第99図 E3区 竪穴住居27 遺物出土状況



第100図 E3区 竪穴住居28 遺物出土状況

E 4区（第101図）

E 1・E 3区の西半とE 5区の北側に続く平坦面であり、近・現代の耕作によって遺構面は削平を受けていた。1・2層を除去すると黄褐色シルト地山面に至り、形状より古代に属すると考えられる柱穴を検出した。

E 5区（第101図）

F 3区の西側に位置し、平坦面の頂部であったことと、比較的家屋解体の攪乱が小規模であったため中世から古代まで、遺構を密に検出することができた。また、竪穴住居に伴うと考えられる壁溝を数条



第101図 E 4・E 5区 遺構配置図

確認した。土器から判断すると古墳時代中期の竪穴住居群と同時期と考えられる。

(1) 古代の遺構…柱穴を多く検出し、掘立柱建物4棟、柱穴列3条を確認した。

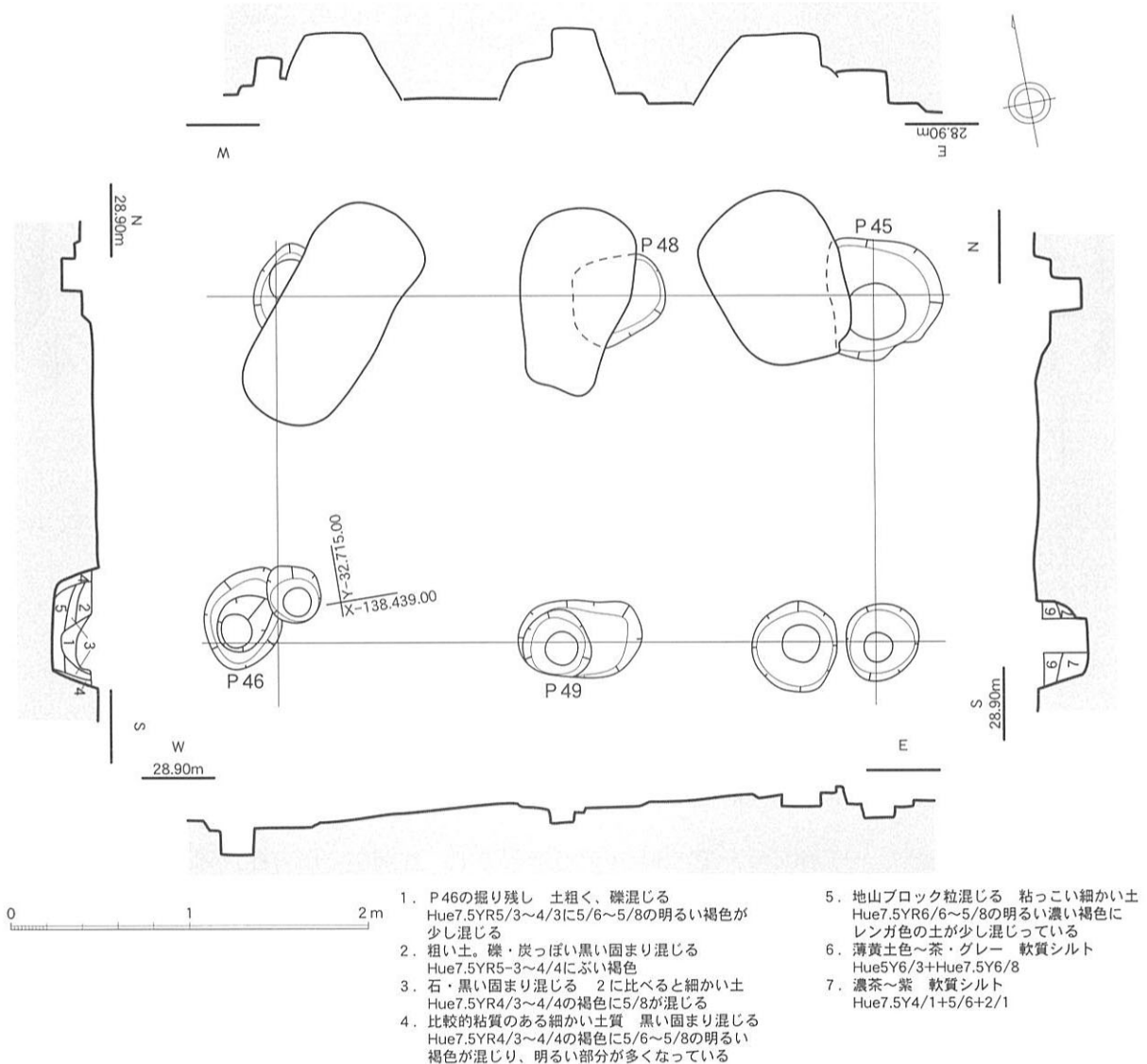
掘立柱建物21 (第102図) 一辺50cm、深さ30cmの方形の掘方で、1間×2間(柱間1.8m)の掘立柱建物である。掘方内の出土遺物から古代に属すると考えられる。掘立柱建物22と同規模の建物となり、南東に展開する可能性が高い。

掘立柱建物22 (第103図) 長軸80cm、短軸50cm、深さ20cmの長方形の掘方で、2間×2間(柱間1.8m)の総柱の掘立柱建物を検出した。一つの掘方内に主柱と添柱が据えられる布掘り状の掘方が東にあたる箇所にある。

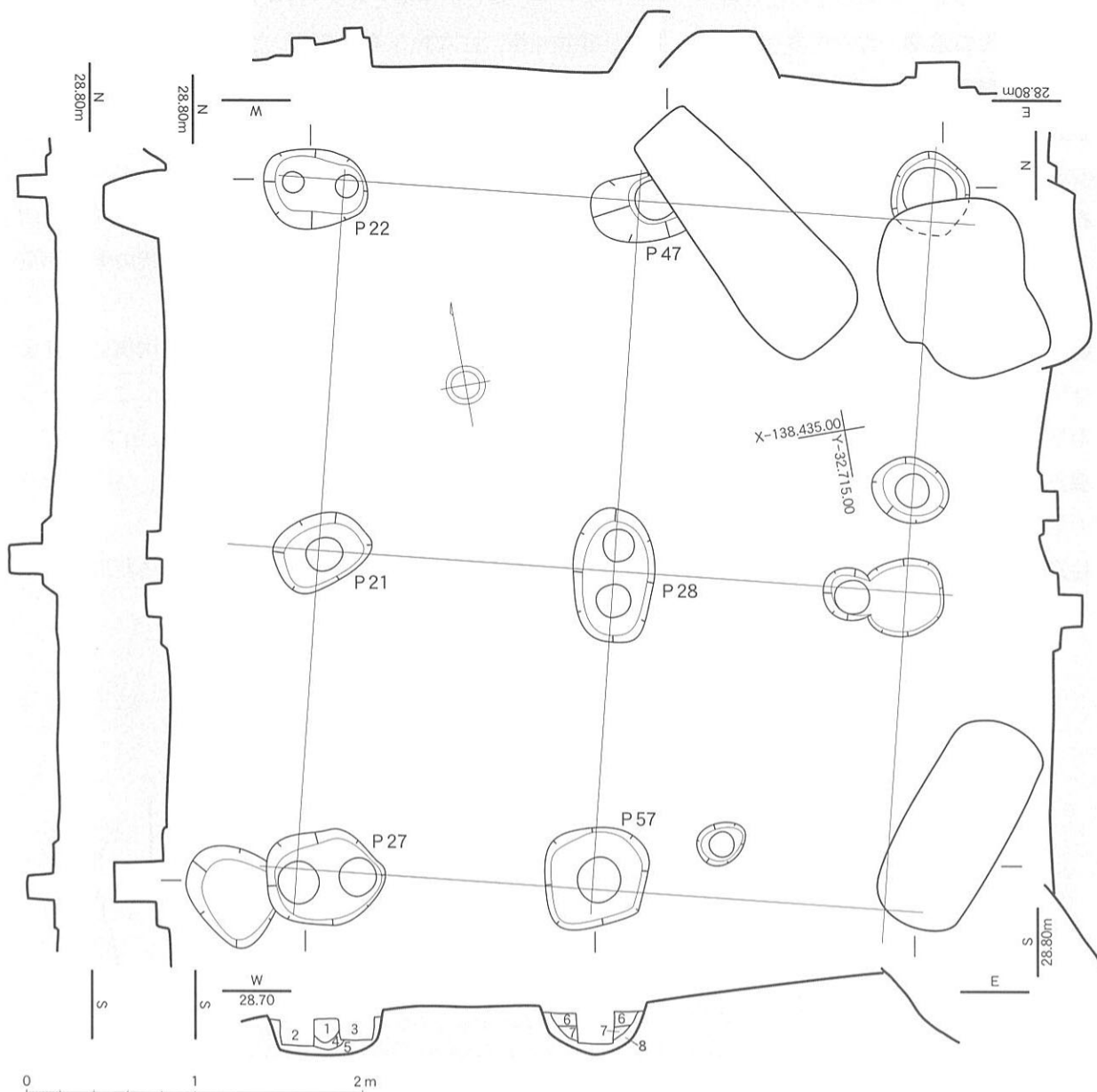
掘立柱建物23 (第104図) C1区で検出した掘立柱建物16と同じく、1×1間の規模で内側に東柱または添柱と考えられるピットをもつ建物を検出した。C1区の掘立柱建物16より一回り小さく、一辺が外側で2.2m、内側で1.5mである。ピットの掘方は直径30cmの円形であり深さは最深30cmであった。

掘立柱建物24 隅柱が隅丸方形、それ以外は直径40cmの円形の掘方をもつ、2間×1間(柱間2m)の掘立柱建物を検出した。出土遺物から古代～古代後半の建物と考えられる。

柱穴列20 (第105図) 一辺50cm、深さ40cmの方形掘方で、北北東-南南西方向にのびる柱間が2m



第102図 E5区 掘立柱建物21 平・断面図



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 粗い土で7.5YR5/2~6/3の灰色っぽい土色をしているが5/6の褐色が細かくまばらに混じている 2. 7.5YR4/6~5/6~5/8の褐色土に5/2~5/4の灰色がかかった土が混じている 少し粘質がある 3. 土色は4と類似しているが乾いた質の土である灰色がかかった土が多い 4. 7.5YR4/6~5/6の褐色土と5/2~5/4の灰色がかかった土が混じている 少し粘質がある | <ol style="list-style-type: none"> 5. 土器片（土師器）の混じった4/6~5/8の明るい褐色をしている炭が少し混じている 6. 所々に炭が混じり、小石や礫が混じている
7.5YR4/4~4/6は6/3~5/3の土の色が混じている 7. 比較的粘質のある土で炭は混じていない 土器片（土師器）混じている
7.5YR4/4~4/6の土に5/6~5/8の明るい色が少し混じている 8. 細かい土となっている 7.5YR5/6~5/8の明るい褐色に4/4~4/6の土が少し混じている |
|---|---|

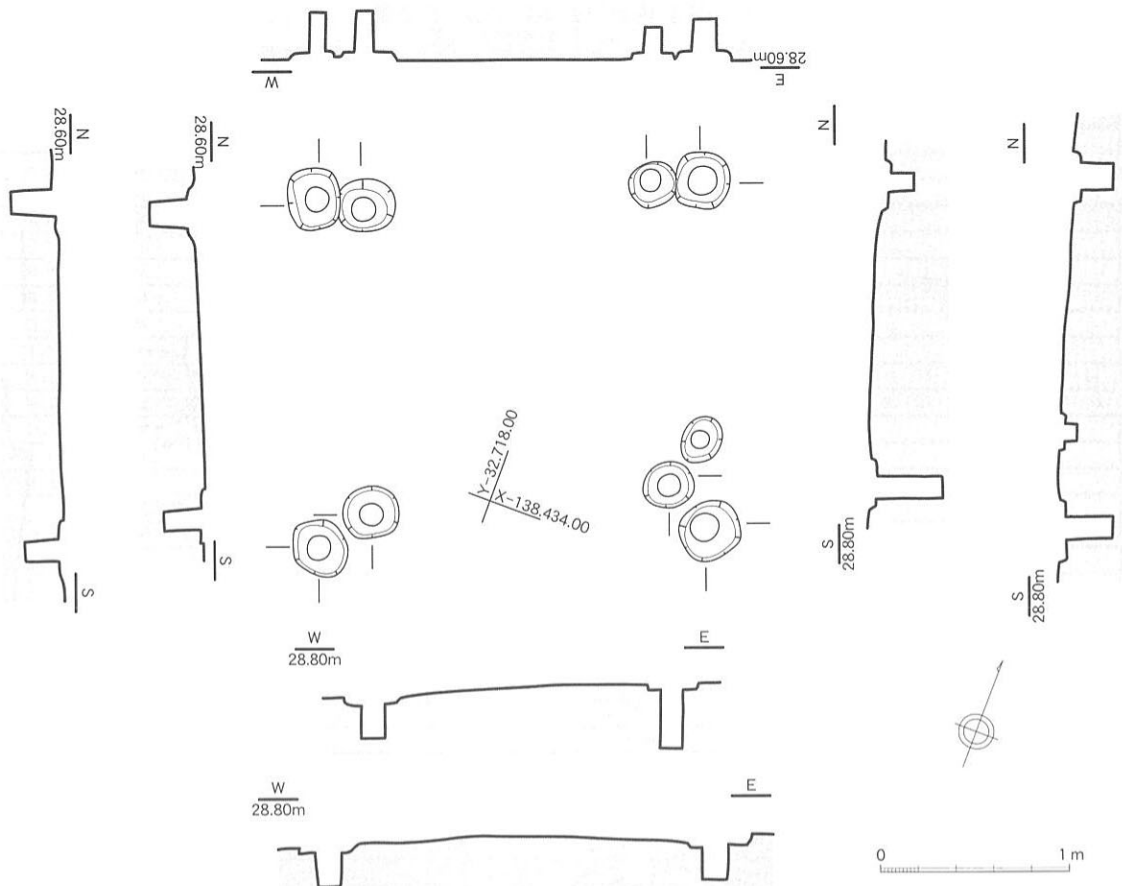
第103図 E 5区 掘立柱建物22 平・断面図

の柱穴列を2間検出した。東・西側に相対する柱穴が検出されず、柵列と考えられる。掘立柱建物21・22と軸が共通する。

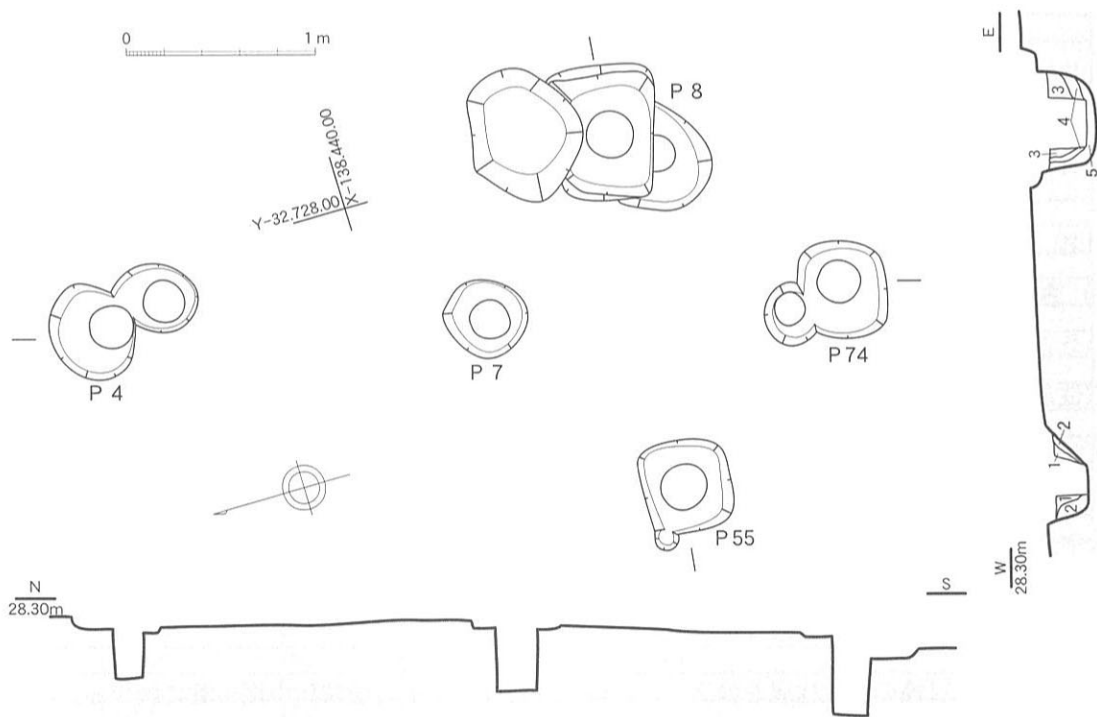
柱穴列21（第106図） 一辺60cm、深さ30cmの方形掘方で、柱間が2mの柱穴列を3間検出した。東・西側には相対する柱穴列が検出されず、柵列と考えられる。

柱穴列22（第105図） 一辺50cm、深さ40cmの方形掘方で、柱間が2mの柱穴列を1間検出した。調査区の南側に建物が展開すると考えられる。

ピットP22（第106図） 建物を想定するに至らなかったものの掘方内の柱根上で古代後半の土師器皿が上を向いた状態で据えられる。北側は削平されていたが、一辺50cm、深さ50cmの方形掘方と考え



第104図 E5区 掘立柱建物23 平・断面図



- | | |
|--|--|
| <p>1. 粗い土 礫混じる 土器（土師器）混じる
7.5YR6/2~5/3の灰褐色に5/6~4/6の明るい褐色が少し混じている</p> <p>2. 炭が混じっている 比較的細かいサラッとした土質
7.5YR5/4~4/6の明るい褐色をしている</p> <p>3. 土器（土師器）混じる 礫も混じる 粗い土 7.5YR4/2~4/3~3/3</p> | <p>4. 礫混じる 少し粗い目の土 炭も混じる
7.5YR5/4~4/4の褐色に4/6~5/6~5/8の濃い褐色が混じている</p> <p>5. 粘っこい細かい目の土 炭混じる
7.5YR4/6~5/6~5/8の明るい褐色</p> |
|--|--|

第105図 E5区 柱穴列20・22 平・断面図

第3表 新旧遺構名対応表（2）

図番号	遺構名	地区名	時代	調査時の遺構名 (小路遺跡(高宮地区)又は高宮遺跡(その3)の各調査時の名称)
第46図	柱穴列5	B 3	古代	高宮：P30・32・33・35・36・105
第17図	柱穴列6	B 3	古代	高宮：P65・75～77・79・88・89
第49図	柱穴列7	B 3	古代	高宮（B 3 址）：P18・19
第47図	掘立柱建物11	B 3	古代	高宮（B 3）：P22・24・25・109 高宮（B 3 址）：P24
第48図	掘立柱建物12	B 3	古代	高宮（B 3）：P20・106・107 高宮（B 3 址）：P28・31・39・40・42・44・45・51・54
第50図	壁立溝	B 3	古墳時代	高宮その3：壁立溝
第52図	竪穴住居10	B 3	古墳時代中期	高宮：竪穴住居2
第53図	竪穴住居11	B 3	古墳時代中期	高宮：竪穴住居3
第54図	竪穴住居12	B 3	古墳時代中期	高宮：竪穴住居4
第51図	竪穴住居9	B 3	古墳時代中期	高宮：竪穴住居1
第76・77図	竪穴住居16	B 3～C 9	古墳時代中期	高宮（C 6）：P1・2・10・11 高宮その3：竪穴住居1
第17図	P12	B 4	奈良時代	高宮：P50
第17図	柱穴列9	B 4	奈良時代	高宮：P4・5・7・50
第56図	P13	B 5	中世	高宮：P53
第41図	土坑3	B 5	中世	高宮：土坑2
第41図	土坑4	B 5	中世	高宮：土坑1
第41図	土坑5	B 5	中世	高宮：遺構名なし
第41図	土壇墓7	B 5	中世	高宮：土壇墓1
第41図	土壇墓8	B 5	中世	高宮：土壇墓2
第55図	溝14	B 5	中世	高宮：溝1
第17図	掘立柱建物13	B 5	古代	高宮：P8・9・16・20・26・27・36・38～40
第17図	掘立柱建物14	B 5	古代	高宮：P4・7・19 高宮その3（B 2 址）：P116・117
第57図	竪穴住居13	B 5	古墳時代中期	高宮：竪穴住居1
第59図	溝15	B 8	古墳時代中期	高宮：溝1
第60図	土坑6	B10	中世	高宮：土坑1
第59図	掘立柱建物15	B10	中世	高宮：P31・32・34・36・45～48
第61図	井戸3	B11	中世	高宮：井戸1
第61図	井戸4	B11	中世	高宮：井戸2
第16図	井戸5	B11	中世	高宮：井戸3
第16図	井戸6	B11	中世	高宮：井戸4
第16図	溝17	B12	中世	高宮その3：溝2
第17図	柱穴列10	B12	古代	高宮その3：P13～16
第17図	柱穴列11	B12	古代	高宮その3：P9・11・12・17
第62図	竪穴住居14	B12	奈良時代	高宮その3：竪穴住居1
第63図	落ち込み1	B12	飛鳥～奈良時代	高宮その3：溝5
第64図	柱穴列12	C 1	中世以降	高宮：C 1 拡張区
第65図	土壇墓9	C 1	中世	高宮：土壇墓1
第64図	掘立柱建物16	C 1	古代以降	高宮：P3・4・21
第64図	柱穴列13	C 1	古代	高宮：P13・25
第64図	柱穴列14	C 1	古代	高宮：P14・18・24
第64図	竪穴住居15	C 1	古墳時代中期	高宮：P2・5～7
第66図	溝18	C 2	中世	高宮：溝1
第66図	土坑7	C 2	古墳時代中期	高宮：土坑1
第67図	土坑8	C 3	中世	高宮：土坑1
第70図	土壇墓10	C 4	平安時代	高宮：土壇墓1
第68図	土壇墓11	C 4	平安時代	高宮：土壇墓3
第68図	土坑10	C 4	奈良時代以降	高宮：土坑6
第68図	土坑9	C 4	奈良時代以降	高宮：土坑2
第71図	掘立柱建物17	C 4・5・9	奈良時代	高宮（C 4・5）：P2～6 高宮その3（C 9）：P6・10～12
第69図	井戸7	C 5	中世	高宮：土坑7
第72図	溝19	C 5～C 7	中世	高宮：溝1
第68図	P14	C 5～C 9	中世	高宮その3（C 9）：P28
第68図	掘立柱建物18	C 5～C 9	中世	高宮（C 5）：P9・11・15 高宮その3（B 3）：P27 高宮その3（C 9）：P22・28
第75図	井戸10	C 6	中世	高宮：井戸3
第73図	井戸8	C 6	中世	高宮：井戸1
第74図	井戸9	C 6	中世	高宮：井戸2
第72図	井戸11	C 7	中世	高宮：井戸1
第72図	溝20	C 7	中世	高宮：溝2
第72図	溝21	C 7	古代～中世	高宮：溝6
第72図	P15	C 7	古墳時代以降	高宮：炭だまり
第72図	溝22	C 7	古墳時代以前	高宮：溝8

第4表 新旧遺構名対応表(3)

図番号	遺構名	地区名	時代	調査時の遺構名 (小路遺跡(高宮地区)又は高宮遺跡(その3)の各調査時の名称)
第78図	竪穴住居17	C 7	古墳時代中期	高宮: 竪穴住居 1
第79・81図	竪穴住居18	C 7	古墳時代中期	高宮: 竪穴住居 2
第72図	溝23	C 7	古墳時代中期	高宮: 溝12
第72図	方形周溝墓 1	C 7	弥生時代	高宮: 方形周溝墓 1 (溝 7)
第72図	方形周溝墓 2	C 7	弥生時代	高宮: 方形周溝墓 2
第72図	溝24	C 7	弥生時代	高宮: 溝14
第72図	土坑11	C 7	旧石器時代?	高宮: 土坑
第83図	溝25	F 1~F 7	古代	高宮その3: 溝 1
第82図	溝26	F 2	古代	高宮その3: 溝 3
第82図	P 16	F 2	奈良時代	高宮その3: 遺構名なし
第85図	竪穴住居19	F 2	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 1
第86図	竪穴住居20	F 2	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 2
第86図	竪穴住居21	F 2	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 3
第87図	溝31	F 3	中世以降	高宮その3: 溝 3
第87図	溝30	F 3	古代	高宮その3: 溝 5
第87図	土坑12	F 3	奈良時代	高宮その3: 土坑
第87図	溝27	F 3	平安時代	高宮その3: 溝 2
第87図	溝28	F 3	平安時代	高宮その3: 溝 1
第87図	溝29	F 3	平安時代	高宮その3: 溝 9
第88図	竪穴住居22	F 3	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 1
第89図	P 17	F 5~E 6	中世	高宮その3 (F 6): P13
第89図	柱穴列15	F 5~E 6	古代後半~中世	高宮その3 (F 6): P 6・7・12
第89図	柱穴列16	F 5~E 6	古代後半~中世	高宮その3 (F 6): P 1~3
第93図	溝33	E 1	中世	高宮その3: 溝 3
第92図	P 18	E 1	古代	高宮その3: P78
第84図	柱穴列17	E 1	古代	高宮その3: P78
第84図	掘立柱建物19	E 1	古代	高宮その3: P 4・5・9・11・12・50
第84図	落ち込み 2	E 1	古墳時代以降	高宮その3: 落ち込み
第84図	溝36	E 1	古墳時代中期以降	高宮その3: 溝 5
第84図	溝37	E 1	古墳時代中期以降	高宮その3: 溝 4
第93図	竪穴住居23	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 1
第94図	竪穴住居24	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 2
第96図	竪穴住居25	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 3
第84図	溝34	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 溝 6
第84図	溝35	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 溝 8
第84図	P 19	E 1	古墳時代中期	高宮その3 (F 2 被): P 73
第84図	P 20	E 1	古墳時代中期	高宮その3 (F 2 被): P 2・71
第84図	P 21	E 1	古墳時代中期	高宮その3 (E 1 被): P 3
第84図	落ち込み 3	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 土坑 2
第84図	落ち込み 4	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 落ち込み 2
第95図	落ち込み 5	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 落ち込み 5
第84図	落ち込み 6	E 1	古墳時代中期	高宮その3: 落ち込み 3
第84図	柱穴列19	E 3	中世	高宮その3: P 9
第84図	柱穴列18	E 3	古代	高宮その3: P35・40
第84図	掘立柱建物20	E 3	古代	高宮その3: P17・23・44・76
第97図	竪穴住居26	E 3	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 1
第98・99図	竪穴住居27	E 3	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 2
第98・100図	竪穴住居28	E 3	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 3
第104図	掘立柱建物23	E 5	古代以降	高宮その3: 遺構名なし
第101図	掘立柱建物24	E 5	古代以降	高宮その3: P 5・9・36・63・65
第106図	P 22	E 5	古代	高宮その3: P41
第105図	柱穴列20	E 5	古代	高宮その3: P 4・7・74
第106図	柱穴列21	E 5	古代	高宮その3: P26・51・56
第105図	柱穴列22	E 5	古代	高宮その3: P39
第102図	掘立柱建物21	E 5	古代	高宮その3: P 6・9・45・53・54
第103図	掘立柱建物22	E 5	古代	高宮その3: P21・22・27・38・47・54・57
第101図	竪穴住居29	E 5	古墳時代中期	高宮その3: 竪穴住居 2
第89図	溝32	E 6・F 5	奈良時代	高宮その3: 溝 1



第107図 小路遺跡（高宮地区）・高宮遺跡（その3）調査全体図

第3章 調査のまとめと付編

第1節 調査成果のまとめ

今回の調査では様々な時期の遺構・遺物を確認したが、旧石器時代の明らかな遺構は検出することができなかった。しかし、多数の石器・剥片資料を得ることができた。石器・剥片は地山を形成する大阪層群の上面に堆積する古墳時代から奈良時代の包含層と遺構に混入しているケースがほとんどであり、これは当遺跡において旧石器包含層を削平するに及んだ開発時期が想定できるものである。以降、時代順に成果をまとめてみたい（第108図）。

後期旧石器時代は、A区下段においてナイフ形石器、A区上段において小形ナイフ形石器の別タイプであるいわゆる切り出し状ナイフ形石器および剥片、C7区南西端部から小形ナイフ形石器、剥片が出土した。集中して剥片等が出土する地区は主としてC7区であるが、B・E・F区においても剥片等が出土している。B・E・F区では遺構埋土出土のものが多いが、A区上段、C7区では地山上のやや風化した礫層より出土しており、摩滅もみとめられないことから、原位置からあまり距離をおかない状態での出土とみられる。

縄文時代は、早期の石鏃がC7区で出土したほか、縄文時代中期の船元式土器がA区下段の溝1下層から、縄文時代後期の北白川上層III式～元住吉山I式土器がA区上段の10面ピットP2上面から出土した。ピットP2は底に礫が敷き詰められる。A区上段では不定形土坑を検出し、前期の土器片、石鏃などが出土している。ピットP2は調理跡とみられ、居住域が存在した可能性も考えられる。

弥生時代は、C7区で方形周溝墓の周溝とみられる遺構を検出した。周溝内からは器台、甕が出土しており、弥生時代中期末～後期とみられる。太秦遺跡から大尾遺跡をへて高宮遺跡まで同一丘陵上にこの時期の墓域が連続した可能性がある。

古墳時代は、古墳時代中期の竪穴住居を全域にわたって少なくとも29棟を検出した。平成13年度の調査では主に丘陵端部の南西方向への斜面地で竪穴住居が検出されたが、平成14年度の調査では大形総柱掘立柱建物群の下層において古墳時代中期の竪穴住居が同一方向軸で検出された他、北東方向へのびる斜面地に累々と造営された竪穴住居群が検出された。

竪穴住居群は主に赤色シルトの地山を削り出して壁とする造成方法がとられている。奈良時代の大形総柱掘立柱建物群の整地以前にすでに黄色シルト地山との境に壁立溝がつけられていることから、これらの竪穴住居群の建設に伴う造成の後、後述の大形総柱掘立柱建物群が作られた奈良時代の造成があったと考えられる。

これらと同時期の竪穴住居が北側の尾根稜線上、および、その背面の北斜面にも分布が拡大することが平成14年度の調査で確認できた。これによって、河内平野北半部に面する丘陵端の一支脈全体に古墳時代中期前葉～中葉の竪穴住居が広がる状況で集落が構成されたことが分かる。

検出した竪穴住居の大半は方形プランで作り付けの竈をもち、大甕などの初期須恵器や韓式系土師器を供伴するなど、いわゆる渡来的要素をもつという共通項がある。中でも古い段階にあった高宮遺跡の周辺には太秦という地名があり、渡来系氏族の秦氏との関連が元来から指摘されてきたが、高宮廃寺造営の契機となった氏族やその居住地は、高宮廃寺周辺で高宮廃寺以前とされる掘立柱建物の拡がりみと

められる他はが明らかにされていなかった。今回、本調査区において古墳時代中期の渡来的要素をもつ一大ニュータウンとでもいうべき竪穴住居群が検出されたことは、その後のこの地域の展開を考える上で重要な観点をもたらすであろう。

また、その丘陵端眼下の低地では、四条畷市葺屋北遺跡の最近の発掘調査で古墳時代中期中葉以降の集落展開が明らかとされている他、その北方の長保寺遺跡でも古墳時代中期以降の足どりをつかむことができる。これらはこの高宮の集落が核となり、古墳時代中期中葉に至ってはじめて分散した可能性がある。

古墳時代後期後半に属する遺構として、A区中段・下段で溝2・8・9を検出した。溝の2・8の肩部には道路状遺構の属性である波板状痕跡がみられ、溝の上層ではブロック土からなる整地層が南北方向にみられたことから道路と考えられる。また、溝2・8は埋土が異なることから、それぞれが道路の東側溝となり、時期は2時期にわたる可能性が考えられる。

この溝の延長線上には高宮廃寺の講堂、中門、南門が位置し、飛鳥時代後半の創建と考えられる高宮廃寺の造営以前に設けられた道路となる可能性が考えられる。ただし、本調査区の溝は直線ではなく地形に沿った部分があり、計画的な路線を配置するべき寺では直線道路が設置されたものと考えられることから寺の存続期には利用されていない可能性が高い。このことは、高宮廃寺の存続期にあたる奈良時代にA区下段で検出された奈良時代の掘立柱建物が道路延長線上にあることなどからも傍証される。現在、調査区の北側には谷池なども存在し、地形的にも高低差があることから、直線道路の配置された痕跡がなく今後の検討課題としておきたい。

奈良時代はB1～B3区にかけて東西に連なる形で大形総柱掘立柱建物群が検出された。これらの建物群は主に赤色シルトの地山を黄色シルトの地山面まで削りだして傾斜面を整地し、平坦面を確保して造成されたとみられる。柱穴掘形は方形で一辺1.2m前後の非常に大きなものである。B1区で検出された大形総柱掘立柱建物4は3×3間であり、他の建物では後世の削平により柱穴がそろわないものが多いが、これが基本形になるものと考えられる。その場合、建物は少なくとも5棟が東西に並ぶこととなる。大形総柱掘立柱建物1・2・4・5は主軸がそろおうが、大形掘立柱建物3は主軸が合わないために時期差が考えられる。また大形総柱掘立柱建物1・2のほうが4・5よりも柱の掘方が大きい。また、その存続時期は南側で検出されたB12区落ち込み1から大量の飛鳥～奈良時代の土器が出土し、廃棄場とみられることから、奈良時代をもって終了すると考えられる。

これらの大形総柱掘立柱建物群は区画溝をもつ可能性があり、南側に位置するB1～B2区にかけて検出した東西方向にのびる溝13がその痕跡と考えられる。しかし、溝13は中世まで存続しており、出土遺物には奈良時代の遺物はほとんど含まれない。

その他、奈良時代の遺構では、B2区で木炭塚となる土墳墓が検出された。大形総柱掘立柱建物群の南側に東西の向きで墓塚が設置されており、少なくとも5基が確認され、そのうち木炭塚であったものは3基である。

周囲では、A区上～下段で掘立柱建物が少なくとも6棟検出された。これらの建物は、大形総柱掘立柱建物に次ぐ大きさの柱の掘方であり、総柱の建物が多く、倉庫群が展開していたものと考えられる。

さらに、B3区北半部を中心に柵列、もしくは掘立柱建物が検出された。これらの掘立柱は柵列と考えられるものはいずれも大形総柱掘立柱建物群の背面にあたる傾斜面に位置し、削平も考えられるものの建物を配置するのに十分な平坦面がないことや対面する柱穴が検出されなかったことから、塀ないし

回廊状の遺構であった可能性が高い。

B3～B5区にかけても大形総柱掘立柱建物群の西側に位置する掘立柱建物数棟が検出された。これらの建物はコの字型に配置されていることや、廃絶期が平安時代に突入していることなどから、大形総柱掘立柱建物の廃絶後になんらかの官衙的要素をもつ施設が建てられ、律令制度の崩壊と共に廃絶したものと考えられる。

E・F区においても奈良時代の遺構が検出されている。特にE1・E5・F2区で多く検出されており、比較的小形の建物が多い。これらの遺構の検出により、E・F区の平坦面も古墳時代中期の開発によって本格的に人の手が入ったものと考えられる。

またF区においては道路状遺構が検出されたことが特筆すべき点としてあげられる。F2区溝25・26の2条の溝は両側の側溝と考えられ、側溝間は7mである。遺物の出土はほとんどなく側溝間には中世の柱穴が数点みられるのみであり、古代以前の遺構はない。その軸はほぼ南北であり、調査区の北側に続く可能性が高く、計画的配置をもつべき古代寺院である高宮廃寺の寺域空間になんらかの関係を想定することも可能である。

中世においてはB1～B2区を中心に、古代に造成された平坦面をもとに、傾斜面の上部を削り出して平坦面を拡張している。こうして作り出された平坦面は約400m²級の敷地が想定され、中世の前半を中心に屋敷地がつくられていたとみられる。中世の屋敷地には井戸が設置されており、主屋、柵列、土坑、溝などが検出されている。柱穴の根石には高宮廃寺と同範の平城宮式軒平瓦が使われている例もあり、中世前半には寺が廃絶していた可能性を傍証するといえよう。

また、B3区土壙墓6で烏帽子が、C1区土壙墓9で鉄刀と烏帽子が出土した点が注目される。その他C4・B5区においても土壙墓が検出され、いずれも南北方向に主軸をもつことが明らかになった。B3区において検出した土壙墓は中世の屋敷墓であった場合、その北側および東側のC6・C9・B3区北側の調査区の中では一番高所の平坦面の屋敷に伴うと考えられる。高宮遺跡の中でもっとも立地条件のよい有力者の墓といえるのではないだろうか。E・F区では、中世においても人が居住していたことは包含層出土遺物より明らかであるが、削平のため明確な中世の遺構は少ない。屋敷地と考えられる地区はF3区であるが、B・C区に比べ小規模である。

中世のその他の遺構としては、B5区で周縁に柱穴がめぐる大形の土坑3・4が切り合いをもって検出されており、室のような貯蔵施設となる可能性がある。また、B1区では瓦器皿とともに甲状の鉄製品が土坑から出土しており、類例を知りえず性格不明であるが興味深い。

以上調査地ほぼ全域において、後期旧石器時代から中世にわたる遺構・遺物を数多く確認し、多大な成果をあげることができた。

国指定史跡高宮廃寺に南接する南側斜面地であり、またかつては河内湖を遠望することができたと思われる丘陵端部という立地から、当初より成果は期待されたものの、予想を上回る成果を得ることができたと言えよう。

(小暮)

第2節 高宮遺跡より出土した石製品、石材について

1. はじめに

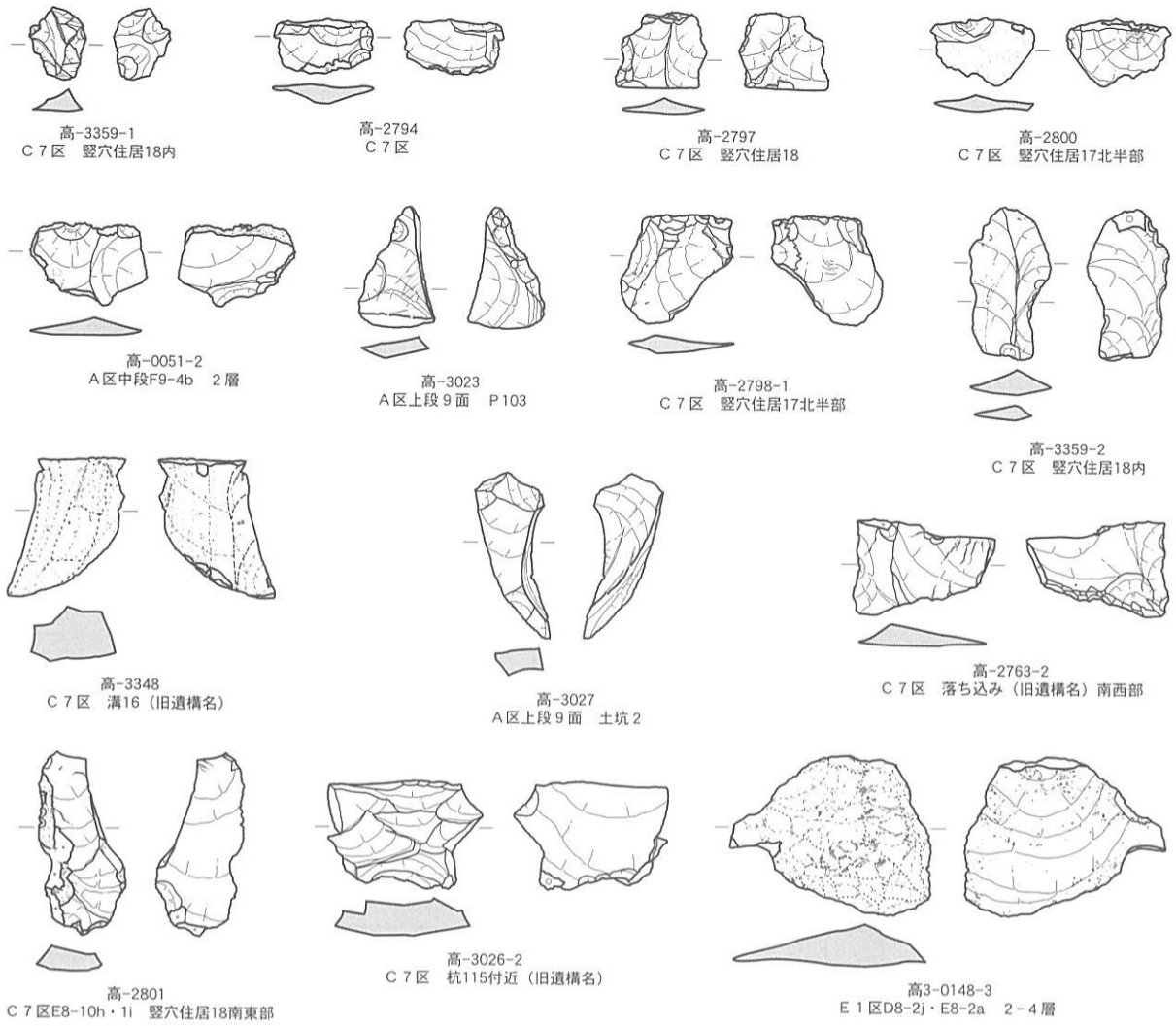
高宮遺跡より出土した石製遺物には、旧石器・縄文時代に、金属に変わる以前の利器・道具として使用されたいわゆる石器と、砥石や礎石など利器以外の石製遺物が存在する。前者の石器は生駒山地では産出しないサヌカイト製であることから、原石の搬入や製品の搬入なども考えられるが、後者は使用箇所、使用目的によっては様々な材質の石が選択されることも考えられる。高宮遺跡は生駒山地より派生する丘陵地に立地していることから、必然的に生駒山地より産出した花崗岩や生駒石といわれる（はんれい岩）質の遺物が出土することが考えられ、鑑定を依頼し、その結果より当遺跡における石材使用傾向を検討した。

第5表 出土石製遺物一覧表

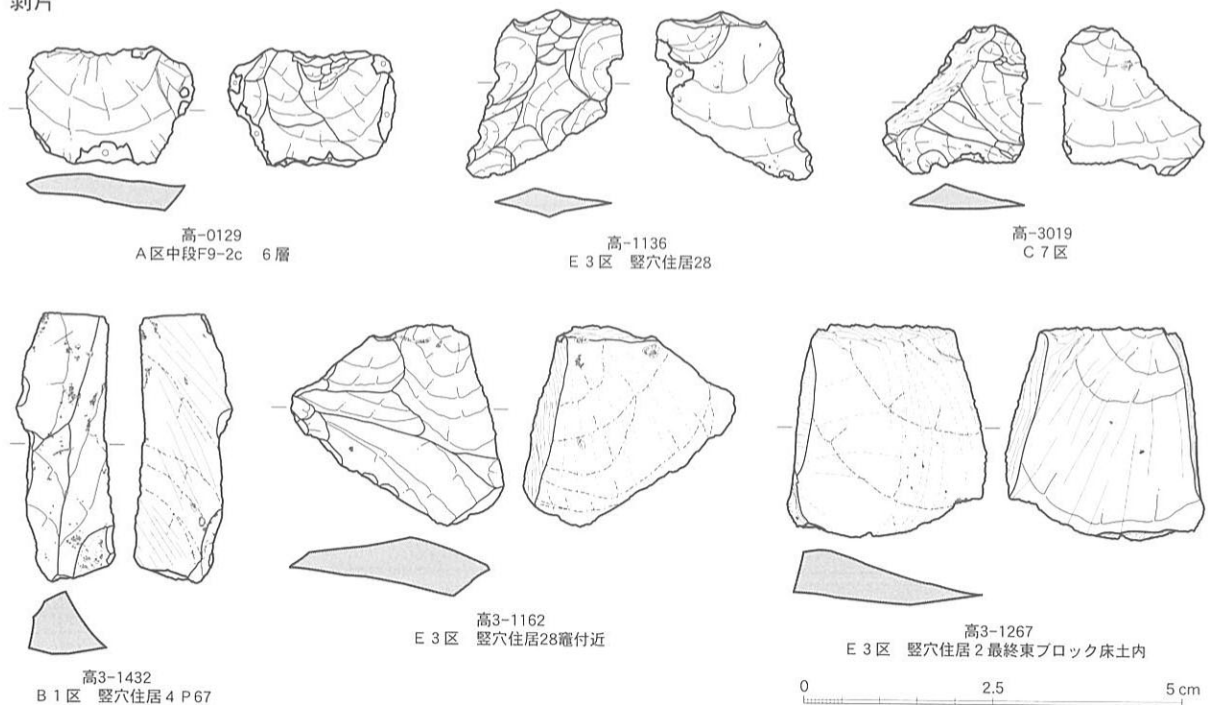
遺物登録番号	時代	用途	地区名	遺構名(調査時遺構名)	大きさ(cm)縦横厚さ	設置可能サイズ(cm)	石材	遺構の形状	考察	色調
-	中世	礎石	A上段	P24	-	-	-	丸	主柱	-
タカミヤ-2660	中世	礎石	A上段	P 8	14×2	直径8	黒雲母花崗岩	丸	控	白灰茶
タカミヤ-2664	中世	礎石	A上段	P24	13×14/1×13	直径5/直径8	はんれい岩	丸	控	白灰茶
タカミヤ-2668	中世	礎石	A上段	P37	20×14	直径10	はんれい岩	丸	主柱	黒灰+茶
タカミヤ3-1454	中世	礎石	A上段	P20	-	-	黒雲母花崗岩	丸	主柱	白灰茶
タカミヤ3-1464	中世	礎石	A上段	P20	13×10/8×8	直径5/直径8	黒雲母花崗岩	丸	控	白灰茶
タカミヤ-2659	中世	栗石	A上段	P 6	5×3	-	チャート	丸	主柱	青灰
タカミヤ-3326	古代以降	礎石	A上段	P65	10×8×8	直径8	はんれい岩	丸	主柱	黒灰
タカミヤ-3326	古代以降	砥石	A上段	P65	7×4×5.5	-	ひん岩	丸	主柱	白茶
タカミヤ-2729	中世	礎石	B 1	P384	17×8×2.5	直径8	珪岩	丸	主柱	白灰茶
タカミヤ3-1455	中世	礎石	B 1	P39	29×23	直径15~18	黒雲母花崗岩	丸	主柱	白地に黒斑点
タカミヤ3-1456	中世	礎石	B 1	P63	22×22	直径15~16	黒雲母花崗岩	丸	主柱	白地に黒斑点
タカミヤ3-0867	古墳	管玉	B 1	竪穴住居4壁溝内	2.2×0.42	-	碧玉	-	垂飾	青緑
タカミヤ3-1331	古代	台	B12	竪穴住居14の土器の下	14×10	-	黒雲母花崗岩	-	-	赤みがかった白地に黒斑点
タカミヤ3-1396	古代	礎石	B12	P84	12×11	直径8	はんれい岩	隅丸方形	庇または軒	黒灰
タカミヤ3-1458	古代	砥石転用の礎石	B12	竪穴住居14上層P12	29×13	直径10	輝緑岩	楕円	主柱	灰
タカミヤ3-1459	古代	礎石	B12	竪穴住居14上層P	20×18	直径10	黒雲母花崗岩	楕円	主柱	白茶
タカミヤ3-0825	古代	礎石	B12	竪穴住居14埋土	20×15	直径12~13	ひん岩	不明	主柱	白灰茶
タカミヤ3-0884	古代	砥石	B12	竪穴住居14	7×7	-	黒雲母花崗岩	-	-	白茶
タカミヤ-2038	古代	砥石転用の栗石	B 2	大形総柱榑立柱建物1-3	8×4	-	黒雲母花崗岩	隅丸方形	主柱	白灰茶
タカミヤ-2327	古代	砥石転用の石材	B 2	土壇臺3	13×4×4	-	はんれい岩	楕円	用途不明	白茶
タカミヤ3-1450	古代	栗石	B 2	P102	5~10	-	チャート、黒雲母花崗岩	隅丸方形	多数の円縁	白、灰、茶、黒
タカミヤ-2849	古墳	砥石	B 2	竪穴住居5	4×5×4	-	黒雲母花崗岩	-	-	白茶
タカミヤ-0736	中世	砥石	B 3	P88	7.5×4×2	-	-	丸	主柱	白茶
タカミヤ-2057	中世	礎石	B 3	P 9	16×11×7	直径10	黒雲母花崗岩	丸	主柱	赤みがかった白地に黒斑点
タカミヤ-2071	中世	礎石	B 3	P81	9×5×5.5	直径5~6	黒雲母花崗岩	丸	主柱	白地に黒斑点
タカミヤ-2132	中世	砥石	B 3	P60	7×7×3	-	石英安山岩	丸	主柱	白赤茶
タカミヤ-1808	中世	砥石2枚	B 5	P59	8×5	-	-	丸	主柱	青灰
タカミヤ-3337	古代後半	礎石	C 5	P 4	12×11	直径10	黒雲母花崗岩	隅丸長方形	主柱	白灰茶
タカミヤ-3065	中世	栗石	C 7	P22	5×4	-	チャート	丸	主柱	青灰
タカミヤ-2694	古代	砥石	C 7	3-2~3-3層	7×5×6	-	ひん岩	-	-	青灰
タカミヤ3-0163	中世	砥石	E 1	溝1(旧遺構名)	13×7	-	-	-	-	灰茶
タカミヤ3-1040	古墳	砥石	E 3	竪穴住居26	15×10	-	黒雲母花崗岩	-	-	白茶
タカミヤ3-1150	古墳	砥石?	E 3	竪穴住居28	12×9の三角形	-	輝緑岩	-	-	灰茶
タカミヤ3-1113	古墳	垂飾	E 3	竪穴住居27	2.3×1.4×3	-	碧玉	-	垂飾	青緑
タカミヤ3-1237	古墳	支脚	E 3	竪穴住居28の竈	11×9	直径8	黒雲母花崗岩	-	-	白茶
タカミヤ3-1453	中世	礎石	F 5	P13	11×11	直径8	黒雲母花崗岩	丸	主柱	白地に黒斑点

第2節 高宮遺跡より出土した石製品、石材について

チップ

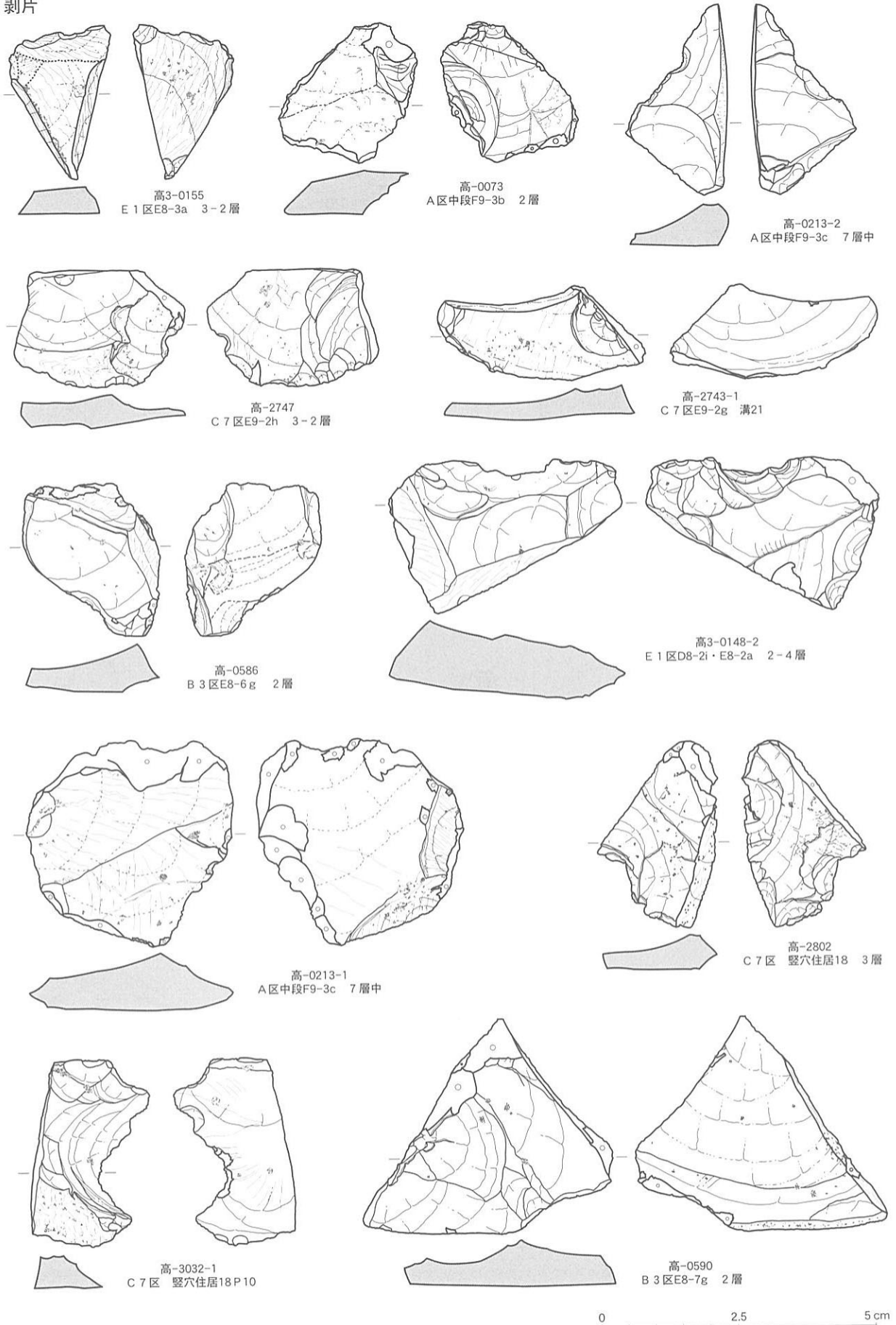


剥片



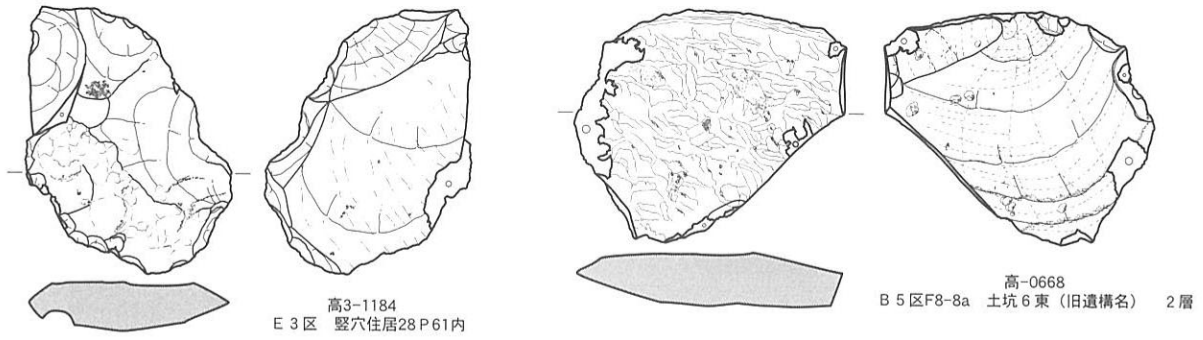
第109図 出土石器実測図(1)

剥片

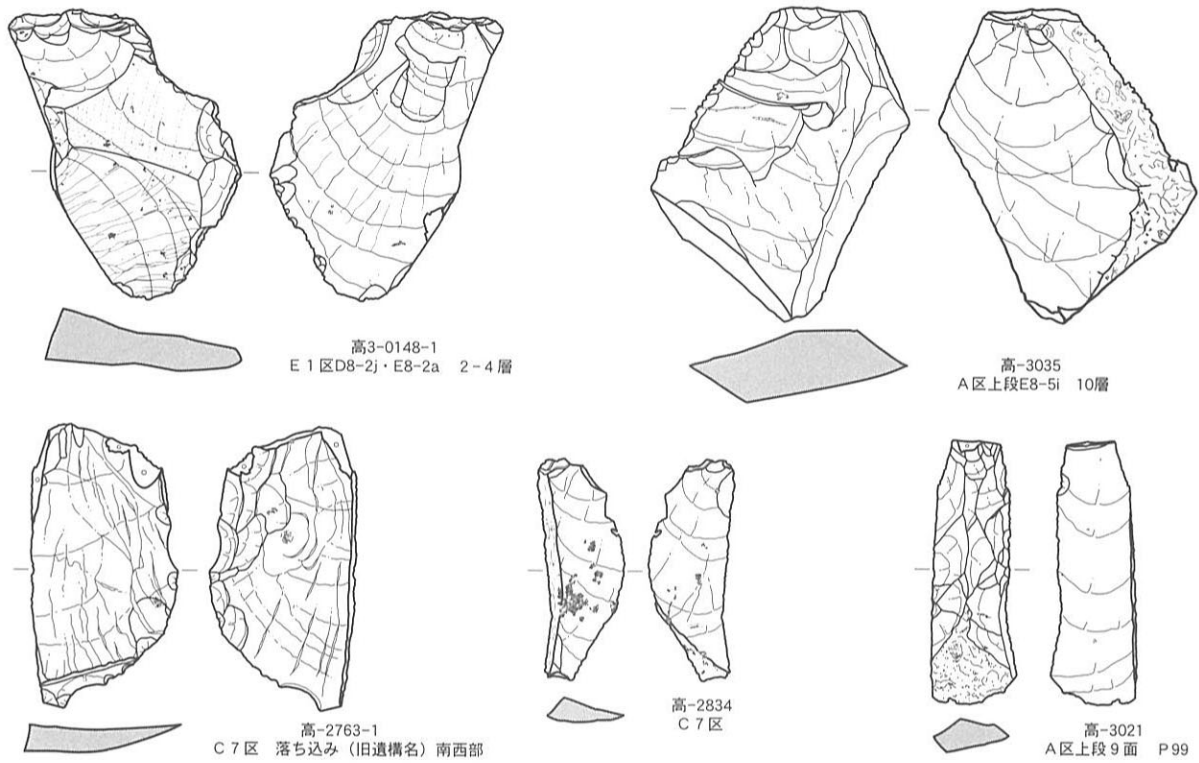


第110図 出土石器実測図(2)

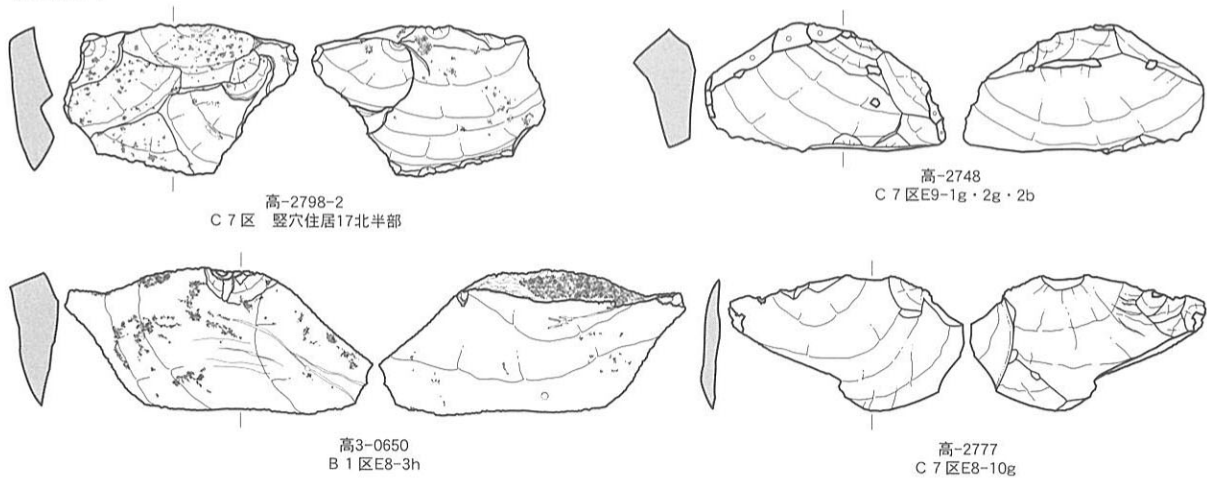
剥片



縦長剥片



横長剥片



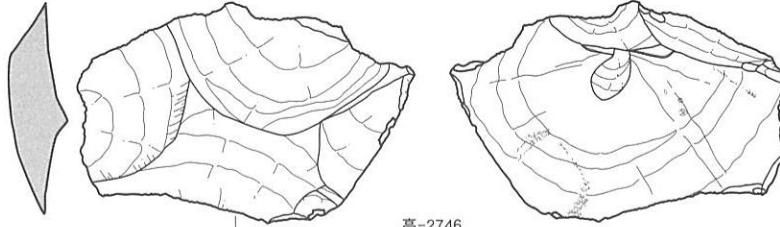
0 2.5 5 cm

第111図 出土石器実測図(3)

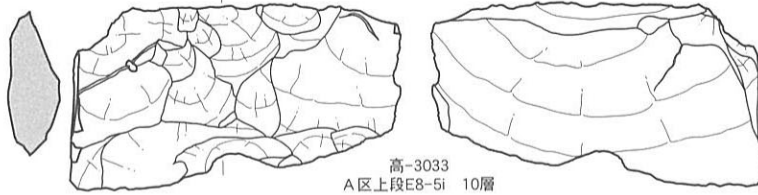
横長剥片



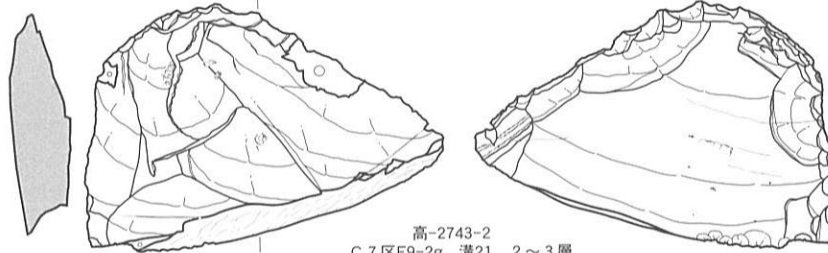
高-0566
B 3区E8-8h 1~2層



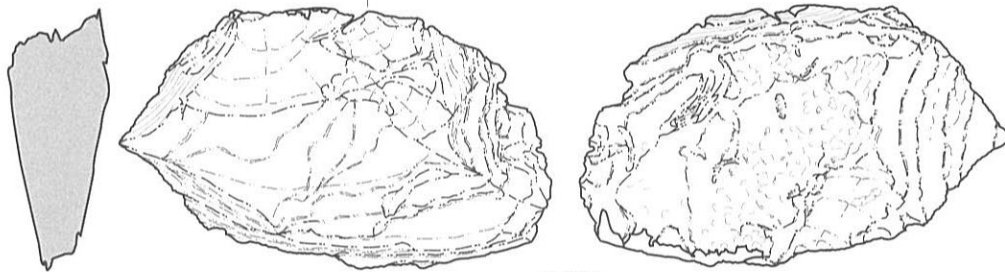
高-2746
A区上段E9-6i~5i 白色粘土礫層



高-3033
A区上段E8-5i 10層

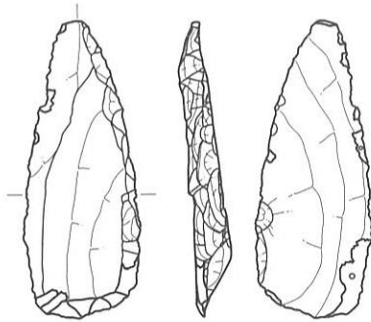


高-2743-2
C 7区E9-2g 溝21 2~3層



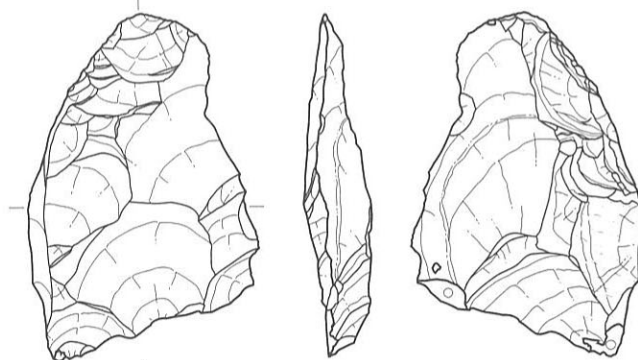
高-3036
A区上段E9-5h・5i 段落ち

国府型ナイフ



高-0051-3
A区中段F9-4b 2層

楔形石器?



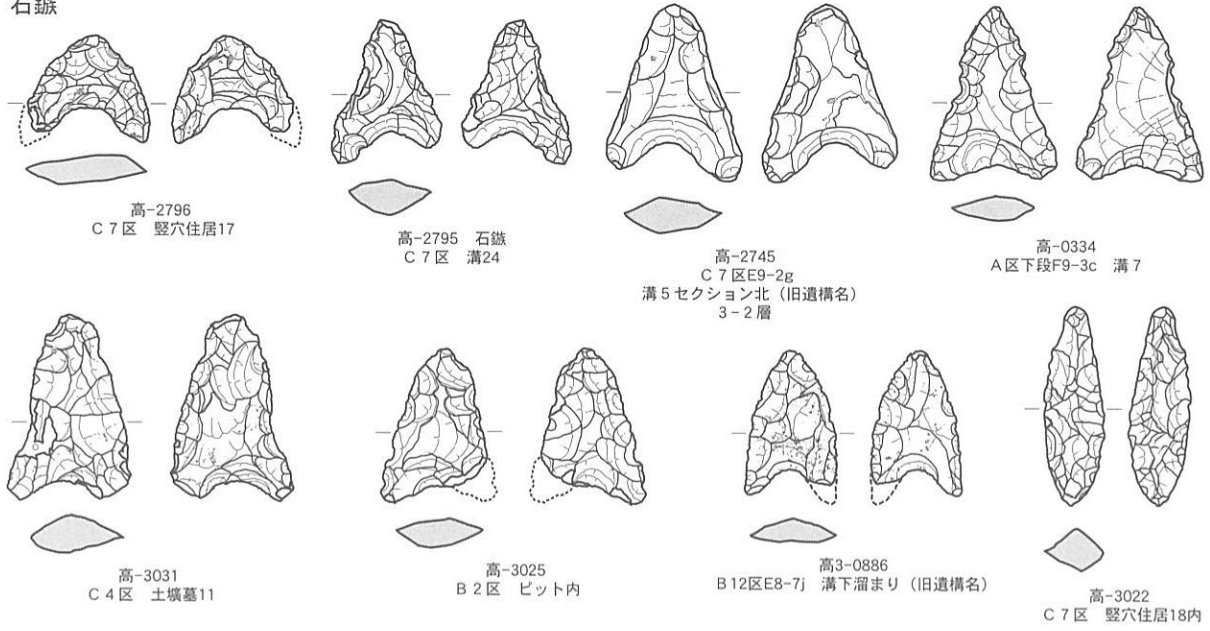
高-3038
A区下段E9-2e 流路ののるベース

0 2.5 5 cm

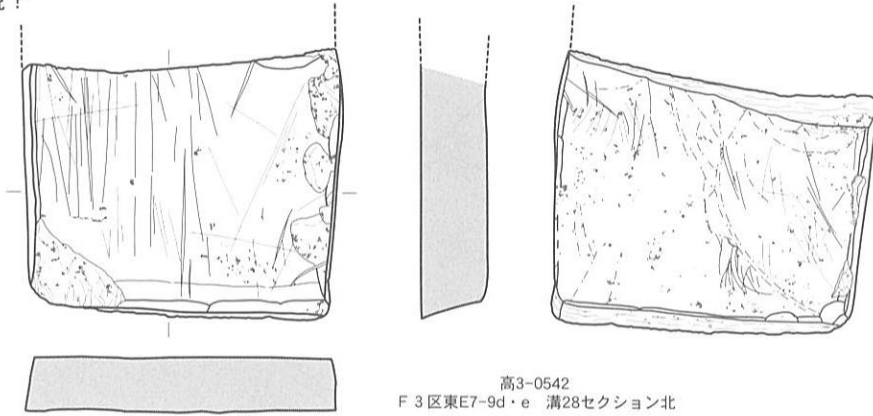
第112図 出土石器実測図(4)

第2節 高宮遺跡より出土した石製品、石材について

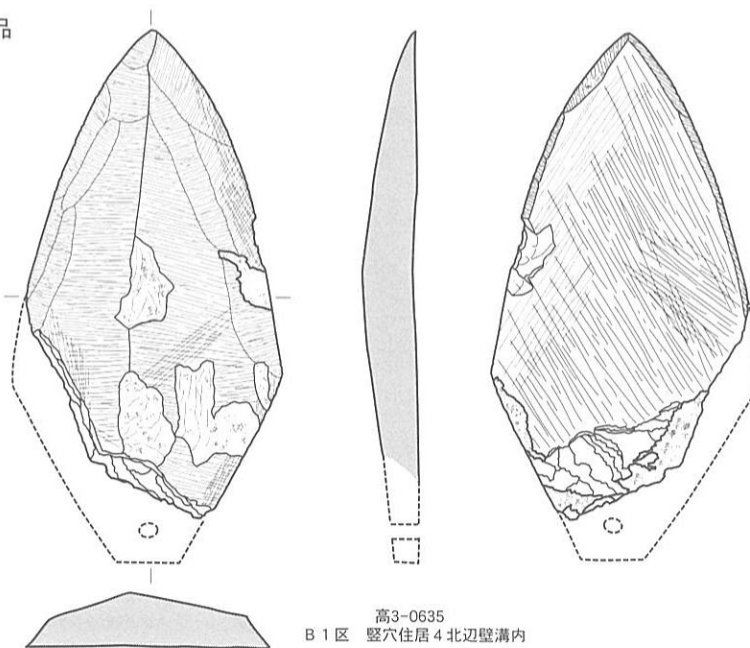
石鏃



石硯?



剣形石製品



0 2.5 5cm

第113図 出土石器実測図 (5)

2. 石製遺物の傾向

高宮遺跡より出土した石製遺物には以下のような傾向があげられる。古墳時代から中世に至るまでは基本的に生駒山より産出する黒雲母花崗岩が使用されている。黒雲母花崗岩は交野市での産出が知られており、高宮遺跡のごく近辺では露頭している箇所は知られていない。この為、産出地または入手地の候補の交野市近辺から、高宮遺跡の住民が直接搬入するには8 km程度の行動範囲は余儀無くされるであろう。その他の岩石類も基本的に生駒山の岩脈より産出するものであり、弥生時代以前のいわゆる石器時代に使用していたサヌカイト製遺物と、古墳時代中期に属する垂飾類以外は広域的な製品としての流通は考えにくい（第109～113図に第5表以外の石器類を参考として掲載した）。

古墳時代に属する石製遺物は主に砥石や用途不明の台状遺物、竈の支脚などであるが、これらも高宮に居住した人々自らが生駒山地より直接的に入手した可能性が高い。これは、古墳時代に属する砥石がすべて黒雲母花崗岩であり、かつ製品としては持ち運びにしにくい大きさであるために交易品とは考えにくいことによって裏付けられるであろう。出土砥石は大変大きく、B12区において竪穴住居のくぼみを足がかりとして礎石建物が建てられた際には、おそらく竪穴住居で使用されていた砥石が礎石として転用されている程である。高宮遺跡に古墳時代中期に居住した人々は渡来的要素をもつ住居に居住していたが、垂飾類からもその他の石製遺物からも渡来的要素の発見には至らずに生駒山地産出の岩石を使用していることは、積極的に居住地周辺の土地活用が進んでいる段階であることを示す。

一方中世に至っては根石としての礎石も巨大なものではなく、主柱は直径20cm以下、花崗岩の礎石、控えの礎石からは直径10cm以下の柱を想定している。素材はやはり黒雲母花崗岩を中心としているが多少のばらつきはある。ただしいずれも形状はそろわず、入手できない柱穴によっては軒平瓦を礎石代わりに使用するなど規格化はなされていないため、用途に応じ近場で入手したものであろう。ただし、中世に属する砥石はほとんどが黒雲母花崗岩以外であり、かつ、小形化しているために製品としての流通が考えられるが、生駒山地より産出した岩石が素材であり、広域的な流通ではないと想定される。

謝辞

岩石の材質はご多忙中の折、大阪市立自然史博物館 石井久夫氏に鑑定をいただいた。記して感謝の意を表する。(小暮)

第3節 高宮遺跡烏帽子出土状況のレプリカ作成

1. はじめに

当調査においては、生駒山脈に連なる丘陵頂上部（南斜面）で南北方向、隅丸長方形の中世に属するC1区土壙墓9を検出した。

墓壙内には鉄剣、土師器皿、烏帽子が副葬されていた。中でも烏帽子は中世に生きた成年男性にとっては一般的な被り物であるが、有機質材料であるという特性上、出土例は日本全国で20数例を数えるに過ぎない。本調査で出土した烏帽子は完形であり極めてその出土状況は良好であったが、非常に脆弱で劣化が予想されるため、レプリカを作成して出土時の三次元の情報として活用することとなった。なお、レプリカ作成は（株）京都科学に委託した。本報告では、そのレプリカ製作工程を紹介する。

1. レプリカの作成

(1) 遺物の検出

まず、現場で墓壙の検出を行い、遺物についた土を落とし、レプリカに残したい出土状況をセッティングする。型取りは正確におこなわれるため、この現場担当者による作業はもっとも重要であり基本的な行為である。



(3)

(2) 色見本をつけて写真撮影

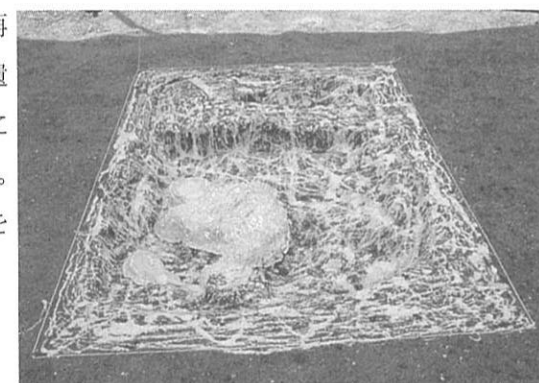
製作に欠かせない彩色工程のため、遺構に色見本をつけて写真撮影をおこなう。



(5)

(3) 錫箔を貼る

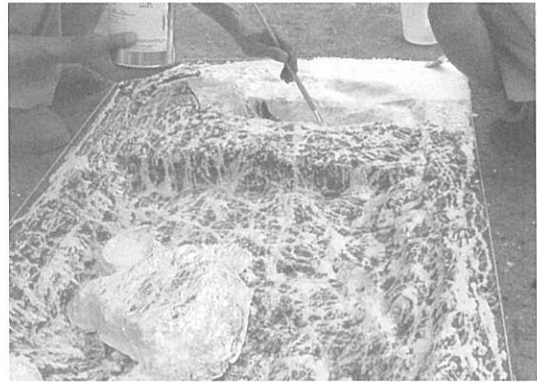
シリコン（RIGOLAC）を遺物にかけて型取りをおこなうため、直接にシリコンをかぶせることのできない遺物に錫箔を貼る。錫箔の上からシリコンを塗布しても再現精度は十分である。また、錫箔を貼る前に立体的な遺物の隙間に粘土を充填して遺物が引っかからないように細工する。本例では烏帽子と土師器皿に錫箔をかぶせた。墓壙上より出土した鉄剣については、出土位置に粘土を置き、別取りとした。



(6)

(4) 水糸を張り範囲を確定した上で型枠を作製する

シリコンをかぶせる位置を決めるために測量し周囲に範囲を明示するために水糸を張った。



(7-1)

(5) シリコンを塗布する

広い範囲の遺構をはぎとる場合は吹き付けをおこなうこともあるが今回は遺構の面積が小さいため、筆でシリコンをかける手作業となった。また、シリコンを直接に遺構へ塗り付けると、筆で遺構面を引っ張り土が筆に付着するために、1層目はシリコンをまんべんなく筆で垂らすという手法をとった。



(7-2)

(6) 乾燥 (1回目)

その後、一時間程度、乾燥させた。

(7) シリコンの裏打ち

シリコンを強化するバックアップのためにビニロンクロスを貼り、特に弱い箇所にはガーゼを貼る。シリコンを剥ぎとって持ち運びに使う型枠のホゾにするため、数カ所にシリコンのかげら (チョボ) を置き硬化を待つ。



(8)

(8) シリコンの塗布、乾燥 (2回目)

2層目のシリコンを塗布し、更に一時間程度乾燥させた。

(9) シリコンを入れる型枠の作製

シリコンには柔軟性がある為剥ぎ取り後そのまま持ちかえることはできないため、遺構を剥ぎ取ったシリコンはガラスのクロス (FRP) の枠に入れる。そのため、ガラスのクロスを使用して型枠をシリコン枠の上から作製する。凹凸があって引っかかりそうな箇所には粘土を充填しラップをかけておきガラスのクロスの上から型枠に遊びをつくる。ガラスのクロスの上にポリエステル樹脂 (+



(11)

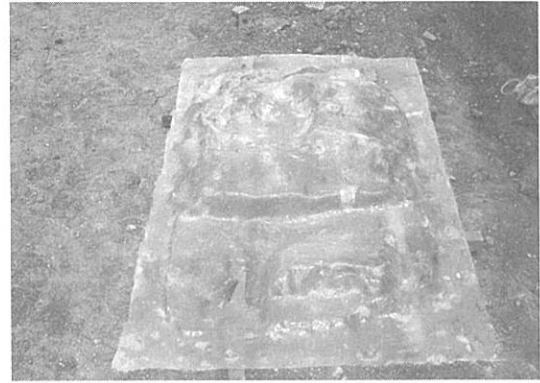
硬化剤) を塗り、遺構にかぶせる。

(10) 乾燥 (3回目)

その後、一時間程度乾燥させる。

(11) シリコン型枠の着脱

木枠を作って遺構に載せ、シリコン型枠の上にもガラスのクロスを重ねて樹脂をかぶせて木枠を固定する。



(12)

(12) クロスをはがす

一時間程度の硬化待ちの後にガラスのクロスごと型枠をはがす。



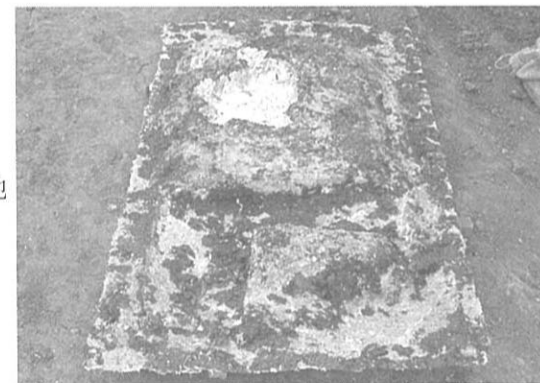
(13-1)

(13) シリコンをはがす

ガラスのクロスとシリコンの間に充填した粘土をはがし、シリコンをはがす。

(14) 土のサンプリング

彩色のために土をサンプリングする。今回は周辺の地山、掘方埋土、墓壙内埋土をサンプリングした。



(13-2)

(15) 遺物の取り上げ

型取り後に遺物を取りあげる。土師器は容易に取り上げ可能だが、烏帽子は土と密着しているため、後日改めて土ごと切り離すこととする。→ (番外編)

(16) 彩色作業

土のサンプリング、写真、遺物をもとに工房内でレプリカの作成ならびに着色作業をおこなう。烏帽子は切り取り後に持ち帰って作業をおこなう。



(16)

II. 番外編 (烏帽子の切り取り)

烏帽子は墓壙の底部に密着しておりまた、大変脆弱であるため、硬質発泡性ポリウレタン樹脂による墓壙の切り取りをおこなった。以下にその工程を記す。

(1) 烏帽子の検出

烏帽子を切り取るということは墓壙そのものを破壊することとなる為、墓壙の検出、遺物の出土状況の実測等はすべて終了していることが前提となる。検出した烏帽子はシリコンの型取りで作製した保護枠を利用して保護する。



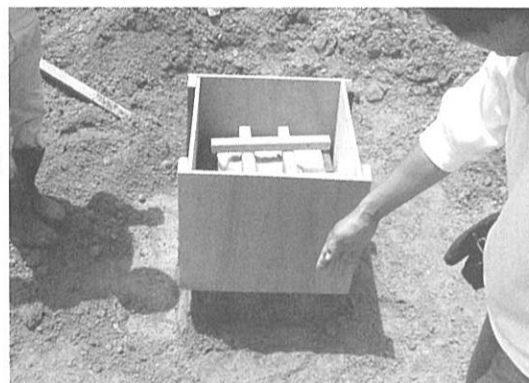
(2)

(2) 墓壙の周りの土を掘り下げる

烏帽子を含め、土をブロックごと切り取るため、周りの土をショベルカーにて掘削し、柱にして残す。

(3) 切り取りの準備

烏帽子の乗った柱状の土のブロックを切り離せるようにベニヤ板で側面を固定する。この時、烏帽子の周りは発泡ウレタンで保護するためにそのスペースを作る。



(3)

(4) 発泡ウレタンの使用

硬質発泡性ポリウレタン樹脂を使用し、烏帽子を保護した上遺構の土ごと切り取る準備をおこなう。

(5) 遺構の切り取り

発泡ウレタンの硬化待ち後、ベニヤで覆った側面の下に金属のボルトを打ち込み、地山より切り離す。



(4-1)

(6) 切り取り後の作業

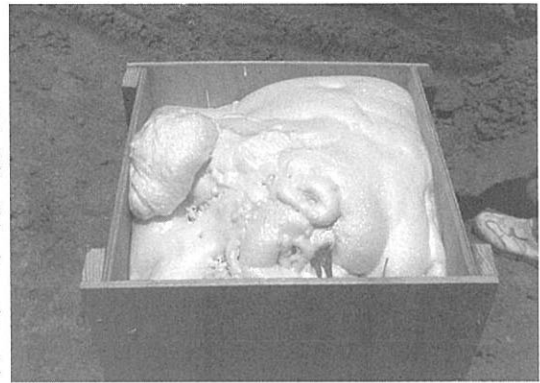
土ごと切り離した烏帽子を着色工程と保存処理のために工房へ移す。

2. まとめ

以上、シリコンの型枠づくり2日、遺構の切り取りに1日、レプリカの作成ならびに彩色作業に約1ヶ月を要して完成した。完成したレプリカはほぼ本物の遺構と変わらない精度を保ち、半永久的に保存が可能である。有機質遺物とは、堆積環境、出土してからのケア、遺物そのものの腐食の進行状況等によって日々変化し続けるため、三次元データとして再現することは極めて困難である。今回、烏帽子という極めて稀に出土する有機質遺物を検出した中世墓を、レプリカとして後世に伝えることができるのは非常に意義深く、広く活用されることを願うものである。

謝辞

今回のレプリカの作成は（株）京都科学に委託した。担当の中宿泰氏、ならびに作業に携わったすべての方々に感謝の意を表す。また、遺構の切り取りの際には元興寺文化財研究所の塚本敏夫氏、工事関係者の全面協力を得た。記して感謝の意を表す。 (小暮)



(4-2)



(5)

第4節 高宮遺跡の竪穴住居作り付け竈について

高宮遺跡では、平成13年度の調査において9棟の竪穴住居を検出し、うちB1区竪穴住居1、同区竪穴住居2、B3区竪穴住居9、C7区竪穴住居17、同区竪穴住居18の5棟において作り付け竈がみとめられた。いずれも、斜面に立地する方形竪穴住居に竈が作り付けられており、古墳時代中期の初期須恵器併行期に位置付けられる。

とくに、B1区竪穴住居1、同区竪穴住居2、C7区竪穴住居18の竈は残存状態が良好であり、竈の復元形を類推するに足る資料である。なかでも、C7区竪穴住居18の竈（報告では竈2）は竪穴が設けられた斜面の上方にのびる煙道が良好に残存しており、竈の全体形を知る上で、西日本においては非常に稀少な資料である。

また、竪穴住居の改築に伴う竈の改築がB1区竪穴住居1、C7区竪穴住居18においてみとめられた。B1区竪穴住居1では、竪穴の西辺が改築により拡大する際、西辺にあった竈（報告では竈2）が東辺へと改築され（報告では竈1）、西辺にあった古い竈は上部構造が削平された状態で新しい竪穴住居の床面下で検出された。C7区竪穴住居18では、最初の床面（報告では床面2）の上に厚さ20cm前後の整地土が盛られ、その上面を新しい床面（報告では床面1）とする。煙道が良好に残存する竈は最初の床面に伴うものであり（報告では竈2）、新しい床面では竪穴隅部に近い箇所において焼土、炭化物がみとめられた（報告では竈1）。

各竈の詳細は報告文によとし、以下平成13年度調査の作り付け竈について注意された点を列挙する。

- ・竈は5棟中3棟（B1区竪穴住居1、同区竪穴住居2、C7区竪穴住居17）が西辺、すなわち北から南へとくだる斜面に対して直交する位置に作り付けられる。斜面の竪穴に竈が作り付けられる場合、C7区竪穴住居18のように、竈は斜面上方の辺に作り付けられ、煙道は斜面上方へと伸びる事例が比較的多いなか、興味深い傾向を示す。
- ・竈の構築材にはB1区竪穴住居2、C7区竪穴住居18では橙色シルトが用いられ、前者ではスサの混入がみとめられた。
- ・C7区竪穴住居18の竈では、煙道の断面形が、天井部がやや曲面となる長方形であり、煙出口との境に高さ5cmの高まりがみとめられる。この高まりは煙道内に雨水が入り込まないためのものとみられる。
- ・C7区竪穴住居18の竈では、掛け口に掛かった土師器甕がつぶれた状態で出土した。土師器甕片は外縁で体部片が2～3重に立った状態で検出され、埋没する過程で自然に土圧でつぶれたものとするには疑問が残る。同様の検出状態は豊中市蛍池東遺跡の竪穴住居の竈でみられる。蛍池東遺跡は、高宮遺跡と同じく古墳時代中期の初期須恵器併行期の竪穴が多く検出されており、比較的是やい段階で竈が導入されていること、韓式系土器が出土することから渡来系の人々の集落と想定され、高宮遺跡と共通する点が多い遺跡である。他に同様の検出状態を知らないが、今後の調査において類例の蓄積がまたれる。

引き続き実施された平成14年度の調査では、前年度調査したB2区竪穴住居2の下層が明らかにされたほか、20棟の竪穴住居が検出された。うちB1区竪穴住居3・4、B12区竪穴住居14、C9区（西）竪穴住居16、F2区竪穴住居19、F3区竪穴住居22、E1区竪穴住居24、E3区竪穴住居25～

28の11棟において作り付け竈がみとめられた。丘陵斜面および頂部付近に立地する方形または長方形竪穴住居に竈が作り付けられており、B12区竪穴住居14が奈良時代に位置付けられる以外は古墳時代中期の初期須恵器併行期に位置付けられる。したがって、平成13～14年度の調査成果を合わせると、古墳時代中期の初期須恵器併行期に位置付けられる28棟の竪穴住居中15棟に竈が作り付けられることとなる。

B1区竪穴住居3・4は、同一方向で近接しており、竪穴住居3は東辺に、竪穴住居4は北辺に竈が作り付けられる。これらの東に位置する竪穴住居1・2の竈は西辺または東辺に作り付けられており、竈を作り付けるにあたってとくにその方向に規制はみとめられないようである。ただし、これらB1区竪穴住居1～4のほか、竈はみられないものの、奈良時代大形総柱掘立柱建物下層のB2区竪穴住居6・7は方向を同じくし、近接して設営され、とくにその北辺はほぼ直線上にのることから、これら南斜面に位置する竪穴住居の設営にあたっては、一定の規制があったと想定される。

これに対し、高宮廃寺に対峙する北斜面から尾根頂部付近にあたるF2・E1～E3区にひろがる竪穴住居19～21・23～28は削平のため残存状況が不良ではあるが、一定の方向性はあるものの、B1区、B2区竪穴住居1～4・6・7ほどの規制はみとめられない。このような状況が立地に起因するものか他に要因があるのかは不明であるが、興味深い状況である。

B1区竪穴住居4、E3区竪穴住居25・26では、竈が廃棄時に破壊されたとみられる出土状況を示す。B1区竪穴住居4では、北辺中央部において長さ1.5m、幅75cmの範囲に焼土、炭化物、土師器高坏がひろがり、竪穴住居の拡張に伴い竈が破壊された可能性が指摘されている。E3区竪穴住居25では、竈の袖部、煙道部は残存するが、焚き口の手前50cmの位置に焼土ブロックが40×60cmの範囲に集中して出土する。竈の廃棄に際し、天井部など竈の一部を破壊後かき出した可能性が考えられる。E3区竪穴住居26では、東辺中央部において焼土と炭のブロック土が盛り上がった状態で出土しており、竈は完全に破壊されて廃棄されたと考えられる。竈の出土状況をみると、C7区竪穴住居18下層竈2のように甕が掛け口にかかった状態で煙道部まで残存するというような良好な出土状態を示す例がある一方以上に示したような焼土・炭化物ブロックの状態でも出土する例がある。後者は竈廃棄時の破壊行為が推定される例であり、竈廃棄時の破壊行為は近代においても認められたことを勘案すると、このような竈廃棄時の破壊行為あるいは破壊するという思想は竈が導入されるとともにもたらされた可能性がある。竈廃棄時には手づくね土器等を燃焼部に置くなどさまざまな行為がみられる。今後、以上に示したような竈廃棄時の破壊の事例についても詳細に検討する必要がある。

E3区竪穴住居27では、壁際の土坑内に細かい炭化物と二次焼成を受けた土師器片からなる層が重なってみられる。C7区竪穴住居18上層竈1も壁際の浅い円形土坑内に同様の堆積が一層みられる。明確な構造物はみとめられず竈と断定できる出土状況ではないが、今回の調査において同様の出土状況が2例みとめられたことから、他にも類例の存在が期待できる。資料の蓄積をまって検討したい。

また、移動式竈がC7区竪穴住居18と竪穴住居17のほぼ中間地点にあたる溝23西側で据えられた状態で出土した。焚口を平野側へ向けた状態であり、燃焼部には炭化物がみとめられた。竪穴住居作り付け竈とともに用いられた可能性がある住居外火処の例として重要である。

以上、今回の調査では、多様な古墳時代中期、初期須恵器併行期の竈資料を得ることができた。竈出現期の河内湖沿岸のひとつの集落の様相として、まとまった資料と考えられる。 (合田)

第5節 高宮遺跡とその周辺の古墳時代以降の集落構造の変遷

1. 高宮遺跡の既往の調査（第114図）

高宮遺跡の所在する「讃良郡」という地域の郡衙や設置場所、条里の実態についての有力な知見は今のところない。

さて、讃良郡には4ヵ所の古代寺院がある。それらは太秦遺跡の北、「河内の秦寺」の推定される「太秦廃寺」、讃良川上流右岸にある讃良岡山遺跡内の白鳳寺院の「讃良寺」、清滝に所在する奈良井と中野遺跡の東側の「正法寺」である。そして「高宮廃寺」は高宮遺跡の北西に位置する。

その高宮廃寺は現在の^{おおもりみおや}大杜御祖神社の敷地を中心に存在する。昭和54年度に寝屋川市教育委員会で寺域確認調査が行われ、薬師寺式伽藍配置と復元された。素弁八葉蓮華文軒丸瓦、単弁八葉蓮華文をもつ平城宮式軒丸瓦と唐草文の軒平瓦から飛鳥時代後半に創建されて奈良時代まで存続し、火災により平安時代には一度廃絶したとされる。

この高宮廃寺の周囲に広がる高宮遺跡のうち、主に西側はそれに先行する古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構が検出される。それらは大形掘立柱建物、石組井戸、柵列で隔てた竪穴住居などである。

大杜御祖神社は、もともとの伝承地が現社の北西約50mにある。この箇所は昭和55年の調査で、2間×3間の掘立柱建物が検出される。このような廃寺との関係は北河内では枚方市百濟寺が百濟王神社と接し、高宮廃寺と同じく薬師寺式伽藍配置という類似性がある。また、枚方市九頭神廃寺と九頭神遺跡が郡寺・郡衙という関係が想定され、これと似る。現状の資料からもこうした複合体的な関連要素を「高宮」という地域もまた、備えていると言える。

そして一方、西側の現高宮集落域では、「保延六年」（1140年）の墨書曲物が平安時代後期の井戸から出土することから、中世的な村落展開の可能性も大いに考えられた。

2. 古墳時代以降の建物群の推移（第108・114図）

さて、既往の調査区である高宮廃寺の西側にある飛鳥時代頃の建物と柵列は、北北西－南南東の方向にあり、枚方撓曲によって生じた崖の方向に沿って建てられたと考える。本報告の平成13～14年度の高宮遺跡の調査区でも、この方向にA区の北半をはじめとして中世など地形に則した建物が建てられる。しかしながら、B1～B3区を中心とする地点では東西南北方向の建物が基本的で全般の傾向にあることから、それらと性格を異にしている可能性がある。

同様に、古墳時代中期の竪穴住居の方向もまた平野をのぞむ丘陵端では崖沿いに等高線に沿って並ぶが、東側では谷地形に合わせたものと丘陵上斜面地にかかわらず東西南北軸のものも見られる。後者は特に大規模な建物群のある地点に顕著であり、集中することから、古墳時代中期初め以降に、これを梶子にして、東西に古代・中世の建物、屋敷が順次展開拡大していった地形的な前提条件が存在したことは明らかである。

ただし、古墳時代中期後葉・後期前半の遺構が平成13～14年度の調査区に見当たらないことから、一部は高宮廃寺側へ移動したことや、四条畷・寝屋川市の蔀屋・讃良郡条里遺跡で検出される当該期の遺構・遺物から低地への拡大も考えられる。また、北東にある太秦古墳群の展開する時期でもあること

は複雑である。いずれにせよ、各時代の建物はこの南向きの眺望の良い斜面にあえて選定されたと考えられる。

飛鳥時代に入り、北東側にある大尾遺跡に2群の掘立柱建物群が見られる。また、高宮遺跡西側のA区、東側のF区でも群在するようになる。平成14年度調査地と同じ台地上にある、さらに北東側の寝屋南・寝屋東遺跡の発掘調査成果をも合わせ考えると、枚方丘陵縁辺部の小尾根上には5・6棟ほどからなる屋敷地が点在していたことになる。それらはやはり東西南北方向軸に沿う傾向をもっていた。

高宮遺跡の大形総柱掘立柱建物群はその後半期に姿をあらわしたと考えられる。その立地は、先の竪穴住居群が形成した東西方向の雛壇の東側を利用して建築される。高宮廃寺がそれより先行するかどうかはともかく、そのころには北北西に谷を隔てたところにその姿を呈示していることは間違いない。それらの軸は比較的に一致する（第114図）。

大形総柱掘立柱建物は掘方の大きいことが特徴的である。理由の一つは、調査所見から掘方底面の高さが建築前の急傾斜の地形に合わせて南北方向に階段状に掘り込まれており、それなりの掘削深度を必要としたために規模を大きくする必要性に起因した。廃寺とを有機的につなぐ決定的な遺構は平成13～14年度の調査区で認めることはできなかったが、これら大規模建物群の南側には土器群を伴った東西方向の溝があり、さらにその西側の崖法面には北西－南東方向に傾斜が強くなった部分につながり、それが高宮廃寺の南門前までつながっていた可能性がある。また、崖下にはA区西側の輪郭に沿うように幅5m程の道路状遺構があり、不規則な丘陵端沿いの地形ゆえ、固定的ではなかったであろうが、南から高宮廃寺、大規模建物群へ向かう路として利用されていた可能性がある。

奈良時代に至って、大規模建物群を中心として平安時代初めまでは、建物は西側のA区で検出された古墳時代から続くと思われる道路状遺構沿いからB区を中心として集中し、東側のF区で検出した南北道まで面的に連続して拡がる。また、高宮廃寺を挟んで西側にも建物の集中が見られたようだ。想像をたくましくすれば、F区の南北道の軸が廃寺伽藍軸と合うことから、伽藍を中心とした外郭としてのエリアにB区の大規模建物群はすっぽりと収まる。そして、A区は中心軸上に発展し、F区は東郭上に沿って建物が展開する要因になった可能性がある。今のところ、寝屋川市域の国道1号バイパス建設予定地の中では、このエリアが最も掘立柱建物が密集する地点であり、遺構濃度からもこの地点が重要であったことを物語っている。

平成13～14年度の調査区A区より西側は平安時代後半期の谷の氾濫によって奈良時代の遺構は認められないが、流された遺物や土砂の状況や、さらに西側の北西－南東方向の河道を見ると、その辺りまでは建物集中の最大域は拡がっていたものと考えられる。したがって、この区域に拡がる現在の田畑に見られる条里痕跡は中世以降になる。その水源もまた、現在の宮池のような溜池築造が必須条件となる。

それでは古代においての水田域の東限を求めるならば、調査地西側の讃良郡条里・小路遺跡で検出した北西－南東方向にのびる幅10m程の河道の存在がある。これは、丘陵から西にのびる縄文時代前期に形成された微高地を斜めに分断していることから、かなり意識的に掘り込まれ、運河的な引き込み水路として機能したことになる。これを境にようやく北側の高地西側に讃良川からの灌漑水が及ぶことになり、奈良時代での条里の東側の限界線を示すとともに、同時に高宮遺跡を中心とした建物群の南西限の区画を表すものとなる。

また、平成14年度の調査で検出した河道内の杭列の状況から考えると、切断した微高地付近に橋が設けられた可能性が強く、その周囲で「巷の祭祀」がとり行われたと考える。この河道は中世には溜ま

り状の窪みとなることから開削当時の役割を果たさなくなり、溜池状施設として機能したと考えられ、以降、小石混じりの造成土で徐々に埋め立てられ、灌漑のチャンネルも大阪外環状線付近の扇状地の田畑も含めて、その北側は高宮廃寺南側にある「宮池」に多くを頼ることになる。

ところで、平安時代の初めには、条里方向に配列された屋敷地が河道の西側にも見られるようになる。この類は大阪市長原遺跡などで見られるような条里区画毎で展開される小規模な屋敷地の拡散現象に伴うものとの共通現象と考えられ、B区を中心とした地点でも散漫ながら建物群が拡散的に存続することと同様な動向となろう。

中世に入って高宮遺跡の地は、再び、丘陵上、その斜面の高台に建物が集中し、A区西側からB区東側までまんべんなく雑壇上に屋敷地がひしめき合うようになる。屋敷地は少なくとも西側の平成14年度調査の高宮遺跡（その2）を含めて11区画は存在する。総じて、丘陵下からの進入ルートから3ブロックに分かれる。畑地+井戸+建物がセットの西側丘陵端、屋敷墓？+炊事施設（火処）+建物が中央、炊事施設（火処）+建物が東側、中央と東側ブロックの丘陵上部には井戸及び土壇墓が築かれる。

3. 河内平野北半の古代集落の展開

高宮遺跡は、河内平野を一望できる斜面にあり、古墳時代以降累々と集落が営まれていたことになる。

このことは河内平野北半部において重要な地点であり、同時に核的な存在であったことは容易に推測できる。国道1号バイパス建設予定地の遺跡確認調査の結果、古代において河内平野北半部は南にゆるく傾斜する、低平で、広大な耕地が広がっていたことになる。はたして、そこに立地する集落と高宮遺跡はいかなる関係にあったのであろうか。

河内平野北半部には、これら集落をつなぐ主要なルートがある。

まず太秦廃寺・高宮廃寺・讃良寺・正法寺が南北に並ぶ丘陵麓の東高野・河内・山根街道沿いのルートはもちろんであるが、平野部においても二つが存在する。一つは、安土桃山時代以降に飛躍的に発展する淀川沿いにある現在の京阪本線（京街道）沿いである。もう一つは、少なくとも弥生時代前期以降から活用される寝屋川沿いのルートである。南半部は現在のJR学研都市線沿いとなる。

現状では前者淀川ルートの調査例が多く、寝屋川市池田下村・池田西遺跡、守口市大庭北遺跡、門真市橋波口遺跡が奈良時代には集落形成がはじまっていることが分かる。

後者の寝屋川ルートは、丘陵から西流する川が合流する寝屋川市長保寺・讃良郡条里遺跡が内陸の湊的な役割を果たし、それを起点とする。それより南流、石切付近で再度西流することになるが、その下流には大阪市茨田安田遺跡がある（第1図）。

両者の上流接点には寝屋川市高柳廃寺があり、下流には大阪市難波宮跡、摂津国分寺跡がある。

さて、寝屋川ルートの遺跡群の確認が遅れているが、淀川ルートの拠点的な点在性を重視すると、門真市上馬伏や大阪市今福辺りで今後核的な遺跡が確認される可能性が大いにある。さらに淀川ルートのあり方を参考にすると、奈良時代集落を核とし、それ以降、中世にかけて面的に拡大する傾向がある。これは国道1号バイパス関係の門真市域の確認調査などの所見においても、中世遺物がまんべんなく散布することから十分に想定することができる。また、このことは同時に寝屋川ルートにおいても淀川ルートと同様の集落展開があったことを示唆する。

こうした状況にあって、この2つの接点である高柳廃寺は特に重要である。と同様に丘陵部、生駒山

西麓の接点となる高宮遺跡および高宮廃寺の立地は類似する役割を果たすものと考えられ、より重要なものとして今後とも注目できる。

このことから、両者の占める位置は前者が主に淀川ルートを中心とし、淀川から寝屋川の範囲を、後者が寝屋川ルートを中心として、丘陵麓ルートの範囲において重要な位置を占めていたと考えられる。

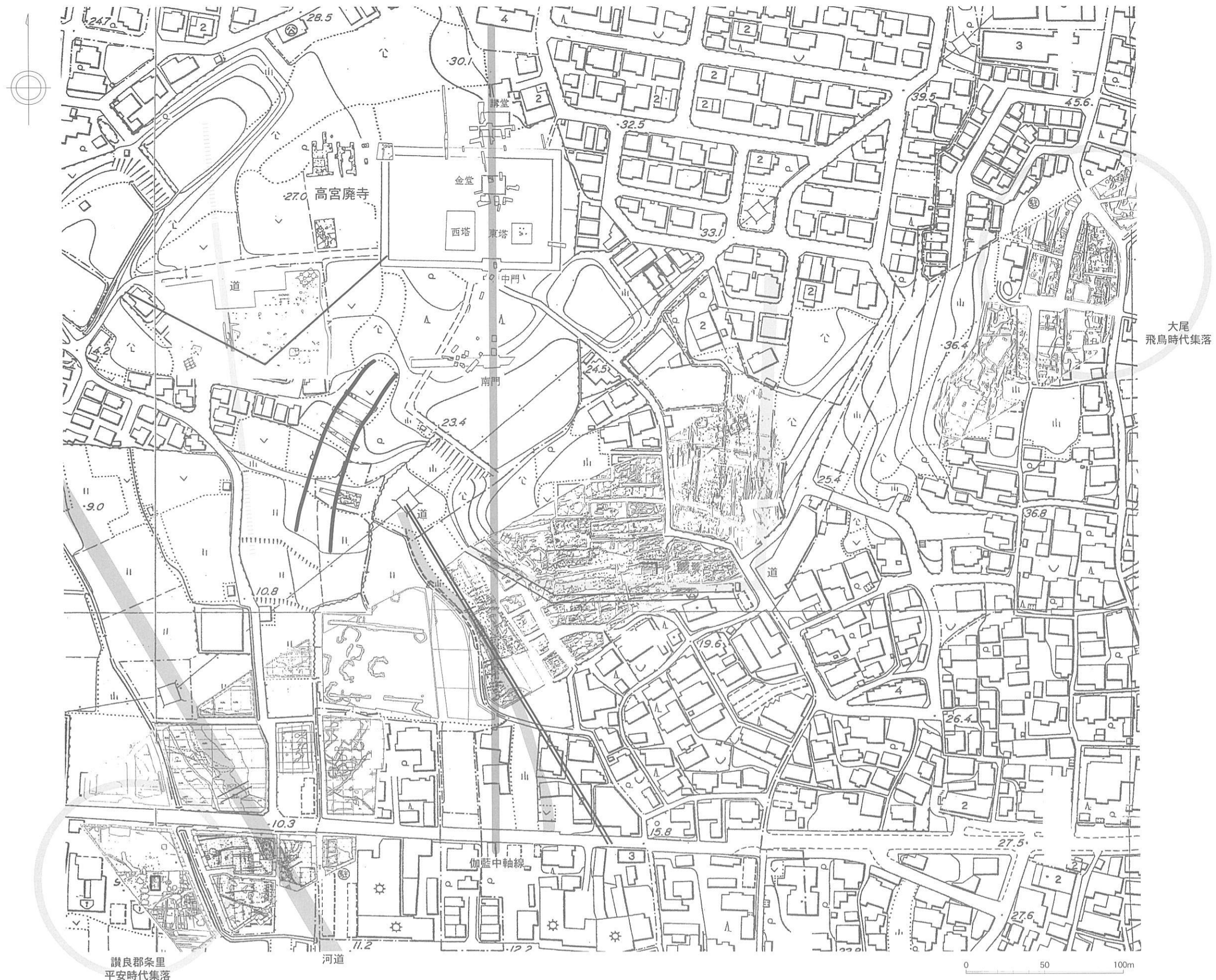
古代集落を核として全面的な展開をする中世以降は、平野北半部の中でも上記のルート沿いに濃密な集中傾向を伺うことができ、特に天井化する河川沿いの微高地に集村傾向がある。中でも門真市北巢本付近は寝屋川沿いに展開する。しかし、それ以降は平野南半部の土砂堆積によって北半部は相対的に低くなり、現在の門真市南半地域が水没するケースが増え、現在の集落と重複する範囲に追い込まれていく。とりわけ平野部は、旧石器時代から相対的に高い淀川ルートに集中する。現在の古川は近世以降にはじめて固定化され、天井川の景観を形成する。そうした事態を受けて丘陵麓に面する高宮遺跡の丘陵斜面にも家屋が集中していくことになる。

現在のところ、高宮遺跡の古代の建物を中心として得られる古代の集落構成と中世への景観イメージの変化は、以上のようなものとなろう。

(一瀬)

《参考文献》

- 大阪府教育委員会 1984 『大庭北遺跡発掘調査概要Ⅰ』
- 大阪府教育委員会 1989 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅰ』
- 大阪府教育委員会 1991 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 門真市教育委員会 1992 『門真市橋波口遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 1994 『池田西遺跡発掘調査概要』
- 寝屋川市教育委員会 1997 『失われた古代の港』
- 寝屋川市教育委員会 1998 『池田西遺跡』
- 寝屋川市教育委員会 1998 『寝屋川市史』第1巻 考古資料編
- 西田敏秀・荒木幸治 2000 「淀川左岸地方における弥生集落の動向」『みずほ』第32号 大和弥生文化の会
- (財)大阪府文化財センター 2003 『大尾遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う小路遺跡発掘調査報告書』
(財)大阪府文化財センター調査報告書第92集
- (財)大阪府文化財センター 2003 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書第93集
- (財)大阪府文化財センター 2003 『太秦古墳群 一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書第99集



讚良郡条里
平安時代集落

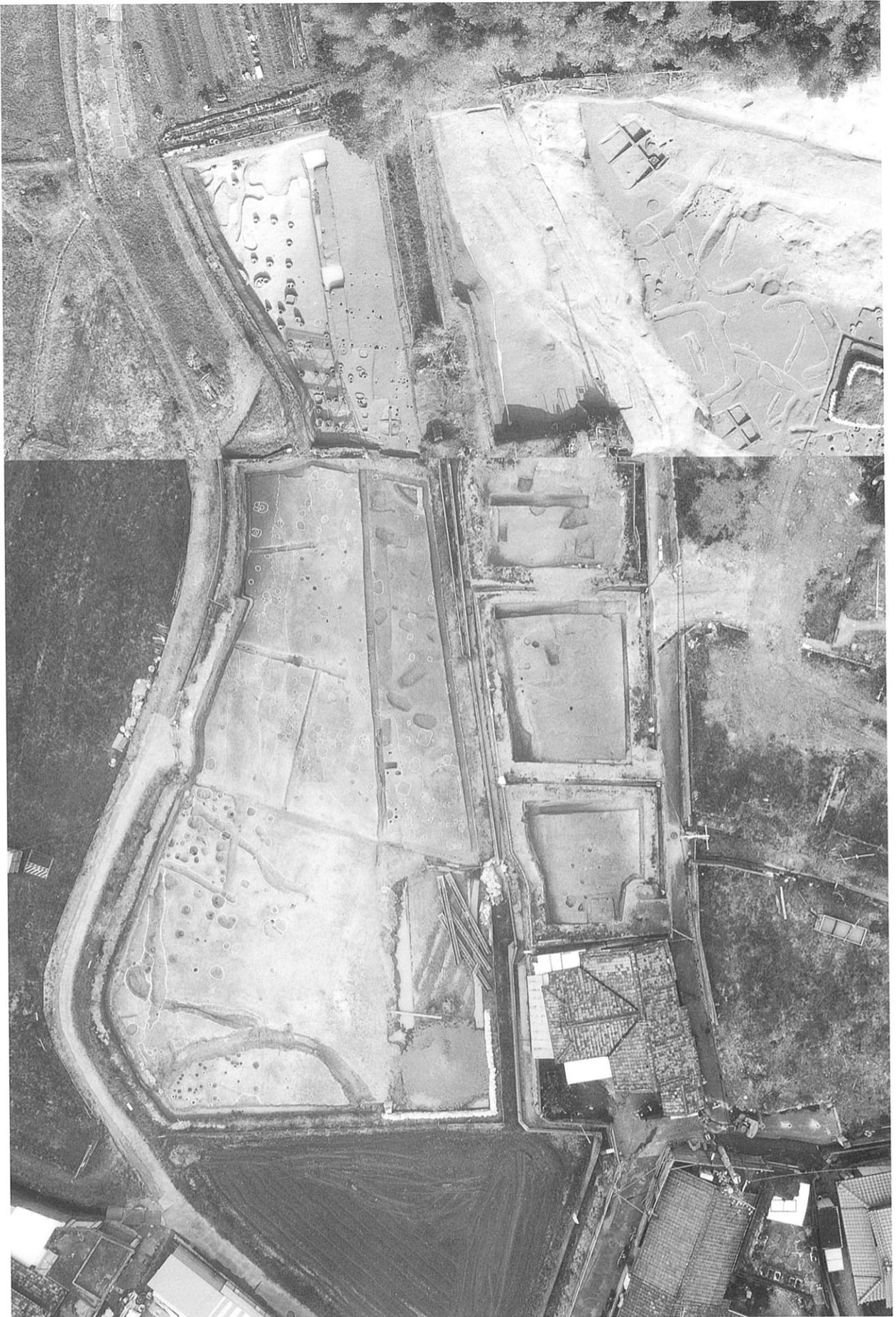
河道

伽藍中軸線

大尾
飛鳥時代集落

第114図 高宮遺跡及び周辺調査位置図

写真図版



A区 全景 航空写真(垂直)

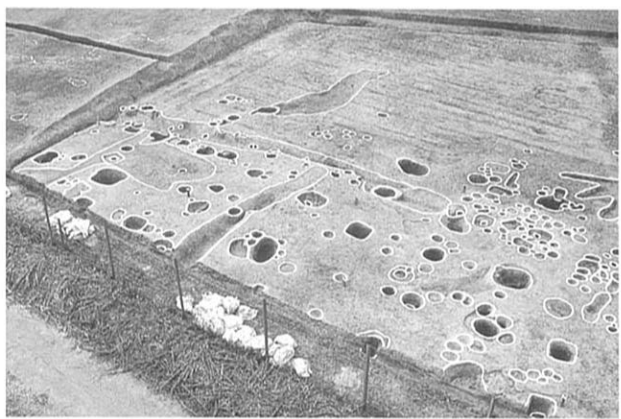
写真図版 2 A区下段



1. A区下段1面 全景 (西↑)



2. A区下段3面西半部 溝1下層 (西↑)



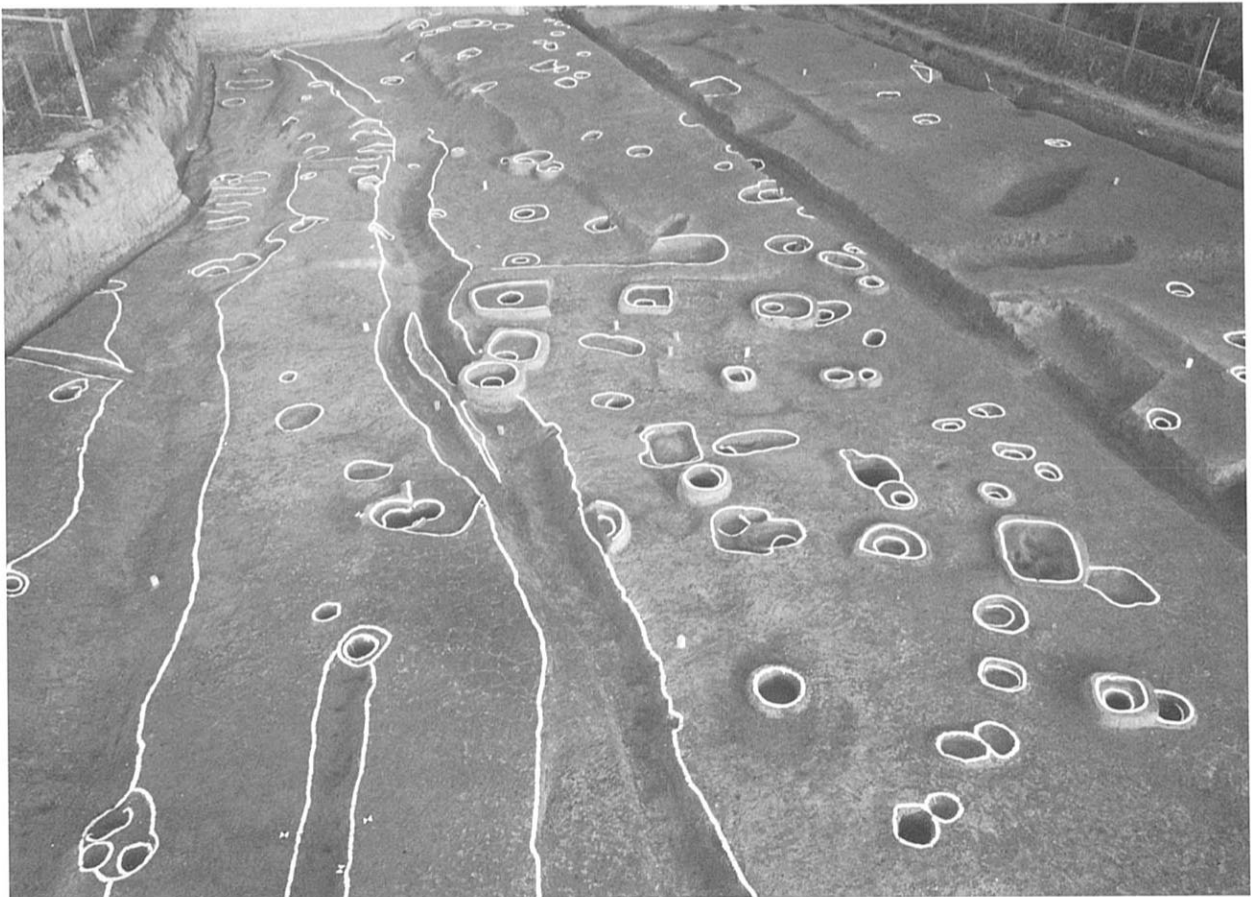
3. A区下段1面 掘立柱建物2他



4. A区下段3面 溝1下層 縄文土器出土状況 (北↑)

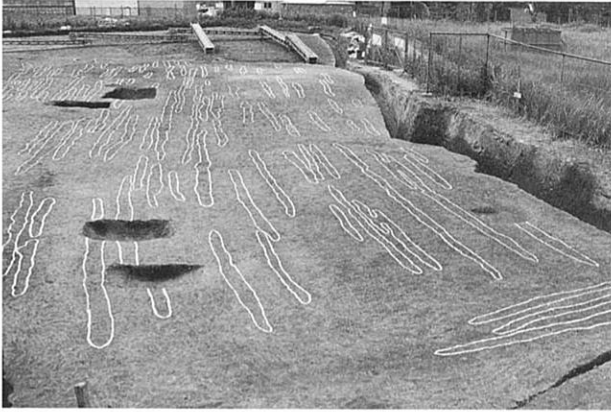


1. A区下・中段8面 全景 (北東↑)

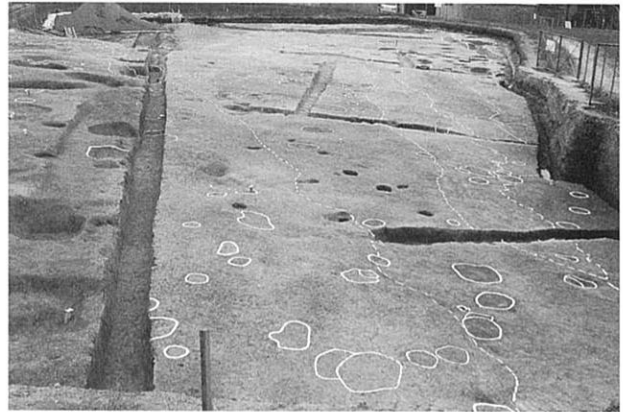


2. A区中段9・10面 全景 (南↑)

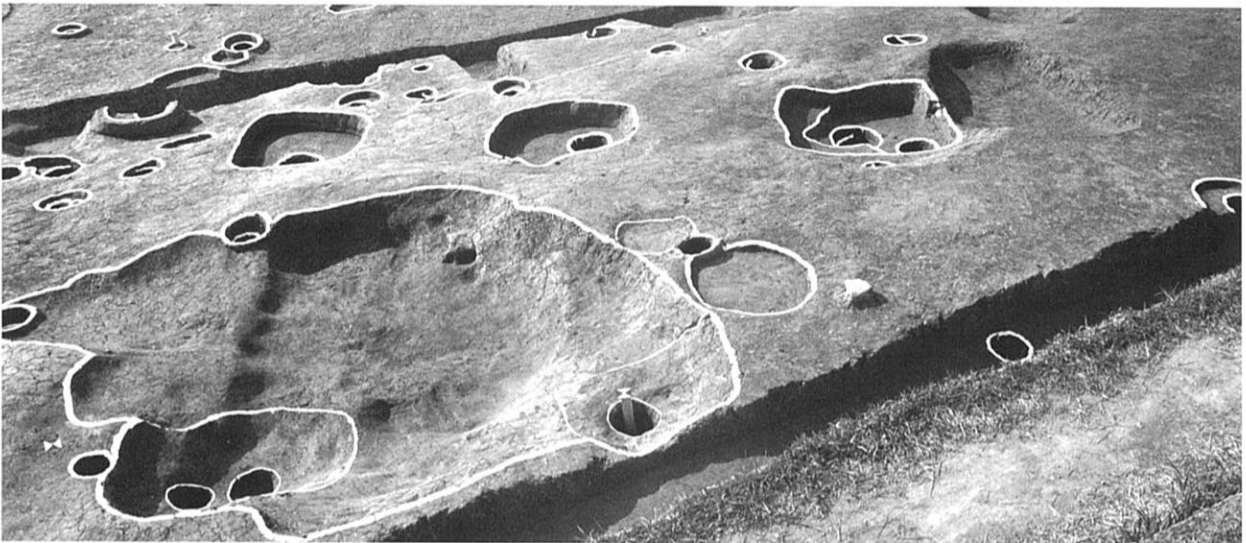
写真図版 4 A区中・上段



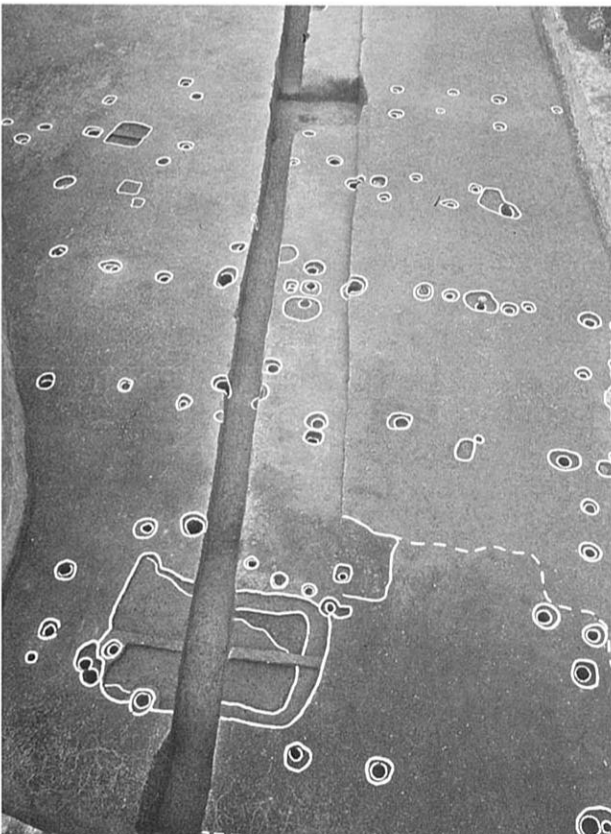
1. A区中段6面 全景(北↑)



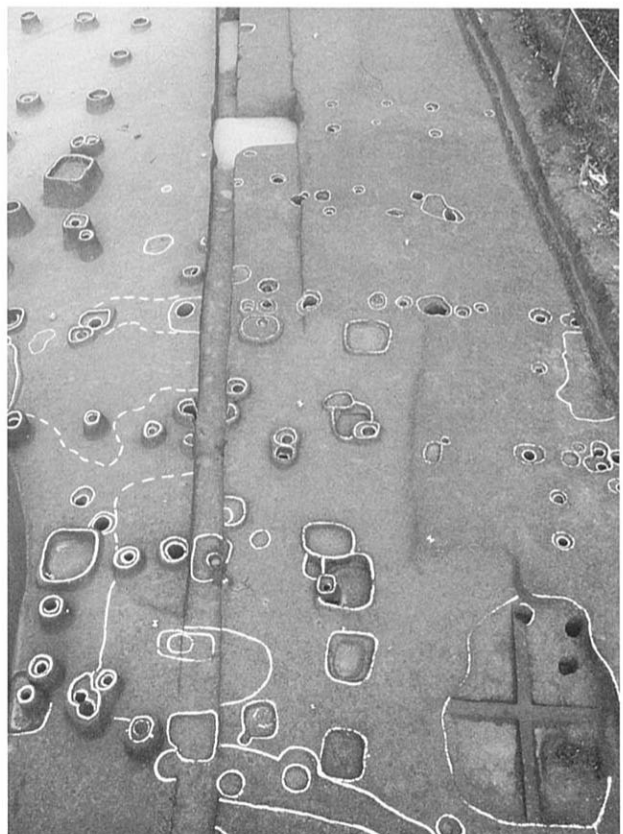
2. A区中段9面 検出状況(北↑)



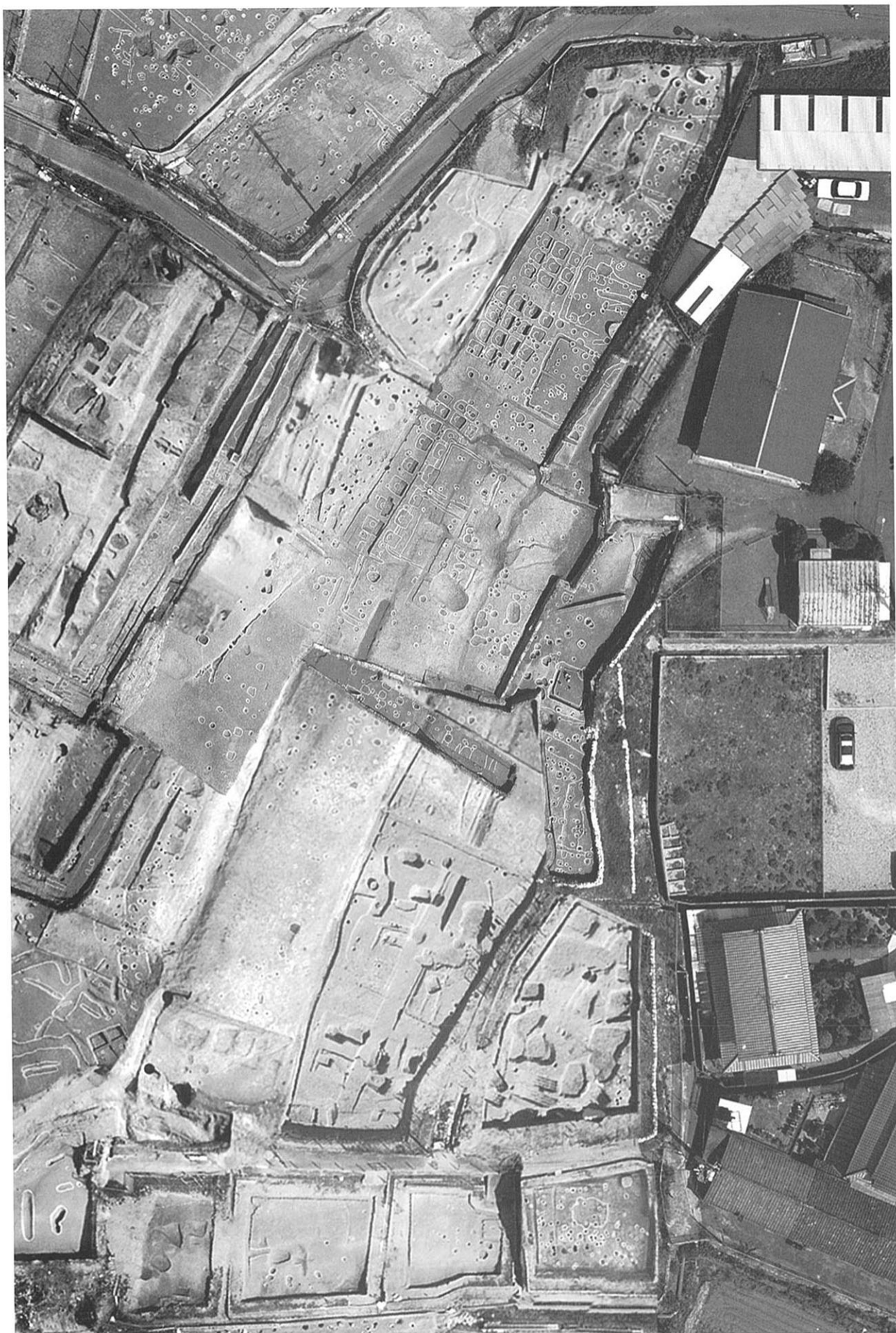
3. A区中段9面 掘立柱建物3東端、土坑1(東↑)



4. A区上段7・8面 全景(北↑)



5. A区上段10面 全景(北↑)



B区 全景 航空写真（垂直）

写真図版6 B1区



1. B1区2面 溝11 (北↑)



2. B1区2面 建物ビットP5の礎石検出状況 (北東↑)



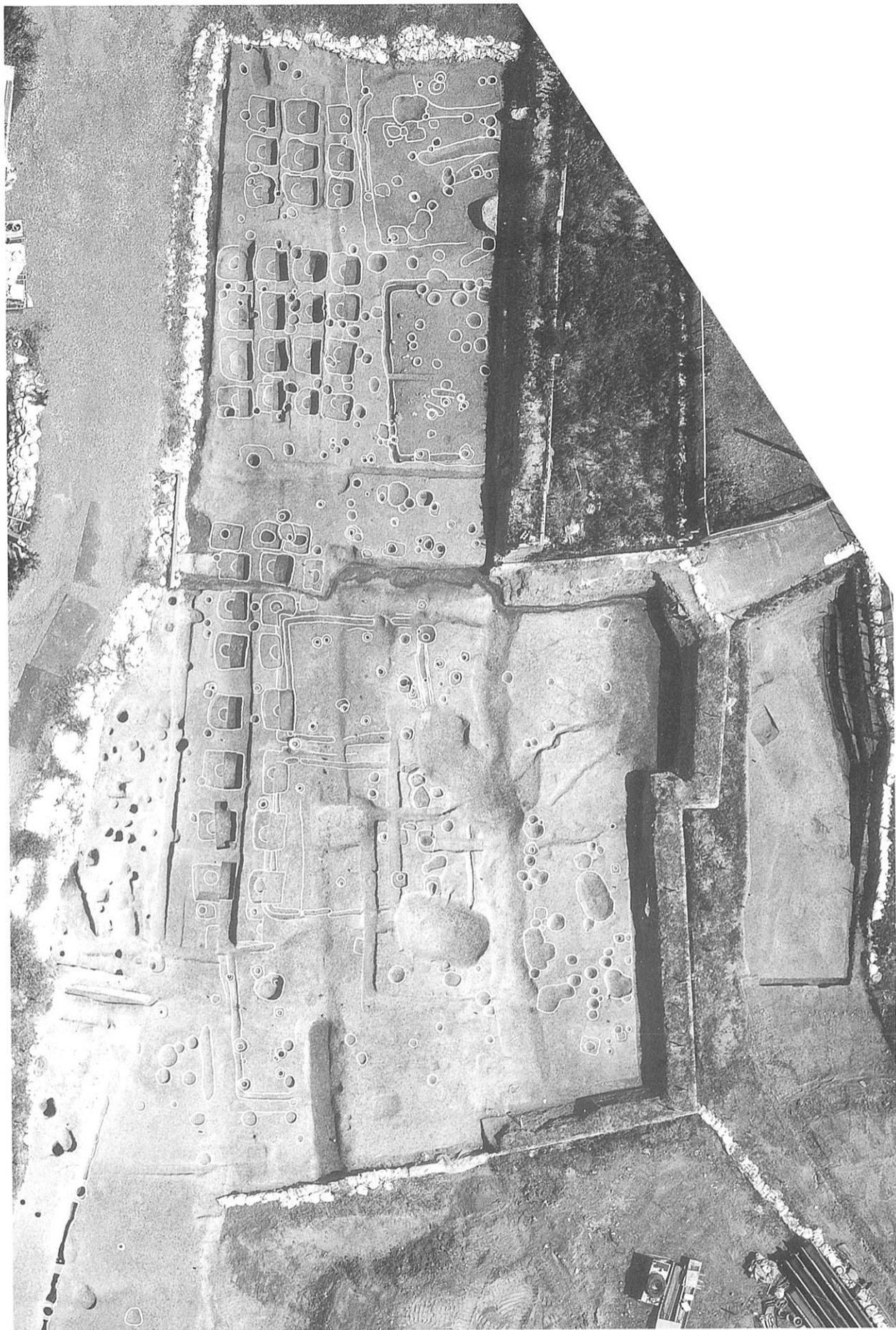
3. B1区西半部2面 (南↑)



4. B1区2面 羽釜出土状況 (西↑)



5. B1区2面 中世遺構 全景 (東↑)



B1・B2区 古代・古墳時代遺構面 航空写真（垂直）



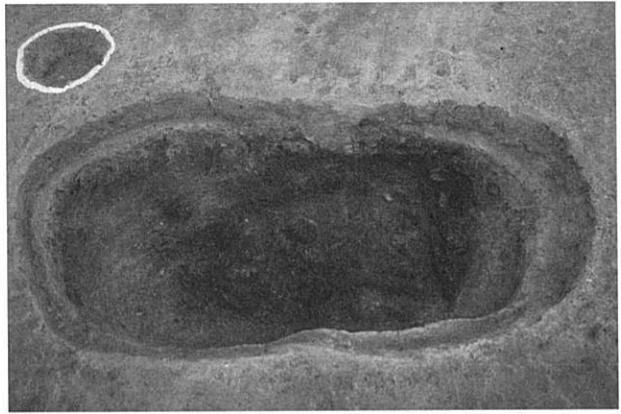
1. B1区3面 大形総柱掘立柱建物5(手前)・4(奥)(東↑)



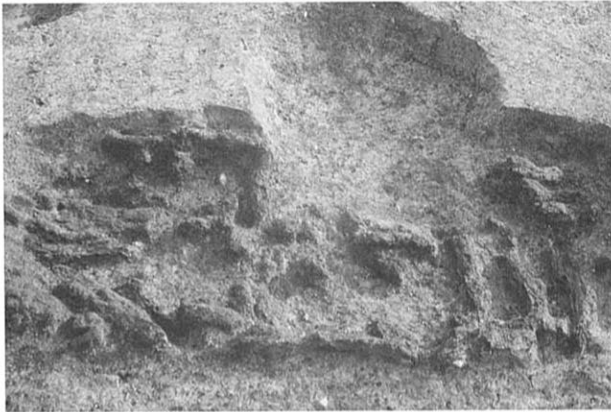
2. B2区 全景(西↑)



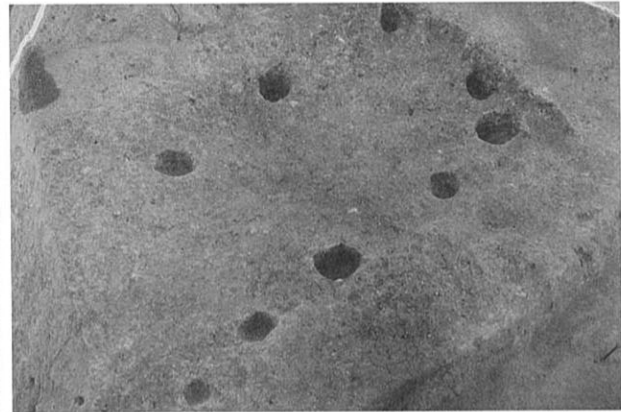
1. B2区2面 ピットP9 (西↑)



2. B2区3面 土壙墓2木炭塚 (南↑)



3. B2区3面 土壙墓1木炭塚 (北↑)



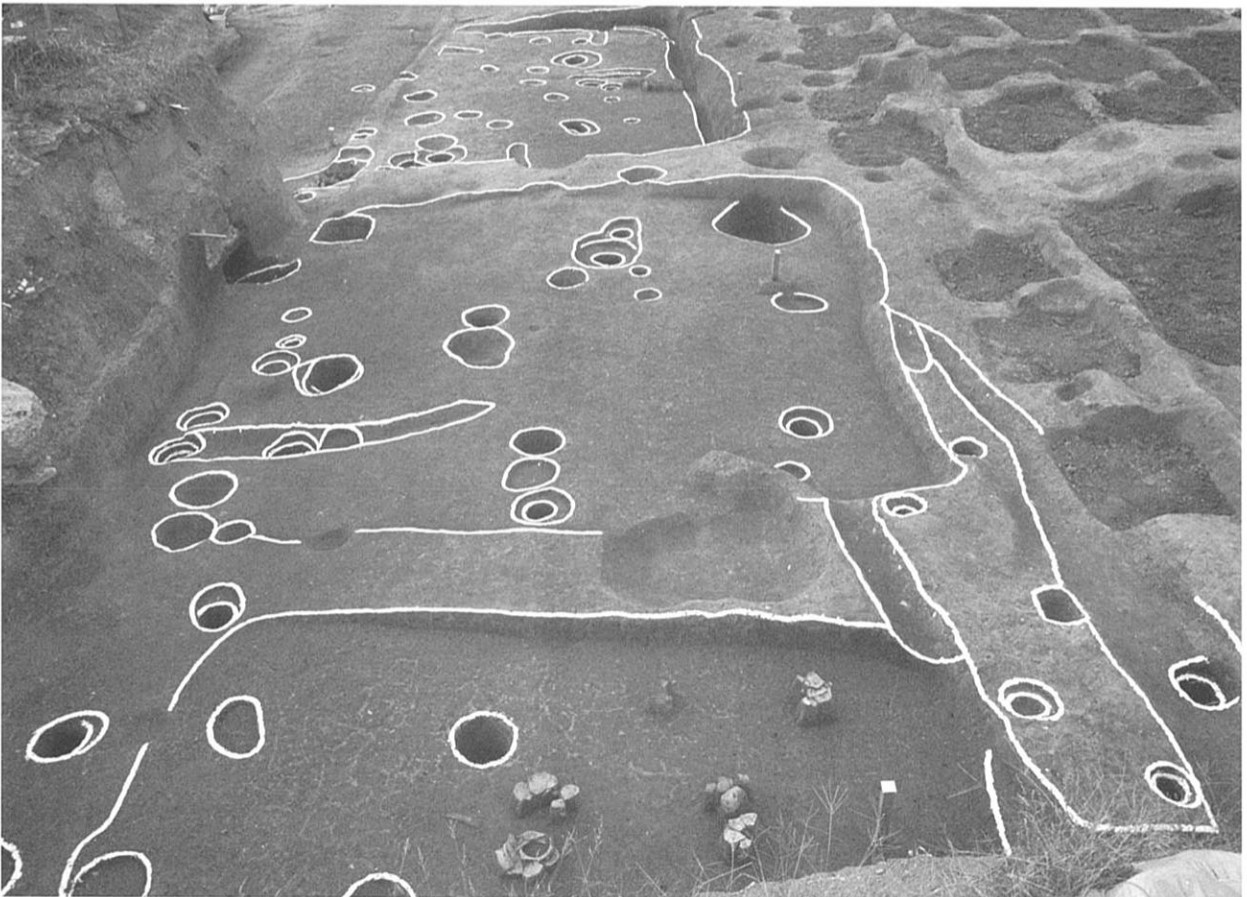
4. B2区3面 土壙墓3木炭塚墓壙底 (南↑)



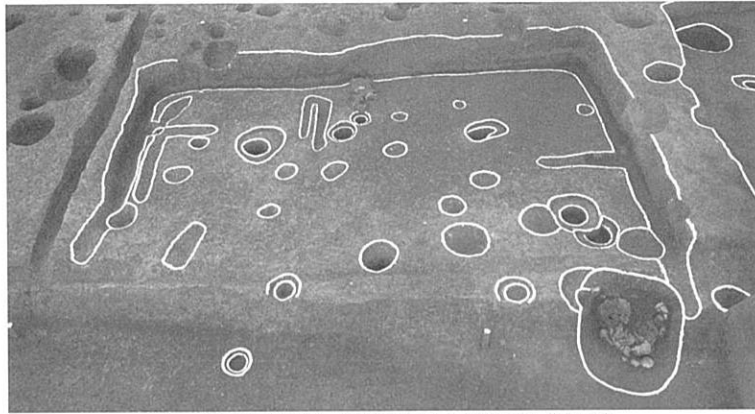
5. B2区3面 大形総柱掘立柱建物1・2 (南↑)



1. B1・B2区3面 竪穴住居群(東↑)



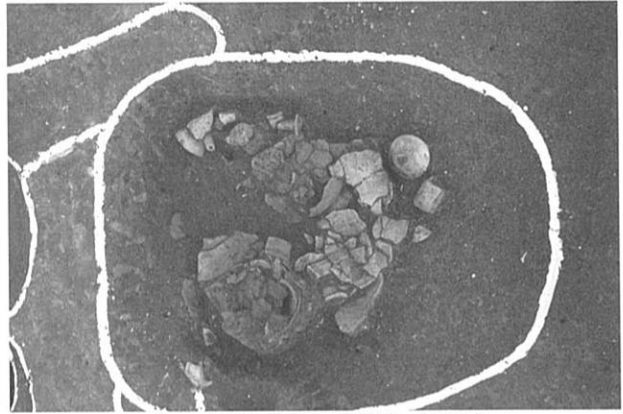
2. B1区3面 竪穴住居2・3上面(東↑)



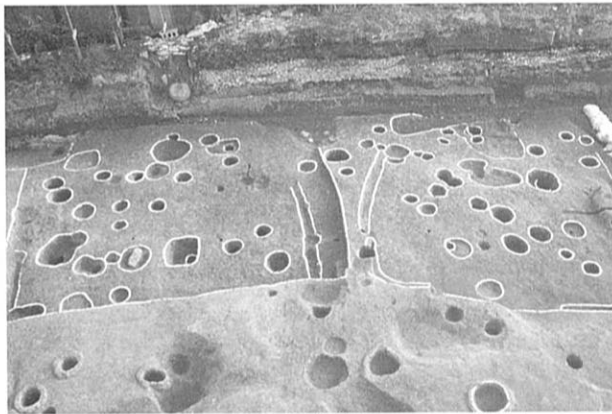
1. B1区3面 竪穴住居4最下面(南↑)



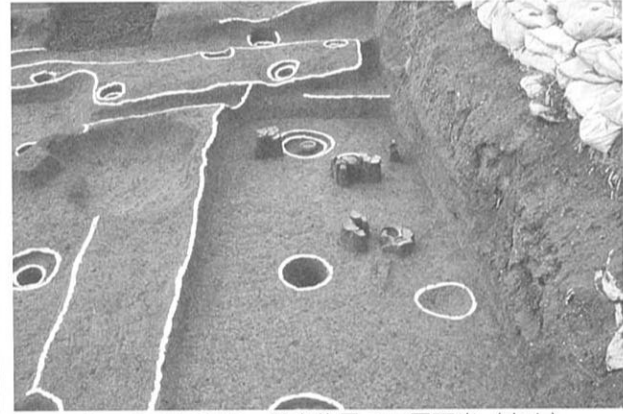
2. B1区3面 竪穴住居4 土器出土状況(西↑)



3. B1区3面 土坑2(西↑)



4. B1区3面 竪穴住居1・2(北↑)



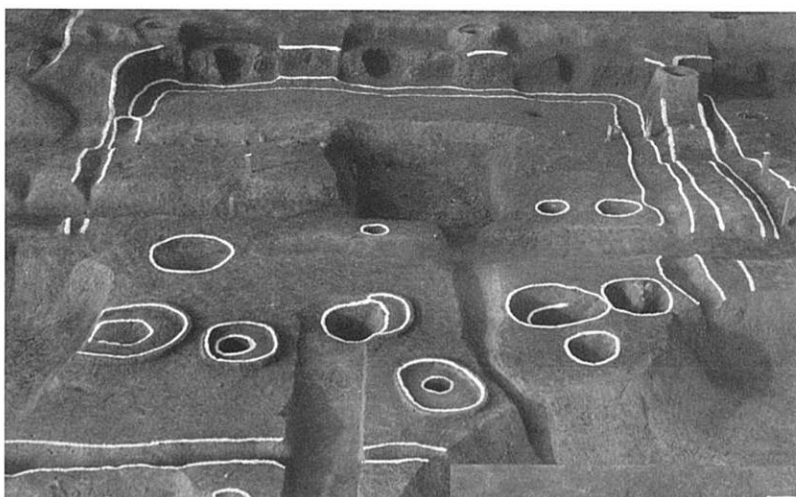
5. B1区3面 竪穴住居2下層西半(南↑)



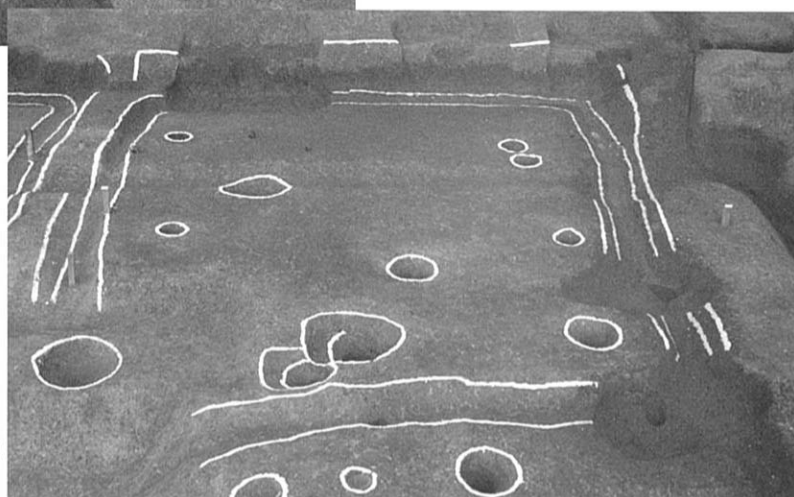
6. B1区3面 竪穴住居2下層
ピット上の土器出土状況(南西↑)



7. B1区 竪穴住居2下層 土器・鉄鋌出土状況(西↑)



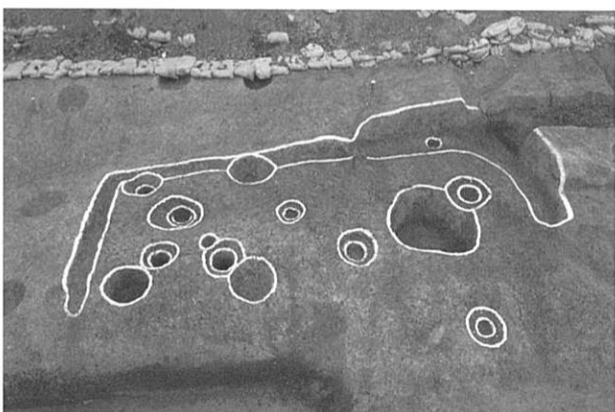
1. B 2区 3面 竪穴住居6 (南↑)



2. B 2区 3面 竪穴住居7 (南↑)



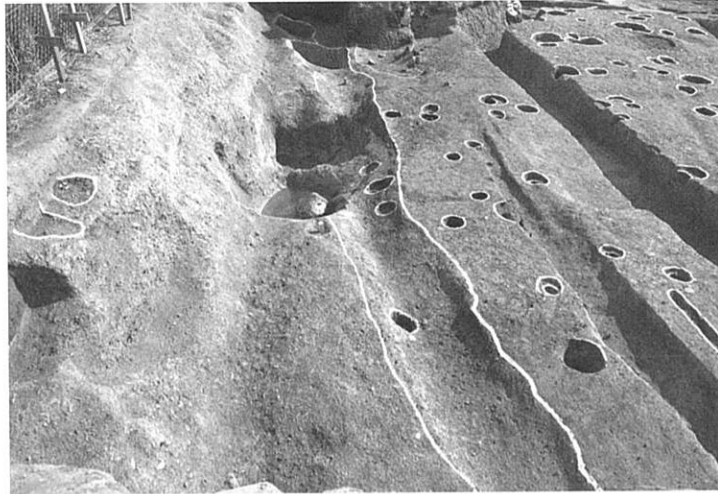
3. B 2区 3面 竪穴住居8 土器出土状況 (北↑)



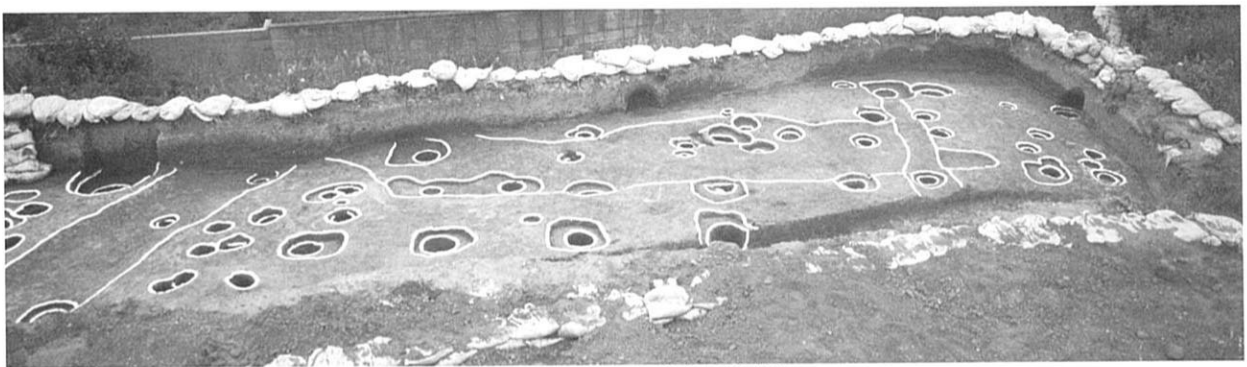
4. B 2区 3面 竪穴住居5 (南↑)



5. B12区 3面東半部 竪穴住居8 (手前)・14 (奥) (東↑)



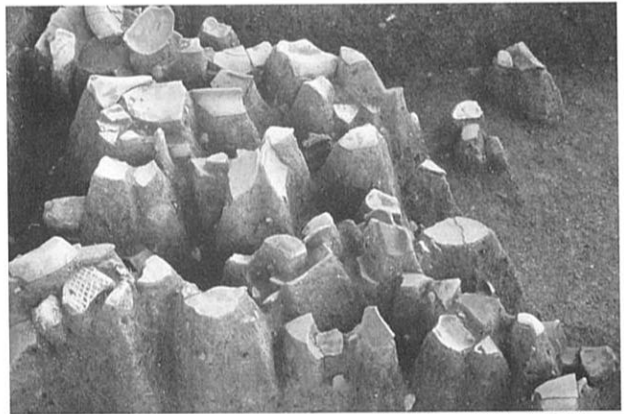
1. B11区 全景 (西↑)



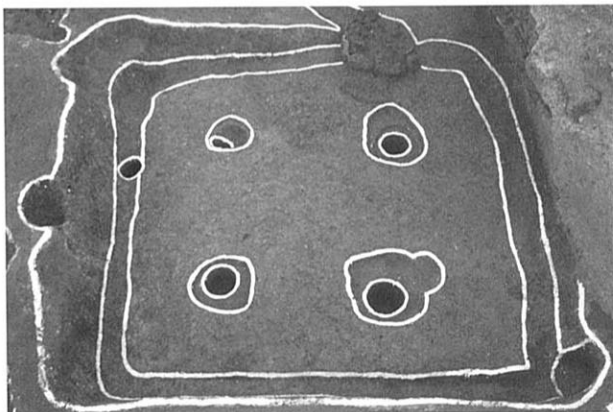
2. B12区3面西半部 (北↑)



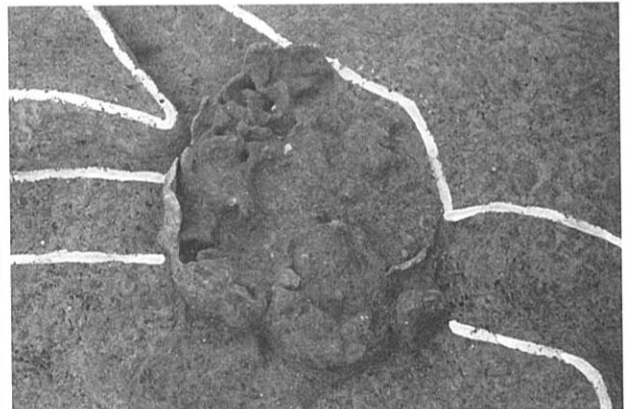
3. B12区3面 落ち込み1 (北↑)



4. B12区3面 落ち込み1 土器出土状況 (西↑)



5. B12区3面 竪穴住居14 (西↑)



6. B12区3面 竪穴住居14 竈 (西↑)



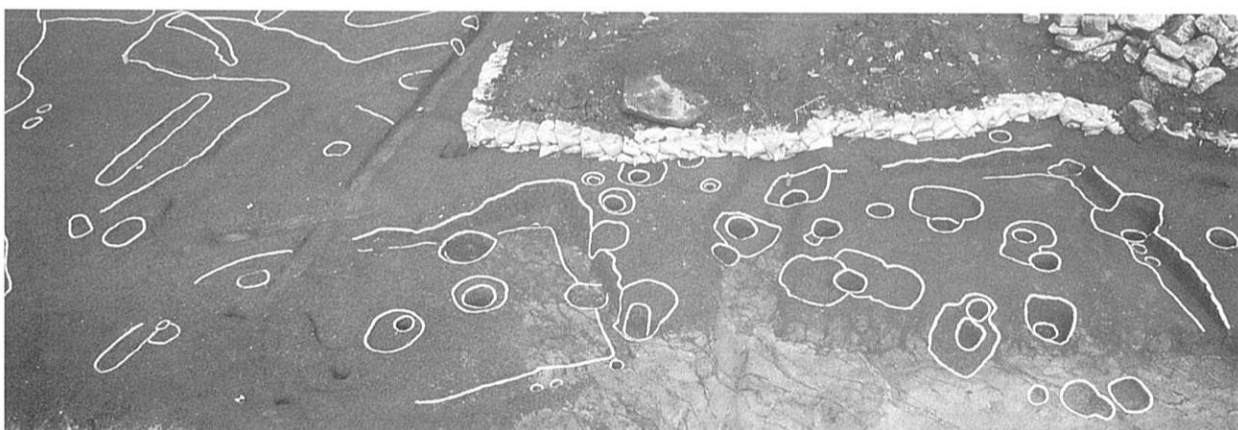
1. B2・B3区2・3面(北西↑)



2. B3区2・3面 掘立柱建物・柱穴列(南↑)



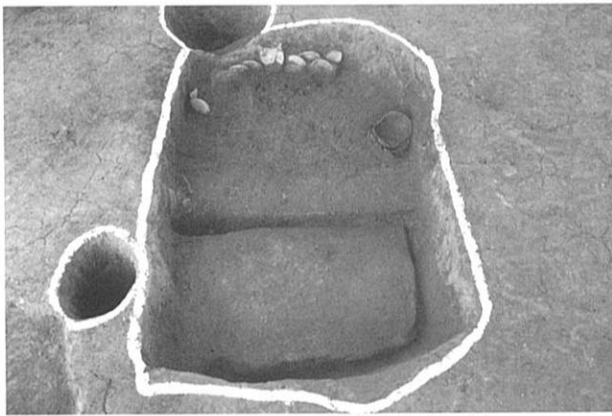
3. B3区3面 壁立溝(西↑)



4. B3区3面 竪穴住居9・10(南↑)



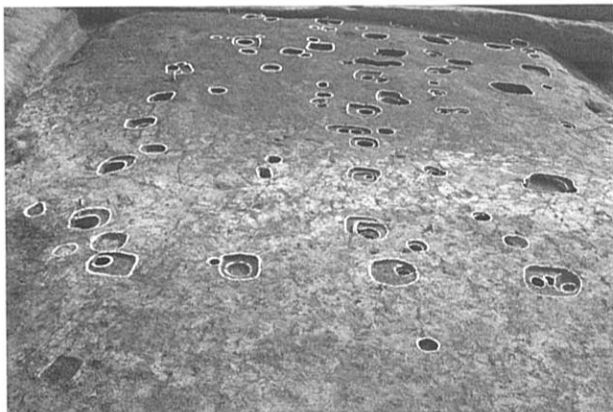
1. B3区2・3面西半部(南↑)



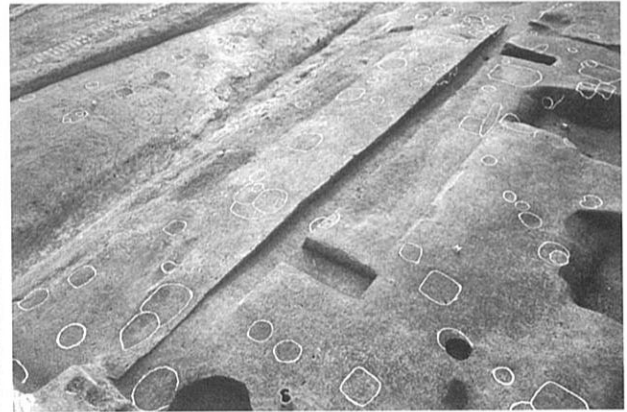
2. B3区2面 土墳墓6(南↑)



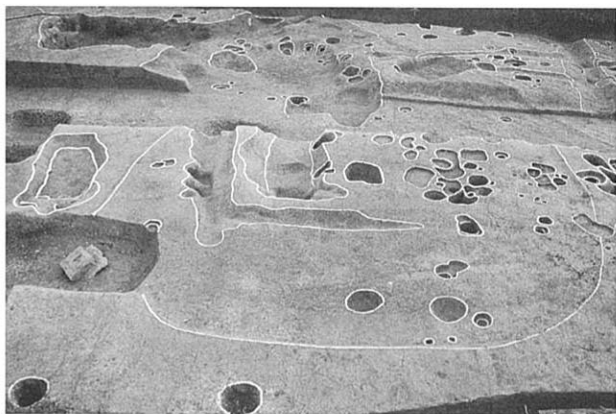
3. B3区2面 土墳墓6 土師器皿・烏帽子出土状況(南↑)



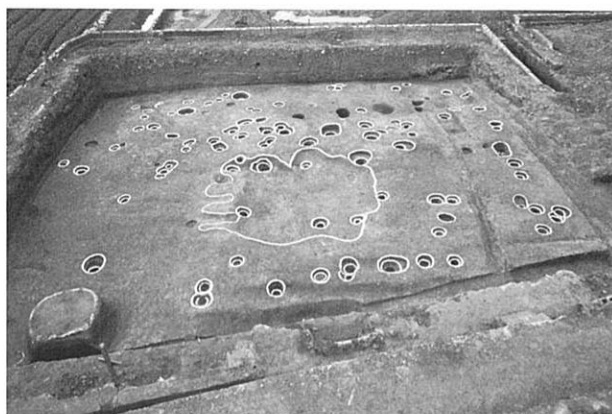
4. B3区3面 掘立柱建物11・12(西↑)



5. B3区2・3面東半部 柱穴列(東↑)



1. B5区2面 中世遺構集中区(南↑)



2. B10区 掘立柱建物15(東↑)



3. B4区 全景(西↑)



4. B7～B10区 全景(北↑)



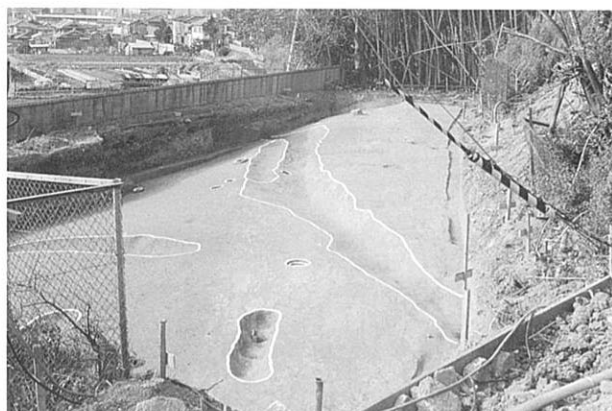
1. C1区 全景 (西↑)



2. C区 全景 航空写真 (垂直)



1. C1区2面 土壙墓9 (南↑)



2. C2区2面 全景 (南東↑)



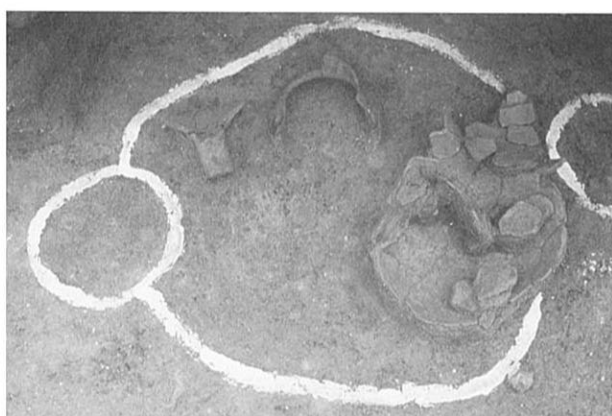
3. C6区2面 井戸9 遺物出土状況 (西↑)



4. C6区2面 全景 (北↑)



5. C4区 (西↑)



6. C6区2面 竪穴住居16 土器出土状況 (北↑)



7. C6区 竪穴住居16 (南↑)



1. C5区 全景 (北↑)



2. C7区2面 全景 (西↑)



1. C7区2面 全景 (北東↑)



2. C7区2面 竪穴住居18付近 (南西↑)



1. C7区2面 竪穴住居18 竈1 (手前)・2 (奥) (東↑)



2. C7区2面 竪穴住居18 完掘状況 (西↑)



1. C7区2面 竈穴住居18 竈1 (北西↑)



2. C7区2面 竈穴住居18 竈2煙道 (南↑)



3. C7区2面 竈穴住居18 竈2 (南西↑)



4. C7区2面 竈穴住居18 竈2支脚の高環 (南西↑)



E・F区 全景 航空写真(垂直)



1. E1区 全景 (東↑)



2. E3区 竪穴住居27 甑出土状況 (東↑)



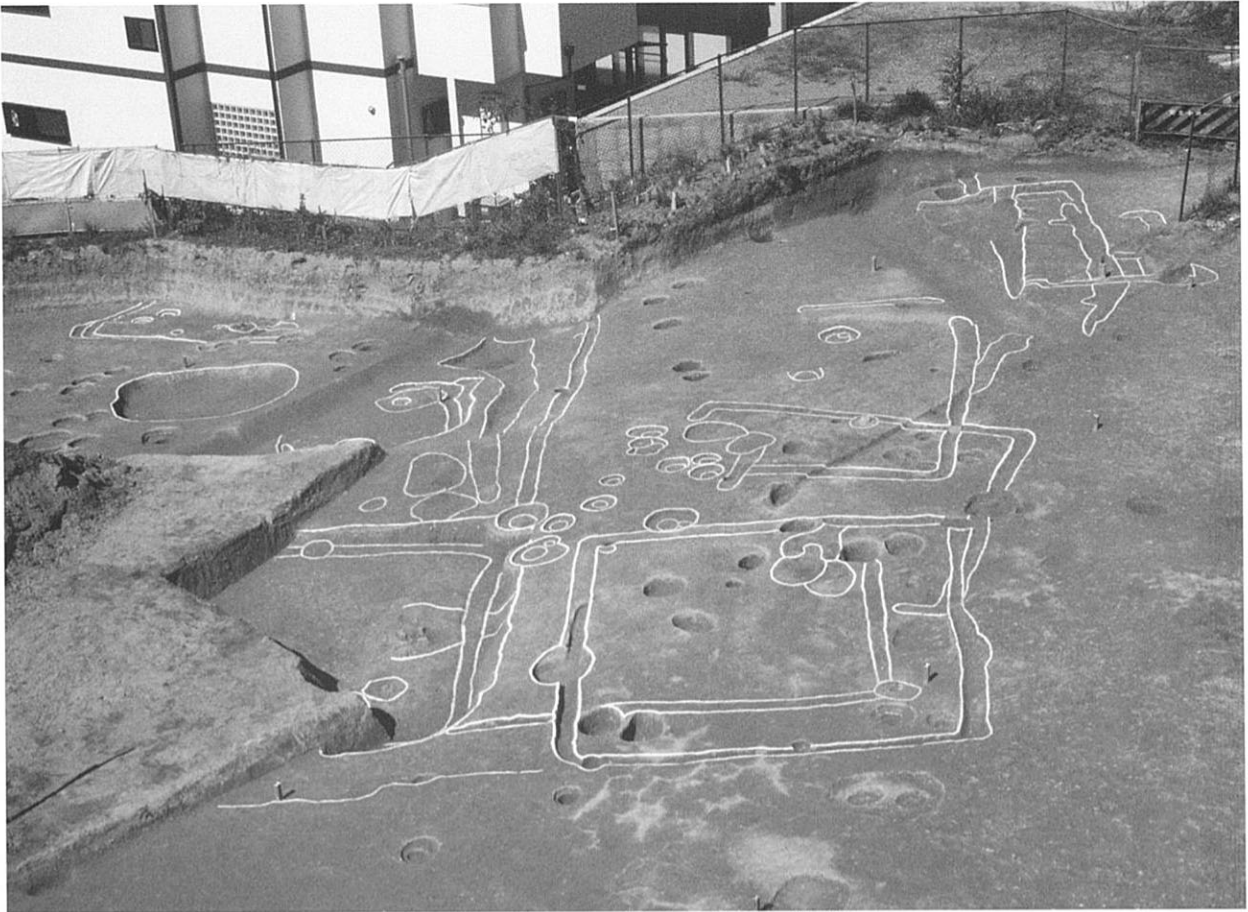
3. E2区 竪穴住居24 (左前)・20 (右奥) (南西↑)



4. E1区 竪穴住居25 (西↑)



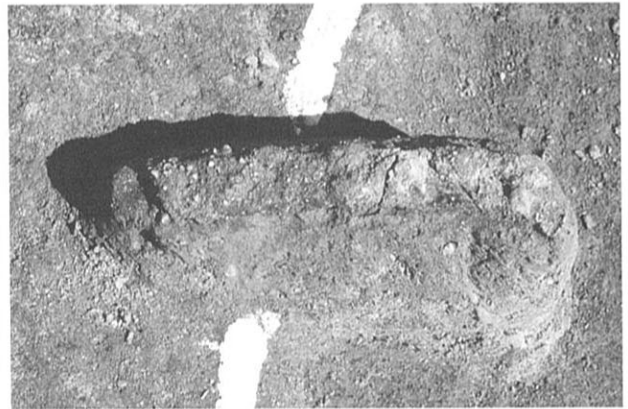
5. E1区竪穴住居25 竈 (西↑)



1. E1・F2区 竪穴住居群上面(南↑)



2. E1区 竪穴住居26中面(西↑)



3. E1区 竪穴住居26 鎌出土状況(南東↑)



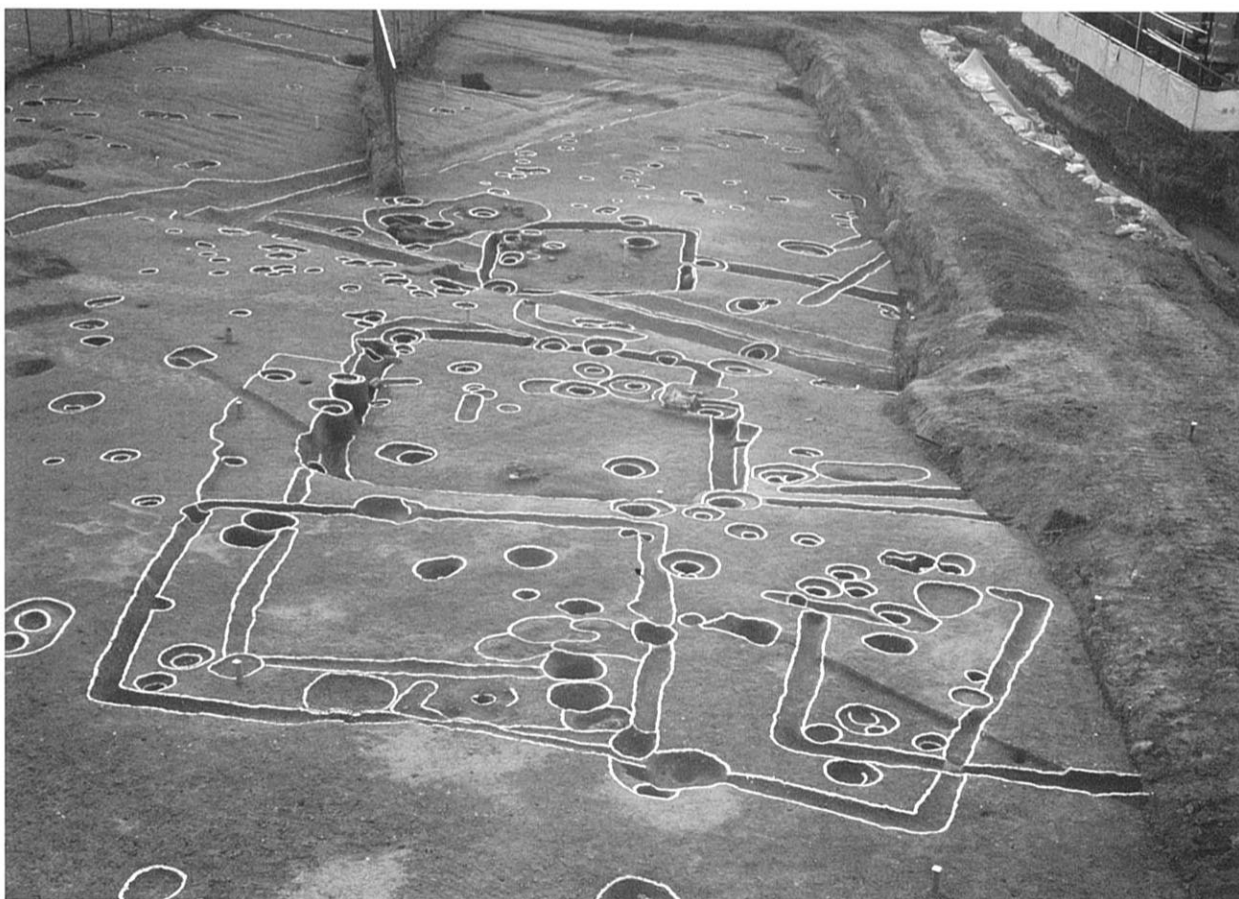
4. E1区 竪穴住居26 土器出土状況(北西↑)



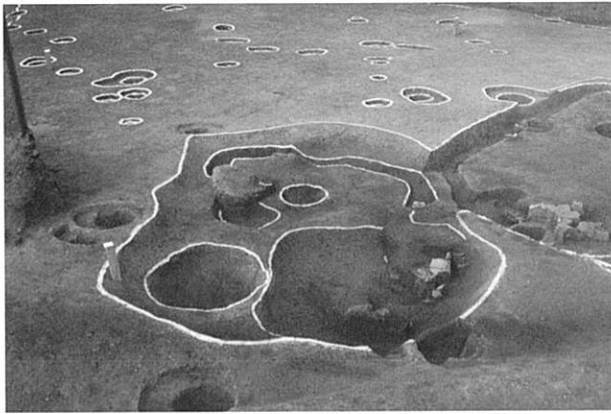
5. E1区 竪穴住居26 最下面状況(南西↑)



1. E3・F2区 竪穴住居群 全景 (南↑)



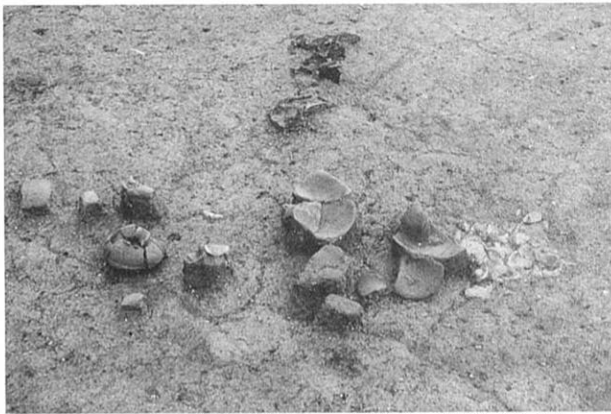
2. E3・F2区 竪穴住居群最下面 全景 (東↑)



1. E3区 竪穴住居27中面(東↑)



2. E3区 竪穴住居27 土器出土状況(東↑)



3. E3区 竪穴住居28 土器出土状況(北↑)



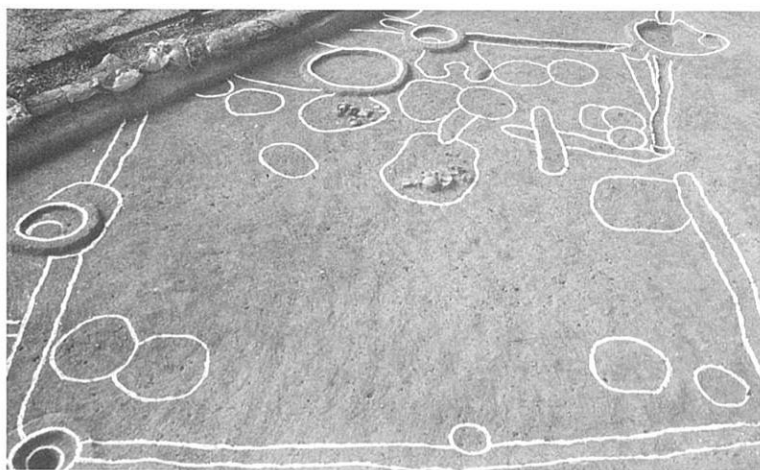
4. E3区 竪穴住居28ピット内 土器出土状況(東↑)



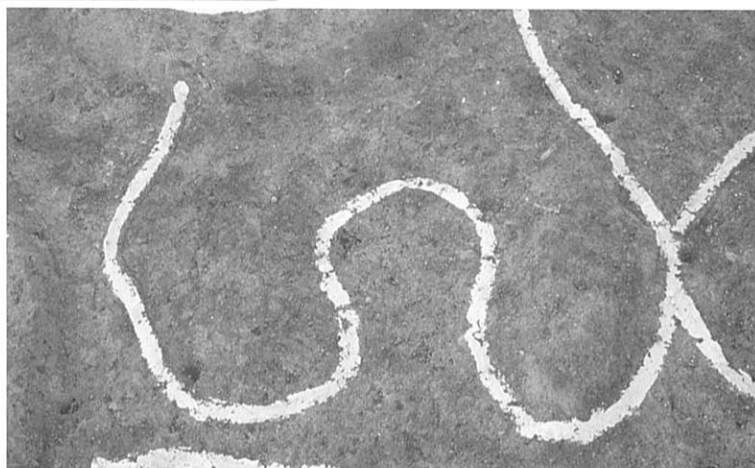
5. E3区 竪穴住居28 土器・竈出土・検出状況(北↑)



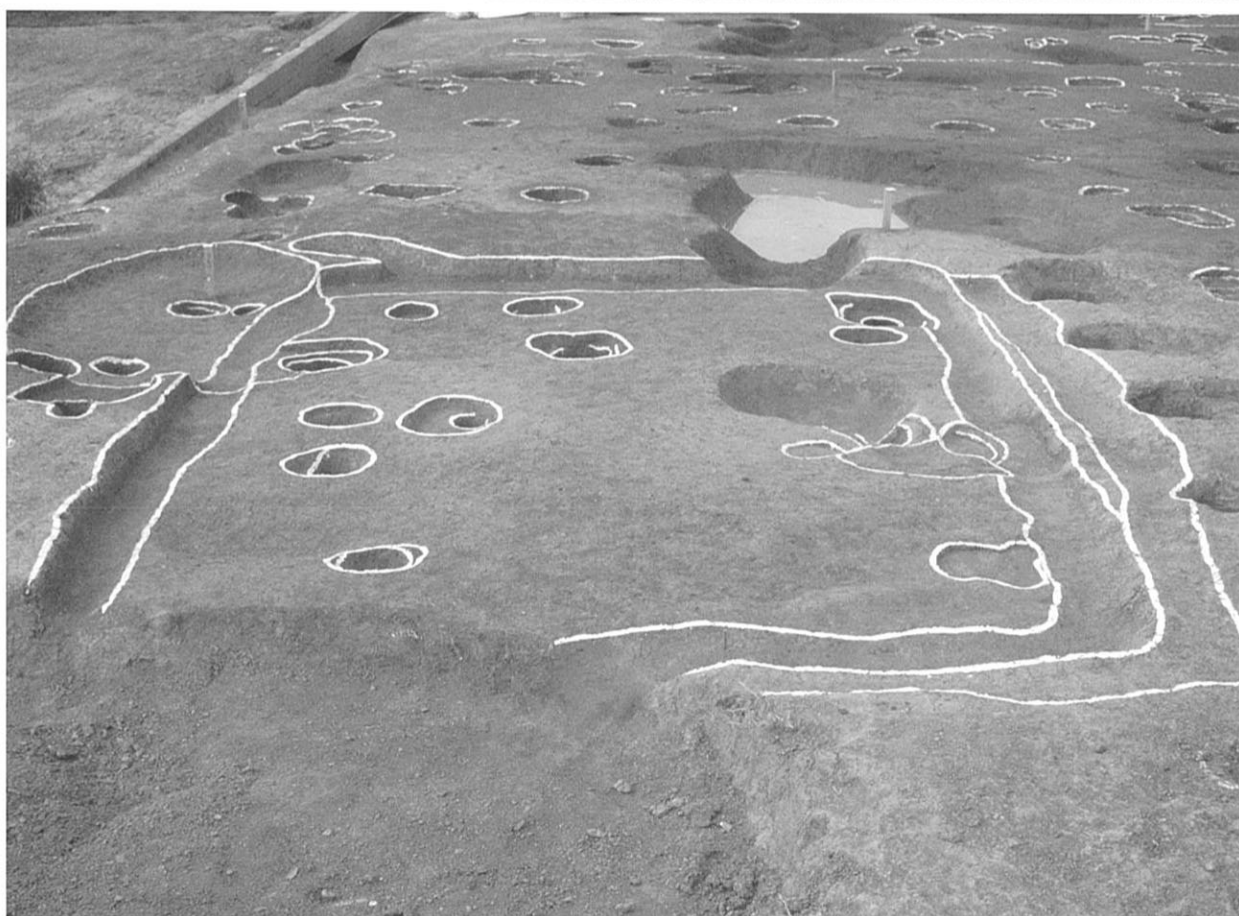
6. E3区
竪穴住居27・28下面(北↑)



1. F 2区 竪穴住居19上面(南↑)



2. F 2区 竪穴住居19 竈(南↑)



3. F 3区 竪穴住居22(東↑)



1. F1～F3区 全景 (北↑)



2. F2区奈良遺構面 (南↑)



3. F3区 (西↑)



4. F3区 (南↑)



1. E 4～E 6区 全景 (東↑)



3. E 5区 ピットP22断面
土器出土状況

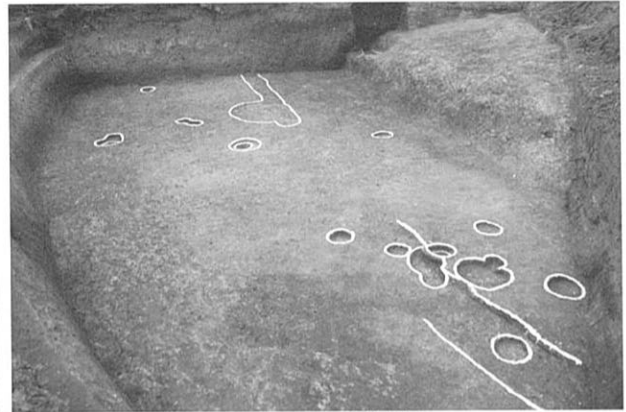
2. E 4区中心 全景 (東↑)



1. F5区 (西↑)



2. F7区 (北↑)



3. F8区 (東↑)



4. E6区 (東↑)

報告書抄録

ふりがな	ねやがわししょざい たかみやいせき (いこうへん)							
書名	寝屋川市所在 高宮遺跡 (遺構編)							
副書名	一般国道1号バイパス (大阪北道路) ・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター 調査報告書							
シリーズ番号	第115集							
編著者名	一瀬和夫、合田幸美、小暮律子							
編集機関	(財)大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかみやいせき 高宮遺跡	ねやがわしくにもりちょう 寝屋川市国守町	27215	37	34°45'15"	135°38'20"	H13年6月20日 ┆ H14年3月25日 ┆ H14年4月24日 ┆ H14年11月29日	6,946 m ² 4,355 m ²	一般国道1号バイパス (大阪北道路) ・第二京阪道路建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高宮遺跡	石器集中区	旧石器時代～縄文時代早期	旧石器～縄文早期：原位置に近い集中区	旧石器～縄文早期：ナイフ形石器・石鏃・剥片	丘陵端部に立地し、旧石器時代のナイフ形石器を含む一群の石器が集中して出土。また、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代中期の作り付け竈のある堅穴住居群を検出。奈良時代の大形総柱掘立柱建物群は隣接する白鳳寺院である高宮廃寺との関連が注目される。中世土壇墓2基において烏帽子が出土。
	河道	縄文時代中期	縄文中期：河道	縄文中期：船元式土器	
	墓	縄文時代後期	縄文後期：ピット	縄文後期：北白川上層III式～元住吉山I式土器	
	集落	弥生時代中期	弥生中期：方形周溝墓	弥生中期：弥生中期土器	
		古墳時代中期	古墳中期：作り付け竈のある堅穴住居群	古墳中期：初期須恵器・土師器	
	古代	古代：大形総柱掘立柱建物群・掘立柱建物・土壇墓 (木炭柳)	古代：土師器・須恵器		
中世	中世：礎石建物・土壇墓	中世：烏帽子・土師器・瓦器			

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第115集

高宮遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

— 遺構編 —

発行年月日 / 2004年 3月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号